
喚び寄せる声

若竹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喚び寄せる声

【Nコード】

N9877M

【作者名】

若竹

【あらすじ】

三十路で病死した彼女はその後、異世界へと召喚された。しかも、なぜか子供の姿となっていた。徐々に変化していく彼女の姿と周囲の反応。戸惑いながらも少しずつ、彼女は前に進んでいきます。

第1話 はじまり（前書き）

初めて小説を書きます。拙い文章ですが、温かく見守って下さい。
h22. 10/10 改稿しました。

第1話 はじまり

もう此の砦は駄目だ。じきに落ちるだろう。

召喚士は眼前の光景を冷静に見つめる。彼の姿は全身に打撲や傷を負っており、服は埃と泥に塗れて襤褸雑巾のような出で立ちになっていた。

その姿は余りにも痛々しく、彼が今立っているのが不思議な程であった。

しかし、その出で立ちを裏切るかのような彼の鋭い眼光は、今なお爛々と青白い光を帯びて力強く輝きを放ち、その存在感は際立っている。

眼の前には見上げるほどに巨大な魔物がいた。その大きさはこの砦の外壁より遙かに巨大であった。禍々しいその姿は蛇の様な胴体に6本の腕を持ち、顔はドラゴンに似て、口はまるで横に二つ分あるかの如くに大きい。爬虫類のように裂けた口にはぞろりと凶悪な歯が生えていた。

死、混沌、破滅。

魔物の姿から連想させられる、そんな言葉が脳裏をかすめた。

魔物と彼の周囲には負傷した部下達が何人も力無くぐったりと大地に転がっており、ピクリとも動くものはない。此処からでは生死の判別がつかなかった。

彼の胸の中に様々な思いが駆け巡った。後悔や自責、逡巡と新たな決意。

これ以上、私の部下やこの砦は傷付けるわけにはいかない。これから先は髪の毛一筋でさえ傷付けさせるものか。

これ以上の暴挙は許さない。

彼は決意した。自分に行える最後の手段を用いる事を。……この状況では最早この方法しか手段は残されて無い様に、今の彼には思われた。

彼を含めた召喚士達の攻撃はこの凶悪な魔物の表層を傷付けるのみで、決定的なダメージを与える事が敵わない。今までの攻撃や召喚獣の力では魔物を倒す事が出来なかった。そして己の魔力も底をついていた。

まさに今、この砦を守る騎士達は後が無い状況まで追い詰められていた。

魔力が無い状態というのはその本人の生命をも危険にさらす。なぜなら己が生命力を削り取るように、魔力に引き換えてしまうからだ。

この体に残っている魔力はもうこの命しかない。己の命に代えても、この魔物をこれ以上進ませてはならないのだ。

この砦の後ろには彼らの国が、町が、王都があった。砦の役目とは、この国に暮らす国民の安全を魔物や外敵から守る事であり、その為に存在していた。

彼の脳裏には自分にとって大切な存在である親、兄弟、友人、部下達の姿が浮かんだ。更に、己が守るべき多くの民が居る。

その人達を守るためならば、私は己の命を媒介に召喚を行う事を恐れない。

彼の傷付き倒れた部下達も己の大切な存在を守るため、命懸けで魔物に立ち向かって行った。

魔物よ、此処までだ。ここがお前の墓場となる。

彼は両腕を勢いよく前方に突き出した。魔力の無い状態での強制的な召喚のために、普段は唱える事のない詠唱を唱える。両の掌からは白い光が放たれた。彼の今の姿からでは予想が付かない程力強い声が辺りに朗々と響き渡った。

「死と闇を司る魔神ケルヌノスよ、我の命を代償に眼前の魔物を滅したまえ！！」

しかし、力を振り絞るように行った召喚は何時もの魔法陣とは異なっていた。まるで周囲の光を吸い取るかのように真っ黒い、漆黒の魔法陣が現れる。

漆黒の魔法陣は虹色の輝きを自ら発し、ゆっくりと回転しながら空中に浮かび上がる。

複雑な文様が素早い速さで上から、上から重なり書き換えられていく。

その異様な雰囲気を発しながら回転する魔法陣は更に形を立体魔法陣へと変化し、彼の制御を離れていく。最早、召喚を行う為のコントロールが全く取れないでいた。

がくりと膝を付いた。真っ直ぐ立ってられない。

彼の体からは力が抜けていく。魔法陣と召喚獣に生命力を吸い取られているのだ。

遂に魔法陣は変化を終わらせる。漆黒の魔法陣の最終形態は巨大な球体となっていた。

魔法陣の中心部には、眩い虹色の輝きが出現していた。その輝きはぎゅっと収縮したかと思うと姿を変形させる。

人の姿へと。

そこには彼の予想とは全く異なる、まばゆく虹色に輝く女が出現していた。虹色の女は膝を抱えて胎児のように丸く空中に浮かびあがっていた。

な、何だアレは……！！！！

予想を裏切る召喚獣のその姿にがく然とする。失望と落胆を抑えきれない。次いで失笑が、皮肉げな形となった唇から洩れた。彼にとって、次の召喚などありはしない。これが人生最後の召喚になるのだから。

命懸けで行ったこの召喚は失敗したのか？

彼の体からは次々と力が抜けて行く。最早膝を付いている事すらかなわない。崩れ落ちるように其の場に座り込んだ。

彼の心にじわりと絶望という暗い感情が湧き上がって来る。

彼はそのまま魂が抜けた人形のように、茫然と虹色の女を見つめ続けた。

女だと思うのは、髪が長く身体つきが女のように見えたからだ。しかし、眩い虹色の光で輪郭程度しか判らなかった。

第1話 はじまり（後書き）

初めまして。此処まで読んで下さり、ありがとうございます。

第2話 喚び寄せられた彼女（前書き）

h
2
2.
1
0
／
1
0
改稿しました。

第2話 喚び寄せられた彼女

私はゆっくりと眼を開けた。

目の前には見た事の無い景色や生物がいる。此処は一体何処なのだろう。突然の環境の変化に付いていけず、戸惑いを感じている。

私は唯、目の前の光景に茫然としたまま見入っていた。それとも単に理解できていないだけなのかも知れない。

私の眼の前には、陸上では存在しえない程の大きさをした生物が居る。私は目の前の光景が信じられなかった。

それは見た事も無い、空想上でのみ存在する様な生物だった。

その姿は禍々しく、お伽噺や神話で例えるならば怪物とか悪魔とか、そういう物を連想させる生き物だった。

何なのこれ？あの生物は一体何？此処は一体何処なのだろう。

……私、映画でも視てるのかな？

映画であるとすれば、特撮映画の怪獣かしら？ウ〇〇〇マンに出てくる宇宙怪獣？みたい。撮影でもしているのかしら。でも、それにしてはあの怪獣は良く出来過ぎている。着ぐるみには見えないし、背中にチャックも無さそうだ。CGかしら？しかし、此処はどう見ても映画館では無い。となれば、私は眼を開けたまま夢を見ているのか。

私の脳みそと認識力は、眼の前の現状が直ぐには理解できず、唯ぼんやりと考えた。自分の置かれている状況が全く解らない。一体何がどうなって、現在私はこの様な状況にいるのだろうか。

白く何もない空間と曖昧な意識。

先程まで彼女は其の白い空間を漂っていた。唯、流されるままに己の身を委ねる。私の思考はたちどころに流れては消えて行く。意識は朦朧としており、時間の感覚は曖昧だ。私は苦痛と共にある生という日々から解き放された後、心地好く感じる何も無いこの空間で漂い続けた。

突如その白い空間が裂け、強い力で全身を押し掴みにされたかの如くにぐいっと万力のような力で引っ張られたと感じた次の瞬間には見た事の無い場所、つまり此の場所に居た。

時間の感覚は曖昧でそのぐいと引かれた間が一瞬だったのか、それとも長い時間だったのかは分からない。

ただ、引き寄せられたときに耳元で微かに聞こえた声。

……誰かの声が私の耳に届いた。身を切る様にあまりにも切なく、そして必死に懇願する決意に満ちた力強い声。

お願いだ、此処へ来てくれ、我らに救いを……と。

次に眼を開けた時に跳び込んで来た景色は、飾り気の無い石造りのお城の様な建物と緑の草原。そして悲鳴を上げて逃げ惑う人々。破壊され、吹き飛ばされる城の一角。城と共に人間までもがまるでおもちゃの人形の様に、一緒に吹き飛ばされて行くのが私の視界に入った。

その先には城の高さよりも巨大な、青みを帯びた鉄色の鱗に覆われた巨大爬虫類の様な怪獣。

ゴジラ等の地球産とは違い、明らかに地球外生命体ではないのか等と私は思った。

その怪獣の体はまさに異様なありさまで、蛇の胴体に、6本の蜥蜴を思わせる巨大な腕をしている。恐ろしげな恐竜を思わせる頭部に血の様に赤く光る、白眼の無い眼。口には鋭い牙が、ぞろりと生えている。宇宙怪獣は重たい地響きを立てながら移動すると、地震が起きているかのように、人や建物が上下に振動していた。

宇宙怪獣はその巨大な左腕を一本軽く振ったかの様に見えたが、空気に唸りを上げさせる。その威力は凄まじく、白い真空の鎌が襲い掛かるかの如く空気の密度を変えると、城を、人を無慈悲に吹き飛ばす。

数々の悲鳴が破壊された城と一緒に飛び散った。

私はその光景にはっと息を飲む。これは悪夢というやつだ、とびきりの。本当に夢なのだろうか？もしも、現実ならば恐ろしい光景だ。城と人を守ろうとするように何人かの武装した人間が武器を持って立ち向かおうとするが、その巨体には全く歯が立たない様に思われた。

人間達は巨大な宇宙怪獣と比べると、虫ほどにも小さく無力に見えたからだ。

その景色を、私は空に浮かんで見下ろす様に見ていた。

第2話 喚び寄せられた彼女（後書き）

読んで下さった方、お気に入りに登録して下さった方、ありがとうございます。

第3話 慟哭する獣（前書き）

魔物を見た事が無い彼女は宇宙怪獣と表現しています。

彼女視点で書いていますので、宇宙怪獣と魔物を表現させてもらいました。

h22. 10/10 改稿しました。

第3話 慟哭する獣

低く、高く、何かを擦り合わせる様な獣の鳴き声に似た音が私の所まで響いてくる。

不思議な響きを持ったその音は、私の心を切なく震わせる。悲しい音色を内包していた。

私の心もこの音につられて深く沈んだ。

さっきから聞こえてくるこの音は何なのだろう？ 一体何処から聞こえてくるのだろうか？

しくしくと、か細い響きが空気を震わせた。

ふと、その音は人の声であることに私は気付いた。

子供が全身を震わせて必死に泣く時のような、そんな声が先程からずっと聞こえていたのだった。

——いや、聴こえてくるのだ。直接私の頭の中に。

それは身を切るように切なく、悲しい心の叫び。必死でもがく者の出す全身から出る心の叫びだった。

その声を聞くと自分まで身を切られるような悲しく苦しい気持ちになった。私の心には目の前の恐ろしげな怪獣を哀れむ気持ちが芽生えていた。

何て悲しい声なんだろう……。

その声は宇宙怪獣から発され、聴こえてくるようだった。

その声は、周囲の人間達には聴こえていないのか激しく攻撃を続けている。

城の方からは雨の様に宇宙怪獣への攻撃が降り注ぐ。爆音が何度も響き宇宙怪獣の皮膚が千切れ、体液が噴き出した。

このままでは、小さな人間達もこの哀れな宇宙怪獣も傷つき苦しみ被害が拡大して行く。

私には、目の前の事態が最悪な方向へと急速に進んでいる様に思えた。どうしてそう思えたのか？第三者の眼で空から眺めていたからなのかもしれない。

気が付くと思わず体が、心が動いていた。言葉が口から零れ出る。

「泣いているの？」

思わずそう、声を掛けていた。

宇宙怪獣は暴れ破壊を繰り返していた動作を止め、私に初めて気が付いた様にこちらを視た。

眼球自体が動いて此方を見たかは良く判らないが、視られているという感じがした。

私は何とかこの悲劇の様な事態を良くしたいと、話し掛けていた。この時私は言葉がこの宇宙怪獣に通じるのか等と疑問に思う事すら思い浮かばなかった。ただ、気持ちのみが先に動いていた。

「どうしてそんなに泣いているの？悲しいの？寂しいの？」

まるで幼い子供に話しかける様な口調になった。子供の様な泣き声に聞こえたからだ。

心に感情が伝わってくる。それは悲しみ、寂しさ、孤独、不安と後悔。そして温もりへの強い渴望。

だから、思わずそう声を掛けていた。

見た目は恐怖を誘う姿だが、それが今は不思議と気にならなかった。宇宙怪獣の心が私に聴こえてきたからなのかもしれない。中身が解れば怖いと感じる事も無かった。それとも未だに夢の様に感じているからなのかもしれない。

宇宙怪獣は獣の様に咆哮を上げた。

その咆哮はびょうびょうと空気に唸りを上げさせ大気を震撼させる。唸りを上げた空気は渦を巻き上げながら竜巻のように周囲に襲い掛かる。竜巻は目標が定まらぬまま、空に向かいそして消える。

それは宇宙怪獣の心の奥底から出た叫び声だった。

お前に何が分かるのか？と。

この苦しみから、この孤独からの救いをくれるのか？と。

「……孤独なら、私が傍にいてあげる。そんな風に苦しみながら泣かないで。だからもう、お互い傷付け合うのは止めようよ。余計に苦しみは増すばかりだわ」

気が付くとそう言っていた。この心が軋むようなつらい感情を放ってはおけなかったのだ。

すると眼の前の魔物から身を切るような切ない泣き声が収まり、そつと違う感情が伝わって来た。今迄の身を切る様な切ない悲しみから他のものへと。

それは戸惑いという感情だった。

第3話 働哭する獣（後書き）

重たい雰囲気がもう少し続きます。

今回も読んで下さった方、本当にありがとうございます。

第4話 癒し（前書き）

h22. 10／10 改稿しました。

第4話 癒し

私は宇宙怪獣の前にゆっくりと宙を滑る様に近づくと、その顔面の前で佇んだ。

血の様に赤く炯々と光る怪獣の眼をじっと見つめる。

宇宙怪獣の瞳は色々な感情が蠢いていて心の中を現すかの様に揺れている。

宇宙怪獣は先程から周囲への攻撃を止めていて、驚く程大人しく彫像の如くに動かない。

その赤く炯々と光る眼でじっと私を見つめながら、此方の様子を窺っている様だった。

動かない怪獣に対していつの間にか、人間側からの攻撃も止んでいた。辺りは静まり返り物音一つしない。ピンと緊張の糸が張り詰める。

彼らも彼女と宇宙怪獣の様子を息を殺す様に、じっと見守っていたのだ。

私は恐れる事無く、そっと宇宙怪獣に手を伸ばして触れた。

掌に伝わって来る宇宙怪獣の感触は、彼女の予想に反して温もりがあった。私はその温もりに驚きを感じた。蜥蜴のように冷たい体温をしているのではないかと思っていたからだ。その感触は金属の様に固く、しかし、温かくて人肌程度の温もりがあった。

私と同じ体温で。

手が触れている所から、お互いが触れ合った場所から、怪獣と私

の意識が繋がり私の気持ちに怪獣に流れ込んで行く。

さらさらと流れる様に私の気持ちが入って行く。まるで流れる水の様だ。

私の心は小川のような流れから、やがては大きく広がって河の流れの様になり怪獣の心へと注がれる。

怪獣の心は震えた。水面に波紋が広がるかの如く、最初は小さく、徐々に大きく広がっていく。やがては湖面いっぱいを覆う程に大きく波がうねった。

私の心がゆっくりと怪獣の戸惑いを塗りつぶして行く。じわりじわりと浸食していくかの様に。代わりに湧きあがって来る感情の名は——喜びだった。

次の瞬間、宇宙怪獣の喜びは爆発するように一気に弾けた。

歓喜が渦となって私の体に押し寄せてくる。

私はその渦にあつという間に飲み込まれた。まるで洗濯機の中に放り込まれたかの様だ。ぐるぐると私の意識は翻弄されて眼が回る。酔いそうになった。

その渦の中で私はふと、何かの違和感を感じた。何だろう？ 何かがずれているかのような感じだ。服を着た時に表と裏が逆であったかの様な、そんな感じ。なんとなくではっきりとは言えない。

私は怪獣が持つ内側からの捻じれた力を感じた。

それを感じた時、不意にこの怪獣の姿は歪で内側からの力で体に変化している。それが原因で今回の事態を引き起こしている。この悲惨な事態を。
そう解った。

何故そう理解する事が出来たのかは解らない。私の中にもう一人の私がいて教えてくれた、そんな感じた。

私は戸惑いながらも声を掛けた。何と言ったら良いのだろう……？

「キミは体の内側から歪みが出ているね」

よりによって、こんな整体師さんが言う様な事を口走ってしまった。

ああ、どうしよう！訂正しようか、もうこのままで突っ走るか？私は焦った。

いやいや、まずは私の言いたい事を理解してもらわねば。

「私に、歪みを戻させて」

何だか余計に微妙なセリフだ。明らかに墓穴を掘ってしまった。

……微妙にセクハラっぽい感じがする様にも思える。あわわ。

言ってしまった後からそんな事を考えた。私は宇宙怪獣の様子を窺ったが、相手は気にしてない？ようだ。しかし、相手は怪獣なので伺った所で解らない。そりゃそうだ。顔色だって最初から青みがかっているし。

つまり、どう受け止めたかなんて全くもって分からなかった。気にしていない事を祈る。

私は改めて目の前の宇宙怪獣を見た。

怪獣の姿が二重になって別の姿が見えてくる。

硬い皮膚の直ぐその下には歪んだ姿が見えた。身体が中心がべろりとめくれて歪に膨れ上がり、外側は異様に引っ張られてこれ以上は無い位伸びている。

その歪んだ姿で過ごすのは辛いだろう。

私の中のもう一人の私が伝えてくる。頭の中に何かが浮かんた。私が私を後押しする。

根拠の無い自信だが、自分には歪みを元に戻すことが出来るような気がする。

私は決意をした。ごくりと唾を飲み込む。

掌を怪獣に向けて翳した。自然なあり方に戻れと念じながら。

私の掌から虹色の光が生まれると宇宙怪獣を包み込んだ。虹色の光に包まれたその体は徐々に小さく萎んでいく。

更にめくれて広がった物が内側へ戻るかのように萎んで小さくなり、やがて人型へと変わる。

その人はふんわりと虹色に輝くと私の胸の中に吸い込まれ、消えた。

最後に笑顔を私に見せて。

私、どうやらウ〇〇〇マンになったみたいです。

およそ常識では考えられない事態が続いている。最早私の脳みその限界も近いかもしれない。私は己の思考をウ〇〇〇マンに置き換える事で受け止めた。

取りあえず私は親しみを込めて宇宙怪獣をこれより怪獣クンと呼ぶ事してみた。これなら受け容れ易いし、可愛いだろう。私の中の怪獣クン。うん、良い感じだ。

私は怪獣クンに向けてメッセージを送った。胸に手を当てると気持ちを含めて呟く。

怪獣クンのこれまでの辛い気持ちを思い返して。

怪獣クン、私の中で少し休んでいてね。

そう告げるとほっとしたかのような、泣きたいような、喜びの様な、複雑でごちゃ混ぜの感情が伝わってきて怪獣クンからの返事があった事に、私は思わず自然と微笑みが零れた。

怪獣クンが消えた後、周りを見渡すとそこは破壊された建物や物が散乱している。

そして沢山の人が倒れていた。建物の下敷きになった者、体や頭から血を流して倒れている者、手足が通常とは違う方向へ向いている者等、眼を覆うほどの悲惨な光景があった。

苦しい……助けてくれ……。誰か……。

怖い。まだ死にたくない、死ねない……。

痛い！痛い！

其の場は悲鳴と慟哭で染まっていた。

その悲鳴と慟哭は私の頭に直接響いた。

——ああ、皆苦しんでいる。救いを求めて魂が叫んでいる。飲み込まれそう、この苦痛の中に。

私は溺れそうになった。この苦しみを叫ぶ数々の声に。

その中でも特に小さな今にも消えそうな弱々しい声が届く。声は溺れそうな私の心にしがみ付いた。私の心がぶくぶくと沈みかけようとしたその時。

閃光の様に過去の記憶が甦った。

私のつらい闘病の日々が。全身を襲うこの身を引き裂くような痛みが。ベットの上に居ながらにして水の中で溺れて行く様な息苦しさだ。

私の心を救った家族の笑顔が。医者声が。看護師の温かい手の温もりが。

皆の優しさが、愛情が！

何かが私の奥からせり上がって来る。勢いを増してぐんぐんと。私はそれと一つになる。

救いたい。この苦しみから全てを。

私の心は空を目指して飛ぶ鳥の様に、溺れそうになっていた水中から一気に舞い上がった。

私の心にしがみ付いた消えそうな程の小さな声は、命の灯が消えかけていた男性からの物だった。

声の主は体と両大腿とが千切れかけた武装した赤毛の男性だった。今、この状況で生きているのが不思議な有り様だ。

大腿部の切断面からの出血量がかなりの量で流れている。それは、地面に血溜まりを作る程大量だった。

男性の緑の瞳からはゆっくりと光が消えていく。生命の灯火が消え去ろうとしていた。

——死なせない。

突如、体の中からどくどくと何かが湧き出すような、体の中心が熱くなるような感覚が湧き上がった。

無意識の内に手をそつと男性に向けて翳していた。

その苦しみから解放され癒されるように、彼の命が助かる様にと。彼女は思いを込めて強く祈った。

すと思うは疾く力へと変わり虹色の光へと姿を変えた。

彼女の掌に虹色の光が次々と生まれては集まり、やがて光は大きく膨れ上がると眼の前の男性を包みこんだ。

すると千切れかけたはずの肉体が、時間を高速で巻き戻すかの如くに再生を始めたのであった。

光は次々と癒しを与え、肉と血管と組織を甦えらせ、骨を繋ぐ。

驚く事に、瞬く間に傷一つない肉体が其処には横たえられていた。

私は自分の成した事が信じれない気持と、この奇跡の様な事柄を冷静に受け止める思考とが混ざり合った。

男性は先程までの名残を窺えるのはぼろぼろになった服と鎧だけだった。死にかけていた男性は、今やその影も無く顔色が良くなっていた。

更に意識を澄ますと聴こえてくる苦しみの声。

此処に居る全ての苦痛に癒しを与え、救いたい。

更なる強い祈りは先程以上に、大きな力を彼女の内側から引きずり出す。

膨れ上がった光は一段と大きくなり彼女の体全体を覆うと彼女の体を飲み込んで圧倒する。瞬く間に巨大な球形の光が形成されると、ギュッと収縮するように揺れた。

突如、一気にはじけるように光は四方八方に雨の様に降り注ぐ。

それは夜空を彩る虹色の打ち上げ花火のようだった。

光を浴びた人々はたちどころに身体に負った酷い傷や怪我が癒されて行く。

ゆっくりとあちらこちらから戸惑いの様な声が上がった。半ばあきらめ絶望した筈の自分の体が癒されていたからだ。

戸惑いの声はやがては生を喜ぶ歓声へと変わり、その声は徐々に大きくなって湧き上がった。

彼女はそれを見届けると、ホッと息をついた。自分の成し遂げる事の出来た事態に驚きを感じながらも満足したからだ。私の思考と気持ちは繋がっておらずバラバラだ。私はこれまでの自分が成した奇跡の様な事柄が、他人事か夢の様に感じていた。

私の体から緊張が解けると、同時に自分を包み込んでいた虹色の光も消え失せた。

この瞬間体中の力が抜け視界が異様に低くなった様に感じた。

私は先程から気になっている、自分を引き寄せる様な何かを意識した。そちらの方向から磁石の様な引力を感じる。

意識した途端一瞬で景色が入れ変わった。その現象に戸惑うよりも先に、目の前の人物へ意識が向いていた。何故ならば、その男性が死にかけている様に見えたからだ。

其処には男性が倒れていた。

檻樓雑巾のようになっていたが、辛うじてまだ意識があるようだった。

眼の前の男性の容態を意識しつつ、頭の片隅で思った。

私はこの人物の元へ引き寄せられる様に移動したのだという事。

第4話 癒し（後書き）

ようやく最初に出てきた彼が登場しました。

第5話 甦る輝き（前書き）

今だに登場人物の名前が出てきません。もう少し話が進むと出てきますので、もうしばらくお待ち下さい。

h22. 10/10 改稿しました。

第5話 甦る輝き

私の眼の前にはぐったりと地面に仰向いて倒れている男性がいる。その姿は、泥や埃にまみれて襤褸雑巾の様だ。鈍い灰色の髪も汚れている。

しかし、その澄んだ深い青の瞳が、眼差しが、とても印象的でこんな状況なのに彼の外見に反してなぜか惹きつけられた。

この人だ。この男性が私を引き寄せるのだ。私は唐突に理解した。何故こんなにもこの人に惹きつけられるのだろうか？解らない。この澄んだ瞳の所為かも知れない。

彼は私の方を見るとゆっくりと力なく微笑んだ。

けれど、その微笑みとは反対に青の瞳はゆっくりと力を失っていく。

このままでは二度と彼の美しい瞳と相まみえる事無く終わってしまうと私は思った。

——この美しい澄んだ瞳と。

目の前の彼には目立った外傷は無い様に見えるのだが、どんどんと生気が奪われていくように視えた。

私は彼に近づくと、先程赤毛の男性を癒した時と同じように手を翳す。

しかし、変化が見られない。全くもって彼の容体は一向に良くならなかった。こうしている間にも彼の生気は失われていく。

私は焦った。

何としてもこの男性の命を救いたいと願う。今では力無く閉じられてしまった瞼の奥に存在する美しい瞳と再び逢いたい。

私は流れ出る生気を押し止めるかの如く彼の胸へ、心臓の真上へと手を当てた。

自分の中から力が流れ出していく。さらさらと流れる水の如く触れ合った掌を通して、倒れている彼へと流れて行く。私の生命力そのものが流れて行っているのだと私の思考が教えてくれる。

それでもいい。それでこの目の前の男性が救われるのなら。

私は唯ただ願った。

もう一度その瞳が、命が輝きますようにと……。

彼は薄れゆく意識の中ぼんやりと考えていた。

先程まで彼の心を占めていた絶望的な感情は消え去っていた。

召喚にて呼び出した虹色の女？は魔物からこの砦を救い、さらに傷ついた仲間たちをも癒してくれた。まるで奇跡が起きた様だ。目の前で生じた事柄が、にわかには信じられない。あの悲惨な状態の部下達が助かった。数多くの尊い命が救われたのだ。

普段は神の気まぐれな奇跡など信じていない自分でさえ、この神が起こした様な奇跡に感謝する。

皆、救われたのか。……本当に良かった。

——ああ、これで私の役割は終わった。

この召喚はイレギュラーが発生したようだった。召喚自体は正常に働いたようだからだ。そのため通常とは異なる存在を召喚してしまった。

召喚は失敗すると召喚獣の姿を形成する事ができず四散してしまう。結果としては召喚獣が出現しないのだ。

イレギュラーは発生率自体がとてつもなく低く、彼自身実際に経験するのは初めてだった。

幸運な事に期待以上の働きをしてくれたこの虹色の女の姿をした召喚獣は、明らかに上位に属するモノだと思われた。そんな存在が此処に現れてくれた。まさに奇跡を起こして。

召喚獣とは、召喚対象を総称してそのように呼ぶ。

今回の存在は魔に属するモノか、聖に属するモノかは不明だったが上位魔神か上位の神にも匹敵した存在だったのかもしれない。

しかし、先程現れた召喚獣は彼の知り得る知識の中には存在しなかった。

初めて見る召喚獣の活躍によりこの砦と、多くの人々の命が助かり被害が抑えられた事に心の底から神と召喚獣に感謝した。

この危機を乗り切った自覚が出ると、とたんに自分の事にも意識が向く。おかげで不良な体調である自覚も一緒に出てきてしまった。

こうやっている最中にも次々と自分の体から力が失われて行くのが分かる。

もう、座っていることすら出来ない。其の場に崩れ堕ちる様に横

たわる。

顔をなんとか皆の方に向けると女の姿は消え去り、そこには救われた仲間の騎士達、召喚士達が見えた。立ち上がりつつ茫然としている者もいれば、抱きあつて喜びを噛み締めている者も見えた。彼らから歓声が上がる。

知らず笑みが浮かんでいた。此処を守りぬいた事に、ひいては彼の大切な人達を守れた事に満足だった。

眼の前が霞んできた。

ここまでか……。

自分の人生の終焉が訪れようとしている事に少しの後悔が浮かぶ。彼が出来なかった事、やり残した事に。しかし、もう良い。皆を守れて満足だ。これ以上何を望むと言うのか。後は、苦痛が無くこのまま死ねるのなら幸運だろう。

思考は重く沈んで行く。もう、何も考えられない。
何者かが自分の前に居る気配を微かに感じた。

しかし、彼にはもう霞んで何も見えない。光の明暗が感じられるくらいだ。

目の前の何者かは彼を窺った後、労わる様にそっと彼に触れた。

胸の上に。

突如、体の奥に灼熱の炎が轟々と噴き上がり燃え上がった。
心臓がどくりどくりと力強く鼓動する。

ガツンと体の奥深くから力が沸き上がり力強く眼を見開いた。体が彼の意志とは関係なく海老の様に仰け反り跳ね上がる。

熱い。体内からの灼熱の炎に体が炎上しそうだ。体が熱く力が漲ってくる！

深い青の瞳は輝きを取り戻す。鋭い眼光を放つ男の瞳からは最早、先程迄の弱々しさは欠片さえも窺うことが出来なかった。

第5話 甦る輝き（後書き）

今回も読んで下さって、ありがとうございます。

第6話 琥珀の瞳（前書き）

気が付かない間に主人公は子供の姿に変わっています。

h22. 10/12 改稿しました。

第6話 琥珀の瞳

彼は力無く閉じられていた瞼を開いた。其処には力強く爛々と青く光る瞳が現れる。

――私は生きているのか。助かったのか？

一体何故、生きているのだろう。召喚が成立した時点で自分の命は無かった筈だ。

……イレギュラーの所為なのか？それとも、私にも神の気まぐれな奇跡とやらが起きたのか？

彼は自分が生きている事が不思議でなかった。

彼は体を起こした。先程までの強い脱力感は何処にも無く、むしろ身体が軽い位だ。

戸惑いを覚えつつ手足を動かしてみる。思いどろりに身体は動いた。

ふと、気が付くと眼の前には整った子供の顔があった。子供は彼の顔をとて心配そうに窺っている。顔中で心配していると書いてあった。

彼は子供を意識してその場にすっと立ち上がってみせた。もちろん、自分でも動けるか確認したかったからだ。

その動きは滑らかで力強い。彼は先程までの脱力感や体調の変化が最早感じられない事を自ら確認した。どうやら何処にも異常は無さそうだ。

彼の様子をじっと大人しく見守っていた子供は、漸く強張っていた表情を安心したかの様に和らげた。子供の顔にうっすらと笑顔が浮かんだ。余程心配してくれていたのだろう。大きな瞳にじわりと涙が浮かんで眼が潤んだ。頬に赤みが差す。

彼にはその表情がとても愛らしく思えた。

彼は改めて目の前の子供を観察する。子供はざっと見る感じでは4〜6歳程度だろうか。

子供はとても小さく頼りなげだ。

まだ、親鳥の庇護を必要とする時期の愛らしい雛鳥。

この雛が彼に魔力を注ぎ生命力を分け与え、自分の命を救ってくれたのだろうか？馬鹿な。そのような事が出来るわけがない。不可能だ。

とても考えられない。しかし、彼の胸にそっと当てられた手があつた事を思い出す。その小さな手が触れたとたんに身体が燃える様に熱くなり力が湧いた。

その手は繊細でとても小さなものだった事を覚えていた。

この雛にそのような事が出来たのだろうか。私の体に再び命を吹き込み助けてくれたのはこの目の前の子供で間違い無い様だ。信じ難いが。

生命力を注ぐという行為は大変危険なものだ。まずは、その能力が無いと行えないが、行えたとしても自分の命を削る行為だ。ましてや、自分はほとんど死んでいたも同然だったと思う。それを補おうとすれば子供の生命力では不足していたかも知れないどころか、下手をすればあっけなく死んでいても可笑しくはない。

子供の体には相当の負荷が掛かったはずだ。

彼は自分の身の丈の半分程度の大きさしかない子供の様子を窺うために、その場に跪いた。良く見ようと子供の顔にそっと手を当てて、上向かせる。表情や顔色を窺った。

「大丈夫か？」

驚いた様に眼を真ん丸にしていた子供だったが、一言問い掛ける
と子供はコクリと頷いた。

掌から伝わって来る子供の軟らかい頬は繊細で温かい。心地好い
弾力を彼の掌に伝えてきた。

……………可愛い。

上目使いで自分をじっと見上げてくる。頷いた時に彼の指先を繊
細な子供の黒髪がさりと撫でた。

その仕草に思わず思考が止まりかける。

そのまま子供の様子を窺うが、体の動きや仕草、反応等から今の
所は特に異常は無い様に思えた。しかし、まだ安心するのは早い。
生命力を彼に分け与えた影響で、子供の体力は低下し弱っているか
もしれない。

自分の所為でこの愛らしい子供に何かあったとしたら、自分自身
が許せない。

「そうか、良かった」

ホッとして一言彼の口から言葉が零れた。子供の表情を見る為に
顔を覗き込むと宝石の様な子供の瞳と自然に視線が合わさった。

眼の前にある子供の瞳はトロリと甘い蜂蜜を思わせる琥珀のよう
だった。

琥珀色の瞳の中には、まるで砂金を混ぜ合わせたかの様な黄緑が
かった虹彩が瞳孔の周囲を取り巻いている。その瞳の美しさ、珍し
さに一瞬眼と呼吸を奪われた。

吸い込まれそうだ……。

言葉も無くその美しい瞳に魅入っていた。

子供の瞳はまるで名匠が生みだした玻璃細工か、猫の瞳の様だと思ひなら。……残念な事に、自分の表現力はこのくらいでこれ以上の言葉を思い付かない。

子供の髪は夜の闇を切り取ったかの如く漆黒で、艶めいている。髪が肩にかかる程度に短いので男の子だろうか。顔付きはどちらのものとも言えない。この国ではある年齢ごとに子供の健やかな成長を願って祝い事する習慣がある。その時に女兒は髪を結い上げるので髪を長く伸ばす風習がある。女兒で髪が結えないほど短い者はほとんどと言っていていくらい居ないだろう。それも、何かの理由がある筈だ。

彼はそう考えながら子供を見ていると、子供は彼に眩しく感じる笑顔を向けた。

その笑顔は、まるで一輪の花の様だ。

普通、男の子にそのような表現は当てはまらないと思うのだが、この子供の整った顔と雰囲気には違和感が無くぴたりと合っていた。彼はその笑顔を見た途端、心に何かが湧き上がるのを感じた。それは、まるでその美しい子供の笑顔が彼の心の壁を飛び越えて、直接心の中心に届いたかのようなようだった。

ほんの一瞬呼吸を忘れる。その笑顔に心が魅せられる。

何故、こんな処に子供が居るのか。何故、彼は契約の代償として命を奪われなかったのか？何故、こんな子供に彼を助ける事が出来たのか？

その思考は子供の笑顔によって奪われた。この雛鳥が無事である

のなら、その他の事などどうでもいい様に思える。

今の彼は戦闘が終わった事で気が緩んでいた為なのか、この状況で思考が鈍っているのかもしれないと頭の片隅で微かに思った。

笑顔のまま、子供は「良かった」と耳に心地好い鈴を鳴らすような声で呟くと、そのまままゆつくりと倒れこんだ。気が付くと反射的にその細く小さい体を受け止めていた。

彼はまるで己の雛鳥であるかのように、壊れ物を扱うかの如く大切に子供を抱きしめた。

第6話 琥珀の瞳（後書き）

改めて自分の文章力の無さを感じていますが、コツコツやって行く
うと思っています。今回も読んで下さった方、お気に入り登録して
下さった方、ありがとうございます。

第7話 過去との決別（前書き）

ようやく名前が出てきました。

h22. 10／12 改稿しました。

第7話 過去との決別

ゆらゆらと周りの景色がゆれている。私は波に揺られて漂っていた。見た事のある景色が近付いては遠ざかっていく。

まるで水面から水底を見下ろしているかのよう。

見慣れた景色が私の目の前に広がった。

此処は慣れてしまった病院の一室だ。けれど、心はいつまでも慣れないままでいた病室。

もう一度、帰りたい温かい自宅。けれど、帰る事が敵わなかった我が家。

ああ、これは夢だ。だって私、病気で動く事すら出来なかった筈だもの。

私は自分が過ごした病室に居た。病院独特のつんとした消毒の匂いや病人が持つ独特の匂いがした。部屋からはざわめきの様に音が聞こえてくる。

夢にしてはやけにリアルだ。

ピッ・ピッ・ピッ・ピッ・ピッ・ピッ・ピッ・ピッ・ピッ・ピッ――――

電子音がけたたましく鳴り響き、大きな音でアラームが警鐘を鳴らす。

心電図の波形は激しい波の様に打った後、ぴたりと止まってフラットになった。

でも、煩い程の警鐘はその時既にベッドに横たわる私の耳には届いてなかった。いや、二度と届く事など無いだろう。先程から呼吸が止まっていた。

家族のすすり泣く声が号泣へと取って代わり、悲しく響いてくる。家族は号泣しながら、音が届く事の無い私にすがって激しく私の名前を呼んでいる。

虚ろな私の瞳には最早何の光も窥えず写していない。瞳孔が散大していた。その、光を失った私の瞳には天井から見下ろしている私が見映っていた。

一体どちらが本物の私なのだろう。今の私は何なのであろうか。胡蝶の夢か、あぶくとなって消えるのか？

私は目の前の光景を茫然としながら、身じろぎすら出来ずに見ていた。

家族は私の体に縋りつき、時に激しく私の体を揺すって大声で泣いている。そんなに大きな声で泣いてしまったら、部屋の外まで響くだろう。私の命が尽きた事を他の病人にも知らしめる。

私は見下ろしながら、ぼんやりと他人事の様に思った。

部屋には役割を失った波形を映さない心電図と、医師と看護師の姿。そして家族と色々なチューブに繋がれた、げっそりと痩せこけた青白い私。

医師が死亡宣告をする。

「〇時〇分、ご臨終です……」

私の鼻と口を覆っていた酸素マスクが外された。

私は五人家族、三人兄弟の真ん中で、それぞれ2歳年の離れた姉と弟がいた。

お父さんは仕事をしながら、毎日夜は病院に泊まり傍に居てくれた。心細い不安な夜と一緒に過ごしてくれるのだ。朝になると、そのまま会社に出勤する。

お母さんはお父さんと入れ替わる様に朝から晩まで毎日付き添ってくれた。私が独りにならない様にいつも傍にいて、細々と世話を焼いてくれた。いつも手を握って、励ましてくれて。

姉は未だに独身で、その原因は私であるとは何となく私は気が付いている。私の面倒を必死で見てくれたお姉ちゃん。ごめんね、沢山の迷惑を掛けて。

弟の涼は生意気で、私より年下のくせに年上ぶってまるでお兄ちゃんのようなだった。笑顔が眩しくて、頼りがいのある弟。

私の看病をするのに皆体力の限界だったのではないかと思う。

それでも笑顔で私に付き添って励ましてくれた。一緒に泣いて、お互い喧嘩して。

私は自分の身体を思う様に動かす事すら出来ず、息苦しくて、痛くて。何度も癇癪を起した。自分の身を嘆いて。そんなみっともない自分勝手な私なのに、それでも傍に居てくれて。

ありがとう、お父さん、お母さん、お姉ちゃん、涼。

本当にありがとう。

こんな平凡な言葉しか思い付かない。

この家族に生まれて来れて幸せだった。沢山の愛情を、優しさを、癒しをありがとう。

私は自分の人生の終焉と家族を見下ろしながら、そつとつぶやく。皆、ありがとう、ありがとう。感謝の言葉は尽きないけれど………
……さようなら、と。

私はそのとき29歳。病名は左肺癌だった。看護師をしていた私

が、まさかこの様な病気で死ぬなんて思いもしなかった。

———死。すんとそれは彼女に落ちてきて、私はすんなり受け入れた。すうと心に入ってくる。

強い未練が無かったのは家族から受けた愛情のおかげだと思う。それに、恋愛だって経験できたし。結局別れて結婚は出来なかったけれども。

私は、最後の瞬間まで家族の愛に包まれていた。

感謝の気持ちが溢れ感極まって涙が零れた。

泣きながらさよならを告げる私に、体の内側から誰かがそっと私を優しく抱きしめる温かな腕を感じた。

……怪獣クン？

温かいなあ……。

ゆらゆらとしていた景色は白く染まり、温かな腕に包まれた私はやがて深い眠りに落ちて行った。

眼が覚めると眼の前には見た事のない顔があった。

吸い込まれそうな深い夜空の瞳。虹彩の部分には深い青色の中に翡翠色の虹彩がマダラの様に瞳孔をとりまいていて、まるで夜空に輝く星々のよう。

その瞳から発せられる強い意志の光が更に美しく魅力を引き立てている。

ぼんやりとその顔を見つめる。これは夢の続きなのかな？

だって、こんなに綺麗な瞳は見たこと無い……。

その瞳が嵌まっている顔立ちも整っていた。ふさふさと眼の周囲を縁取る鈍い銀色の睫毛。涼やかな眼元。彫の深い顔立ちだが深すぎず、すっきりと整った顔立ち。形の良い唇は若干ふっくらとしていて、官能的にも見える。

一体誰なのだろうか。天使かもしれない。だとしたら、お迎えか。だって私は死んだのだから。

私はじっと見つめ続けた。

眼の前の瞳は不意に笑みを浮かべて細まった。あ、笑ったんだ。ん？ 笑った？ アレ？？

天使にしてはやけに現実的すぎる。目じりに皺が寄った。

……ダレ？ ココ何所？

私は急遽意識が現実に戻った。天使じゃないし！天国でもない！

「どうだ、体調は？大丈夫か？」

そう、眼の前の男の人が話しかけてくる。

私は反射的にかなり勢いよく跳び起きた。ガバって言う音が聞こえてきそうだ。

「あー！お、おはようございます！！ええ、えっとー……」

何だ、このシチュエーションは？？ いきなり知らない男性の部屋で目覚めるとは！

一体何がどうなっているのやらさっぱり理解できない。どういった経過で今、私はこの男性の部屋で目覚める事になったのか？

これはゆゆしき事態、一大事だ。私は多少行き遅れ掛けているかもしれないが、まだまだ花も恥じらう乙女のつもりだ。

嫁入り前の娘が何たる失態！

私の頭の中は真っ白になっていて、何の言葉も考えつかない。こんな時一体何と言ったら良いのだろう。こんな経験の無い私は次の行動が解らない。

何だか痛い子になったみたい。

取りあえず、挨拶をしよう。挨拶は人間関係の基本だ。社会人としてここはきっちりしといった方がいいだろう！

私の慌てぶりと表情を見た眼の前の男性は少し驚いた様に眼をみはったが、クツと楽しそうに相手を崩すとベットの傍に置かれていた椅子に腰掛けたまま更に話しかけてきた。

「私の名はヴァルス・シン・グランディオーヴ。君は？」

「初めまして。私は夕月沙耶です。あ、あの、此処は何処ですか？私、どうしてこのベットにいるんでしょう？」

「ユウキ？……ん、ユウ？」

どうやら発音し難かったのか、略してユウになったようだ。それ、名字が下の名まえになったみたい。しかし、訂正するという考えはこの時は思い付かなかった。

「ユウ、此処は砦にある私の部屋だ。君は私を救ってくれた後、倒れたのだ。どうだ？気分は。もう大丈夫か？」

ヴァルサスの口調はまるで幼い子供に話し掛けるようにゆっくりと優しい口調だ。

とても優しいけれど、何だか微妙な気分になる。だって私、29歳なのに。あと数カ月で30歳だ。それをこんな口調で話されては、あまり良い気分では無い。

この人は私を一体何歳だと思っているのだろうか？

ん？ 咎？ もしや、石造りのお城の事だろうか？ 私は今、あのお城の一室にいるのか？

あの、非現実的で不思議な出来事は夢ではなかったらしい。

私はまじまじと眼の前にいるヴァルサスの顔を見た。

そういえば私、この人を助けたかもしれない。

記憶の中の彼は泥と埃にまみれてて、今の状態とは随分と印象が違っていた。ただ、あの力強い印象的な瞳は変わらない。

良く見ると襤褸雑巾のようになってた人は確かにこんな瞳をしていたかも。強い意志の光を宿す、青の瞳は忘れようが無い。

でも、前回見た時の髪の色は灰色だった筈だが今は違っていた。あの時は随分と汚れていたのかもしれない。まるで灰かぶり姫のようだ。ヴァルサスは男性だが整った容姿である為以外にもそういう表現も似合っていた。

ヴァルサスの持つ本来の髪は鋼の様な鈍い銀色で金属の様な煌めきを放っている。

日本では見た事の無い髪の色だ。とても珍しく綺麗だと思ったが、あまりに美しく芸術品の様な髪なので思わず本当の地毛か疑ってしまう。

……それ本当に地毛なのかしら。もしかして、新種のカツラなのでは？ キラキラしてやたらと眩しい。

あまりに綺麗過ぎる。

———思わず私は目を逸らしてしまった。

この眩しすぎる男性を助けた後の事は覚えてない。記憶はぷつぷつりと途絶えている。

そうか、気絶しちゃったのか、私は。

私はさらに俯いた。見知らぬ男性であるという事に警戒心を抱いていた。しかし、ちゃんと聞かれた事には返事をしないと。其処は社会人としての心得である。私は当たり障りの無い返事を返した。

「はい、もう大丈夫です。ありがとうございました。えっと、ヴァあるーすー・シーさん」

あれ？何だか自分の声じゃないみたいな子供の様な澄んだ高い声が出た。

しかも、何だか舌っ足らずで上手く発音できなかった。まるで本当に子供みたいだ。

「……。ヴァルサス・シン・グランディオーヴ。ヴァルサスでいい」

ヴァルサスは少し間を開けて返事をした。私が上手く発音出来ない事を、何と思ったのだろうか？しかし、何と長い名前なのか。ヴァルサスという名前でさえも長くて発音し難く舌を噛みそうだ。

「ヴァあるーすー、……ヴァル」

「……ヴァルでいい」

私は難しい発音は、元々苦手なのだ。

遂に省略してしまったが、ヴァルサスは嫌そうな表情を一切浮かべず事無く了承してくれた。

ヴァルサスはククつと楽しそうに頬を緩めて笑うと、くしやりと私の髪と頭を撫でた。青い眼が優しく細まる。その眼差しは、私の家族が与えてくれた物と似て重なった。

私の心に届く優しい眼差し。

ヴァルサスが私にくれた優しい笑顔と眼差しは、いつの間にか私の抱いていた彼に対する警戒心を解いて行く。代わりに好感を感じるようになっていた。

第7話 過去との決別（後書き）

いつも読んで下さる方、初めて読んで下さった方、有り難うございます。

本当に嬉しいです。

第8話 迷い子（前書き）

h
2
2.
1
0
／
1
2
改稿しました。

第8話 迷い子

ヴァルサスは目覚めたばかりの私に質問をしてきた。私としては、答えにくい内容ばかりで返答に困る質問だらけだ。

「ユウ、君はどうして魔物が出た時、あの場所に居たんだ？」

うつつ、と思わず私は言葉に詰まる。

魔物とは怪獣クンの事だろう。この質問には答えられそうにない。だって、私にも全く訳が分からない事柄をどう説明すれば良いというのだろうか？

本当に全くもって解らないのだ。

「本当に分からないんです。気が付いたら、そこに居ました」

私はヴァルサスの眼を見て話をしようとしたが、顔が私よりかなり上の方にあるので視線が合わない。必然的に見上げる形となった。見上げて更に、上目使いで彼を見る。

ヴァルサスは背が高い。こんな風に見上げる事なんて、普通無いだろう。日本人では考えられない程の長身だ。

私は首が疲れてきた。疲れが表情に出たのかもしれない。

ヴァルサスは私の様子を見て椅子から立ち上がると椅子を脇に除け、私と視線を合わせるように其の場に跪いた。

私は驚いた。ヴァルサスの観察力や、さり気ない気遣いと優しさに。その何気ない風を装った優しさが自然に出来る人間である事がほんの少しの間に解った。

ヴァルサスは優しく微笑んだ。

「迷子になったのか？ユウのご両親は？」

……迷子。いい年をした女を相手に迷子とは。私って一体どう見られているのかしら？若干へこんだ。いや、若干よりも少し凹んでいるかもしれない。

ヴァルサスの態度はまるで迷子センターのスタッフさんのよう。彼は本当にやさしいです。デモ、子供扱い。

いや、待て。これはもしかして、ワザとなのかしら？しかし、ヴァルサスの表情は真剣そのものだ。ううむ。

ヴァルサスが跪いたので整った顔が、あの美しい瞳が良く見える。それにしても本当に格好良い人だわ。

同じ人間とは思えない。こんな人今迄一度も見た事が無い。最早感心しながらユウはヴァルサスの質問に答えた。

「親とは、離れ離れになってしまいました。もう会えないと思います」

何とも話し難い。我ながら苦しい内容の返事をしているが、嘘を付いている訳では無い。

このままでは舌を噛みそうだ。

でも、本当の事を言っても信じてもらえるだろうか？決してそうは、思えない。

それどころか病気扱いか、もしくは下手をすれば魔物と間違えられたりしてっ！

ううむ。

私の脳は今迄に無いくらい素早く回転している。

そもそも、私、死んだんじゃないのかしら？何で、生きているのかしら。本当に訳が解らない。むしろ、私の方こそ誰かに教えてもらいたいくらいだ。

それでは、此処はどこ？天国？それとも地獄？でも、死後の世界には思えない。まるで違う世界に居るみたい。しかも、何故か自分が使えたあの力。

不思議だ。……もうそれ以上言い様が無い。

どうして生きて此処にいるのだろう。ふと思ひ出す、あの呼び声。死ぬ前に夢ともうつつとも分からない、白い空間に漂っていた私のあいまいな意識の中で聴こえた声。

耳に心地よい低めの、そして少し甘い声。

ヴァルサスの声に似ている。

———あなたが私を此処に呼んだの？

そう、心の中で問い掛けた。

質問に答えた私の返事を聞いてヴァルサスは少し顔をしかめた様に見えたが、その表情は一瞬で何も窺えない表情になった。もしかして、私の見間違えだったのかもしれない。

ヴァルサスは真剣な顔で私を見ると問い掛けた。

「ユウ、ご両親が見つかるまで、此処で私と共に過ごそうか？」

私への配慮に満ちた優しいヴァルサスの問い掛けに、私は驚いた。いきなりだったからだ。しかし、言われてみて初めて気付く。

私には何処にも帰る所が、居る場所が何処にも無い。此処が何処なのかすらも解らない。

そうか、私、本当に迷子になっちゃったんだ。ヴァルサスの問いかけは正しかったのだ。

私は心細くなった。この訳のわからない場所で唯一人、私は強く孤独感を覚えた。

もし、あの声がヴァルサスだったのなら。不思議な力で此処に私を呼んだのだたら、そのくらいしてもらっても悪くは無いだろう。そう考えないと私は彼に甘える事が出来そうに無かった。初対面の、何一つ知っている事の無いヴァルサスに。

ヴァルサスから差しのべられた手に、私は一も二も無く飛び付いた。

本当は不安で仕方なくて、誰かに手を握っていて欲しかったのかもしれない。

彼の手の温もりは、母の手の温もりを想い起こさせた。

「はい、よろしくお願いします」

三十路で迷子という状況の私は、ペコリと彼に頭を下げた。

第8話 迷い子（後書き）

読んで下さる方や、お気に入りにして下さる方が増えました。
とっても嬉しいです。

これからも、宜しくお願いします。

第9話 変身（前書き）

h
2
2.
1
0
／
1
2
改稿しました。

第9話 変身

結構な間、私は眠っていたらしい。

ヴァルサスは私が倒れてから2日間、ずっと眠っていたのだと教えてくれた。

成程、それほど長い間寝ていた為か体のあちこちが痛い。動かすと身体がぼきぼきいいそうだ。それに喉がとても渴いている。

水が欲しい。

私は強く口渴を感じている事に気が付いた。唇を湿らそうと舌で舐めたが、カラカラで、全く湿り気を帯びない。

「水を飲むか？」

ヴァルサスは私が喉が渴いている事を察してくれた様で、部屋に置いてある水差しから綺麗なガラス細工の青いグラスに水を注いで手渡してくれた。

「ありがとうございます」

感謝を述べて、私はグラスを受け取った。水はほのかに甘い香りがして、青いグラスは水のひんやりとした冷たさを私の指に伝えてくる。私は水を一口飲んだ。久しぶりに飲む水は微かに甘く、さらりと喉を撫でた。私はむせる事無く水を飲み込む事ができてホッとすると、次はごくごくと一気に飲みほした。

人心地が付いて、私はほうつと息が漏れた。

「ユウ、もう一杯いるか？」

「い、いえ、もう大丈夫です。落ち着きました」

「そうか。ならば、腹は空いてないか？長い間食べて無いからな。何か栄養を取らないと良く無いぞ。食事は何か食べれそうか？」

ヴァルサスはそう優しく聞いてきた。

死んだのにお腹が空くのだろうか？食事を摂るというのは生きているという証のように思われる。

私は死んでいるのか、生きているのか？しかし、現に今の私は生きて呼吸をし、水を飲んで会話をしている。

そういえば最後に食事を取ったのは何時だったか、思い出せない。最後は点滴の栄養だけで生きていた。

しかし、そう聞かれると自分がお腹が空いている事に気付く。何でもいいから食べたくなった。

「はい。お腹は空いてます。何でもいから、何か食べたいです」

私は素直に返事をした。自覚すると空腹感が湧いてくる。

「そうか。ならば、何か適当に用意させよう」

「ありがとうございます！」

嬉しくて、思わず元気よく返事をしてしまった。

私は久しぶりの食事にワクワクと期待感が出てきた。どんな食事が出るのだろう。とても楽しみだ。

生前、入院中の私の食事は長い間ドロドロの流動物だけとか、味気ない食事とか、そんな物だったので期待感はおおさらだった。

私はベッドから抜け出そうとしてごそごそ動くと、掛かっていたシーツを自分の上から除けた。

そこで、私が身に付けているのは元々病院で着ていた寝巻きである事に初めて気付く。白い下地に紅と紺の子菊模様。服のサイズが大きいようで袖が随分余っている。

妙に袖が長いな。サイズが合っていないんだろうか？私は何時もと違う何かに違和感を感じるが、それが何なのかは解らない。

「体調は良さそうだな。この調子なら着替えは独りで出来るな？」

私の様子を見ていたヴァルサスは、私の体調が特に問題無く独りでも動けると感じたようだ。

どうやら着替えを手伝ってくれようと思っていたのだろうか？まさかね。私は其処まで動けない程の病人ではない。

この人、真面目な顔して何を言ってるんだか。私は動けないわけでも、子供でも老人でもないぞ！！

凹凸は少ないが、それでも妙齡の女なのだ。恥ずかしいから着替えは独りにしてほしい。

「一人で大丈夫です。自分で着替えれます」

それを聞いたヴァルサスは立ち上がると、

「そうか、準備ができたなら食事にしよう。それまでに着替えておいで。服はクローゼットの中に準備してあるはずだ」

まるで子供に言うように話しかけると、部屋を出て行った。

私はベッドからゆっくりと降りた。久しぶりに立ち上がった体は一瞬くらりと立ちくらみがしたが、それも直ぐに落ち着いた。

それにしても、大きいベッドだわ。

私は驚きながら、今居る部屋を見渡した。

20畳以上はあるだろうか？この部屋にはさっきまで私が寝てい

たダブルサイズ以上かと思われるベッドと、明るい白色をした木目のローテーブルと椅子があった。椅子は上品な花柄をモチーフとした布で覆われており、心地よく包み込むように体を受け止めてくれる。

同じ木目の素材で出来ているチェスト。美しい金の化粧飾りが施してあった。大きなクローゼットを開けると何着か服が掛けてあった。

これに着替えればいいのか。

クローゼットの中には服が何着か並んでいた。私はクローゼットの中を一瞥すると、窓の外へと眼を向けた。

窓の外から見える景色は暗くてポツポツと明かりが地上に見えた。夜空を見上げると星空と淡く輝く月が見える。元の住んで居た場所で見ると夜空より、ずっと星々が良く見えて大きい。まるで宝石のように迫力をもって輝いている。それに月も倍くらいサイズだ。そのせいか、夜空が近い様に見える。手を伸ばすと星々がこの手に掴めるような気がした。月は真ん丸と中天で淡く輝いていて、どうやら今が夜中である事はぼんやりと分かった。

窓から見えるこの景色は砦の内側なのか、住人の暮らしが窺える。良く見ると、小さく見えている数々の窓から明かりに照らされて人が動いているのが見えた。

この部屋の照明は宙に浮いている丸い球だ。リング程の球体がどんな仕掛けなのか、数個宙に浮いている。

私はクローゼットを覗いて用意してあった服を手にとった。

ん？ この服のサイズ、何だか小さい。合わないんじゃないかな。それに、この服はどうやって着たらいいんだろう？

頭から被る様に着る白くて広い襟ぐりの、七分袖の肌着のような服。その上から着るのだろう、白いリボンの飾り紐で襟をボタン代

りに締める様になっている水色の服。裾が長く、短めのワンピースのようだった。

その下に着るのかウエストの所を紐で調節する黒い7分丈のズボン。

下着と思われるボクサーパンツの様な物。サイズが合わないと思っただけは、着れば意外と合っていた。用意してあった服を適当に着てみてから、部屋に姿見が有るのに気付く。姿見で確認しようと鏡の前に立つと、其処には子供がいた。

「え？」

そのまま鏡に近付いて触れると、鏡の中の子供も同じ動きをする。

「ええ？？」

なんと今の自分は子供になっていたのだ。茫然と鏡の中の自分を見て、掌をまじまじと見つめる。其処には可愛らしい子供の手があった。それに、髪はぱつぱりと切ってしまったかの様に短くなっているし、眼の色も変わっていた。

今まで黒目だったのに、琥珀色になっていたのだ。

体つきは凹凸の無い小学一年生か、幼稚園児のようになっていた。肌は透き通っていて弾力があり、瑞々しい。勿論、顔のシミも無かったし、腕や足に残っていた点滴の痕も無かった。眼は大きくて濡れた様に潤んでいて、頬は薔薇色。唇は花卉の様に血色の好いピンク色でプツクリとしている。

「誰？」

鏡の中には見た事の無い健康的な女の子が立っていた。がりがりに痩せて血色の悪い青白い顔をした私はいない。自分の姿とは思え

なかった。

変身しちゃってたんだ、私……。縮んでる。

いやいや、それだけでは無い。

道理で子供扱いな筈だ。

自分が自分である事をなんの疑いもせずにいたが、何度か感じた違和感はこのせいだったのだ。

自分はこうであるという自己認識、それが大きな音を立ててバラバラと碎けて行く音が私の耳に聴こえてくる様な気がした。

茫然と鏡の前で立っていると、コンコンとノックの音が部屋に響いた。

「入るぞ？」

そう言うのと、返事を待たずにヴァルサスが部屋に入ってきた。

「どうだ？」

何の事？縮んだ事？

咄嗟に理解が出来なかった。

ヴァルサスは私に近づいて来て私をじっと見ると、やおら手を伸ばした。

「これは逆に着るんだ。後ろと前が逆だぞ」

「えっ？」

そう言うのと、私が理解しようとする間も無くあっという間にリボ

ンを解いて私の上着を脱がし、リボンが背中にくるように着せ変えた。

そして私の頭を撫でる。いや、なでなでだ。

服装の事だったのね。それにしても、いささか強引だ。ヴァルサスがこうやって接するのは私が子供の姿をしていたからだ。

「……ありがとうございます」

一応そう言ってお礼をする。社会人の心得は子供でも通用する。

体はオトナ、頭脳はコドモ、あ、逆だった。こんなアニメあったなー、等とどうでもいい事を考えているとヴァルサスがそつと私の肩を引き寄せた。

「こちらで食事にしよう」

「……はい」

ヴァルサスは茫然としている私を隣の部屋へと導いた。

混乱し、今だ頭が真っ白な私は食事という言葉に釣られてされるがままに部屋の外へと踏み出した。

とりあえず、お腹が空いた。

第9話 変身（後書き）

今回も読んで下さってありがとうございます。
改めて、文章の拙さを感じるこの頃ですが、コツコツやって行きます。

第10話 甘やかな子猫（前書き）

h
2
2.
1
0
／
1
2
改稿しました。

第10話 甘やかな子猫

ユウはヴァルサスに促されて隣の部屋に入った。

そこは、ユウの居た部屋と同じような感じだったけれど、さらに広い部屋だった。部屋には白い木目に金の化粧飾りが施された高級感溢れる家具が配置されている。絨毯はシックなサーモンピンクの濃淡と、モスグリーンの物だった。植物を模した複雑な紋様が美しく描かれている。

部屋の雰囲気はクリーム色を基調としていて、高そうな絵や花瓶がさり気なく置いてある。所々にユウには意味の解らない置物なども置いてあった。

照明は少し暗めで代りに蝋燭が部屋を飾るように灯っている。燭台に乗せられた蝋燭の、オレンジの火が揺らめいて美しく部屋を照らしていた。

華美ではないが、上品なこの部屋の雰囲気の良さに私は魅入った。給仕さん？ が奥から出てきた。給仕さん達の手によって、テーブルの上に次々と料理が並べられる。

大きなテーブルの上には温かな湯気を立てる鮮やかな緑色のスープとこんがり焼けた薄い楕円のパン、青とオレンジ色と紫色をした葉っぱのサラダとカリッと焼けた白身魚と思われるメインディッシュ。最後に柑橘類と思われるオレンジや赤の一口サイズに切った果物が並べられた。

どの皿も華やかな絵のように食事が飾って盛りつけてある。

私は給仕さんがいるという、セレブな様子に驚きながらも給仕さんの洗練された動きをぼんやり見ていた。

そんな私に構わずヴァルサスが、食卓の椅子を引いてくれる。ど

うぞと促されるが、椅子は少し背が高く座り難い。なんとか座ろうとしていると突然私は背中側から抱えられ、気が付いた時には椅子に座っていた。驚いて振り返ると、ヴァルサスが私の後ろで微笑んでいた。どうやら彼が抱えてくれたみたい。

お恥ずかしい。これではホントに手のかかる子供のよう。お子様な感じに羞恥心が湧きあがる。自分の顔が熱くなって、赤くなっているのが解った。

食事は本当に美味しくって、お腹が空いていたのも手伝って黙々と全て平らげてしまった。見た目と反して予想していた味や食感とは違うものはあったけれど、味は良かった。

勿論、私の食量とヴァルサスの量は違う。ヴァルサスの方が多いし、お酒も軽く飲んでみたい。

食事はパンのような物が主食で、中はもちっと外はカリッとした食感。ほのかに甘い味がして、小麦では無くお餅を食べているようだった。

スープはコーンスープのような味で、少し青臭かったけれど飲みやすく、豆っぽい。

白身魚と思ったメインディッシュは淡白な味で鶏肉のような食感だった。一体何の肉だろう？ 臭みが無く食べやすい。

私の手には大きいサイズのフォークと見慣れない形のナイフがある。それを使って食べてみたけれど、使い勝手は悪く無い。

サラダはホウレンソウのような葉っぱが入っていた。食感はパリッとしていて新鮮さが窺えた。口に入れると香ばしいゴマのような香りがふわりと広がる。他にもオレンジや紫の葉っぱが入っているけど、ほんの少し苦いパプリカみたい。瑞々しく歯ごたえが良かった。

最後に色鮮やかな赤やオレンジ色のフルーツは、しゃりしゃりとした食感で味は甘酸っぱく南国のフルーツみたいだった。たつぷりと果汁を含んだフルーツは、噛むと口の中に甘酸っぱさがジュワッ

と広がって、至福の気分を味わった。

どれもこれも、見たことが無く知らない物ばかり。素材は一体何なのか興味が湧いたけれども、味は美味しくて大満足だった。

途中、何度か給仕さんに子供用のフォークやスプーン等と交換しました。うかと尋ねられた。けれどもそこは、意地でも断固として拒否をした。

これくらいは大人でいたい。

ユウは食事を食べ終わると、テーブルについたまま居眠りし始めた。目醒めたばかりで動いたので、体力を消耗したのだろう。

眼はとろんとして何度も瞬きをする。そのうち瞼が降りてきて閉じられたままになった。ユウの体の方は特に異常は無さそうで、食欲も有り出された食事をぺろりと平らげていた。なかなか良い食べっぷりだ。

ユウは美味しそうに食事をするので、見ている方も気持ちが良い。気が付くと自分の顔には微笑みが浮かんでいた。

ヴァルサスは子供の様子を見て席を立った。このままでは椅子から落ちるかもしれない。

ユウは好き嫌いなく出された食事を食べたが、食べながら眠くなつたようだ。フォークを右手に持ったまま、こくりコクリと船を漕ぎだした。

その愛らしい様子を見て、思わず笑みが零れる。

ヴァルサスはユウを椅子からそっと抱え上げると、そのまま右腕に乗せるように抱き抱えた。

腕の中の子供は驚くほどに軽い。それに華奢だ。

ヴァルサスはユウが右手に持っていたフォークをそっと取り上げ、テーブルの上に置く。

子供はイヤイヤと首を振るかのようにヴァルサスの肩に顔を埋め、子供の頭を肩に擦り付けた。

眠いのだろう。何とも可愛らしい。

そのさまは、まるで子猫のようだ。

甘く、骨が無いような軟らかい小さな身体。首筋にかかる子供の微かな吐息と、さらさらと触れる艶やかな黒髪が少しくすぐったい。ヴァルサスの眼は笑みの形で細まった。

ヴァルサスの心に甘い疼きをもたらす何かが湧き上がってくる。ユウの仕草はヴァルサスの庇護欲を刺激する。ヴァルサスは子供を起こさないように力加減をしながら、しっかりと己の腕の中に抱き締めた。己の腕からこの子猫がすり抜けて行かないように。

気が付かないままに、いつの間にかヴァルサスの中でユウを愛でる気持ちが芽生えていた。

ヴァルサスは己の欲望のもたらすままに、そっと頭を撫でながらその髪感触を味わう。絹のような手触りの黒髪はさらさらと零れて指通り良く心地よい。ほのかに甘い花の香りがする。

……良い匂いだ。

ヴァルサスは頭を傾けユウの様子を窺った。起こしてはいないだろうか？ 顔を傾けると私の頬にユウの頬が触れた。触れ合う軟らかな皮膚と子供特有の高い体温が心地好い。

傍から見るとその仕草は親が子供にする仕草のよう見えただろう。……愛しむように。

ユウは外見上4〜6歳程度に見える。子供でも、小柄な方ではないかと思う。

ユウは聞き分けが良く、年に似合わず大人びている。このくらいの子供ならもっと落ち着きが無く、我儘を言ってもおかしくない。普通なら我慢や忍耐、冷静さ、そういった物とは縁遠いだろうに。自分の弟と妹を思い出す。彼らは子供というには年を取っているが、今だにそんな風に思わせた。

ユウは一体どんな環境で育ったのか？

子供が大人に成らなければいけない環境とは、あまり良いものとも思えない。一瞬自分の過去が心によぎった。微かにほろ苦い思いを感じたが、直ぐに思考を切り替えた。

ヴァルサスはユウが目醒めた時に交わした言葉を思い返す。

親とはもう会えないとは、一体どういう事なのだろう？ 今回の騒ぎで両親は存命していないのか？ それとも置き去りにされたのだろうか。だとしたら、捨て子なのか？ 分からない。

魔物の襲撃で親と逸れてしまったのなら砦の担当に届けが出されている筈だ。しかし、そういった物は今の所、確認できなかった。

ユウの黒髪と琥珀色の瞳はこの国ではどちらも珍しい。それは、この国以外での生まれを予想させた。ユウは一体どういう経緯でこの砦に來たのだろうか？

ユウは礼儀正しく言葉使いが丁寧で下品な処が無い。訛りの無い共通語を話し、教養があるのを窺わせる。ユウは一般の子供とは明らかに違っている。つまり、それなりの教育なり躾を受けている事を窺わせた。一般市民の子供では無いだろう。

それに、彼を助けてくれたあの癒しの力。

癒しの力を持つ人間は大変数が少なく一人に一人と言われている。その為、国を挙げて保護する事に取り組んでいる。

その、貴重な癒しの力を持って生まれた者は保護を受け、国の医療機関で働く事となる。

そんな者が保護者も無く迷子になるなど考え難い。

もしくは力がある事を知らなかったのか？ 自分の命を救ってくれた時が、初めて力が発露した瞬間だったのかも知れない。

自分に子供がいたらこんな感じだろうか？

心の中にこの子供、ユウを守りたいと思う気持ちが浮かんだ。己の想いに少しの戸惑いが浮かぶ。

この子供を私は気に入ったのか？

答えは解っている。命を救ってくれた恩人という以上に、この子供に好意を持っているのだ。出逢って間も無い個人を気に入るなどと。……子供だからだろうか？

それは、普段の自分からは想像がつかない心境だった。

ヴァルサスはユウを寝室に運ぶと、起こさないようにそっとベッドへ横たえた。

第10話 甘やかな子猫（後書き）

今回も読んで下さってありがとうございます。

おかしい文章が有ったりするかもしれませんが、出来るだけ良い物になる様に頑張って行きます。

第11話 子猫の湯浴み（前書き）

h22. 10／16 改稿しました。

第11話 子猫の湯浴み

窓から差し込んでくる朝日が眩しい。私は澄んだ清々しい空気に包まれて、眼が覚めた。

……眼覚めると朝だった。一体いつの間にベットに入ったのだろうか？ 全く記憶に無い。私が着ている服は、昨日着替えた服のままだ。服は皺になってしまっている。

一体どのくらい眠ったのだろうか。時計が無いから解らないが、少なくとも日にちが変わっているのは間違いない。

私はとても疲れていたのだろう。全く夢も見ずにぐっすりと眠った。おかげで今朝は気分が良いし、身体も軽く感じられる程だ。

私はベッドの上でうーんと伸びをすると、ベッドから抜け出した。

窓から外を眺めると、吸い込まれそうに透明な青空が見えた。窓を開けるとそこから吹いた心地よい風が私を包む。窓からぐっと身を乗り出して下の方を窺うと、昨日は気付かなかった花壇のある小さな中庭が見えた。花壇には色鮮やかな可愛らしい花が風に揺れて咲いている。ふんわりと辺りを花の香りが漂った。

向かいには回廊を歩いている人が見える。一階部分の回廊には洗濯物を抱えた女中の様な格好をした女性や、野菜を籠一杯に抱えた料理人、騎士を思わせる服装をした背の高い男性達などが会話をしながら歩いている。

周りからは鳥の囀りや人々のざわめき、心地良い風に乗って活気のある声と共に、トントンカンカン砦を修繕している音も聞こえてきた。

部屋を見渡すと机の上に綺麗に畳んである新しい着替えが目に入

った。誰かが用意してくれたのだろうか。

私は用意してある服を手にとった。服は手触りが良く軽い。上等な生地で出来ている事が解る。

これに着かえれば良いのかな？

そう思いつつ、服を元どおりに置くと私は用を足しにトイレへと向かった。

この部屋の奥の扉を開けると洗面台とトイレがあった。トイレは洋式トイレと似た作りで脇にある紐を引くと上に付いているタンクから水が出てきて流れて行った。

トイレトペーパーはロールでは無く、一枚一枚ティッシュペーパーの様に取り出すようになっており、それで処理を済ませた。手を洗い、顔を洗って歯を磨く。歯ブラシは木と何かの毛で出来ていて、歯磨き粉は小瓶の中に入っていた。薄荷と塩の味がする。

スキンケアは顔を洗うだけで済んだ。今の私は子供なので化粧水や乳液がいらない程、肌はきめ細やかだ。有り難い。明らかに、これは子供特典だろう。

シャコシャコとぼんやり洗面台の鏡を見ながら歯を磨く。

——昨日はいつの間にか寝てしまったんだ。

食事の終わりくらいから記憶が無い。美味しい食事を平らげた後、とても眠くて仕方が無かった事は覚えている。居眠りした私を誰かがベッドへ運んでくれたのだろうか。ぼんやりとだが優しい手が抱き抱えてくれたのを覚えている。

思考を遮る様に、ノックの音が響いた。その後、「入るぞ」という声と共にヴァルサスが入ってくる。

相変わらず、私の返事は聞いちゃあいない。

「お早う、ユウ。どうだ、良く眠れたか？」

そう聞くとヴァルサスは微笑みながら、私の頭を撫でた。

「はい、おかげさまでとても良く眠れました。あの、私、昨日は食事の途中で居眠りしてしまって、ごめんなさい。ベットに運んでもらったみたいでご迷惑をお掛けしました」

「ああ、昨日の事か。気にしなくていい、疲れてたのだろう。私が無理をさせた」

謝るところか逆に、反省させてしまった。あれれ。

「とんでもないです！本当に有り難うございました」

私は慌てて否定した。

そんな私に対してヴァルサスは、優しく笑うと私の頭をまたもやナデナデして、返事の代わりとした。

私、ナデナデされ過ぎている。

ふと、唐突に自分が随分お風呂に入って無い事を思い出した。

あ！髪べたついて無かったかな？うーん、気になる。ヴァルサスの手は大丈夫だったかな？頭、洗いたい。私、臭く無いか？大丈夫かな？

女なのでそういう事には敏感だ。体をすっきりさせたいし、髪もしっかり洗いたい。

お風呂……、入りたい。お風呂に昨日も入って無いし、死ぬ前も体を拭くだけでお風呂には入れなかった。よし、ここは勇気を出して聞いてみよう。

「あの……、お風呂に入りたいのですが、どうしたらいいですか？」

ん？という風にヴァルサスは片方の眉毛を器用に上げると、屈んで私を見た。

「どうした？」

どうやらあまりの身長差に私の言葉が聞こえなかったようだ。ヴァルサスは背がとても高い。2 mくらいはあるのではなからうか。

「あの、お風呂入りたいんです」

「ああそうか。……ん、そうだな、準備させよう。私も入ろうと思っていた」

ヴァルサスは顎に片手をあてると少しの間、何かを思案しているようだったが、召使を呼んでお風呂の準備を言い付けると姿を消した。程なく準備が出来たのか、戻って来ると屈んで私と視線を合わせた。

「さあ、行こうか。体はしんどくないな？」

私の体調が気掛かりだったようだ。一言確認する。

「はい、この通りぴんぴんしてます！ 気合い十分です」

私としては、待望の入浴をここでストップなど掛けられては堪らない。この機会を逃したくは無かったので、出来るだけ元気であるとアピールした。

目の前で力こぶなんか作って見せる。出来た力こぶはぷにぷに

よだったのだが、ヴァルサスはクツと相好を崩して笑うと、お風呂の許可をくれた。

「おいで」

私はヴァルサスに連れられて、お風呂に向かう事に成功した。どうやらアピールが効いたようだ。

此処には個人用スイートの様に、部屋付きのお風呂があるようだった。

ヴァルサスはお金持ちか身分の高い人なのだろうと思う。こんな豪華な部屋に住んでいるし、お手伝いさんの様な人もいる。随分と身なりが良いし彼には品があった。人を使う事にも慣れている。

扉を開けるとクリーム色をしたタイル張りのフロアに、金の猫足が付いたバスタブと固定のシャワーのような物があった。シャワーヘッドはハスの花の形に似ている。

私にとって背の高いバスタブは、陶器で出来ていて縁に金が使われている。なんとも洒落なバスタブには少し熱めのお湯が張ってあった。

私は覗き込むようにしてバスタブの中を見た。これは、よじ登るしかないか。

裸でバスタブによじ登る自分の姿を想像する。……間抜けな姿だ。足台になる様な物はないだろうか？

そんな事を考えていると、突然ヴァルサスが私の手を取った。

「ユウ、脱衣所はこっちだぞ」

大きな手に私の小さな手が優しく包み込まれる。軽く引き寄せられた私は、そのまま逆らわずに付いて行った。

此方の部屋は木のフローリングに真っ白でふかふかなタオル地の

マットが敷いてある。

ヴァルサスは繋いでいた私の手を引き寄せると背中のリボンを解く。私はそんな事には気付かず部屋の中を見渡していた。此処にもセンスの良い小物が置いてある。しかし、あれは何に使うんだろう？

「ユウ、両手を挙げて」

こう？

私は何も考えず、言われた通り素直に両手を挙げた。

「もう少し上へ」

万歳をする様な格好になった。ヴァルサスは、私の服の裾を掴むとあつという間に脱がされた。いつの間にか服のリボンや釦も外されていたようで、一瞬にして上半身はスッポンポンにされる。しかも中の肌着も一緒にだ。

ええええ——！！！！ちょ、ちよつと待って。何これは！！この状況は！待て待て！！

焦ってじたばたする。既に上半身は、裸に？かれてしまった。ま、前を隠さなければ！膨らみなんて、ゼロだけでも！

「ギャアああ！！止め止め、大丈夫です！間に合ってます！！十分です！自分でします！！」

そう言うと、ヴァルサスは何言っただ、みたいな顔をした。解りにくい片方の眉だけ器用に上げる。

ヴァルサスは、ほら、みたいな事を言ったと思う。逃げようとしている私を難なく捕まえると、あっさり履いている7分丈のズボンも、下着のボクサーパンツも一緒に手際よく脱がされてしまった。

手慣れている、等と考えている場合では無い！

ヒョエエー！ー！！

ヴァルサスは私が着ていた服を脱衣用の籠に放り入れ、自分もポンポン脱いでいく。あつという間に裸になった。う、ウワーーーー！私はなんとか体を覆い隠す物が無いかと焦ると周りを必死で探し、近くにあったタオルを掴んだ。

逃げよう！取りあえず逃げるしかない！

そのまま此処から逃げ出そうとして足を踏み出した途端、ベチャリとコケた。

見事に顔から床へと突っ込んだ。い、痛い。殆どの衝撃を顔で受け止めたんじゃないだろうか。

「ふぎゃー！！」

「おいおい、大丈夫か？」

そう言いながらヴァルサスは私を起き上がらせる。逃亡計画は一瞬にして失敗に終わった。

「さ、行くぞ」

「ど、何処へ！？」

そう言って後ろから両脇を抱えて私を抱き上げた後、左腕だけで私を抱え、タオルを二枚掴むと浴室に入った。私はヴァルサスの小脇に抱えられ、ペットか荷物の様に運ばれて行く。

うぎゃああああああああああああああああああ！！

最早言葉は出て来ない。頭は真っ白、体は硬直。

ヴァルサスは私を抱えたまま猫足バスタブに何かを放り入れると、私ごとざぶんと入った。しゅつと音がしてヴァニラと薄荷を思わせる匂いと共に泡が湧き上がる。

「ん？大丈夫か？熱かったか？」

大丈夫じゃ無い。

ヴァルサスは私をくると自分の方に向け直した。背中をヴァルサスに預ける形で膝上に座らせていた私は強制的に？真正面からヴァルサスを見る事になった。みるみる全身真っ赤になっていく私を見て、ヴァルサスはあれ？という顔をする。少し眉が動いて目を見開いた。

「ユウは女の子だったのか。髪が短いから男の子だと思ったぞ」

気付くの遅いよ！

何？この刺激の強過ぎる状況は！

私は自分の胸と下を隠そうとじたばたした。お湯が跳ねて、飛び散った。

「こら、暴れるんじゃない」

ヴァルサスは私をしっかり抱え直してしまい、身動きが上手く取れなくなった。

ま、不味い。何だか意識が朦朧としてきた。身体に力が入らないよ。ヴァルサスは続けて何かを言っているのだが、何を言われている

るのやら全く理解がデキマセン。

ヴァルサスは良い香りのする石鹸を泡立てている。次の瞬間には、私は石鹸の良い香りに全身包まれた。大きくて、少し筋張った手が私の頭を気持ちよくマッサージするように動く。

大きな手は、更に耳の後ろや耳たぶ、首筋を優しく鳥の羽根が撫でる様に触れて行く。

また何か言った。でも、頭はぐちゃぐちゃなのに真っ白ふわふわで、何を言ったか解らない。

繊細な手つきで私の顔は泡で包み込まれた。眉毛を、瞼を、優しく指がなぞっていく。

そのまま私は、何かの罰ゲームか羞恥プレイの様に頭から爪先まで、体の隅々まで洗われてシマッタ。

おまけに、私もヴァルサスの体をばっちり見てしまった。引き締まって無駄の無い筋肉が付いた、豹を思わせるしなやかな体。きゅっと筋肉の付いた、すらりと長い四肢に大きな筋張った手足は、アフリカ人系の様な身体つきに似ている。肌はきめ細かくて白く、程良く日に焼けている。

小さく整った顔に濡れた髪から水が滴ると、彼は水滴の滴る鋼色の髪を掻き上げた。指の隙間から零れた水滴が顔の輪郭をなぞって喉仏を伝い、逞しい胸まで滑り落ちて行く。

瞬きをした伏し目がちな瞳はお風呂に入っているせいか、艶を増して潤み眼元がほんのり紅く色付いている。

髪の間からは少しだけ先の尖った耳が現れた。耳の先は丸く無い。

私、もう、お嫁に行けないかも……。まだ、一回も行って無いのに……。

体は子供だけど、心は三十路。三十路にも、この状況は刺激が強すぎる。頭がぼんやりしているのはお湯でのぼせたのか、ヴァルサスの色気にやられたのか……。

意味の解らない思考が私の頭の中をぐるぐると回った。

ヴァルサスに抱えられてお風呂から上がった私は、バスローブを着せられて、ぐったりとソファーにもたれていた。

………燃え尽きたぜ。

ヴァルサスの方かというと、私が湯あたりしたくらいにしか思っ
て無い様だった。

第11話 子猫の湯浴み（後書き）

今回も読んで下さって、ありがとうございます。

まだまだ恋愛要素は低めですね……。こちらでも今後、ちよつとずつ増やして行こうと思うのですが、気長にお付き合い下さい。

第12話 抛り所（前書き）

h22. 10／16 改稿しました。

第12話 抛り所

昨日の事を少しでも思い出すと、今だに顔が赤くなってくる。うう、は、恥ずかしいやらどうしていいやら。

私は一人、青くなったり、赤くなったり、百面相を繰り返してしていた。

現在、この部屋には彼女独りで居るわけではない。先程一人のメイドさんが衣服を抱えて持って来てくれたのだ。

ユウが悶々と一人で考えている中、メイドさんは手際よくクローゼットに入っている今までの服を入れ替えてくれている。ユウは手間を掛けさせるという事に申し訳ない気持ちから、メイドさんに手伝おうと声を掛けたのだが、笑顔ではっきりと断られてしまった。

まあ、自分が逆の立場でも断ると思うが。

自分の仕事を子供に手伝わせる訳にはいかないだろう。

キビキビと働くメイドさんの姿を私は大人しく椅子に座って眺めながら、こうなった顛末を思い返していた。

私は風呂から上がってふらふらする頭と体を少し休ませた後、部屋で着替えを済ませてベットに潜り込み、シーツを頭からすっぽり被って一人恥じ入っていた。何故かベットの上で正座となる。これは一人反省モードだ。

次にヴァルサスと会う時はどんな顔をして会えば良いのだろうか。あんな事や、こんな事までされてしまった。そもそも、どうしてあの時お風呂に入りたいと言ってしまったのか悔やまれる。他のタイミングで言えば良かったものを、更にアピールまでしてしまった。

あのアピール作戦が失敗だったのか？あの時、逃亡に失敗した自分の運動神経の無さが呪わしい。

もう、穴があったら入り込んでしまいたい。ついでに上から蓋を被せて頂きたい。

せめて、自分の姿が子供でなければ、こんな事態に為らなかった筈だ。くうっ！

……いやいや、そしたらこんな怪しい人物なんて、此処まで優しく受け入れては貰えなかったかもしれない。見ず知らずのがりがりに瘦せた不健康な三十路女など。

私の動揺を余所にヴァルサスは、女？の裸を見という動揺も無く全く平気そうだった。そう、あの余裕のある態度は、明らかに知っていて免疫のある証に違いない。……初心者では無く、経験者だ。しかも、男の子と思ってた、とか言ってたし。つるぺた真っ平らの胸とくびれの無い己のボディを思い出し、がっくしと落ち込んだ。せめて胸さえあれば……。

ぬううー、口惜しやー。今すぐ湧いて来い、女性ホルモン！

「ユウ、入るぞ」

ひゃあ！

私は飛び上がった。

突如部屋の扉が開いて、ヴァルサスがユウの部屋に入ってきたのだ。

ノックくらいせい！

心臓が小躍りしている。

予想よりも遙かに早く、早速ヴァルサスに会ってしまった。心の準備が全く出来ておらず、思わず体が硬直する。

ヴァルサスは手にグラスを二つ持って入って来た。どうやって扉を開けたんだろう。両手が塞がらなかったのだろうか？彼は器用にドアを開けて入ってきたようだ。

「ユウ、どうしたんだ、その格好は？」

私の格好を見たヴァルサスは怪訝そうに言った。今の私は傍から見ると相当怪しい格好に違いない。

はっ、し、しまった！一人反省モードを発見してしまった！

「具合でも悪いのか？」

「い、いえ、違います！何でも無いんです！そ、そう、気分転換です！」

動揺の為、口走った言葉は何という返事だ。素直に気分が悪いと答えた方が余程良かったかもしれない。既に後悔した。

先程の返事を取り消す様に、私は勢い良くシーツを跳ねのけベツトから飛び降りた。

ヴァルサスは少し眼を見張ったが、やがて瞳を笑みの形に崩した。楽しそうな表情になると瞳が煌めいた。

「クッ、ククッ。そうか、ならいいんだ」

両手に持っていたお茶の入ったグラスをヴァルサスはテーブルへ置くと、椅子に座って長い脚を組んだ。彼は私にも座ってお茶を飲むよう勧めてくれた。

「ユウ、冷えた茶を用意したから飲まないか？」

「ありがとうございます。いただきます」

何て気が効く人なんだろうか。ノックはしないのに。ヴァルサスはのぼせた私の事を思っこの冷えたお茶を用意してくれたんだ。
……いい人だな。

私が椅子に座ると、ヴァルサスは優雅にお茶を飲んだ。自然な仕草なのにやけに決まって見える。しかも、なんとなく色気が有る様に思えた。お茶を飲み込む時に微かに喉仏が動いた。

私の心臓はドキリと一度大きな音を立てた。慌てて下を向くと、ごくuriとお茶を飲み込む。ああ、顔が火照って来た。今頃赤くなっているに違いない。

先程見たヴァルサスの引き締まった体が脳裏に浮かんだ。大きな筋張った手と、力強い腕。そして逞しくて広い胸。

はっ！イカン、思い出しちゃイカン！！

私は己の脳裏に浮かんだ映像を必死に消そうとした。

そんな事を考えているとは予想だにもしていないだろうヴァルサスは、私に声をかけた。

「ユウ、君は今まで何処で、どんな風に生活してきたんだ？」

私がお茶を飲み込むのを見届けた後、ヴァルサスは尋ねた。

「……へっ？」

唐突に発せられた質問を、私は理解するのに時間が掛かり、答えられない。

「ユウは今迄何処に住んでいたのだ？」

「……えっと、私は日本に住んでいました。私の住んでいた地域は比較的温暖な小さな島で、とても自然が豊か（田舎ともいう）な海が綺麗な所です」

故郷の風景が脳裏に浮かび上がった。青い海と、美しい緑。港に繋いである数々の船。吹き抜ける潮の香りを少し孕んだ風と、キラキラと水面を反射する光。思い起こすときゅんと胸が切なくなった。しかし、ヴァルサスは怪訝そうな顔をした。

「そうか、悪いが日本という島は聞いた事が無いな。地図で教えてくれないか？」

「え？」

日本はそんなにマイナーだろうか？

ヴァルサスは何処に持っていたのだろうか、世界地図を私の目の前に広げてみせる。なかなか用意が良い事だ。

この地図をじっと見つめたが、日本は何処にも無くユーラシア大陸もアメリカ大陸やオーストラリア、南極大陸も無かった。それは今迄に見た事の無い地図だった。精緻に描かれたその地図は、私が見た事も無い文字で、国名や海、山の名称や数字等が事細かに書いてある。

———何これ。こんな文字見た事無い。まるでアラビア文字を見ている様。

おまけに、見た事が無い文字なのに、慣れ親しんだ日本語の如くにすらすらと読めた。

「……あの、これが世界地図ですか？」

「そうだが。ユウは地図を見るのは初めてか？そうか、ならば解ら

ないかな？此処が私達の居る国、ウィルヴェリング。この辺が私達の居る砦、守護者の砦だ」

そう言いながら、ヴァルサスは指差しして教えてくれる。

「ここ？」

「そうだ」

……違う。ここは違う、世界が違う。今までの地球じゃない。頭を何かで殴られたかのような衝撃を受けた。くらりと視界が揺れた。

魔物、異なる地図、知らない食材、見た事の無い文字、形の違う耳、あり得ない体の変化。それがパズルのピースの様に、パチリ、パチリと音を立てて嵌まって行く。

此処は異世界だ。大きな音を立てて最後のピースがカチリと嵌まった。

————最早、否定のしようが無い。私は今、異世界に居る。

視界が黒く染まった。

もう、何でも有だ……。どうにでもなれ。私は生きて此処に居る。それ以上でも、以下でも無い。健康な体で病気は無く、衣食住もどうにかなっている。ヴァルサスのお陰で。

これ以上に何を望むと言うのだろうか。今の私には健康な体がある。これ以上の望みなど何も無い。

腹を括るしか無い。一度は死んだ人生だ。もう一度、違う世界でやり直す機会に恵まれたんだ。再びもう一度生きる事が出来るという奇跡を私は手放したくなど無い！

腹を括ればもう、死んで生き返ろうが、子供になろうが、異世界だろうが、大した事でも無い様に思えてきた。こうなったら死から甦った女は強いのだ。

もう、何でもドンと来いや——！！

私は小さく拳を握り、未知なる世界で生きるといふ困難に立ち向かう決意を顕わにした。

そんな私の様子を見ていたヴァルサスは、立ち上がると傍まで来て私を軽々ひよいと抱えた。私はヴァルサスと向き合う様に抱きかえられた形となった。突然力強い腕の中に閉じ込められ、どうしようかと思わず顔を上げてヴァルサスの顔を仰ぎ見ると、彼も私を上から見下ろしていた。

——家族の眼差しを思い起こさせる、あの優しい眼差しで。

「ユウは私と共に居ればいい」

ヴァルサスの言葉は私の心に直接届いた。その言葉は優しくじんわりと沁み込んで来ると、徐々に温かく私の心を満たした。

私は自分で思っている以上に寂しさや孤独、不安を感じていたのだろう。

思わず目の前の景色が涙で歪んだ。

後から後から涙が溢れて出てきた。止まらない。

私は恥ずかしくなって、ヴァルサスの胸に顔を隠すように押し当てた。泣いている顔なんて誰にも見られたくはない。泣き声を上げない様にぐっと我慢していたがそれは抑えようが無く、やがてはみっともなくしゃくり上げながらの激しい嗚咽となって涙と一緒にぼろぼろと零れた。

ヴァルサスの胸は広くて温かく、包み込むように小さな私を抱きし

めてくれた。

耳に心地良い何時もより少し低めの声で、私をあやす様に囁きながら。

この時から、ヴァルサスは私にとって他人ではなく家族の様に大切な、心の拠り所となる人となった。

「ユウ、私の事は年の離れた兄か、父親の様に思ってくれないか？」
「えっ？」

「だから敬語を止めてくれないか？もっと親しく話したい」

「でも、迷惑なんじゃ……」

「お願いだ」

そう言ってもらえた私は幸せ者だ。なんて有り難い事だろうか。彼の持つ深い懐のお陰で、私は彼の優しさに甘える事が出来た。

「はい！」

ヴァルサスは私が落ち着くまで抱き締めてくれていたが、頃合いを見計らって更に質問してきた。

「ユウの住んでいた島では女の子は髪を伸ばす習慣は無いのか？ウイルベリングでは、子供の行事毎に髪を結い上げられるよう、伸ばすのだが。そのように短くては結えないし、男の子の様だ」

ああ、それでヴァルは私を男の子と勘違いしたのか。

「私の居た国では、これが普通なんです。……なの。髪は男女共、自由な長さになっていたよ」

「そうか。だが、此処だとその髪の長さでは悪目立ちしてしまうな。ユウ、どうだろう、カツラか付け毛をするか？髪が伸びるまでには時間が掛るからな」

ヴァルサスは此処での私の生活が、不自由で無いか心配してくれていた。有り難い事だ。しかし、鬘や付け毛など、寧ろ面倒くさくて回避したい所が私の本音だ。

「えっ？イイよ、このままでっ。このまま男の子の格好をしときます。鬘とか、必要無いよ。髪なんて伸びるし」

「しかしなあ」

「動きやすい方が好きなんです。このままで十分だから」

「そうか。ならば、そうしようか」

しかし、ヴァルサスは私を思っただろう、男でも女でも通用する様な服に入れ替えてくれる事となった。

第12話 抛り所（後書き）

今回も読んで下さって、ありがとうございます。

第13話 新緑の瞳（前書き）

h
2
2.
1
0
／
2
2
改稿しました。

第13話 新緑の瞳

——猫の手も借りたいくらいだ。

ヴァルサスは疲れを感じて、思わず溜息が出た。

目の前には、山の様に書類が積まれているが、一向に減らない。

「ヴァルサス殿下、新たに治療所から報告が。それと、治療上必要な薬草や物資の不足により備蓄庫からの使用許可を求めています」

部下から報告書を受け取ると、眼を通しつつ指示を出す。

「使用は許可する。物資の補充状況はどうなっている？急がせろ」
「はっ」

報告書には現状と問題点、更には今後予想される事態が記載されている。

こうして新たな仕事が増えると言うわけだ。

他に眼をやると、従者のカイルも同じように仕事に追われている。ひっきりなしに執務室に持ち込まれる問題に指示を出している。何時もは爽やかなカイルの表情にも疲れが滲んでいるように見える。ヴァルサスは眼頭を揉むと再び目の前の書類に意識を向けた。

この砦は魔物の襲撃にあって以来、人手が不足している。

魔物に襲撃された後、奇跡的に死人は出なかったのだが、疲労と心労からの病気や修復作業での怪我などで倒れる人間が続出した。おかげで治療所の全てのベットは患者で埋まってしまい、スタッフ

は悲鳴を上げている。

いくら傷や、体の損傷が治ったとしても、受けた苦痛や恐怖等の感情や経験はそのまま消せずに残っている。心の傷やストレス、疲労などは目に見える傷の様には癒されない。心の奥深くに刻まれたまま、根深く残っているのだ。この現状を迎えているのも当然の事態かもしれない。

倒れたのは騎士や召喚士達ばかりでは無い。この砦での下働き達も数多くいたのだ。それは、この砦を支える土台となる人員であるため、砦の機能を正常に保つ事に滞りが出る程だった。

そのためヴァルサスの所からも人員が駆り出された。まさに何処も人手が足りない状態となっていた。

ヴァルサス自身も極力自分の身の回りの事は己自身で行わないといけない。しかし、幸いな事に元々そういった性分なので、特別何かに困る事など無かったが。

それに此処が戦場であれば、そんな贅沢など最初からありもしない。

しかし、ヴァルサスには一つだけ気掛かりに思う事がある。それはユウの事だ。

ユウをずっと放置したまま私は仕事に取り組んでいる。ユウは一体どんな気持ちで独りこの時を過ごしてるのだろうか。さぞかし寂しい思いをさせていることだろう。

慣れない場所で独り過ごさせている今の状況は、子供にとって不憫だった。

……独り部屋で過ごしているユウには何冊か本人の元へ書物を届けておいたが、今頃どう過ごしているだろうか。

ユウは年齢の割に妙に大人びた、手の掛からない子供ではあるが、まだほんの小さな子供である事には変わらない。

この自分の腕の中で、全身を震わせるようにして泣いたユウを思い出した。小さな、小さな身体で魂の底から振り絞る様にして泣き声を上げた、脆くて哀れな存在を。

あの小さな存在を抱きしめたその時からユウが何処の誰であろうと構わなくなった。もしも、ユウの保護者が現れたのならその時はそれで良い。しかし、現れなければこのまま自分の元で引き取ろう。あの時そう思ったのだ。そして、今もその気持ちはほんの少しも変わらない。

自分には一人養うくらい出来るだろう。しかも、私は王位継承権を放棄しているので今後世継ぎを残す煩わしい義務も無いし、その気も無い。婚姻もしない。今迄も、そしてこれから。

周りは色々と煩く騒ぎ立てるだろうが、構わない。もう二度と、心から傍にいて欲しいと思える様な女性には出逢う事など無いだろう。

今もまだ、あの人に未練があるのだろうか？解らない。極力考えない様になっているからだ。私としては、ただ、彼女が幸せである事を願うのみだ。

私はこれ以上思考する事を半ば強制的に止めた。そうしなければ、己の心に向き合わなければならぬ。思考と心の迷路に迷い込みそうだった。

私は目の前にある山積みになっている仕事に集中する事にした。

報告書には今回の魔物の襲撃によって起こった被害状況と破損状況、被害損額、修繕状況、人員確保、物資の補充状況などが記載されている。ヴァルサスは現状把握のため部下を呼び付け報告をさせると更なる指示を出す。現状の砦の機能を元の状態に回復させなければ。

この砦の本来の役割とはすなわち、魔物からこの国を守るというものだ。これを正常に機能させ続けなければならない。

更に、此処に住む人々の生活もある。この砦には300人の騎士と60人の召喚士、医療班と砦に住む者達の生活を支える下働きの者や、スタッフが存在している。また、出入りの商人などもいた。

時間はいつもより早く、物凄いスピードで否応なく過ぎて行くように感じた。

報告書に目を通して行く。報告によると、砦の修復は順調に進んでいる様だ。

襲撃を受けたその日の内に王都へ報告がなされると、王都からは医療スタッフや建築技術者などの第一陣が当日のうちに到着し、次の日には大工や騎士達、その他の人員が物資と共に到着した。

こうも早くに修復が進んでいるのは、王都が手早く対応してくれた結果だ。迅速なその対応に、ヴァルサスや砦の者は尽く彼らに感謝した。

お陰で人手不足だった現状には大いに助けとなり、何とか砦の運営ができています。現在は王都から次々と資材と物資が運ばれてきていた。

出来るだけ速く、砦の機能を復旧させなければならぬ。この砦は常に魔物の脅威にさらされているのだ。

「岩の警戒、巡回に回す人手は確保出来ているな？」

カイルは報告に来た騎士隊長から書類を受け取って見ていたが、眼を此方に移して返事をした。

「はい、そちらの人員の方は足りております。ただし、先日の魔物の様な、相手でなければですが」

「そうか。皆、良くやってくれている。現状が落ちついたら、人員の交代を王都に寄越させよう。此処での務めが長い者では3年位になる。彼らにも、此処を離れての休息が必要だろう」

「は、かしこまりました」

カイルは書類の束を抱えて執務室を出て行った。私は再び次の報告書を手にとった。

どのくらい経っただろうか。部屋を漂う良い香りに気が付いた。お茶の香りがする。私は顔を上げた。

カイルが香しい香りのするお茶の入ったティーカップを持って現れた。一緒に菓子も付いている。カップからは温かな湯気がゆると立っていた。

「どうぞ、召しあがって下さい。少し休憩をなされてはいかがですか？」

「ああ、ありがとう、カイル」

私はお茶の入ったカップを受け取ると、しばし香りを楽しんだ後ゆっくりと飲んだ。疲れた体に熱いお茶が潤いを与える。ホッと息を付いた。

カイルは私が一息つくのを見守った後、口を開いた。この様子だと、ずっと機会を窺っていたのだろうか。

「ヴァルサス様、この前の召喚の事をお聞きしたいのですが」

「何だ？」

「あの黒い球体の魔法陣と虹色の召喚獣は一体……？ 私には見た事も聞いた事も無い魔法陣と召喚獣でした。あの召喚は何だったのでしょうか？ 殿下は何かご存知なのではないですか？」

「……」

「私は、あれ程の力を持つ召喚獣を喚ぶ事が出来る者など、貴方以外知りません」

カイルの言葉に返事をせず、黙って聞いていた。

「召喚者は殿下ですね？ あれは殿下自ら行われたもの、違いますか？ ……あの状況であれ程の召喚を行うとなると、随分と御無理を成されたのではないのですか？」

カイルはため息を交えながら聞いてきた。成程、言いたい事は解っている。何時ものものだろう。

「……ああ、私が召喚したものだ。あの状況では仕方なかったんだ。だが、あの召喚獣は故意に呼び寄せた訳でなく、イレギュラーが発生したものだ。……事故だよ。だから、詳しい事は私にも解らない。しかし、そのおかげで我々は生きているし、私も死なずに済んだ」

ヴァルサス自身、今回の召喚での契約で己の命を取られずに済んだのはイレギュラーが発生した為だろうと考えている。彼は、国内の学者にあの黒い魔法陣と虹色の召喚獣について早急に調べさせるよう手配していた。過去の文献にも載っていないあの不思議な召喚獣は一体何なのか。

「そうですか。くれぐれも御身を大事にしてくださいよう、お願いいたします。貴方に何か合っては、我々は……」

私は、その言葉を遮る様に言葉を発した。いい加減聞き飽きている言葉だからだ。

「我が国は今だ王が健在だ。それに、アルフリードも居る。あいつが次期後継者と決まっているのだし、何も心配する事など有りはない。この任務には常に危険は付きもの。そうだろう？」

「……」

カイルは諦めた様に口をつぐんだ。カイルの瞳には一瞬憂いの様な感情が渦巻いている様に見えたが、それを実際に口に出すことは無かった。カイルは眼を瞬かせると、本を閉じたかの様に、あっという間にその瞳には何の感情も見えなくなった。

これはいつもの様に繰り返される遣り取りだった。カイルは私の身体を心配してくれている。それはありがたい事だが、私には自分の身以上に守りたいと思う物や、重く感じる王族としての責務があった。決して自分の命を軽く考えている訳ではない。

しかし、カイルの眼には自分がどう映っているのかは解らなかった。

「そういえば、今、殿下の部屋には子供がいるとか。一体何があったのですか？」

まさか、噂どうり貴方の隠し子ではないでしょうね？」

カイルは話題を変えた。これも気になってたのだろう。

先程の表情とは異なり、面白そうに澄んだ湖の様なアクアブルーの瞳を輝かせて、カイルは聞いてくる。これは、明らかに楽しんでいる表情だ。

カイルは冗談めかして聞いてくるが、まさか本心ではないだろうな？

「……」

一体どんな噂が流れているのやら。

早くも子供は噂になっているみたいだ。全く、何処から話が出回ったのか。噂は今頃尾ひれが付いて流れているのだろう。

「違う。子供は私の命の恩人だ」

そう言う口をつぐんだ。無駄に面白がられたくないからだが、カイルはその答えに明らかに物足りなさそうな表情をしていた。

———暇。

時間を持て余してる。ユウは椅子にだらりと座った。

砦の人員と違ってこの時ユウは一人、する事も無くぼんやりとしていた。ヴァルサスは何冊か本を用意してくれたが、手渡された本は子供向けだったので、あっという間に読んでしまった。本の内容はというと、この国の歴史や神話で美しい挿絵が乗っていた。どちらかというと、文字が少なく挿絵の量が多いような本だったので、すぐに読めてしまった。

ユウは、此方の世界に慣れようと思い、紙とペンを用意してもらって文字の書き取りをしていたけれど、しばらくすると気分転換が

したくなった。

単に飽きてしまったとも言える。

此処から外へ出てみたいな。窓の外を眺めながら心の中でポツリと呟いた。何度もそう思っては、自分を窘めた。それは、ヴァルサスより一人で出歩かないようにと言われていたからだ。でも、もうそろそろ好奇心の方が強くなってきている。

慣れない場所で一人過ごす時間はとても長く感じた。

ちよつとだけ……。

そう思ってしまう程にユウは時間を持て余していた。それに、何かしてないとひたひたと、孤独がユウに迫って来る様に思えた。私は孤独の影に怯えていた。

私は部屋の外へと通じる扉をゆっくりと開いた。扉は音も無く静かに、思っていたよりもずっと軽くあっさりと開いた。扉を開けると何かがいるのではないかと密かに思っていたが、其処には誰もおらずしんと静まり返った廊下があるだけだった。

私はきよろきよろと周りを見渡して、誰もいない事を確認した。よし、どうやら大丈夫そう。私は部屋の外という、初めて経験する場所へと第一歩を踏み出した。

広い廊下には人影が無く、私は堂々と廊下を歩いた。

廊下の端まで来ると下の階に降りる階段があったので、私は迷わず下の階に降りた。此処の階はユウが居た上品な雰囲気があるフロアとは違って、どちらかといえば実用的な雰囲気がある。扉が幾つも並んでいて、まるで宿舎の様な造りだ。そのまま更に階段を降りると1階に出たようで、廊下を忙しそうに歩く人々とすれ違った。

すれ違う人々は皆背が高く、女性でも170cm以上はありそう
だ。途中、怪訝そうに私を見るメイドさんや騎士達、作業服を着た
男性達等がいたが、私は気にせず砦の中を探索した。

初めて見る珍しい石造りの建物はさり気なく柱や壁、手すりなど
の所々に飾りが施してあった。それらは私の視線を奪い、怪訝そう
な視線など全く気にならなかった。

差し込む日差しと建物に遮られて出来る複雑な影が美しい。

私は気の向くままうろろしていると、中庭だと思われる場所に
出た。

私の居た部屋の窓から見えた場所だろうか？

中庭は美しく整えられていた。花壇には花が咲き乱れている。花
以外にも植物が植えてあった。

「わぁ、綺麗……」

堇のような可愛らしい花や、白や、ピンク色の小さな花が風に揺れ
て咲いている。辺りに花の香りが濃く漂った。私はしばらくその花
々を眺めて香りを楽しんだ後、好奇心と共に更に中庭の奥へと進ん
だ。

私は自分が子供というのを武器にして、この砦を見学して回ろう
と思っていた。子供ならば、注意を受けるとしても多少大目に見て
くれるだろうから。

けれど、うろついている間に本当に迷子になってしまった。

この砦は広く、そして入り組んでいる。ワザとそういう造りにな
っているのだ。敵が来た時に砦の構造が直ぐには解りにくい様にし
てあった。

……此処って何所？

右も左も分からない。いつの間に来たのか石畳みの広い空間に来ていた。

此処が何処だかさっぱり解らなくなった私は、どうやって部屋まで帰ろうかと半ば途方に暮れて考えた。

……どうしよう。誰か人に尋ねようか。

突如、自分の周りの日差しが遮られ、大きな日陰が私の上から出来ていた。

————え？

大きな鳥の羽ばたく音が頭上から聞こえてくる。

空を見上げると、私の遙か上の方から大きな影が覆いかぶさって来た。影は3m以上はあるかという大きな獅子の胴体に、巨大な鳥の様な翼を持った生き物が、翼を羽ばたかせ降りてくる。

な、何アレ！

砂埃を大量に巻きあげながら獅子は降りてくると、私は風圧に吹き飛ばされそうになり、思わず体を竦ませた。

「うわっ！」

突如、私の頭上から声が降ってきた。

獅子の背には男性の姿があった。男性は獅子の背からひらりと降りると私の前に素早く移動した。

「おい、踏まれてないか、大丈夫か？どうしてこんなところに子供がいるんだよ？」

そう言うと、声の主は私を猫を持ち上げる様に両脇に手を差し入

れ、ひょいと自分の眼の高さまで持ち上げた。不安定になった私の両足はブランブランと宙で揺れる。

「あっ！」

驚いて顔を上げると目の前には燃えるように鮮やかな赤毛で、新緑を思わせる碧の瞳を持つ凛々しい男性が私を覗き込んでいた。

第13話 新緑の瞳（後書き）

今回も読んで下さって、有り難うございます。

第14話 殿下と副団長（前書き）

h22. 10／22 改稿しました。

第14話 殿下と副団長

「おい、ボウズ。お前、一体何処からこんな処へ迷い込んできたんだ？」

私の体は宙に浮いていた。目の前の男性が、私の身体を自分の眼の高さに合うよう持ち上げたからだ。まるで、無力な犬か猫になった様な気分だ。

男性の美しい新緑の瞳から鋭い眼光が放たれ、私の眼を射抜いた。

「うう……」

怖い。

男性の鋭い眼差しも、後ろにいる羽根の生えた獅子も迫力満点だ。男性の問いに何て返答をしたら良いか考えるが、緊張の為か全く何も思い浮かんで来ない。

「……」

私が答えられないでいると、更に男性はずいっと顔を寄せた。綺麗な新緑の瞳が一段と近くなった。

うつつ、ち、近い……。余計に怖い。

緊張が一段と高まり、私はごくりと唾を飲み込んだ。息が詰まりそう。

そんなに迫力のある眼で見られると、余計に緊張してしまう。今や、私は必死になってどう説明しようか、あれやこれやと考えたが、さっぱり何も思い付かない。

だ、駄目だ。何にも思い浮かばないよ。どうしよう！

背中に冷や汗がつうと伝った。ドキドキと心臓が早鐘を打つ。

突如、この緊迫した雰囲気を打ち破る様に、生温かくてざらつとした感触の何かが私の左頬にべろりといった感じで触れた。

「ひええっ！な、何？」

思わず悲鳴が出た。緊張している上から更に未知なる感触を味わい、混乱がピークになった私は半泣きになりそうだった。

反射的に感触のした方を見ると、今度は思いつきり顔面一杯に生温かく湿った赤い物がべろりべろりと二度も舐めるように私に襲い掛かった。

「んっ！ぷうあっ！」

息苦しいっ。一体何なの？！

「おい、ヒエン。止めろ、子供が驚いているじゃないか」

先程の怖い男性が私に救いの手を差し伸べた。私は半泣きになりながら、男性の腕にしがみ付いた。未知なるべろろ物体がもたらす恐怖に、先程まで感じていた男性への怖さは吹き飛んでいた。

男性が制止を掛けると漸く気持ち悪さと息苦しさから解放された。ううう。私を襲ったべろろ物体は一体何だったのか？そろりと確かめた。

見ると、大きな獅子の閉じられた口から仕舞い忘れた大きくて真

っ赤な舌が覗いている。

どうやら先程の得体の知れない気持ち悪い感触は、このヒエンと呼ばれている獅子の舌だったみたいだ。この舌に思いつきり舐められたのか。

「よしよし、怖かったな。もう大丈夫だぞ」

半泣きになった私の顔を見られたのだろうか？あやす様に男性は私に言った。

「ヒエン、その半出しになった舌を仕舞えよ」

先程まで怖い程の鋭い眼光を放っていた男性の瞳は、今では違う光を宿しているように見えた。私に触れている大きな手は、温かいぬくもりを服越しに伝えてくる。男性の両腕は私をそのまま包み込むと、ヒエンの舌から私を庇うように、彼の胸へと私を押しつけた。しかし、その力は私にとって強すぎた。

「うむうつ。ちょっと…」

ぐ、ぐるしい。力が強いよ、この人。い、息がっ！

再び生命の危機を感じて、じたばたと男性の腕の中で暴れる。彼は漸く気が付いたのか、私を抱く腕の力を緩めてくれた。

「お、すまん。苦しかったみたいだな。少し力が強かったか」

「……」

少し所では無い。危うく知らない男性の腕の中で昇天するという、危険なシチュエーションに陥る所だった。

あ、危なかった……。

男性はその腕から漸く私を解放し、地面に降ろしてくれた。ゼイゼイと音をたてて息をしながら必死に酸素を取り込む。返事が出来る余裕など、今の私には欠片も無い。

その様子を見た男性は少しやりすぎたと思ったのか、隣にいる獅子に話し掛けた。

「こうなったのも全部お前の所為だぞ、ヒエン」

自分の事は棚に上げて男性はヒエンを非難した。非難されてヒエンはフンと鼻を鳴らした。明らかに納得していない。

ヒエンと呼ばれるこの獅子は、黄色と赤橙色のトラ縞の毛皮に朱色の？をしていた。何とも色鮮やかだ。更にその背中には驚の翼を持っていて、トラ縞の尻尾の先はヤマアラシのように鋭い棘になっている。

ヒエンは私に顔を近づけてくると、鼻をフンフンいわせながら私の匂いを嗅いだ。今度は何をするつもりだろう。私は身がまえた。するとヒエンは猫がする様に、大きな頭と体を私に擦りつけてきた。

うをつつ。こ、転げる。

大きすぎる獅子の身体は小さな私の身体では受け止められず、バランスを崩して転げそうになる。

「ふあっ！」

咄嗟に私は近くに在る物、すなわち男性の足にがっしりしがみ付いた。

「ボウズ、お前随分とヒエンに気に入られたみたいだなあ。こいつは気難しくて、なかなか人には懐かないんだが……」

少し驚いた様に男性は言ったが、必死に男性の足にしがみついている私にとって、そんな事はどうでもいい。

「おい、ヒエン。お前はもう厩舎に戻れ。御苦労だったな」

男性はヒエンに劳いの声を掛け、ヒエンの背中に括り付けてある鞍を外すと、彼は劳わる様な優しい手つきでヒエンのふさふさした毛を撫でる。

鞍を外されたヒエンは返事をしているかの様に両耳をぴくぴく上下に動かした。

しばらくすると、挨拶が済んだのだろうか？ヒエンは、男性から視線を外すと私の方を見た。

———ん？

何故に此方を見る？……嫌な予感がする。

ヒエンに私の背中側から服の襟首近くを軽く啜えられたかと思うと、ひよいと子猫のように持ち上げられた。どうやっているのか、器用に啜えていて私の皮膚を傷つけず、首が服で締まる事も無く持ち上げられていた。

「ひゃあ！」

か、勘弁してよー！

「おい、おい。ヒエン、それはお前の食事じゃないぞ」

見かねたのだろう、男性は呆れた様にヒエンに声を掛けた。
ヒエンはそれに対して男性の方に首を巡らして顔を向ける。宙に
浮いている私も必然的に一緒にそちらを見る事になる。またもや私
の両足は地面と離れてぶらついていた。

……はあ。今日は何でか、吊るされる事の多い日だわ。

遂に私は、半ばあきらめの極致に到った。

そんな私を放っておいて、一人と一匹のやり取り？は続く。

「なにィ？こら、何を言っている。そいつはお前の子供じゃないん
だぞ！！しかも、お前、オスだろう！」

男性は少し焦った様な表情をしている。対するヒエンの反応はこ
の位置からでは見えないけれど、この様子だと本当に会話が成立し
ているみたいだ。————驚いた。

「はああ？彼女と一緒に居たいだあ？……メス、い、いや女の子か
！そういうのは獣同士でやれ！っておい、勝手に連れて行くな！！」
「ガウ」

……一体どういうのだ。今のは聞き捨てならないぞ。

「その子はお前にはやらん！そんな事はこの俺が許さんぞ！此処に
置いて行かなければ、お前の今日の飯は抜きだっ！」

「……」

……貴方のモノになった記憶もありませんが。

この状況は、結婚の許しを乞う彼氏と、それに反対する父親という緊迫した場面みたいだ。お父さんは今にもちゃぶ台に手を掛けようとしている！

そして私かというと、この騒動に出くわした隣近所の人で、ハラハラしながら見ているという気分。

ユウは吊るされたまま、第三者の様な気持でいたが明らかにこの騒動の中心人物であった。この場面は更に続く。

「ウウウ」

ヒエンは耳を激しく上下にピクピク動かしている。抗議するかの如く長い尻尾を激しく地面へと打ち付けた。砂埃が宙に舞う。

「そうか、其処まで俺の言う事が聞けないのなら、仕方ない。お前をベニと一緒に厩舎にぶち込んでやる！！」

ああっ、お父さん、ちゃぶ台ひっくり返したー！

とたん、ヒエンの体は硬直した。？と毛が逆立ち、尻尾はぴんと立っている。

———あ、固まった。

ヒエンは一声キュウンと鳴くと耳と尻尾をだらりと下に下げた。どうやら最後の一言で勝敗が決まったようで、ヒエンは啞えていた私をそっと放してくれた。私は久しぶりに感じる地面の感触を、大いなる喜びを持って迎えた。

漸く解放された……。はあ。

ヒエンは私の方をじっと見て、切ない眼差しで何か訴えたように

している。しかし、遂に諦めがついたのか、ヒエンは私の顔を名残惜しそうに一回舐めると、背中に哀愁を漂わせながら、去って行った。

……さようなら、ヒエン。

私は絶対に引き留めない。このまま見送る事にした。

「はあ。あいつは一体何を考えてんだか。お嬢ちゃん、悪かったな。あーあ、ヒエンの涎で顔がベトベトだ」

そう言うと、疲れた様に溜息をついた。彼は私の頭をぐりぐりと撫でると、懐のポケットからハンカチを取り出してヒエンの涎が付いた顔を拭いてくれた。

「さて、遅くなったがお嬢ちゃんの名前は？俺はレオン・アシユレイだ」

「夕月沙耶です」

「……ユウか」

私の名前はまたもや軽く省略されてしまった。多分発音し難いのだろう。

「ユウ、さっきはボウズと呼んで悪かったな」

そういうと彼は鮮やかな緋色の頭を照れた様に掻いた。私は気にしていないとレオンに伝えた。

「なあ、ユウの歳は幾つだ？」

「29歳です」

私は素直に自分の年齢を答えたけれど、勿論信じてもらえない。彼は私を上から下までざっと眺めると言った。

「何だ？ 熟女ごっこか？ うーん、お嬢ちゃんが本当にその年なら良かったんだがな。お嬢ちゃんがあと、15歳くらいは歳がいったらなあ。なかなか良い具合にこう、成長してそうなんだが、本当に残念だ」

こうとはボディの事かしら。今の私には凹凸という物が全く無い。しかも、熟女ごっことお嬢ちゃんとは。私はショックを受けた。特に熟女の方に。しかし、レオンは全く気が付いてない。

「お嬢ちゃんは どうして 此处に居るんだ？ 迷子にでもなったのか？」

先程とは違って優しく私に問い掛ける。この雰囲気なら、身構える事無く返事が出来た。

「はい。多分あっちの方から来たと思うんですが、途中で解らなくなっちゃって……」

「あっち？ あちらの方向と言えば、宿舎かな。一体誰の連れ子だ？ お父さんか、お母さんは？」

「……」

私はヴァルサスに迷惑が掛かりそうだと思った事と、自分が言い付けを守らずに出てきた事で、多少後ろめたさを感じていて、素直にヴァルサスの名前を言えなかった。

「しょーがねえなあ」

レオンは溜息をついて両眼を閉じると、何かを諦めた様に明るく言った。

「俺は今から少し用事が有るんだが、それが済んだ後ならお嬢ちゃんに付きあって宿舎まで送ってやれるぞ」

「ありがとう！レオンさん。とても助かります」

「よしよし、それじゃあ行くか。ヒエンの所為で時間を食っちゃまった。それと、俺の事は呼び捨てでいいぞ。そんなに畏まらなくてもいいからな」

「はい、レオン」

レオンは外した鞍をさっさと片付けると、石畳みの空間を出て建物の中に入って行った。

私はレオンの後に付いて廊下を歩く。必死に足を動かして付いて行こうと歩くが、足の長さが違いすぎて、見失わないよう歩くので精一杯。途中、何度かレオンは振り返って私の存在を確認した。

レオンはヴァルサスよりも更に背が高いのでは？そう思いながらも小走りに付いて行く。

息を切らしながら付いて行くと、レオンがさっと此方に来た。

突然私の体は宙に浮いた。何の断りも無くレオンが掬う様に私を抱き上げたからだ。

「ほら」

「きゃあっ！」

ぐんと視界が高くなる。あんまり高いので、思わずレオンの肩と首に両手でしがみついた。

「た、高いよ」

「ははは、びっくりしたか。高いだろ。自分で言うのもなんだが、俺ってスマートで背が高いからな」

「……」

ホント、背が高い。私の目線は二メートルくらいの高さになって
いるのでは？

私が目を白黒させているのを見たレオンは突如、堪え切れなかった様に吹き出した。

「ははは！」

レオンは楽しそうに艶のある声で笑った。目線が同じ位の高さになった為、整った凛々しい顔が良く見える。先程までの怖い顔はな
りを潜め、打って変わって違う表情を見せた。細まった瞳は悪戯っ
子の様にきらきらと煌めいて、とても魅力的だった。

その彼の笑顔に私はしばし、頬を赤らめてぼうっと見惚れてしま
った。

「あ、レオン様。お疲れ様でした。今、戻られたのですか？」

建物の中の長い廊下を進んでいると、前から青年とも呼べそうな
年若い騎士の格好をした男性が近付いてきた。

「ああ、たった今戻った所だ。殿下は今、どちらに居られる。執務
室か？」

レオンは殿下と呼ばれる人に用事があるようだ。二人のやり取り
を黙って大人しく見ていた私は、レオンの立場はこの青年の上司だ
ろうと推測した。

「いえ、先程まで執務室に居りましたが、今は席を外されています。会いに行かれるのなら、もう少し後にされた方が良いかと思いますよ」

「そうか、何処かに出られたのか？」

「いえ、砦の中に居らっしゃいますよ」

青年は先程から気になっていたのだろう。私の方をちらちらと見ていたが、やがて好奇心に負けた様にレオンに質問した。

「ところで、その子は一体どうされたのですか？まさか、レオン様の子供ですか？」

「違うに決まってるだろ。な、お嬢ちゃん」

私はコクリと頷いた。

「そうですか、ならば守備範囲が遂に其処まで広がったとか。いけませんよ、そんな小さな子供にまで悪戯しては」

「……人を変態扱いするな！この子は迷子になってた所を偶然拾っただけだ」

そう言うのと、何故か青年は残念そうに言った。

「なんだ、そうでしたか」

青年は笑い、それではと一言挨拶をして其の場から立ち去った。レオンは随分と碎けた上司なのだろう。部下とあんな風に話をする人なら。

レオンは苦い顔をして青年を見送ったが、こちらを向くとやけに真剣な顔をして、私に言った。

「まったく、どいつもこいつも好き勝手な事を言う。ユウ、いいか。あんな悪い大人は絶対信用しては駄目だぞ。人をあんな風に無闇に疑うもんじゃない」

私は取りあえず、ここは素直に肯いておく事にした。なんだから、違う事を言っではいけないような……。

「はい、レオン」

「よしよし、お嬢ちゃんは本当に素直でいい子だな」

何故かホツとしたようにレオンは笑顔を見せた。

彼は私の頭を軽く撫でると、懷から時計の様な物を取り出して時間を確認する。

「今は丁度昼時だな。先に食事をしてから殿下に会いに行くか。お嬢ちゃんも腹が減ってるだろう？ 昼飯と一緒に食おうか」

「はい」

そういうわけで、お昼を御馳走して戴く事となった。

向かった場所は皆の食堂だ。丁度お昼時だったので、食堂には沢山の人が集まっていた。

騎士や作業着を着た職人さん、他にも白い制服を着たお医者さんや医療スタッフの様な人達などでごったがえしていた。

幸い、隅の方にある小さなテーブルが空いていたので其処で食事を取る事となった。

レオンはトレイに山盛りに盛った自分用の食事と、私には軽いお子様ランチを思わせる物を持ってきてくれた。

内容は、カリッと揚げてある根菜の様な物と甘い肉団子とサラダ。あ、美味しい。主食は少し硬めの丸いパンだ。味は全体的に甘く、薄味だ。

「それはお嬢ちゃん専用特別メニューだぞ。料理人に頼んで作ってもらったんだ」

そう言うと、レオンは顔を傾けて調理場の方へ視線を送った。レオンの視線の先にはコックさんが立っていた。あの人が作ってくれたのか。私はコックさんと眼が合ったので、軽く頭を下げた後、手を振った。

すると、向こうも軽く手を振り返してくれた。何となく嬉しい。私は嬉しかったのと美味しかった事で、特別メニューを残さず全て平らげた。

「おお、良い食べっぷりだな！」

「はい、ごちそうさまでした！」

二人が美味しい食事を食べ終わると、その頃を見計らった様にレオンの部下と思われる騎士達が数人、私達が食事をしているこのテーブルにやって来た。彼らの制服は他の騎士と違って青い布地に金糸で刺繍が施してある。そう言えば、レオンの着ている制服も彼らと殆ど一緒のデザインみたい。

他の人から見たら色々と違いがあるのだろうけども、私には良く判らなかった。

「副団長お疲れ様です。いつの間にお戻りでしたか？」

「ああ、お疲れ様。王都から戻って来たのはつい先程だ」

「そうでしたか。毎度毎度、大変ですねえ。……ところで副団長、一体どうなされたんですか？この子供は。……まさか？」

「俺のじゃない。趣味でもないぞ、断じて。迷子になっている所を保護したんだ」

「へえー、てっきり自分は……」

「それ以上言うなよ。実力行使に出るぞ。それに子供に悪い影響を与えるだろ」

彼らはレオンが本気である事を察し、それ以上聞くのを止めた。

「な、なあ。そう言えば、殿下の噂を聞いたか？何でも、隠し子がいたとか。その子供が今、この砦に居るらしいぞ。確か、4〜6歳程度の珍しい髪色の子供で、何でも黒髪だとか……」

騎士達の会話がぴたと止まった。しんと静まり、視線が私に集中する。な、何？

「まさか……」

「なあ」

「そうだな」

「……俺達この辺で失礼するか。それでは副団長、自分達、務めに励んでまいります」

レオンの部下達はあっという間にその場から居なくなった。

「……」

レオンは額に手を当てて、下を向いた後、実に深い溜息をついた。

「はあああ……」

彼は席から立ち上がると、食事を食べ終わって水を飲んでいる私に声を掛けた。

「ユウ、そろそろ殿下の所へ行こうと思うが、お前も一緒に付いて

来い」

そう言うと、私をひよいと抱えて歩きだした。

有無を言わず抱えられた私は再び視線がレオンと一緒に合った。彼には何か思う所があるようで、先程とは違う通路を足早に歩いて行く。

レオンは歩くのが速く、どんどん景色が過ぎて行くように思えた。気が付くと宿舎の中に居たみたいで、見た事のある風景に変わっていた。その間、レオンにしがみ付いていた私は邪魔にならないよう大人しくしていた。

3階のフロアに入ると丁度廊下の奥にいたヴァルサスと出くわした。

常に落ち着いていて、感情をあまり表に出さないヴァルサスが今、別人のように見えた。いつもは整えられている髪が所々乱れていて、表情は硬く焦っている感じた。

「殿下！」

……デнка？

レオンはそうヴァルサスと呼んだ。そのままヴァルサスのもとまで私を抱いたまま近づいて行く。

ヴァルサスはずんずん一直線にこちらに向かって来る。

「ユウ！探したぞ、何処に行っていた！」

ヴァルサスは走る様な勢いで、あっという間に私達の所まで来た。ヴァルサスはレオンの腕からひよいと私を受け取ると、そのままぎゅっと苦しい程に抱きしめた。

「……………心配したぞ、ユウ。無事で良かった」

「ヴァル、ごめんなさい」

彼の只ならぬ様子に私は驚いて、素直に謝った。余程心配させたのだろう。心から、申し訳なく思えた。

ヴァルサスは暫らくそうしていたが、やがて私にしか聞こえない程の小さな低い声でそつと言った。

「悪い子には、後でたっぷり仕置きをするからな」

凄みの効いたヴァルサスの声に、私はゾクリと背中に寒気を感じた。ひえっ。

ヴァルサスは、レオンにお礼を告げると同時に彼の報告もその場で一緒に受けた。

レオンはヴァルサスに声を掛けられるまで、ヴァルサスと私のやり取りを茫然とした様子で見っていた。これ以上は開かないだろうというぐらい、眼を真ん丸に見開いて。

その後、私がたっぷりお小言と、お仕置きを受けたのは言うまでもない。

第14話 殿下と副団長（後書き）

今回も読んで下さって、ありがとうございます。

第15話 閉じ込めた想い（前書き）

今回は、ヴァルサス視点です。

h22. 10/28 改稿しました。

第15話 閉じ込めた想い

良い香りが部屋を満たしている。花の様なお茶の香りが執務室に漂った。

「ヴァル、お茶をどうぞ」

「ああ、ありがとう」

幼い声と共に湯気が立ちのぼるお茶が机の上にそっと置かれた。傍には茶菓子も用意されている。ヴァルサスは湯気の立つカップを手にとると、まずは香りを楽しんでからゆっくりとお茶を味わった。ふわりと口の中に花の香りが広がる。少しだけ酸味のあるすっきりとした味が舌を刺激して喉を滑り落ちて行く。その香りがゆっくりと心を解していく。

「——ん、ユウが淹れてくれたお茶は美味しいな」

そう褒めるとユウは頬をほんのり赤く染めて嬉しそうに微笑んだ。

「本当？ああ、良かった！ちゃんと淹れているか心配だったの。ヴァル、このお茶菓子も一緒にどうぞ」

「ああ、ありがとう」

その笑顔を見ると、自然と自分まで微笑んでしまっている。

……可愛いな。この笑顔を見ているだけで癒される。

ユウが動かたたびにこの国では珍しい黒髪がさらりさらりと揺れた。ふわりと、お茶とは違う香りが微かに漂いヴァルサスの鼻孔をくす

ぐる。

いつの間にか手を伸ばしていた。ユウの微かに揺れる黒髪に向けて。私はユウの頭を撫でるとユウの髪感触をゆっくりとこの手で味わう。

ユウの髪はさらさらと零れ落ちる様にヴァルサスの指を愛撫してはすり抜けて行く。私はその感触に魅せられた。とても心地良い。

ユウの胸元には銀のチェーンにオパールを嵌め込んだ首飾りがさり気なく存在感を放っている。ユウが動くとき首飾りも一緒に、きらりと輝いて揺れた。

……ユウにとっても良く似合っている。

それは、ヴァルサスがユウに贈った首飾りだった。首飾りはユウの胸元にしっかりと馴染んでいて違和感がない。

ヴァルサスは湧きあがる満足感に満たされて微笑んだ。

その微笑みは猫が目を細めて喉を鳴らす時のような、蕩ける様な表情だった。

——ヴァルサス自身気付かずに。

ヴァルサスは仕事だったが、気付かない内に随分と時間が経っていた。丁度ユウがお茶を淹れてくれたので、一息淹れて少し休憩を取る事にした。私はユウも一緒に飲もうと誘った。

「うん。ありがとうヴァル。それじゃあ私も一緒にいただきますかな？」

ユウは白い小さな手で器用に自分用にもお茶を淹れた。カップの中を少し赤みがかった液体が満たして行く。

私はユウがお茶を飲みながら、嬉しそうに笑顔を浮かべて茶菓子

を食べる様子を眺めた。私にとっては軽く一口で食べれる程度の小さな茶菓子を、ユウはあーんと口を開けてパクリと食べる。ユウにとっては茶菓子が少し大きいのだ。大きなそれを、下品ではないが気取らずにもぐもぐ食べている姿は小動物のようだ。その様子を見ているだけで気分が良くなった。

もう一度、私は今の顔が見たくなった。ユウに自分の菓子も勧めてみる。

ワザと少し大きいのをだ。

「ユウ、これも食べないか？私はどういうから、食べてくれるといいんだが」

「えっ？そうなの？じゃあ、もらいます。それにしても、このお菓子本当に美味しいねえ。こんなの食べた事無いかも」

「そうか、気に入ったか？だったら遠慮するな」

ユウはもう一度あの顔を私に見せてくれた。……………可愛い。私もお陰で満足だ。

この子供は出会ってから少しの間にこんなにも、するりと私の心に入ってきた。

……一体いつの間だろう？

私の脳裏には先日の出来事が浮かんた。

ユウを一人部屋に残して仕事をしていたヴァルサスだったが、ユウの事が気掛かりで脳裏から離れない。仕事の合間を縫って何とか

少しの時間を作ると、ユウの様子を窺いに部屋へいそいそと戻った。部屋で一人、ユウが寂しい思いをしていないか気になって気が急ぐ。自然と歩調も早くなった。

宿舎の三階フロアに戻る。ユウの部屋の扉をノックして返事を待たずに扉を開ける。

私の脳裏には驚いて此方を見るユウの姿が浮かんでいた。今回は飛び上がるだろうか？それとも、笑顔で迎えてくれるだろうか？

顔が自然と緩んだ。

扉を閉めて部屋を窺う。

—————人の気配が無い。

私の予想は見事に裏切られ、其処にはがらんと静まり返ったユウのいない部屋があった。

「ユウ？」

返事は無い。

「……ユウ。何処に居るんだ、ユウ！」

段々と声が大きくなっていった。普段の生活では大声を出す事など無いというのに。

私はユウが部屋に居ない事を確認する。突如、訳も無く心に湧きあがってくる焦り。先程までの気分は吹き飛んでいた。

むくむくと焦燥感と喪失感が湧きあがって来る。

何だ？この気分は。

まるで、心に隙間が出来てしまったかの様だ。

侍女を呼んで声を掛けるが、彼女はおろおろと動揺しつつ、解らないと答えた。

ユウが居なくなっていた事に気が付かなかったのか。
拳をぐつと握りしめる。でないと何かに当たってしまいそうだ。
握った拳は白く汗ばんでいた。

何者かに侵入された形跡は何処にも無い。

此処には彼の張り巡らしている仕掛けがあった。部屋に侵入者があれば探索に引っ掛かるのだが、今迄何の反応も無い。

これらを見れば明らかだ。ユウは自分からこの部屋の外へと抜け出したのだ。

その場で召使いに指示を出し、急遽ユウを探させる。

幾ら、ユウが聞き分けが良く賢い子供とはいえ、こんな処に閉じ込められて平気な筈が無いだろう。

クソッ。

自分を蹴り上げてやりたい。

ヴァルサスは頭を掻き筆ると、ユウを探しに部屋の外へ出た。

もしやと思うが、ユウの身に何かあったらと思うと居ても立ってもいられない。

——— 搜索を始めてから半刻後、意外な事にユウはレオンに連

れられてひよっこ戻って来た。どうやら無事だった様で、私は安堵の為ほっと胸を撫で下ろした。

「ユウ！探したぞ、何処に行っていた！」

ユウが現れた時少しの間我を忘れた。私はユウの元まで駆け寄るとユウを抱きしめていた。気が付くと、腕の中には戸惑う様な表情をしたユウがいる。ユウの香りと体温が確かに己の腕の中にあった。

「……………心配したぞ、ユウ。無事で良かった」

「ヴァル、ごめんなさい」

ユウは花が萎れる様に項垂れた。しゅんと下を向く。

それにしても、何故レオンと一緒になのだ？

レオンに眼を向ける。

ヴァルサスは自分の立場をすっかり忘れていたが、自分を見つめるレオンの視線とぶつかった。レオンの間抜けな顔を見てはっと我に返る。高ぶっていた感情が落ち着きを取り戻した。

私とした事が、己の立場を忘れるなど。

自分を取り戻すと、レオンからの報告をひとまずその場で受ける事にした。

頭の片隅では別の事を考えながら。

——さて、一体どうやって反省させようか？二度とこんな想いは御免だ。

小さな耳元にそっと唇を寄せる。

「悪い子には、後でたっぷり仕置きをするからな」

報告を受ける私の腕の中で、ユウはその小さな身体を一層縮こませた。

あの時、ユウを見て湧きあがって来た複雑な感情。一体あれは何なのだ？それは余りに強すぎて、自分の物でありながら持て余す。自分でもどうしていいか分からない。何故と己に問い掛ける。この感情は似ているのだ。未熟な自分があの人を想った時と。

……胸の奥が疼く。

ユウが部屋を一人で抜け出した日以降、ヴァルサスはユウを自分の眼の届く所に置いた。なんだかんだと理由を付けて、傍に居させる理由を自分に言い聞かせながら。

それだけに留まらず、更に何時でも所在が確認できるよう魔力の付加された首飾りを渡しておく。これはユウの為だと言いながら。保護者なのだからと、ユウのプライバシーまで侵害する。

あの時の心境は、もう二度と味わいたくない。

ユウが居ない事で感じた焦燥感と喪失感。まるで、自分の方が迷子になったかの様だ。私はこんな小さな子供に明らかな執着心を持っている。

その事実嫌が応でも気付かされた。

——出来れば己の腕の中に囲ってしまいたい。ずっと自分だけのモノだけにして。

はっとする。

今、何を考えた？

違う、そんな筈は無い。

己の感情に戸惑う。そして、危険性を感じる。

いや、持て余していると言っている。

この強い執着心は何だ？

親や兄弟、そして自分には居ないが子供に向けるものとは違う。

何故、年端もいかぬ己の半分も歳を取って無いと思われる子供にこんな感情など覚えるのか……。

これ以上考えたくない。……危険だ。

心の奥底にこの感情を閉じ込める。硬く、硬く封印をした。

次の日、ヴァルサスはユウを執務室に連れてきた。

ユウは暇を持て余しているようなので、簡単な用事を与えてみたのだ。

昨日、ユウに説教をしたヴァルサスだったが、ユウの意見も聞く。やはり、寂しかった様だ。更に、他にもユウは意外な事を言った。

自分も何か手伝える事をしたいと言うのだ。

驚いた。

何かの役に立ちたい様なのだ。こんな小さな子供がそんな事を言うのかと。

存在を認められたいという思いがあるのだろうか。人は他人に認められる事で、己の存在意義を確認するものだ。それとも居候をしているという心苦しい思いが、幼い子供の心にあるのかもしれない。

私は早速ユウの希望どうり用事を頼んでみた。これならば、抜け出そうなどとは思わないだろうし、ユウが感じていると思われる居候としての心の負担を軽くしてやる事が出来るだろう。

それに、自分の傍に居させる事が出来る。本当は別の用事でも良いのだが。

早速カイルに協力してもらい、ユウに簡単な用事ができるよう教えを頼んだ。

それから早かった。ユウはカイルからお茶の淹れ方を教わると、直ぐに覚えてしまったのだ。しかも、回数をこなしていくうちに、カイルより上手に淹れるようになった。

今や、私とカイルのお茶を淹れるのはユウの仕事となっている。

他にも簡単な仕事（お使い）を頼んでみたが間違わずに行って戻ってきた。相手方に書類や、資料などもきちんと届いたようで、更には返事を持って帰ってくる。

おいおい、凄いな！ユウ。

期待以上の働きに驚愕する。思わず抱きしめ撫でていた。これに

はカイルも驚いた様だ。

その時は、思わず力が入りすぎたのかユウが潰された様な声を出していたが。

勿論、お使いは重要でない内容の物を頼んでいる。

ユウに与える用事が無い時は本を与えて読ませたり、カイルに頼んで一般常識やマナーなどを教えてもらっている。ユウはこの国の者では無いので常識に疎い処があったからだ。

カイルは意外にも教えるという事に才能を持っていたようで、ユウはスポンジが水を吸う様に知識を吸収していった。

そうこうしているうちに、ユウは早くも此処の砦に馴染んできたようだ。

ヴァルサスの部下達とも話をするようになり、カイルやレオン、召喚士や召使いにまで可愛がられている。

その証拠に出掛けた先からお菓子を貰ってくるようになった。

今日も何か貰ってきたようだ。

「ヴァル、レオンと召喚士さん達からまたお菓子貰っちゃった！これ、初めて見るお菓子だけどとっても美味しそうなの！」

ユウはレオンの所へお使いに行つて来たのだ。

嬉しそうに小さな袋を私に見せる。上機嫌だな。

うん？それは、有名な菓子工房の焼き菓子ではないか？

「そうか、良かったな。その菓子は王都にある有名な菓子工房に売つてある物だろう。私もその菓子を食べた事があるが美味しいぞ」

……値段もまあまあした筈だったが。

「えっ、そうなの？嬉しい！どんな味だろう。食べるのが楽しみだなー」

女と子供は甘い物が好きだからな。ユウも一緒だ。

ユウはもう一つ何かを手にとっていた。菓子その他にも何か貰ったようだ。

どうやら果物？の様に見えるが、色合いが何となく不気味だ。しかも、蔓など途中で千切れていて、いかにも自分で採ってきましたという野趣溢れる感じがする。

これは食べ物なのか？

「ユウ、それは？」

声を掛けるとユウは楽しそうに返事をした。

「これはヒエンから貰ったの。とても珍しい果物らしくて、もぎたてだって。一体何処で採ってきたんだろう？」

「—————そうか」

レオンが騎獣にしているマンティコアか。変な処が飼い主に似ているようだ。

ユウはそんな獣にまで貰っているのか……。

何と言えば良いのだろうか。得体の知れない物は貰ってはいけませんと、教えてやる必要があるな。

ともあれ、仕事を与えた事は正解だったようだ。

それにしても、あやつら召喚士達からは毎回菓子を貰ってくる。
もしや、ユウは餌付けされているのではないだろうか？

密かに疑ってしまうヴァルサスだった。

第15話 閉じ込めた想い（後書き）

今回も読んで下さって、ありがとうございます。
次回は遅くなりましたが、漸く魔物との戦闘シーンになります。

第16話 炎の嵐（前書き）

今回もヴァルサス視点です。

h22. 10／28 改稿しました。

第16話 炎の嵐

長く感じていた守護者の砦の修復作業は漸く終わりを告げた。朝も早くから響く、修繕作業での活気ある喧しい音から漸く解放された。

久しぶりに平穏な朝を迎える。空気は清々しく、差し込む朝日はいつもより一段と眩しく感じた。

ヴァルサスは修復作業をとても長く感じていたが、実際のところ修復作業は迅速かつ確実に行われていた。王都からの建築技師や大工達の手を借りて、守護者の砦は以前より強度を増して存在を新たにしていた。

ヴァルサスは報告書に眼を通す。手に持った報告書には人員の配置転換が記載されていた。今回の騒動で、王都への異動をさせたのだ。

多数の怪我人や病人達も砦の修復が済む頃には回復し、砦の人員達も落ち着きを取り戻しつつあった。

ただ、怪我人や病人達の中には未だ精神的に不安定な者、ストレスを強く感じている者等、癒しが必要な者も存在した。その為、移動が可能である者は王都へと帰還をさせた。

今の砦の機能は、被害を被る以前とほぼ同じ程度にまで回復している。周辺地域の巡回任務に砦の騎士や召喚士達の半数程度が出ている。

魔物は相変わらず、数を減らす事も無く度々出現している。その為、絶えず哨戒任務と周辺地域の警護、討伐を続けていた。

ここ数年、魔物の出現回数や数自体が増えてきている。活動が活発になっており、数年前よりも明らかに強くなっていた。

これは一体どういう事だ？ 一体何の兆しなのだろうか。事態は今まで説明されていない。

突如朝の爽やかな空気が一変する。魔物が出現したと、緊急で連絡が入ったのだ。魔物はこの砦付近に出現していた。

見張りの棟より非常事態を知らせる鐘の音が、煩く鳴り響いた。

執務室にいたヴァルサスは、魔物出現の報告を受けると直ちに戦闘準備に取り掛かるよう指示を飛ばした。

執務室にはヴァルサスの他にカイルとユウがいた。私はカイルに指示を出す。

「カイル、戦闘準備を。私の装備を此処へ、私も出る。あと、侍女のフランを呼べ」

「はっ」

カイルは素早く姿を消した。

先程から、ユウが不安そうに私を見ている。

こんな表情はさせたく無い。出来るだけユウに不安を感じさせないように、私は笑顔を浮かべて話し掛けた。ユウには砦の安全な場所へ避難させる必要がある。

「ユウ、この砦付近に魔物が現れた。私は今から魔物を退治してくるからユウは退治が終わって安全になるまで、侍女のフランと共に

部屋で待っていてくれないか？」

「魔物？魔物って、この前の様な？」

ユウはとても不安そうだ。私の服を小さな両手でぎゅっと掴み、潤んだ琥珀の瞳で此方を見上げてくる。その表情はこわばっていた。私は下の方にあるユウの小さな顔に両手で触れると、両頬を包み込んだ。親指をそっと動かして、その軟らかい頬を緩く撫でる。

「いや、違う。今回はグール共だ。やつらは大して強く無いから、安心して待っていてくれ。討伐はすぐに終わるだろう」

そう伝えると、砂金を混ぜ込んだ蜂蜜のような瞳に様々な感情がよぎった。

しかし、ユウの愛らしい唇から洩れた言葉はたった一言。

「うん……。待ってるから」

ユウは不安そうに私を見上げながら頷くと、私の体にぎゅっとしがみ付いた。ユウが自分からこんな風に、私に抱き付いてくる事など初めてだ。ユウの小さな体で表現された気持ち、私は自分の体で受け止めた。安心させる様、小さな体を抱きしめ背中を撫でる。その時ノックの音が執務室に響いた。

「入れ」

「失礼致します」

呼び付けていた部屋付きの侍女、フランが素早く到着する。私はユウをフランに預けた。

「フラン、ユウの事をしばらく頼む」

「はい、お任せ下さいませ殿下。このフラン、しかと承りました」

フランはしっかりとした声ではっきりと返答をした。彼女ならば、大丈夫だろう。

強張った顔で私を見ていたユウは何か言いたそうな表情をしていたが、フランに促されると大人しく執務室の外へ姿を消した。

私は魔物の討伐に向け自分も準備を整える。

「ヴァルサス様、剣と鎧、ローブを準備いたしました」

「頼む」

「はっ」

カイルが私の剣と鎧を差し出す。私はそれを、手早く装備する。

ヴァルサスの出で立ちは、黒の戦闘服に青銀に輝く籠手と半身を覆う鎧、下肢を覆う具足だ。これらは全てに魔力が付加されており、薄く軽量でありながら防御力に優れている。

ヴァルサスの装備した鎧と籠手、具足の留め金をカイルが締めに行く。

腰に剣を佩き、その上から襟の高く肩の詰まった、眼にも鮮やかな金糸で縁取りが施してある白のローブを身に纏う。ローブは足元まであったが、意外と肩や足の動きを妨げない仕立だ。足の付け根近くから下の前身ごろは切り取られたようなデザインになっている。

「どうだ、カイル」

「はい、何時でも出れます」

「行くぞ」

私はローブの裾を翻し、カイルと共に急ぎ砦の門へと向かった。

共に移動するカイルの姿は剣を装備し、黒い戦闘服に体幹を覆う強度を高めた銀の鎧と肩当て、籠手と具足、色鮮やかな青のマントを装備している。その姿は金糸を思わせる彼の髪に映え、良く似合っていた。

相変わらず鎧姿が良く似合うヤツだ。

この姿に魅せられた御婦人達の気持が解らなくも無い。

私はこの緊迫した空気に似合わない事をちらりと考えた。

彼の後ろを歩くカイルは凛々しい表情で淡々と歩く。カチャカチャと金属の擦れる音を立てながら、二人は砦の門目指して急ぎ移動した。

門に到着すると騎士隊長がこちらに駆け寄って来た。

「ヴァルサス様！」

「魔物は？」

「既に、6番隊と7番隊が交戦中です。相手はグールの群れとワイバーンです。グールの数は百を下らないでしょう。ワイバーンは10頭程確認されました」

「そうか、砦の守備はどうなっている？」

「8番隊から10番隊の者が当たっています」

この砦の騎士団は騎士と召喚士で形成されている。彼らはそれぞれ

れ騎士10人、召喚士2人を一グループとした部隊で分けられ、1番から30番隊迄で形成されている。

現在16番隊以降は各々砦の周辺地域の巡回任務に当たっていて、この砦からは出ていた。

11番から15番隊は度重なる任務から、休息を与えられている。現在動けるのは、1番から10番隊までとなる。

この騎士団の団長はヴァルサスである。副団長はレオンだが、昨日からレオンは王都へ出ていた。

門に移動すると、其処には1番隊から5番隊の騎士団員達が隊列を組んで待機していた。

騎士たちは鎧姿に盾、剣や槍を装備している。召喚士達は鎧姿の者から半身を覆う鎧や軽装の者など、カイルの様な姿の者から重装備の者と様々だった。

共通しているのは、騎士は赤い色のマントや紋章を身に纏い、召喚士は青いマントや紋章を身に纏っている事だった。

ヴァルサスは彼らに向けて片手を挙げ、命令を下した。

「よし。橋を上げよ！全門封鎖、結界展開！皆の者、いざ、出陣！」
「ウオオオオオおお！！！」

鬨の声を上げ、ヴァルサスを先頭に騎士団員達は勇ましく出陣した。

騎士団員達が砦の外に出終わると、砦の跳ね橋が上がり重い音を立てて門が硬く閉鎖される。その上から砦全体を覆う様に結界が張られた。

グールは醜惡な姿をしている。その姿は、まるで全身の皮膚を剥ぎ取った様な姿で、骸骨に筋肉と筋が付いているといった風貌をしている。グールは人肉を好み、ある程度の知恵が働く。大きさは成人男子と同じくらいか少し大きい程度で、獣のように手足を使い四つん這いになって移動する。その力は強く凶惡だ。

ワイバーンは翼竜の一種でこちらも凶暴だ。毒のブレスを吐き、その尻尾にも猛毒を持つ毒針が付いている。蝙蝠の様な翼を持ち、腕と翼が同化している。体長は成人男子の2倍程度である。

「1番隊から4番隊の召喚士達よ、結界を展開せよ！」

先に交戦をしている6番隊と7番隊に合流し、戦闘を開始する。

グールの此方を上回る数とワイバーンの空中からの攻撃とで、両方に挟撃される形となる。6番、7番隊は召喚術を持って魔物に對抗していた。

ヴァルサスの命令と共に地上に魔法陣が幾つも出現し、魔法陣の数に合わせた召喚獣が出現する。召喚された召喚獣は、主に防御に適した大地を司る精霊や霊獣、妖精等が多い。

形成された結界は、騎士達を守る様に召喚士の意図に添って自在に展開した。

盾のように広がった結界はグールの鋭い爪での凶暴な攻撃と、ワイバーンの毒ブレス、重い鞭の様な毒針攻撃を、力強く硬い音を立てて受け止めた。

ヴァルサスは続けて指示を出す。

「1番隊から7番隊騎士達よ、そのままグールと交戦し、合図と共に回避に移れ！」

5番隊から7番隊召喚士達よ、これより炎嵐の準備に入る。魔力を合わせてかれ！」

ヴァルサスの命令と共に一斉に声を合わせて召喚士達が詠唱を始めた。力のある召喚獣を呼び出すのだ。

召喚獣を呼び出すまでに掛かる時間は騎士達と結界とで凌ぐ。

ヴァルサスは召喚士達が放つ大量の魔力を引き寄せ、一つに集束させると組み上げ導いて行く。

召喚士達の詠唱が終わると巨大な魔法陣が二つ、彼らの前に出現した。

魔法陣がゆっくりと回転し光を放つ。

其処に現れたのは燃え盛る炎を纏う炎の魔神イフリート。

更に、猛き風を纏う風の魔神ヴァーユの姿が出現した。

「騎士達よ、回避行動に移れ！召喚士達よ、カウント3で発動せよ！」

「3、2、1、発動！」

ヴァルサスの声と共に突如、視界一面に炎が吹き荒れ空をも焼きつくさんばかりの巨大な炎の竜巻が出現する。

爆音を響かせながら、空気が沸騰する程の高熱を発し炎の竜巻はその姿を現した。

炎の竜巻は意志を持つように唸りを上げ、グールの群れに襲いかかる。あっという間にグールの一団を呑み込み、狂気を孕んで暴れまわる。この炎と風は勢いが衰える事が無い。更に、中の温度は想像を超える高熱だ。

炎の竜巻は一段と燃え盛り、空気を巻き上げ全てを焼き尽くさん

が如くに獯猛に牙を？いた。

ウギヤアアアア——！！ギイイイ！！

逃げ遅れ、全身を炎に焼かれるグール達の悲鳴が響き渡る。

しかし、それだけでは済まない。

炎の竜巻は更に恐ろしい勢いで膨れ上がる。その大きさを更に増すと八岐大蛇を思わせる姿に形を変化させ、分裂する。

炎の大蛇は8つの首で鎌首をもたげ、轟々と恐ろしい音で咆哮を放つ。炎の咆哮はグール達にとって、地獄から響く音の様に聴こえただろう。

八つの頭は一斉にその真っ赤に燃え盛る巨大な口を開くと、瞬く間に天から降り注ぐように四方八方から一気にグールの群れを呑み込んだ。其処には一片の慈悲も無い。逃げ場も無く、グール達は炎熱地獄に陥った。

かくて、100体以上いたグール達は一瞬の内にほぼ全滅した。

炎嵐の術の激しさに、熱風がヴァルサス達騎士団までも巻き込まれたかと思われたが、炎と風は彼らを髪の毛一筋さえ傷付ける事無く、皆平然としている。

炎と風が消えると共に、二つの魔法陣も消失する。少し遅れて2体の召喚獣も姿を消した。

炎が消えると其処には高熱で焼き尽くされ、真っ黒い炭と化したグールの屍が累々と現れた。炭は風に吹かれて砂の様に形を崩して行く。

後には、炎を逃れて生きているグールが数匹が残っていたが、最早騎士達の敵ではない。あっけなく討伐される。

空中のワイバーンも先程の炎の竜巻に飲み込まれ、半数が焼死していた。残るは5匹。

そのうち一匹は、他の物と比べてひとまわり大きい。

ワイバーン達の動きは統制が取れていた。此方の攻撃を回避しつつ、空中から毒ブレスが襲ってくる。此方の隙を突いて尻尾での毒針攻撃が奔った。騎士の数人かは結界に守られながらもその衝撃に吹き飛ばされていた。

ひとまわり大きなワイバーンを中心として攻撃と回避をしている。どうやらこのワイバーンが司令塔の様だ。

更に、このワイバーンはシールドを周囲に張っている。張り巡らされたシールドにより、此方の攻撃が尽く弾かれていた。

厄介な相手だ。

防御を担当している召喚士達の疲労の色が濃い。早々に決着をつける必要がある。

そう判断すると、ヴァルサスは司令塔のワイバーンを第一に片付ける事にする。

「魔物は地を這っているのがお似合いだ」

ヴァルサスは詠唱も無く武器召喚を始める。

右手の前に魔法陣が一瞬で構築され、次の瞬間にはヴァルサスの身長より遙かに長い巨大な槍が出現していた。

ヴァルサスは体をバネの様にしならせ思い切り踏み込むと、巨大な槍を司令塔のワイバーンに向け力一杯放った。

放たれた槍は空気を切り裂く音を立てながら、物凄い勢いで司令塔ワイバーンに向かう。槍は一瞬でワイバーンに迫ると張り巡らされたシールドを易々と打ち破り、左の眼球を一気に貫いた。

ギョエエエエ——！！

身の毛もよだつような鳴き声がその場に響き渡った。

ヴァルサスは槍を放った瞬間から同時に走り出していた。

その姿はまるで獲物を狙う肉食獣だ。走りながら、無詠唱で再度武器召喚を開始。瞬く間に魔法陣が二つ、赤の文様を描きながら両腕を取り巻く様に構築する。次の瞬間には異様な程に巨大な長刀が両手に握られていた。

左の眼窩から槍を生やした司令塔ワイバーンは体制を崩して苦悶の咆哮を放つ。ヴァルサスは司令塔のワイバーン目掛けて勢いをつけたまま跳躍した。驚愕の跳躍力を見せ、一気にワイバーンに迫ると両腕の長刀を力強く振り降ろし両翼を一刀のもとに切断する。

ワイバーンの両翼にぴつと赤い線が奔る。

そのままワイバーンの頭上まで跳躍。くるりと体制を反転し両刀を左右に交差させ勢い良く振りぬいた。

「落ちろ」

その言葉を合図にしたかのように、司令塔ワイバーンの首に赤い線が奔った。首がずるとズレると、血を噴水のようにまき散らしながら首・胴体・両翼がバラバラとなって地上に落ちた。

司令塔が居なくなったワイバーン達は統制が取れなくなった。

各々がバラバラに行動し、尻尾を巻いて逃げようとする。しかし、それを許す騎士団達ではない。

ヴァルサスの傍にいたカイルは既に詠唱を始めていた。魔法陣が現れ、其処から風の精霊シルフィードが出現する。カイルの召喚し

たシルフィードは風の刃をワイバーンに無数に叩きつける。刃で翼を切り刻まれたワイバーン達は飛行する事すら叶わず地上に落ちた。こうなると、ワイバーン達はまともに身動きする事すら出来ず、赤子の手をひねる様に騎士達の手で退治された。

第16話 炎の嵐（後書き）

今回も読んで下さってありがとうございます。
戦闘描写って難しいですね……。

第17話 クリムゾンの瞳（前書き）

h
2
2. 1
1 / 2 改稿しました。

第17話 クリムゾンの瞳

魔物は、ヴァルサス達はどうかただだろう？

ヴァルサスから自分の部屋で待っている様に言われたユウだったが、ヴァルサスや仲良くなった召喚士達が心配でたまらない。

魔物とは、グールとは、一体どんな相手だろう？

もし、ヴァルサスや皆に何かあったら……。ヴァルサスは大丈夫って言ってたけど、実際どうなんだろう。傷ついてはいないか？

———怖い。

ヴァルサスに何かあったら。そう思うと、とても心細くて堪らない。

ユウにとって、ヴァルサスはこの世界で生きて行く上で心の拠り所となる唯一の存在であり、保護者の様な存在でもあった。それは子供が親を無条件に信頼している姿と似ている。

この世界で生きて行く術のないユウにとって、ヴァルサスは絶対的な存在であると言っている。精神的にも生活面でも。ユウは今まで無自覚だったが。

私はこんなにも彼に依存している。まるで、生まれたばかりの雛鳥が親鳥を求める様に。

彼が居ないこの世界では生きて行けない。
そんな気がした。

此処での生活に慣れ日々を過ごして行くうちに、ヴァルサス以外にも私の存在を支えてくれる人達が現れた。それは、得体の知れない私なんかと仲良くしてくれる、レオンやヒエン、カイルやフラン、召喚士達だ。彼らの存在は私にとって、とても大切な友人や先輩、親戚のオジサンの様な存在となっていた。

そんな彼らが戦っているのだ。危険を顧みず。

——このまま此処でじっと待っているなんて出来ない。

この部屋から抜け出して、ヴァルサスの様子を見に行こう。

決心した。一度決めてしまえば迷う事など何も無い。腹の底にぐっと力が籠った。

侍女のフランの隙をじっと窺って、フランがほんの少し此の場を離れた隙に、私はそっと抜け出した。

「迷惑掛けてごめんね、フラン。後でたっぷり反省するから。でも、どうしてもヴァルサス達が気掛かりで、大人しく待っているなんて出来ないの」

心の中でフランに手を合わせて謝った。

私は砦の中を必死で走った。

途中、見張りの騎士達に見つからないよう辺りを窺い、時に身を隠しながら。

今だけは、この小さくなった体に感謝する。目立つ事無く物陰に隠れて移動する事が出来たからだ。

砦の外が窺える場所を目指して走る。多分こっちの方だったと思う。

最近ではお使いと称して砦の中を探索する機会が出来たので、この砦の構造に以前よりは詳しくなっていた。迷子になる様な事は無い。

この砦は建物の周囲をぐるりと外壁が囲んでいる。外壁の一番上は回廊となっていて、其処から敵が攻めてきた時に攻撃できるようになっていた。私は外壁上の回廊を目指して階段を一気に駆け昇る。

子供の体は体力が無いし、段差の高い階段を昇る事がキツイ。

途中で何度も息が上がり、心臓がバクバクと動悸を打つ。それでも歩調を緩めず階段を駆け上がると回廊までたどり着いた。

肩で大きく息をしながら壁に手を付いて呼吸を整える。汗がどつと出てきた。

少しして息が整うと、そつと顔を覗かせて回廊を窺う。砦の守護に当たっている騎士が巡回しているのが見える。

こっちに気付きませんように……！

私は息を潜めて体を縮こませた。

騎士が私とは反対方向に向けて巡回に回る隙に、音を立てない様その場をそつとすり抜けた。

こそこそしながら進んでいると、丁度隅の方に小さな子供一人なら入れそうな物陰になっている空間を見つけた。私は其処に滑り込む。

———此処なら見つからずに良く見れそう。

改めて周りを窺うと、視界の上には淡く輝く不思議な壁があった。不思議な壁はこの砦を守る様にすっぽりと砦全体を覆っていた。これは今迄無かったものだ。一体何だろう？

しかし、疑問は取りあえず置いて、ヴァルサス達に集中する。

「ヴァル、皆、何処に居るの？」

良く見えない。私は更にヴァルサス達の姿を見ようと身を乗り出して周りを見渡した。

音が響いてくる方向を良く眼を凝らして窺うと、この砦より少し離れた場所で戦っている騎士団と魔物の群れが見えた。

あつ、あそこっ！

赤と青の騎士達の中に、目にも鮮やかな純白の衣装を纏った姿が目に入る。陽光を受けて、鋼色に光る銀の髪が見えた。

ヴァルサス！

騎士団は彼らの人数を上回る数の魔物と交戦していた。魔物の群れが目に入った途端、私の心に怪獣クンに感じた時とは違う怖気のような生理的嫌悪が湧き上がる。

何だろう？とても嫌な感じがする。あれが魔物？

凄い数。あんなのと戦うなんて。しかも、空を飛んでる蜥蜴みたいなものもあるし。

あんな魔物に対して一体どうやって戦うのだろう。

突如、空を焼き尽くす程の巨大な炎の竜巻が出現した。炎の竜巻はあっという間に魔物の群れを呑み込むと、瞬く間に焼き尽くして行く。

す、凄い……。

ユウは召喚獣と騎士団によって次々と討伐されていく魔物たちの

様子を、ただ茫然と見つめた。

騎士団達の実力は圧倒的だった。

魔物が退治されて行きたび最初に感じていた強い不安が私の心から消えていく。

全ての魔物が退治されるのを見ると、私は安堵の為全身の力が抜けていった。へなへなと手すりに凭れかかる。

「はあー、良かった……」

でも、ヴァルサス達は怪我をしてないだろうか？ 彼らの無事をこの目で確かめない事には安心できない。

私は外壁の上の回廊からヴァルサス達の戦いを見ていたが、自分でも気付かないうちに回廊から随分と身を乗り出していた。

こんなのでよくもまあ、見つからなかったな。我ながら感心しちゃう。

ぐっと力を込めて乗り出していた身を起こそうとしたが上手く力が入らない。途端、つるりと手が滑った。

がくんと身体が傾く。

えっ？

地面が目飛び込んだ。私は重力に引き摺られ、真っ逆様に頭から落ちる。

身を乗り出している私の身体を押し止める物は何も無い。

「きゃあああ！！」

死ぬ、間違いなく頭をぶつけて死んじゃう！

悲鳴を上げながら落ちる。必死にもがいたが、掴まる処なんて何処にも無い。

——！！
やだよう！また、死にたくない！！も、駄目！だ、だれか助けて

私は地面に叩きつけられる瞬間が来るのをぎゅっと眼を閉じ、覚悟した。

しかし、衝撃は何時まで経っても襲ってこない。

「……………」

訝しく思い、硬く瞑っていた両目をそろりと開けた。

「……あ、あれ？生きてる」

私は誰かの温かい腕に抱きかかえられていた。

恐る恐る眼をそろーっと開いた私の視界に入ったのは、青銀の髪にクリムゾンの瞳を持つ美少年だった。私はその美少年に横抱きにかかえられて宙に浮いていた。

だ、誰デスか？どちら様？ もしかしなくても、今、浮いちゃってる？

私の口はぱくぱくと魚の様になった。驚きで言葉が出ない。
私のピンチを救ってくれたこの美少年は、一体何処から現れたの

だろう？

私の眼とクリムゾンの燃える様な瞳が自然にぶつかった。視線が合うと、彼は眩しい笑顔をその美しい顔に浮かべた。その時私は一瞬光が差し込んだような気がした。

「漸く君に逢えた。僕の愛しい女神よ」

彼は唐突に言った。そして、私の額に口付けを落とした。――？
！！

「へっ？ええ？」

な、何？この人！今、何が起こったの？

この状況でそのくっさいセリフとは一体何なの？初対面の相手に向かって。おまけにチュウを。そう、チュウ。

………チュウウ？！なんじゃそりゃー！

と、いうか誰？

どうなってんの？

「会いたかった。君の前に何度も姿を現そうとしたけど、まるで力が出なくて出来なかったよ。君の中は、優しく温かく僕を包みこんで、とても居心地良かったよ。まるで母親の胎内にいるようだった」

美少年はうつとりした表情を浮かべて、私の耳元で囁いた。

な、何だか相当キテる人かも……。本気でやばい。

相当危ない人の様な気がする。変質者？

私、何処をどう間違って今の状況に陥っているんだろう。この危険人物は一体何処から湧き出て来たのだろう？

危ない。これは避難しないと。しかし、私の気持ちとは裏腹に全く身動きできない。

この危険人物の腕の中から抜け出したいけど、力が強いし宙に浮いているから出来そうにないよ！

あわあわと、私は美少年の腕の中でもがく。

美少年はそんな私の様子に構わず話し続けた。

「ずっと君の中で眠っていたかったよ。でも、そうすると今以上に君の体に負担が掛かる。

それに、君と直に会って話したかった。もう一度、君の姿をこの眼で見たかったんだ」

「何の事？私の中？一体何を言っているの？放して、お願い！」

美少年はくすりと笑った。

「嫌だ」

「……えっ」

「覚えて無いの？僕の事。あれ程印象的な出逢い方をして、君の小さな身体の中に僕を受け入れてくれたのに」

そんな事は、した事無いよ！少年の恥ずかしい発言に体がかつと熱を持つ。

ん？身体の中？

「————ああっ、もしかして怪獣クン?!」

私の中といったら怪獣クンしかない。最近怪獣クンが私の中にいる事を殆ど忘れていたが。

「そうだよ、僕の女神。やっと気が付いてくれたね。気が付くまでこのまま君を抱いて、慌てて嫌がる君の姿をずっと見ていようと思ってたよ。それにしても、怪獣クンとはセンスの無い凄い呼び名だね！ははは！」

美少年は軽やかな声を上げながら体を震わせて、本当に可笑しそうに笑った。

呼び名については同じレベルだと思う。それをこの人に言われたく無い。

それにしても、この人……怪獣クンはちょっと意地悪な気がする。いや、気では無い。本物のいじめっ子だ。

「僕の名はシリウスというんだ。ユウツキ・サヤ。此方の言い方でいうと、サヤ・ユウツキか。宜しくね、サアヤ」

私の中に居たせいか、シリウスは私の本名を知っていた。彼は、不思議な発音で私の名を呼んだ。

第17話 クリムゾンの瞳（後書き）

お気に入りに登録して下さった方が、800件を超えました。本当に有り難うございます！

第18話 魔族（前書き）

h
2
2.
1
1
／
2
改稿しました。

第18話 魔族

周りの景色が一瞬でころりと変わる。

私は眼を瞬いた。まるで映画を見てるよう。

シリウスは不思議な力で砦の内側に瞬間移動した。私を抱えたまま。

私は物凄く不思議に思い、どうやって移動したのか彼に尋ねた。

「ああ、今のは魔力を使ったちよつとした転移だよ」

どうやらシリウスにとって瞬間移動、もしくは転移？とは、とても簡単に出来る物みたい。

シリウスは何も知らない私の反応が面白いのだろう、ニヤニヤしている。

せっかく整った顔なのに、そんな表情をするとは。

シリウスの表情は苛めっ子な性格が現れていて、彼を幼く見せている。

もっとも、外見と内面の年齢が一致する場合の話だけど。

私の様に体は子供で中身は三十路という、つり合いが取れない特殊な場合もあるかもしれない。なんせ此処は異世界だ。想像もつかない事があっても可笑しく無いと考えてしまう。

要は、何でもアリってやつ。

ただ、最近の私は幼い体に引きずられるのか中身の方も精神年齢が低くなってる気がする。良いのか？こんなので。イヤイヤ、私、しっかりしろィ！

私達は人目に付かない丁度建物の陰になる場所に出現した。シリウスは此処を初めから知っていて移動したみたい。

シリウスは腕に抱えていた私をそつと地面に降ろしてくれた。

「サアヤ。いや、今はまだユウと呼ぼうか。ユウ、僕は魔族なんだ」
魔族って何者？ 良く判らない。人間とは違う種族みたいだ。

「僕は魔族の住む国で生まれ、この年まで育った。割と元気に育ったと思うよ。病氣なんて風邪くらいしか引いた事無いし」

へえー、魔族でも風邪って引くんだ。人間以外でも為るモノなのね。

うーん、風邪って侮れない。

私はうんうん頷きながら、シリウスの話を大人しく聞いていた。

「数年前から魔族の中で奇病が流行り始めたんだ。初めは発生数が少なくあまり認識されていなかったものだった。それが、ここ1年でどんどん増えてきて。その奇病とは、体の内側の魔力と己自身の存在が反転し、魔物の様な化け物に変化してしまうものだ。……この僕の様」

シリウスは何かを堪える様に口を閉じた。彼の赤い宝石の様な瞳に苦渋の影が一瞬よぎる。

彼は一呼吸置くと、再び話し始めた。

「何故、そのような事になるのか原因は全く解らない。これが本当に病氣なのかさえ解っていない。我ら魔族の中には一種の呪いではないかと言っている者もいる」

呪い。その言葉に私の体はぶるりと震えた。

穏やかでは無い話だ。もしそうだとしたら、誰が、何の為に、どんな理由でそんな事を？

シリウスは真剣な眼で話を続ける。先程まで浮かべていた表情は消え去っていて、ただ真剣な顔付きだった。

「反転して歪んだ魔力は己の命を削りながら一気に噴き出して燃え上がり、あっという間に燃え尽きる。魔力の少ない者等は、酷い場合一刻と持たないで死に至る。反転した者は人格が歪み意識は闇へと溺れる。気が付いたら、僕はあんな姿の化け物になっていた。………苦しみながらもがいていたあの時。君が助けてくれなかったら、僕はあのまま命ある限り破壊を繰り返しながら死んでいただろう」

「……」

言葉から伝わる、彼が経験した苦しみを私は感じた。

「有り難う、ユウ」

そう言うと、彼は深く頭を下げた。

其処には先程までのからかいを含んだ態度は何処にも無かった。

初めて会った時の姿からは想像もつかないが、これがシリウスの真の姿だった。

シリウスは私の中でゆっくりと癒されたと言った。だから、私の中から出てくる事が出来たみたい。でも、どうやって癒されたかは全く解らない。

それにしても、自分の中に人が居たというのはとても不思議な感覚だった。

「本音を言うと、このまま君と一緒に居たい。けれども、そうもいかないんだ。急ぎ、国に帰って僕の経験した事を皆に報告しなければ」

「シリウス……」

「それに、余り長居するとあの怖いお兄さんに感付かれてしまうからね。いや、もしかしたら既に気付いているかもしれないな」

そう言うと、シリウスはニヤリと笑った。それは、最初に感じた苛めっ子な性格を感じさせる表情だった。

その表情に何故か私の心臓はドキリと音を立てた。

「ユウ、それじゃあ名残惜しいけど此処で失礼するよ。あの怖いお兄さんに見つかる前に出ないとね。ユウ、君が僕を呼べば君の元まで直ぐに飛んで行くよ、必ず。何かあったら何時でも力になる」

シリウスは力強い口調で言った。彼の気持ちいが嬉しい。私は素直に頷いた。

それにしても、怖いお兄さんとは一体誰の事だろう？

「私の方こそ助けてくれて、有り難う！シリウスが元の姿に戻れて本当に良かった、嬉しいよ。……気を付けて国に帰って。また、次に会う時までそのまま元気だね、シリウス」

「ああ。それじゃあまた逢おう、僕の愛しい女神」

また女神って言った。聞いている方が恥ずかしいよ、そのクサイ呼び方。

忘れ掛けてたとはいえ、ずっと私と一緒に居てくれたシリウスが居なくなるという事に、私は寂しさを感じながら返事をした。

人は何時かは別れの時がやって来る。

だから出逢えた事に感謝して、その時を、その人を大事にしたい。私はシリウスと再び出逢う事を約束して、彼に向けて手を振った。

突如、シリウスはさつと身を屈めると素早く私の頬に口付けを落とした。

余りにも突然だった。私は動く事も声を出す事も出来ない。

「！」

突然襲ったシリウスの唇は温かくて、ちょっぴり湿って、そして軟らかかった。

はっとした時にはシリウスの姿は何処にも無く忽然と消えていた。どうやら此処から去ってしまったみたい。私の頬に温もりだけを残してあつという間に。

私は暫らくその場で佇んでいたが、やがてその場から足を踏み出した。

「ユウ！こんな所に居たのね！探しましたよ！」

私が建物の影から出るとフランが向こうから走って来た。

「あ、フラン」

まずい、先程までの光景を見られて無かったか？シリウス、かな

り怪しい人に見えるところし、魔族だし。

しかし、フランはシリウスの事に気付いて無かったようで、私は安堵の息をついた。

「ユウ？顔が赤いけど、どうしたのでしょうか。体調でも悪いのかしら？」

「い、いえ、何でもないの！それよりフラン、部屋を抜け出してごメンなさい」

私は焦って否定した。フランは怪訝そうな顔をしたが、それ以上聞いてはこなかった。

「ほんと、ちょっと眼を離した隙に居なくなるんだから。でも、ユウ、貴方が無事で本当に良かった。私はとっても心配しましたよ？」

フランに心配を掛け探させたという罪悪感が心に湧きあがった。

「御免ね、心配掛けて。それにとっても探させてしまったみたいで、ホントにごめんなさい。私、ヴァル達がどうしても気になって部屋を抜け出してしまったの。でも、もう大人しく部屋に戻るから」

「ふふ、解りました。それじゃあ部屋に戻りましょうか。殿下が戻られるのを部屋で待っていますよね」

フランは優しく私を許してくれた。ありがとう、フラン。

フランの温かいふんわりとした手に、私は手を引かれながら大人しく部屋へと戻った。

程なくして、部屋にヴァルサスが戻ってきた。

「ヴァル！無事で良かった！」

ヴァルサスが扉を開けて姿を見せると、私はヴァルサスに駆け寄った。彼は白いローブ姿で現れたが、その姿はまるでお伽噺に出てくる王子様か英雄のように格好良い。彼を何かに例えるならば、その煌めく鋼の様な鈍色の銀髪と白いローブが相まって、閃光の様だ。その美しい姿に思わず私は息を飲んだ。

「ああ、ユウも無事だったか……」

駆け寄った私はぐいっと引き寄せられたかと思うと、ヴァルサスの腕の中にぎゅっと抱きしめられていた。私の顔は彼の広い胸に押し当てられ、両足は地面から離れてしまった。

「？」

どうしたんだろう？何かあったのかな？

ヴァルサスは暫らく私を抱きしめていたが、少しして解放してくれた。小さな声で何か言っていたが私には聞こえない。何て言ったのかな？

ヴァルサスはため息をつく、私と一緒に部屋に居たフランに声を掛けた。

「フラン、入浴と着替えの準備を頼む」

「はい、かしこまりました」

フランは準備に取り掛かる為、部屋を出て行った。

ヴァルサスは軽く息を吐くと、煩わしそうに詰まった立て襟を荒

々しく緩めた。

そして、私を見つめる。

ヴァルサスは眉間に皺を寄せている。何となく何時もの優しいヴァルサスとは雰囲気が違う。

な、何？

「ユウ、微かに見知らぬ魔力を纏っているな。言い付けどうり、部屋できちんと待っていたか？」

ドッキーン！

文字どうり私は飛び上がった。

部屋を抜け出した事や回廊から落ちた事、シリウスとの事が脳裏にちらついた。

つつと背中に冷や汗が流れる。ヴァルサスは私が部屋を抜け出していた事や、シリウスと居た事にも何か感付いている？

ひえ……。どうして解ったのー？ど、どどどうしよう……。

私は不倫がバレた、冴えない中年男性になった気がした。どうやってこの場を切り抜ける？

1. 知らぬ、存ぜぬでひたすら通す。

2. 素直に話して怒られる。でも怖い。

3. とにかく、ひたすら謝る。……この場合はやっぱり土下座か？でも、これだけは最終手段にしておきたい。

全く名案など浮かんで来ない。

ヴァルサスはゆっくりと私の方に近付いてくる。ただ、此方に向かって歩いてくるだけなのに、その動きは獲物を狙う豹の様。

「その頬の印はどうした？」

「えっ?! 印？」

私は思わず頬に触れた。何か付いている? 触ってみるが、指先には何の感触もしない。

フランは何も言って無かった。何か付いてたら教えてくれると思う。

私は先程シリウスから頬にキスされた事を思い出した。途端、かつ顔に血が昇る。

その様子を見ていたヴァルサスは無表情になった。おかげで一層迫力が増す。

こ、怖っ！

無意識の内に、私はじりじりと後退していた。

突如、背中と踵に衝撃が奔った。壁にぶつかったみたいだ。気が付くと、私は壁際まで追い詰められていた。

ヴァルサスは壁に手を付くと、私の上から覆い被さる様に身を屈めた。

私の頬を汗が伝った。

私はゴックンと唾を飲み込む。口の中はカラカラだ。

ヴァルサスの腕と体に囲われた私は籠に囚われた小鳥のよう。其の場から身動きが全く取れない。

ヴァルサスは私を上から見下ろしながら、さらにその身を屈めた。私の首筋近くにヴァルサスの顔が近付いてくる。

か、噛まれるんじゃないの？

この迫力では本当に獲物になった気がした。

ふっと首筋に吐息が掛かる。

ひえっ！

「いつもと違う香りがするな、ユウ？」

ううっ！

一体どんな香りがするというのだろう。

ヴァルサスは、私と眼を合わせながら片方の眉を器用に上げた。

私は蛇に睨まれた蛙の如く身動きできない。思わずひゅっ音を立てて、息を呑んだ。

ヴァルサスの顔は更に近づいてくる。私の頬に吐息が触れた。

私はぎゅっと眼をつむった。獲物になった蛙や、ウサギになった気がした。

ペロリと温かく湿った何かが私の頬に触れる。

「?!」

えっ？

更に、もう一度。

「消毒だ」

そう言うのと、ヴァルサスは覆い被さる様にしていた体を起して私を解放した。

部屋を出て行くヴァルサスの背中をぼんやりと見ている私の顔は、茹でダコより赤くなっているに違いない。

……それにしても、印と消毒とは一体何だったのだろうか？
答えは解らないままだった。

第18話 魔族（後書き）

今回も読んで下さってありがとうございます。

第19話 成長期（前書き）

h
2
2.
1
1
／
5
改稿しました。

第19話 成長期

シリウスが去ってから3日後。

服を着替えているときに、何かがいつもと違う感じがした。何？この違和感。

ん？

鏡に映ってる私の姿が変わってた。

髪は肩にかかるくらいだったのに、肩をこす程度まで伸びている。それに、背も伸びていた。

「えっ?!」

一体どうしてこんな事に？

たった一晩で10センチ位？随分と成長していた。

もしかして私、成長期なのかな？こちらの世界ではこんな風に一気に背と髪が伸びることがあるのかもしれない。

……本当にそんなことってあるのかな？

不安になる。

あと、変わったことがあるとすれば、シリウスが私の中から出て行ったこと。

不意にシリウスの言葉を思い出した。

——ずっと君の中で眠っていたかったよ。でも、そうすると今以上に君の体に負担がかかる。

——今以上。すでに負担がかかっていたの？

もしかして、背が伸びたこととシリウスは何か関係があるのかも知れない。何にせよ、私の体はどうなってるのやら全く解らない。

私は異常なのかもしれない。

私は意を決して隣の部屋へと移動した。そこではヴァルサスが優雅にお茶を飲んでいた。お茶はフランが淹れた物だろう。

ハーブのような爽やかな香りが漂っている。今朝は眼覚めに良いハーブティみたい。

ヴァルサスは新聞を読んでいた。

朝日がヴァルサスを照らして穏やかな空気を醸し出す。私の気分とは裏腹に。

「おはよう、ヴァル」

私は少し緊張しながら挨拶をした。こんな私を見たヴァルサスやフランはどう思うだろう？

ヴァルサスは、新聞から眼を離さずに返事をした。

「ああ、おはよう、ユウ。今朝も早起きだな」

そう言って顔を上げて私を見た。とたん、少し眼を見開いて私を見る。

「ユウ、背が伸びたんじゃないか？」

「うん。朝起きたらこんなにも背が伸びて成長してた。背がニョッキリ伸びていて、本当に吃驚しちゃったよ」

「……確かにニョッキリだな」

私が着ている服の裾は短くなっていて、手首や足首まである服の裾から腕や足がニョッキリ出ていた。この服はゆったりした服だったから着る事が出来たけれど、着れない服もあった。

そこにフランが入ってきた。両手で茶器を乗せた盆を持っている。

「殿下、お茶のお代わりはよろしいですか？」

「ん、ありがとう。だがもういい」

私はフランに挨拶をした。

「おはようございます、フラン」

「あら、おはようございます、ユウ。今日もお早いお目醒めですね。ユウもお茶をどうです？さっぱりしていて美味しいんですよ、このお茶。さあ、今から淹れますからね」

そう言ってお茶を淹れてくれた後、私の変化に気が付いたフランは少し驚いたように言った。

「あら？背が伸びました？ユウ。それに髪も伸びてますね」

「うん、そうなの。朝起きたらこうなって、驚いちゃった」

「髪もか。言われてみればそうだが、一晩で随分と伸びたものだなあ」

ヴァルサスは驚いていた。それに対して幾らかフランの方は落ち着いている。

「ユウにはちよっと早いですが、成長期でしょうか？普通ならもう少したってから来るものですが。成長期の子供というのは時に驚くほど背が伸びることがありますもの」

そうなの？

こちらの世界の人間にも成長期があるみたい。

「髪の方はちよっと解らないけど、女の子としては短すぎるくらい

だったから丁度良かったですわ」

「そうかなあ」

「ん、まあそうだな」

そんなものだろうか？二人の反応は随分と穏やかな気がする。

こんなにニヨキニヨキと背や髪が伸びて気持ち悪くないのかな？しかし、見ている限り二人はあまり気にしているように見えない。

どちらかといえば、前向きにとらえている。

私はほっとした。

——良かった、異常じゃないのかも。

「取りあえず、今の服はサイズが合っていないですね。新しいのを準備しないと！」

心なしか、フランの声が弾んでる。

「そうだな。こういう事は女同士で決めた方がいいだろう。フラン、任せたぞ」

「はい、お任せ下さい。ユウにはこれぞという物を選んでみせます！」

ヴァルサスに一任されたフランは、明らかに楽しそうに返事をした。なにげに力拳なんて作ってるし……。

大丈夫かな、何だかやる気があり過ぎるような……。

今度は違う不安が私の心に湧きあがった。

私はヴァルサスの執務室へ出るほかに、2日前から砦の治療所へ

も出かけるようになっていた。

この2日間、午前中はヴァルサスのいる執務室で過ごし、午後は治療所で過ごしていた。

グールとワイバーンによる襲撃の際、いつもお菓子をくれる召喚士が怪我を負っていたのだ。

私はお見舞いに行きたいとヴァルサスにお願いした。子供が行っては治療の邪魔になるかもしれないし、許可が下りないかもしれないとは思ったけれど、実際に頼んでみると彼はあっさり許可をくれた。

頼んだその日の内に治療所に行く事になり、なぜか治療所の先生も紹介してくれた。

以来、私は治療所へと通っている。とは言っても、まだ今日で2日目だけど。

ただ、ヴァルサスがあっさり許可をくれたのは何か思う所があったようで、その為に私の治療所通いを許可したみたいだった。

ヴァルサスが言うには私には癒しの力があるそうだ。その力はとても貴重であるらしく、少しでも力の使い方に慣れていた方が良いという事らしい。

確かにこの世界に飛ばされた時、想像もつかない程とても大きな力を使った。しかし、それは初めの時だけで、今はほんの少しも力が使えるようなことは無かった。えいと気合を入れて声を出し、掌を壁に向けてみる。けれど、全くもって変化なし。ホント、悲しいくらいに何も無かった。

初めの時の大きな力はもしかして、夢か幻だったのかな？

そっちの方が納得するよ。

「こんにちはー！」

元気良く、淡いクリーム色で統一された治療所の中に入る。

「あら、こんにちはユウちゃん。エディルさんとクリス先生なら今は回診中よ」

中に入ると女性の医療スタッフが笑顔で迎えてくれた。奥の方からは、聞き覚えのある患者の悲鳴が聞こえてくる。

「イダッ！イダイよっ、先生。もう少し優しくお願いしますよー！！」
「何だ、大袈裟だな。これ以上無いくらい優しくしているのに。少しくらいは我慢しな」

先生はそう言って、患者の右腕にある赤く爛れた切り傷を医療器具で洗浄する。すると、中から膿がじわっと出てきた。傷は結構深く、筋肉組織を一部切断していた。傷の長さは15センチくらいだろうか。傷は縫合しており、いまだ糸が残っている。その傷の周囲は赤く腫れ感染をおこしていた。

クリス先生は薬液の滲み込んだガーゼを傷口に当て、その上から乾いたガーゼを当て包帯を手際よく巻いていた。

「はい、終わったよ」

「はああ、ありがとうございました！」

クリス先生は数人の助手を連れて回診にまわっている。まだ、忙しそう。回診は当分終わりそうにない。

私は先程の情けない声をあげていた召喚士の元へと近づいた。

「こんにちは、エディルさん。今日も凄く痛そうでしたけど大丈夫？」

「ああ、ユウちゃん。今日も見舞いに来てくれたのかい？ いや、

オジサンとっても嬉しいよ！この年になると人の優しさが身に沁みるんだよね。本当にありがとう。オジサン感激！」

何言っただか。オジサンはまだまだ30代でしょ。オジサンを認めると三十路はオバサンになってしまう。ここは否定しておかないといけない。

「エディルさんは、まだまだオジサンじゃありませんよ」

「！！　もう、ユウちゃんったら、オジサン殺しだね！」

私に言われてよっぽど嬉しかったのだろう。エディルは体をくねらせて、喜色を浮かべながら恥ずかしそうに言った。
ちよっと気持ち悪い。

「……。私、殺っちゃいましたか」

「うん。オジサンのハートはズキッときたよ」

結局痛かったのか？ズキッとは何だか表現が間違ってるよ。

私はオジサンの発言を軽く受け流し、エディルに手伝える事は無いかと声をかけた。

「エディルさん、何か手伝えることがありますか？さっき傷の処置も終わってたし、今日は体を拭きましようか？そしたらさっぱりしますよ」

エディルは今朝方熱が出たらしく、熱が下がった後は汗をかいていた。丁度良いので声をかける。

「ええー！良いの？ユウちゃん。オジサン恥ずかしいよお」

……何を考えてるのか。拭いてあげるのは、もちろん片手では手の届かない背中や左側の腕や体などだ。後は自分で拭いてもらうに決まってるよ。

「おいおい、なに気持ち悪い事やってんだ、エディル。いい歳したむさ苦しいオヤジが体をくねらせるんじゃない」

驚いて振り返るとレオンが私の後ろに立っていて、呆れたようにエディルを見ていた。レオンはエディルの様子を見に来たみたいだ。

「あ、レオン。こんにちは！」

「おう。ユウ、元気にしてたか？」

レオンは笑顔を浮かべて挨拶を返してくれた。右手で私の頭を軽く撫でる。レオンの左手には大小の袋が二つぶら下がっていた。

「副団長、いきなり現れないでくださいよ！吃驚したじゃありませんか」

「そうか？さっき部屋の入り口で声はかけたからな。いきなりじゃないぞ」

「聞こえませんでしたよ」

「ふん、それより何やってたんだ？」

「ふふふ、知りたいですか？実はですね、なんと今からユウちゃんご自分の体を拭いてくれるんですよ！実に羨ましいでしょう？副団長」

緩んだ笑顔を浮かべたエディルは嬉しそうに言った。

「馬鹿、なに気持ち悪く喜んでんだ。こんなオヤジの体をユウが拭くなんてとんでもない、けしからん！エディル、体は俺が拭いてや

るから安心しろ。恥ずかしい思いをしなくて済むぞ。それに、その調子なら数日中にも仕事に復帰出来るな」

「ええ、そんなあ。横暴ですよ」

明らかに悲しそうな表情でエディルは言った。それにしても、レオンってば結構前から私達の会話を聞いてたのかも。

そこにクリス先生が現れた。

「復帰はまだちょっと無理だぞ。傷口の感染が良くなっていないんだ。もうちょっと良くなってからにしろ」

クリス先生は美人でナイスバディな女医さんだ。栗色の髪は美しく、顔は女優さんのよう。おまけにボディラインも素晴らしい。形の良い巨乳の上に細くくびれた腰、きゅっと引き締まったヒップ。まるで不○子ちゃんだ。そのボディは私の将来の理想であり、目標だ。男性二人の視線はクリス先生の豊満な胸に釘付けた。勿論、私の視線だって例外じゃあない。

現状からみて理想と程遠い私のボディだが目標は高く持ちたい。

「クリス先生。助かりましたよ」

「別に助けようとして言ったわけじゃない。事実を言ったまでさ」

「……………。まだまだここで、大人しくしとかないといけないんですね」

本当の事を言われてエディルはがっくりと落ち込んだ。

そんなエディルは放つといて、クリス先生は私に声をかけた。

「ユウ、待たせたね。渡した本は少しは読んでみたかい？ 内容はどうだった？」

クリス先生が貸してくれた本とは医療に関する人体解剖学の本だった。解りやすく、難しくない、初心者向けの絵が多いものだ。これを読んでみると、身体の造りは元の世界の人間とこちらの世界の人間はあまり変わらないようだった。しかし、詳しくは解らないが筋肉や骨の発達具合が若干違うようではあった。

内容はとても興味深く面白かったので、結構読んでしまった。

「はい、とても面白くて興味深い内容でした。まだじっくり読みたいのでお借りしてもいいですか？」

「ああ、いいよ。それにしても面白く感じたのなら良かった。もし、解らない所があったり難しかったらいつでもここへ質問に来ていいからね」

「はい、先生ありがとうございます」

「次回は癒しの力についても勉強してみよう。私の手が空いていたら、だがな」

そういう事で癒しの力を学ぶ事となったけど、本当に私に力があるかはいまだに疑問だった。

「お、そうだ、ユウ。この間の菓子はどうだったか？美味かったろう？」

レオンが思い出したように聞いてきた。

あ、そうだ。お菓子のお礼がまだだった。あれは本当に美味しかったな。

「あつ、この前はありがとう、レオン。あのお菓子とっても美味しかったよ！ヒエンにも変わった果物を貰ったから、お礼を伝えても」

「らないかな？」

「……ヒエンの果物？大丈夫かそれは。食ったのか？」
「……」

食べてない。ヴァルサスがどこかへ持っていたのだ。私は返事をせず黙った。

「ふむ、食べてないな？それならいいだろう」

私が返事をしなかったのでレオンは察したようだ。心なしか安堵の表情をうかべた気がする。良かった、味見しないで。

「それにしても、あいつ、果物なんて一体どこから用意したのやら」

レオンは眉を顰めた。

「まあ、いい。それより菓子を気に入ってくれたのなら良かった。今度また、王都に行くからその時にお土産で持って帰るからな。待っとけよ、ユウ。今日のは前のは違うが美味そうだから買って来た。ほら、俺の部下の面倒を見てくれるお礼だ。取っといてくれ」

そういうと、手に持っていた紙袋の小さい方を私にくれた。大きい方は 크리스 先生に渡している。

「こっちは、いつもお世話になっている 크리스 先生に。良かったら今度夕飯でも一緒にませんか？」

レオンは軽い口調でさらっと言ったのけた。

おお、やるなこの男。私は次の展開をドキドキしながら見守った。

「副団長は巨乳が好きですからね」

「馬鹿野郎っ！俺を乳目当ての男のように言うなっ！」

「私を巨乳と呼ぶな。失礼なやつらだな、お前ら」

「……………」

……がっかり。

レオンとエディルは、クリス先生から白い眼で見られていた。

「お、おおっ。ユウ、お前背が伸びたんじゃないか？」

そう言ってレオンは私の頭を撫でた。明らかに話題を変えようとしているのがバレバレだ。

しかし、私はお菓子のお礼に返事をする事してみた。

第19話 成長期（後書き）

お気に入り登録にして下さった方が1000件を超えました。皆さん本当にありがとうございます。

第20話 混血児（前書き）

h
2
2.
1
1
／
5
改稿しました。

第20話 混血児

あれから1カ月。いまだに私の体は成長してる。

この一カ月の間私は毎日治療所へと通い、エディルのお見舞いとクリス先生の授業を受けていた。お見舞いの方は途中で不要になったけど。

エディルの腕は、わりと経過良く早いうちに治って退院した。現在、彼は仕事に復帰している。

私は毎朝の日課になってしまった自分の体の確認を、鏡の前に立って行った。今日もまた少し成長してる。

毎日のように少しづつ、しかし、明らかに急速に私の体は変化していく。通常の人間なら数年かけて起こる身体の変化が一カ月程で起こった。

ただ背や、髪が伸びるだけでない。身体つきが女性らしくなってきた。

今まで、凹凸の無いつるぺたボディだった体のラインは腰にくびれができて、ささやかながら胸に膨らみができた。今の私の身体つきは子供ではなく、少女と言って可笑しくない。100センチ位しかなかった身長は、150センチ位にまで成長していた。

もちろん、私の理想とするクリス先生の巨乳にはまだまだ程遠いけど。

巨乳様、どうせこのまま育つのなら私は貴方のようにになりたい。感染しないかなー、巨乳。

そんな私の成長具合をみた巨乳様ことクリス先生は、先日の授業

の時とある推測を述べた。

「ユウ、あんたのご両親ってどんな人なんだい？」

「どくなって……。ごくごく普通の人でしたよ」

それ以上言いようが無い。だって、異世界人ですとかって言えないし。

「そう、普通の人か……」

クリス先生は少し黙った。何か、躊躇っているよう。けれど、決心がついたのか口を開いた。

「ユウ、これはあくまで私個人の推測なんだが、あんたは純粋な人間では無いのかもしれない。あんたの成長は普通の人間とはあまりにも異なっているんだよ。ユウだって、人と違う事は薄々気がついてるんだろう？」

「え？」

人間では無い？ という事？

……やっぱり異常だったんだ。

「この砦にも極少数だが、魔族や獣族のとの混血児がいる。そういった者は普通の人間とは成長が異なるんだ。あんたの容姿や成長具合を見ていると、そう思わずにはいられないんだよ」

そうなんだ、そういう事もあるんだ。

この世界には人間の他に魔族・獣族がいて、人間と他種族間での妊娠・出産が可能なのだそう。ちなみに魔族と獣族の間では子供は出来ないんだって。遺伝子的に離れすぎているのかもしれない。

それにしても、実際に他種族との混血児が存在するなんて。だとしたら、私の体にも人間以外の要素があるのかもしれない。けれど、私には自分が一体何者であるか一切解らなかった。確実に解っている事といえば唯一つ。今、私はこの異世界で生きている。ただそれだけ。

私は、明日という日が灰色と白の霧でごちゃ混ぜになっているような気持ちになった。

成長した私は当然の事ながら、今までの服は着れなくなった。

クローゼットを開けるとそこには新しい服が並んでいる。一度は新しく服を揃えてもらったが、またもやすぐに着れなくなってしまい再度揃えてくれたものだ。今度は私の成長具合を考慮して、少し大きめのサイズで揃えてくれた。

私はフランが新しく選んでくれた服に袖を通した。

クローゼットに並んでいる服はフランの趣味だと思う。白やピンクベージュ、可愛いパステルカラーの服がならんでいた。

レースやリボンをあしらったものやシフォン地のヒダの寄ったふわりと広がる服、可愛い刺繍を施してある服など女の子らしくてとても可愛いデザインが多い。

私はどちらかといえばシンプルで動きやすい服が好きなので、ほんの少しだけ用意してあるシンプルなシャツとズボンを毎日身に着けている。

そんな私の格好を見るたびフランは残念そうな顔をする。

「ユウ、今日もまたそのような格好をしているのですか？ たまには

可愛らしい服も身に付けて下さい」

「うん、解ってるよ、フラン。でも、動きやすいからつついづボ
ンを選んじゃうんだよ」

「そう、残念です……」

フランは「くっ」と言って拳を握りしめた。

「……」

何？その握り拳は。

私が毎日少しずつ成長していることについて、最近ではフランは
何も言わなくなっていた。

フランに言わせると毎日のことなので、当たり前のようになっ
てきたそうだ。

フランは私が異常に成長していることを、意外とすんなり受け止
めてくれてるように見える。

理由は 크리스 先生が言っていたように、混血児という存在が認識さ
れているお陰かもしれない。

「ユウ、今日は王都に出かけるぞ。どうだ、ユウも一緒に来ないか
？」

ヴァルサスは私の部屋に入ってくると、いきなり私に質問した。
もちろんノックの返事は間に合わない。

突然のことに私は驚いたがヴァルサスの言葉を理解すると、その
内容に興奮した。

「ええっ！行きたい。是非とも一緒に行きたい！あっ、でも……」

王都。一体どんな所だろう？

私はここの砦以外の場所をいまだに知らなかった。今までこの砦から一步も外に出たことが無かったから。だから、砦の外の世界に対する興味は日に日に増していた。

けど、クリス先生の授業はどうしよう。今日の授業内容は何だったっけ？確か……。

私が悩んでいるとヴァルサスが不意に言った。

「ほら、クリスからこれを預かってきたぞ。今回の授業はこの本を読んでもおけば受けなくても良いそうさ。クリスの方も今日と明日は忙しいらしい」

「えっ？」

ヴァルサスは手に持っていた本を私に手渡した。

なにになに？本のタイトルは《治療士の心得》とある。

そういえば、今日の授業はそんな内容だとクリス先生が言っていた。

これを持ってきてくれたということは、ヴァルサス本人がじきじきにクリス先生に許可を貰ってくれたのだろう。全くもって何と言っているのやら。

……彼は本当に優しい。私は彼の心使いや気持ちがとても嬉しかった。

「……ヴァル、ありがとう。本当に嬉しい！」

私は嬉しさのあまり、思わずヴァルサスに抱きついた。本当に嬉しかったから。

けれど、その瞬間ヴァルサスの体はビクリと強張った。私にも伝わるほど。

私はヴァルサスの体からぱっと離れた。一瞬だったが、ヴァルサ

スの反応に私は気付いたからだ。

ヴァルサスはすぐに強張った身体の力を抜くと、そっと私の頭を撫でた。

彼の表情からは何の感情も窺えない。

「そうか、それは良かった。ただし、遊びに出かける訳ではないぞ。それでも良ければ直ぐに準備するんだ。あと一刻したら、出発するからな」

ヴァルサスは何事もなかったように話を続けた。私もそれに合わせる。ちくりと胸が痛んだ。

「……はい」

「まあ、本当に良かったですね、ユウ。楽しんで来て下さい」

「うん、ありがとう」

不意に名前を呼ばれたような気がして私はヴァルサスの方を振り向いた。しかし、彼はこちらに背中を向けている。聞き違いだったのかな？

ヴァルサスは自分自身の準備があると言って私の部屋を出て行った。私は彼の背中を見送りながら、思いに沈む。

——さっき、一瞬だけどヴァルサスの体は強張っていた。

子供の体だったときは、ヴァルサスがこんな反応をしたことは無かった。

少女の体に成長してからだ。こんな風に彼の様子が変わったのは。

私の外見は、ヴァルサスが自分の子供のように可愛がってくれた姿では無くなってしまった。今の私は子供の時と比べると、別人のように感じるかもしれない。

今までと違うヴァルサスの反応に私は微かに不安を感じた。

もしかしたら、私に抱きつかれてヴァルサスは嫌だったのかな？

ずきん。私の胸に痛みが走る。

どくん。どくん。

心臓がやけに大きな音を立てて、鼓動した。

いけない。こんな風に考えては、いけない。

私はその考えをできるだけ打ち消した。

……今日だって、彼は私を大事にしてくれているのに。

私はこれ以上考えるのを止めた。

一刻後、フランに着替えさせられた私はヴァルサスと共に中庭奥の騎獣発着場にいた。

この場所は、私がレオンと初めて会った場所だ。

ここから騎獣に乗って移動するみたい。一体どんな騎獣に乗るのかな？

私は期待と緊張でちよっぴり落ち着かない。

すると、そこにヒエンを連れたレオンがやって来た。

レオンはヴァルサスと共に私も一緒にいるのを見ると、おやつという顔をした。

「殿下、お待たせいたしました。遅れて申しわけございません」

レオンは遅れてなどいないが、少しばかり私達が早く到着してしまっていたためそう言った。

「いや、遅れてなどいない。私達も先程ここに付いたばかりだ」
「勿体ないお言葉でございます」

そう言うと、レオンはヴァルサスに礼をした。
その後、レオンは少し碎けた口調に変わった。

「殿下。もしかして今日はユウも一緒ですか？」
「そうだ。よろしく頼む」

……レオンは変わった私をどう思っているのだろうか？

私はレオンにペコリとお辞儀をした。

「レオン、ヒエン。今日はよろしくお願いします」

そう言うとレオンは優しく笑い、ヒエンは嬉しそうにガウと鳴いた。尻尾がピンと立つ。

「おう、よろしくな、ユウ。それにしても、ちょっとした間に随分可愛らしくなったじゃないか。ボウズのようなだったお嬢ちゃんが、こんなに可愛らしくなるなんてなあ」

レオンは私の頭をいつもと同じように優しく撫でた。
レオンの態度はいつもとあまりにも変わらない。

子供の体の時も、少女の体となった今も。

その優しい手の温もりは、私の心にじんわりと沁み込んだ。チクリと痛んだ私の心をゆっくりと満たしていく。

レオンの手から伝わって来る優しい温もりが、私の表情に笑顔をもたらした。

「フフフ、ありがとう、レオン」

嬉しくなった私は貴婦人のように膝を曲げ、手を胸に当ててお辞儀をした。

流れるようにその仕草が行えたのは、カイルの指導の賜物だ。

「お、これは失礼した」

レオンはそう言うのと、私の手を恭しく取り手の甲に口づけを落とした。まるで本当の貴婦人になったみたい。レオンの仕草はとても洗練されていた。堂々としていて、思わず見惚れてしまう。口づけを落とすレオンと眼が合った。私はレオンを上から見るなんて初めて。少し上目使いのその表情は艶やかで悪戯っぽい。

私は思わず顔が赤くなった。

「呼ぶぞ」

え？何を？

それまで私達の様子を見ていたヴァルサスだったが、突如言葉を放った。

気のせいかな？少しいらついているような声だ。

ヴァルサスはさっと掌を前方に向けた。

「ハクオウ、来い」

そう言うと、ヴァルサスの掌に紋章が浮かび上がり、発光する。突如、びようびようと頭上から大きな音が轟き雲が渦を巻き始める。雲の渦は勢いを増し、渦の中心がある遙か上空に掌にある紋章と同じモノが光を放ちながら出現した。ただし、上空の紋章は驚く程大きい。

金属同士を打ち鳴らしたような、高く澄んだ音がその場に響きわたった。

鋭い金属音と共に紋章の中から白い塊が生える。次の瞬間、紋章を突き破る様に勢い良く巨大な塊へとその姿を現した。その姿は白い大きな弾丸に見えた。

空気を震わし切り裂く音を轟かせ、空から落下してくる。

白い大きな弾丸は、きりもみ状態のように回転しながら物凄い速さで落ちてくる。このまま地面に激突する！そう思った時、塊は一瞬で姿を変えた。ソレは自身の巨大な翼を広げ、そのまま空中で急停止した。

空気を己の翼に孕ませ突風を生じさせると、大きな音を立てその場にぴたりと止まる。

その存在が発した風が私達に向かって強く吹きつける。

一瞬の突風に吹かれながらも、私は開けた眼を閉じる事が出来なかった。

私の視界には力強くも美しい、メタリックな輝きを放つパールホワイトのドラゴンがいた。

まさに、その姿は威風堂々という表現が相応しい。

私はただただ、その素晴らしい姿に声も無く見入った。

白いドラゴンは日の光を浴びてキラキラと硬質の輝きを放ち、煌めいている。頭から生えている2本の角は、根元の部分が半円を描いて前方に向け力強く突き出している。その角の色は根元が深い青みがかった紫で、グラデーションのように先端に向けて白くなっていた。

体は全体のバランスからいうと細めで尻尾は長い。尻尾はそれ自体が武器であるかのごとく鞭のようになっていて、大きな翼を広げると翼の付け根は角と同じく深い青みがかった紫色で、徐々にグラデーションのように先端に向かって白くなっている。

翼を広げた全身の姿を見上げると、その姿はまるで白く輝く十字架だった。

白いドラゴン、ハクオウは鳥のような優美さで私達の目の前にふわりと降りた。

まるで重力を感じさせることなく、翼はあっという間に鳥のように畳まれている。

さらに、ハクオウの大きな腕と脚は獅子のようにがっしりとして、見るからに力強く爪の先まで真っ白だった。

ハクオウは体を曲げ覗き込むようにして、上から私達を見た。ハクオウの瞳は深い青紫で高い知性を窺わせる。

ヴァルサスは手を伸ばすとハクオウの顔を撫でた。撫でられたハクオウは気持ち良さそうに眼を細める。

「よろしく頼む、ハクオウ」

そう声をかけられてハクオウはじつとヴァルサスを見た。その様子はレオンとヒエンの時と同じように意志の疎通を図っているように見えた。

ハクオウは不意に私の方をひよいと向くと眼を閉じ頭を下げた。その様子はまるでお辞儀をしたようだった。私はその挨拶が嬉しく、ハクオウにゆっくりと近付いた。

ドキドキと興奮する。ドラゴンだなんて！何て綺麗で格好良いんだろう！

「は、初めまして、ハクオウ。今日は宜しく願います」

興奮で少し声が震えた。

私が挨拶すると、ハクオウは嬉しそうに私の顔に自分の顔をよせ、優しく擦りつけた。

感触は硬くてツルツルしている。こんなに大きいのが、擦りつけられても私はふらつかなかった。力加減を上手にしてくれてるのだろう。

「フフ、くすぐったい！」

私は思わず身じろぎした。すると、背中に何かがぶつかる。

振り返るとそこにはいつの間に移動したのか、私の後ろにヴァルサスが立っていた。次の瞬間、私は背中側からヴァルサスの片腕で強引にさっと抱きかかえられていた。私のウエストにヴァルサスの力強い腕が巻きついて、そのまま体が宙に浮く。

「！」

「行くぞ」

気が付くと、私はあつという間にハクオウの背中に乗せられていた。何だかいつものヴァルサスとは違って強引だ。背中には微かにヴァルサスの体温を感じる。

ヴァルサスの声に反応したハクオウは高い声で一声鳴くと、その場から力強く飛び立った。

ハクオウはぐんぐんとスピードを上げて空高く舞い上がっていく。私は思わずぎゅっと眼を閉じて、身体を竦ませた。

不意にヴァルサスがそっと私を支えてくれた。少しの距離を置いて。

私はその距離を寂しく感じた。少しの距離なのに、やけに遠く思えた。

第20話 混血児（後書き）

今回も読んで下さってありがとうございます。

第21話 王都（前書き）

h22. 11/7 改稿しました。

第21話 王都

もう少しで雲に手が届きそう。

私は鳥か、風になったように感じていた。

ハクオウは、地上から離れて遙か上空をまるで風そのものであるかのように、私達を背中に乗せて飛んでいく。時に、風よりも速く空気を切り裂きながら。

地上を見下ろすと、美しく雄大に広がる大自然がどこまでも続いていく。

その景色は私達の目の前を飛ぶように通り過ぎていって、まるで飛行機の中から地上を見下ろしているようだった。

美しく広がる鬱蒼と繁った森。森を分断するように流れる大きな川。幾つか大きな滝が見え、瀑布をたてて空に虹を作っている。その流れはときに激しく奔流となって、ときに緩やかになっては流れていく。その川の大きさは海の一部を切り取ったみたいだった。

綺麗……。

森がとぎれると灰色の岩が多い草原が広がり、緑の占める割合が減って行く。私達の飛行する高度より低い位置に色鮮やかな赤や黄色、青を身に纏った鳥が逆Vの字に群れをなして飛んでいく。高い鳴き声をあげながら飛んでいる鳥の群れを私達は追い越して、さらに飛び続ける。

地上にはインパラに似た動物やバッファロー、大きな蜥蜴のような動物達が大群をなし地響きを轟かせながら草原を横切るように移動していく。

景色は過ぎ去っていく。

目の前に迫ってくるのは切り立った山々と高低差のある大地。連綿と連なる山々はその頂に白い雪化粧を身に纏い青白い山肌を晒していた。山の標高が高いため頂上近くになると山肌が凍っているのだろう。

山々のすそ野には隙間を縫うように澄んだ色を湛えた水が川を作って流れていく。

何て素晴らしい景色なんだろう。

この素晴らしい感動を覚える景色を私はできるだけこの目に映したくて、眼をしっかりと開けヴァルサスとの会話も無くただひたすら眺め続けた。

ハクオウはこんなに高い上空を飛行しているが、乗っている私はほとんど気温の変化を感じないし風を切る音もあまり聞こえない。私達の周りには空気の層が出来ていて、外気から遮断されている印象をうけた。

ハクオウの飛行は安定していて恐怖を感じない。風に体を揺らされることも無く微かに風を頬に感じる程度だった。

完全に空気が遮断されている訳では無いのだろう。でないと呼吸できなくなってしまう。

これもハクオウの力なのかな？

「ユウ、そろそろ王都に到着するぞ。ゆっくりと高度が下がって行くからな。落ちないように気を付けるんだぞ」

「うん」

私は落ちないようハクオウにしっかりとしがみついた。

ヴァルサスが私の後ろにいるのだけれど、彼には頼れなかった。またヴァルサスが強張ったら。子供の姿のときのようにには思わなくなっていたら……。

どきんと心臓の音がした。

そしたらこの世界での私の居場所はどこにも無いように思えた。……今の姿に変わってしまったけど、傍にいてもいいのかな？

でも、私の体はどんどん成長していく。このまま年を取り続けたら？あっという間に成人を通り越して壮年や老人になったら？

掌にじわりと汗がでた。怖い。

魔族や獣族の混血児はある程度で成長が止まるのだそう。子供の姿から青年へと。私もそうだといいたいけれど。

いつまでも雛のままではいられない。いつかは巣立たなければいけない。

ハクオウはゆっくりと高度を下げていく。途中、気圧の変化で耳が痛くなったがヴァルサスがハクオウに何か伝えると、耳の痛みも感じなくなった。

「見えてきたぞ。あれが王都だ」

目の前にはなだらかに広がる草原と林。丘陵地に広がる畑とその内側に現れた一段高い大地。その外側を挟むように流れる大きな二つの川。川には橋が幾つもかかっている。

その大地に辺り一帯をぐるりと囲む巨大な壁があり、外壁の内側には石造りの建物でできた巨大都市が出現していた。

「ここが王都……！」

「ああ。ここは私が生まれ育った場所だ」

町に入ると灰色と白を纏った鳥達が一斉にこちらに向かって羽音をたてながら飛んできた。それは、私たちを歓迎し出迎えてくれたかのよう。

「わあっ！凄いつ」

「ふふ、ようこそ、王都へ」

町は沢山の建物と人がひしめきあっていて、活気に溢れている。こじんまりとした家やアパートのような背の高い建物が整然と並んでいた。

町の大通りや広場は露店で賑わっていて、色鮮やかな果物や野菜、食べ物や布、服などが売られているのが空から見えた。

ひととき目立つ時計台が目を引く。美しい鐘の音が周囲の空気を震わすように幾重にも重なり合って響きわたった。

さらに町を飛びこえていく。町の内側に大きな二つめの外壁が出現し、その内側には数多くの大きな屋敷が建っている。

「ここからの一帯は貴族の居住区だ」

「へえー、立派な建物が多いねー」

貴族の屋敷はとても立派で庭も広い。

石畳の街並みを、中世の映画のように馬車が走っているのが何度か見えた。

ハクオウは貴族の居住地を悠然と飛んでいった。

「ここがこの国の中枢、王城だ」

「ふわあああ！！」

「フフ……」

目の前の壮麗な光景に意味の無い声をあげた。もうほんと、言葉が無い。そんな私をヴァルサスは面白そうに笑った。

私達の目の前には蒼く透きとおった水を湛えた湖の中央に、まるで浮かぶように建つ巨大な城が出現した。

それは金色の半円を描く巨大なドーム状をした屋根、幾つもの高い塔に囲まれた白亜の城だった。大理石でできた白亜の城からは、白い石畳で舗装された一本の道が外側へと延びている。

私達は空からゆっくりと旋回しながら王城の中へと入った。

ハクオウが羽ばたきながら入っているほどの広いスペースがある巨大な城だった。

城の壁には至る所に透かし彫りで緻密な装飾がびっしりと施してあって美しい。まさに職人技。

さらに、眼にも色鮮やかな美しいタイルで天井の内側や、壁、太い柱に様々な絵や文様が描かれ飾られていた。

ハクオウは青い垂れ幕がはためく召喚獣専用門をくぐりぬけると広い空間に出た。

そのままふわりと着地する。着地した所は見上げるほどに高い天井にステンドグラスが嵌め込んである場所だった。色とりどりの光が天井から差し込むと、その場は幻想的な空間となった。

「ユウ、着いたぞ」

ヴァルサスに声をかけられるまで、口をぽかんと開けてぼんやり

したまま私は固まっていた。

「ふぁあ！」

ヴァルサスは私を軽々と抱えるとあっという間にハクオウから飛び降りた。

私をその場に立たせてくれたあと、ヴァルサスはハクオウを撫でてお礼を言う。

「ここまでお疲れだったな、ハクオウ。感謝するぞ」

「私も、ハクオウ。長い距離を飛んでくれて本当にお疲れ様でした。私、今日ハクオウに乗せてもらえて、とても良かった。本当にありがとう！ここに来るまでにハクオウの背中で見た景色は二度と忘れないと思う」

劳いの言葉と感謝の気持ちを伝えると、ハクオウは小さく喉を鳴らして私の体に頭を擦りつけた。

私もハクオウの顔を撫でる。

そこへ、遅れてレオンを乗せたヒエンが飛んできて着地した。レオンがヒエンから降りるとすぐさま係の者がやってきて、ヒエンを連れて奥の方へと姿を消した。

ハクオウの方かというと、光を放ちながら紋章がハクオウの足元に出現した。

紋章は出現した時と同じ形で現れた。紋章が現れるとハクオウは光の粒子になったかのように光りを放ち、ぱっと散って姿を消した。

「よくお帰りなされたヴァルサス殿下、レオン副団長」

「セーゲルか。出迎え御苦労」

深緑のローブを着た中年の男性が姿を現した。セーゲルは深々とヴァルサスに向かって礼をする。そして、私の方に鋭い眼差しをむけた。何だか怖そうな感じの男性だ。

「して、殿下。そちらの少女は？」

「私の連れでユウと呼んでいる。よろしく頼むぞ。それより陛下は今、どちらへいらっしゃるのだ？」

「陛下はただ今謁見の間におられます。隣国の使者と謁見中なので。今しばらくお待ち頂く事になりますゆえ、まずはくつろいで移動の疲れをお取り下され」

「そうか、ならばそうさせてもらおう」

「殿下の元へ後ほど使いの者をやりますので、それまでお待ち下され」

「ああ。レオン、ユウ、行くぞ」

私はヴァルサスとレオンに連れられて、その場を後にした。

今、私は王城にあるヴァルサスの部屋にいる。

砦の部屋とは比べ物にならないほど広く上品でありながら豪華な部屋に、私はまたもやあんぐりと口を開け、ぼんやりソファに座っている。

庶民にとってこの環境こそが異世界だわ。それほどまでに想像外。心なしかこの空気さえ高級な気がしてくる。これ以上ここで呼吸をしたら一体幾らお金がかかるのか。

いやいや、それはさすがに可笑いぞ。お金は掛からないだろうっ！

そういえば、私はこの世界では現在一文無しだった。はあ、一文なしかあ。どこの世界でもお金は必要だよな。

そこへ謁見用に着替えを済ませたヴァルサスとレオンが入ってきた。

レオンは召喚士の制服をベースに銀の飾り紐や紋章、装飾が幾つか付いた装いにマントを羽織った姿だ。

レオンは背が高いのでマントが良く似合っている。いつもより一段と格好良い。赤い髪が一層引き立った。

ヴァルサスの方はいつもの装いとは違っていた。

前開きの服は足元までの長さでそれを腰帯で止めている。さらに上から羽織りのような上着を緩くまとうていて、落ち着いた色の腕輪や首飾りなどの装飾を身につけている。

その姿は王子様の気品と、なぜか男の色気が全開の姿だった。

イイ男が二人も。う、や、殺られそう、鼻血出るかも。

「済まないが、ユウ。少しの間この部屋で待っていてくれないか」

「お嬢ちゃん、良い子にしているんだぞ？ここは広いから抜け出したりしたら、一発で迷子になるからな」

「うっ。……解りました」

実際に砦では迷子になっているので反論できない。私はこの庶民にとって異世界な部屋で、大人しく彼らを待っていることにした。

丁度、クリス先生から渡された本があるし、これを読んでおく良い機会かも。

彼らが陛下との謁見に向かって部屋を出ていったあと、私が本を読んでいると突如部屋に男性が現れた。

「失礼する」

「えっ……」

誰？

「お久しぶりです。ようやく会うことができ……ん？」

見たことも無い男性だ。

広い部屋なのでノックの音が聞こえなかったのかな？

「……あの、どちら様でしょうか？」

お久しぶりではない。明らかに初めましてが正解の筈だ。私の問いかけは聞こえなかったのか、全く反応が無かった。

見ず知らずの男性は、私の顔をじっと見た。

じい————つと。ジィ————……。

長い！

しかもどんどん近付いてくるし！近いよ、顔が。近すぎるよ！

何だかこの世界の人は顔を近付けすぎと思う。

どこから取り出したのか、男性は眼鏡を掛けると私をじろじろ見た。

レンズ分厚い。

「誰だ？お前は」

遅っ！質問来るのが遅すぎっ！

私はできるだけ、身体を仰け反らせて変な眼鏡男との距離を取った。

「私は、夕月沙耶といいます」

「……聞いたことの無い変わった名だな、お前。今、この部屋には

お前だけか？部屋の主は今、どちらにおられるのだ？」

「ヴァルのことなら今は、陛下と謁見中だそうです」

「！」

一体何者だろう？この人は。なんとなく身なりや態度から身分の高い人のように思えた。

「……もう一回言ってくれ」

「え？……ヴァルなら謁見中ですよ」

言った途端がぱつと眼鏡男に両肩を掴まれて揺さぶられる。がくがくと頭が揺れるくらい激しく。目の前のソファやテーブルが上や下に勢い良く移動していた。

いやいや、勢い良く動いてるのは私じゃない！

め、眼が回るよ。

「ヴァルう！？お前一体兄上とどういう関係なのだ！ま、まさか！

！い、いや、だがしかし！」

「ううう」

「兄上は意外と小っこいのに弱いんだ！」

誰が何に弱いつて？

ぶんぶん頭が揺れる。も、これ以上振られたらヤバイ。脳みそ耳から出てグルヨ。

「ちょ、ちょっと……」

私の体はぶんぶんと揺さぶられ続けてる。止まる気配は皆無だ。そこへ救いの声がかかった。

「待たせたな、ユウ。って、オイ！大丈夫か？！アルフリード殿下、なにユウで遊んでるんですか！可哀想だから放してやって下さいよ！」

「ん？レオンか。久方ぶりだな」

ようやく揺れが止まった。この声はレオンかな。
揺さぶりは止まったが、一足遅かった。

も、駄目、昇天。

「ああっ！おい、ユウ、大丈夫か！」

「あ。……やってしまったな……」

「ユウ！」

私の目の前はぐるぐるまわってチカチカしてる。
景色が闇に包まれた。

第21話 王都（後書き）

今回も読んで下さってありがとうございます。

第22話 城下（前書き）

h
2
2.
1
1
／
7
改稿しました。

第22話 城下

大きな手でゆっくりと撫でられてる。

優しい手の感触が心地好い。ゆっくりと私の意識は浮上した。大きな優しい手は頬を包み込みながら瞼の上を羽毛のように優しく撫でた。

「ん、んん……」

「ユウ」

「どうだ、目覚めたか？」

目を開けると、そこには私を心配そうに見下ろす二つの顔があった。

レオンと眼鏡男だ。

眼鏡男はレオンを押し退けるようにして私の視界に入ってくる。

誰だっけ？この眼鏡男。眼鏡男は金髪でアメジストみたいな紫の瞳をしてる。

ここはどこだっけ？私、何で寝てるんだろう……。

「おい、お前、気分はどうだ？」

そういえば、この顔はさっき部屋に現れた狼藉眼鏡男！

はっと正気に戻ると私は勢い良くがばっと跳ね起きた。その瞬間鈍い音と火花が！

「！」

「！！」

い、痛ーいっ！

眼鏡男は私に近付き過ぎてたみたい。私は眼鏡男の顔面にいきり頭突きを喰らわせてしまった。

眼鏡男の頭蓋骨は石でできてるに違いない。物凄く痛くて声が出ない。悶絶モノ。

「~~~~~！」

「ぐっ！」

私は再び倒れ込むと顔を枕に埋めた。あんまり痛くて思わずじわりと涙がにじむ。

「凄い音がしたなー。ユウ、大丈夫か？」

「うう。私の方の心配もしろ。その娘の頭突きのせいで額が割れたぞ」

「アルフリード殿下は大丈夫でしょ、石頭ですからね。額なんてどこも割れて無いじゃないですか。それよりユウの方が何倍も心配ですよ」

「先程のは言葉のあやだ。見ろ、眼鏡が割れてしまった」

「はいはい」

私は痛みをこらえようと、ぐりぐりと枕に顔を押し付けた。

「~~~~~！……………」

あれ？なんだかこの枕、違わない？ごつごつ硬いというか、温いというか。

不意にこの枕が普通のとは少し違うことに気付いた。

この枕、変。

んん？

ぱちっと目を開いた。どこかで見たことのある青い上質な生地が目飛び込む。

あれ？これって……。

そのまま生地を追って視線を上にならす。微かに動いてる？

そのまま上に視線をあげていくと呼吸のたび微かに動くお腹と胸、次いで心配そうな表情をしたレオンの顔が見えた。ぱちっと視線が合わさる。

「！！！」

———ぎゃあああ！！

「ユウ、どうだ？ちょっと見せてみる」

「ひゃあ！し、失礼しました！」

レオンの膝枕だったんだ！何てこったい！

それでは、先程ぐりぐりと顔を押し付けた場所はまさか、マサカ

……レオンの股間？

ひいえええ！！

いかーん！それはやっちゃいかーん！

私は再び勢い良く跳ね起きた。途中まで。伸ばした手が空を切る。

「！」

素早くレオンに取り押さえられ再び押し戻された。彼の太腿へと。私の右肩はレオンの大きな左手に掴まれ押さえつけられていた。

「お嬢ちゃん、少し大人しくしてるんだ。さっきは酷く頭をぶつけたからな。さあ、良く見せてみる」

最近のレオンは私を窘める時や注意する時にお嬢ちゃんと呼ぶようになった。

レオンは私の前髪を優しい手つきで掻き分けた。額を見てる。

「どれ、赤くなってたんこぶが出来ているな、ここ。ユウ、気分が悪くなったり吐き気はないか？」

「ないない！」

「本当か？ どんどん赤くなってきたぞ？」

「ちょっと痛い程度でホントに大丈夫だから！ レオン、だからもう放して！」

「そうか？ なら良いが」

レオンは私のたんこぶをよしよしと言って撫でると、ようやく私を解放してくれた。私は自分でもびっくりするくらい素早くレオンの膝枕から逃げた。

もう、ホント恥ずかしいよ！ 私はそれを必死で隠すようレオンに質問した。

「私、どのくらいああやって伸びてたんですか？」

「ほんの半刻程度だ。すぐに目が覚めたぞ」

「そうですか……」

一刻とは30分程度だから15分くらい膝枕をされてたのか。1
5分間も……！

「ああ、耳まで赤くして。ユウ、本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫です！」

そこへ眼鏡男が会話に割り込んできた。信じれないことに今の私

にとっては救いの声だ。

「おい、レオン。ところで兄上はご一緒ではないのか？」

「はい。ヴァルサス殿下はもう少し陛下や宰相との話し合いがあるようで、こちらに戻られるには時間がかかるとのことでした」

「そうか、残念だ。せつかくお会いできると思ってたのだが…」

眼鏡男は心なしか肩を落とした。しかし、私はそんな眼鏡男の様子に全く同情を感じない。私だけでなくレオンもだと思う。レオンは眼鏡男を放って私に声をかけた。

「ユウ、ヴァルサス殿下を待っている間、城下に行かないか？この間の菓子を買に行こう。ヴァルサス殿下の許可は貰ってある」

「えっ?! ここから出てもいいの?」

「ああ、俺と一緒にならな」

「やった! ありがとう、レオン!」

「俺もユウと二人っきりで出かけるのが楽しみだ」

お城の外はどうなっているのか実際に出てみたかった。

「私も行ってやろう」

「は? 殿下?」

突然眼鏡男が言いだした。レオンは少し戸惑ってる。

「私も行ってやろうというのだ。案内してやろうではないか」

「案内ってそんな案内できるほど城下に出て行けないでしょう? 大体ご自分の職務は…」

「いつもは変装をしている。それに今日は時間を作ってここに来たのだ」

要は暇ってこと。

眼鏡男の眼鏡は先程の私の頭突きで無残にもひび割れてる。そんな眼鏡では見えにくいんじゃないかな？

すると、眼鏡男は懷から新たに眼鏡を取り出し何事も無かったように掛けかえた。

ええっ？ 一体何個持つてるの？

「これは変装用だ」

「……………どこが？」

「……………」

どこが変装？ 黒縁の分厚い眼鏡で先程と変わってない。

私はレオンが眼鏡男を殿下と呼んでいることを思い出した。

「殿下」

返事はない。

「眼鏡殿下」

「…………それは私の事か？ 私の名はアルフリードだ。眼鏡ではない！」

眼鏡はこの人しかないし。他に誰がいるのだ。

「お前、私を知らないのか？ 一体どんな田舎から出てきたのだ！」

「ぷっ、く、くっくく」

レオンが口を押さえて肩を震わせている。

「アルフリード、……アル殿下」

「勝手に省略するな！」

「それじゃあ急いで出かけましょう！遅くなっちゃうよ！」

「おい！」

「ほら、行きましょ？」

「……あ、ああ。そうだな」

眼鏡殿下改めアル殿下は顔を赤らめるとそっぽを向いた。

「では、アルフリード殿下。その格好ではいささか目立ちますので地味な服装にお着がえ下さい」

「そうか？解った」

「ユウ、俺も着がえるからちょっと待っててくれ。直ぐに済む」

「うん」

そういうことで更衣を終えた男二人と城下に出かけることになった。

私達は今、一般市民の居住区にある商業地区の一角にいる。目の前にはお菓子屋さんがあった。

ここに来るまでは城から馬車に乗って途中から徒歩で移動した。

この辺りはお菓子屋さんが軒を並べている。その中で、ひと際目立つ大きな店の前だ。

そこは立派な店構えの三階立てのお菓子屋さんだった。辺りには焼き菓子の甘い美味しそうな匂いが漂っている。

観音開きで銅の手すりの付いた大きな扉は開け放たれていて、レオンを先頭に扉をくぐった。

中には色とりどりのお菓子や飲み物、瓶詰めのジャムやゼリー、ドライフルーツのような物まで沢山の商品が所狭しと並べてある。店の中は沢山のお客で活気に溢れていた。私はレオンやアル殿下とはぐれないようにぴったり二人に付いて行った。

「お、これこれ」

そう言うと、レオンは見た事のある焼き菓子をひよいひよい取っていく。

私は先程から気になっていたピンク色のお菓子をじっと見つめた。

今ほど自分が無一文だと自覚したことはない。

お金が、せめてお小遣いがあれば！一文無しであることが悔まれる。

私は切実に仕事に就きたくなった。

すると、私の物欲しそうな様子に気が付いたレオンが声をかけてくれた。

「ん？それが欲しいのか？」

私はこくりと頷いた。

「そうか」

そう言うと、レオンは何も言わずにひよいとピンク色のお菓子も手に取った。

「さ、行くぞ」

「うん。……ありがとう、レオン！」

レオンは私がお金を持ち合わせていないことに対して何も触れない。私は彼のさり気ない優しさに今回も心が温かくなる。彼はいつだってそうだ。いつも私の心に温もりをくれる。私は心からレオンに感謝した。

レオンが会計を済ませると、私達はお菓子屋さんを後にした。

アル殿下は小さな袋を持っていた。何やらお菓子を買ったみたい。その後私達は近くの食堂で軽く食事を摂り、もう少しこの辺りをぶらついた。

珍しい、良く判らない用途の物を売っているお店やおしゃれな雰囲気、果物を売るなど沢山の店がひしめき合っている。

その中でアクセサリーを売っている店にレオンは堂々と入ってゆく。

アル殿下と私は大人しく彼に付いて店の中に入った。
誰かにプレゼントするアクセサリーでも買うのかな？

私は店の中に並べて飾ってある、珍しく美しいデザインの指輪や首輪、腕輪や髪飾りなどを見て楽しんだ。

アル殿下が私を呼んでいる。
何だろう？

私は呼ばれるがまま、アル殿下の元へと近寄った。

「おい、お前。」

「……ユウ。ほら、腕を出せ」

そう言う腕を動かす前に私の腕を取り何かを嵌めた。それは美しい金細工に紫の石が数個埋め込んである細めの腕輪だった。

「お前にやる。先程の詫びだ。言っておくが、別にお前を気に入ったからやる訳じゃないぞ。ただお前の、……その細い腕にはこの腕輪が良く似合うと思ったからだ」

アル殿下は口元に手を当てぽつと頬を赤らめるとそっぽを向いた。
……なにそれ。ツンデレってやつかしら。

お詫びというのは私を揺さぶって目をまわさせたことだと思う。
断るのも何だか謝罪を拒否しているようだし、殿下はお金持ちだろうからここはお詫びとして受け取ることにした。

「……ありがとうございます」

レオンも何か買ったようで袋を手を持っていた。私達は大いに楽しい時間を過ごして城へと戻ったのだった。

第22話 城下（後書き）

今回も読んでいただき、ありがとうございます。

第23話 不穏な報告（前書き）

今回はヴァルサス視点です。

h22. 11／13 改稿しました。

第23話 不穏な報告

時を遡ること少し。

ヴァルサスとレオンは謁見の間にいた。広いこの空間は今、ざわめきも無くシンと静まり返っている。

玉座には壮年の男性が王者の風格を漂わせて座っている。この人物こそウィルヴェリング現国王オルバルト・ウル・グランディオーブだ。王座より下段にいるヴァルサスとレオンの周囲にはこの国の宰相や大臣、貴族や神官など臣下達が両脇にずらりと並んでいる。

「青の騎士団団長ヴァルサス・シン・グランディオーブ、青の騎士団副団長レオン・アシュレイ、守護者の砦よりただ今戻りました」

「肩苦しい挨拶はよい。面を上げよ」

「はっ」

青の騎士団というのはヴァルサス率いる召喚士達が所属する騎士団だ。

砦での青い制服を纏った召喚士達は青の騎士団に所属し、赤い制服を纏った騎士達は赤の騎士団に所属していた。両者は守護者の砦での任務に就いていた。赤の騎士団団長は激しくなる魔物との戦いにおいて重傷を負い、任務の遂行が困難であったため数年前からヴァルサスが代わって守護者の砦に赴任している。

また、数と強さを増している魔物に対抗するため召喚士達はそれぞれの隊に分かれて他の騎士団と共に協力し合い、日々の任務に努めていた。

ヴァルサスは顔を上げると久しぶりに会う事になる、王であり父

でもあるその人の姿を見た。

そこにはいつもと変わらぬ健在で圧倒的な存在感をたたえたオルバルト王がいた。

オルバルト王は輝く銀髪に深い紺碧の瞳をしている。王は玉座から衰えることのない鋭い眼光をたたえた紺碧の瞳で他者を睥睨している。王は重々しい声をその王座から放った。

「よくぞ戻って来たヴァルサス。そなたの活躍は余の元へも届いておるぞ。この国の召喚士でそなたの右に出る者など存在しないであろう」

「は、若輩者の我が身には過ぎたお言葉です」

ヴァルサスは身に余る思いで王の言葉に頭を下げた。

それは、オルバルト王その人も優れた召喚士であったためだ。召喚士としてのヴァルサスを上回る者の名を挙げるとするならば、オルバルト王その人だ。しかし、経験以外で比較をすれば王の言葉に偽りは無いだろう。

「そなたら騎士団の報告書、並びに他の騎士団からの報告書を読ませてもらった。

その内容はこの国の近い未来に真の懸念を感じる物であった。この場にてその詳細を述べよ」

「は。レオン、始めよ」

ヴァルサスに促されたレオンは何のてらいもない態度で真っ直ぐな視線を王に向け、静かに語り始めた。

「はっ、申し上げます。ここ数年の間に我が国内での魔物の発生数が激増しております。現在と十年前とを比較しますと、その出現数と確認数は倍以上に膨れ上がっています。しかも、その個体自体が

凶暴さを増し強くなっています。この状況は我が国だけでなく、近隣諸国でも同様で、魔物の確認数増加に伴い被害も倍増しております。隣国での小さな村などは魔物の襲撃に耐え切れず、消滅してしまった所もあります」

背筋の冷える、ぞっとするような内容であった。

その報告内容に動揺した者達がざわついて音を立てる。

それを気に留めずレオンはさらに淡々と報告を重ねて行った。レオンが言葉を発すると再びその場は水を打ったようにシンと静まり返った。

「また、魔物の増加に呼応するかのように世界中で確認されている奇病も増加と拡大が続いています。奇病とは、魔力の放出が止まらず命が尽きるまで魔力を燃やしてしまう病気です。いまだ、どの国でもその原因は判明せず治療法や対処法は見つかっていません。その発生が確認されたのが十年前でした。当時は極少数のみの、あまり認識の無い病気でしたがここ数年で増加の一途をたどっております」

この奇病が最初に確認されたのはウィルベルングに隣接する大国イルムディであった。

ウィルベルング国内で確認されるようになったのは去年からだったが発生数は増加の一途をたどっている。未だ謎が多く魔力の過剰放出と制御不能という今までに前例の無い症状を呈し、原因の解らない病気として奇病とされた。

レオンに続いてヴァルサスが言葉を継ぐ。

「この魔物と奇病は何かしかの関連があると考えられています。なぜなら奇病と魔物被害の発生場所、発生時期が一致している事が

多いからです。偶然にしては余りにも数が多過ぎる。しかし、その関連が具体的には何であるのか分かってないのが現状です」

ヴァルサスが言葉を発し終わった後も謁見の間はシンと静まりかえっている。

その時何かの予兆のように地震が発生した。揺れはかすかに感じるほどの小ささで直ぐに収まったが敏感な者は気付いた。

不安の色が色濃く謁見の間に広がっていく。

「そうか、報告御苦労であった。皆の者、もはや一刻の猶予も無いほど現状は逼迫している。今以上の対応を早々にせよ。医療機関には奇病の原因究明を第一に優先するよう命じる。ヴァルサス、そなたには増加し凶悪化する魔物への対策として守護者の砦での任を解き、対魔物機関の設立とその最高責任者へ任命する。レオン副団長、そなたも砦での任を解きヴァルサスの副官として対魔物機関へと任命する」

「ははっ。非才ながら謹んで職務をお受けいたします」

「ははっ。粉骨碎身して己が職務を全う致します」

ヴァルサスとレオンは深々と頭を垂れ、謹んで任命を享受した。

謁見が終わった後ヴァルサスはレオンと別れて別室にいるが、一人ではない。部屋にはオルバルト王とセーゲル宰相もいた。王は先程の威厳ある態度とは異なり穏やかな雰囲気醸し出している。口調も変わっていた。

「久しぶりだな、ヴァルサス。元気だったか？守護者の砦が魔物に

破壊されたとの報告を受けた時は、さすがのお前もどうにかなったのではないかと胸の塞がる思いがしたぞ」

そう言うと、オルバルト王はヴァルサスをぎゅっと抱擁した。

私は久しぶりに父の温もりを感じた。一体いつ以来だろう？ こうやって父と抱擁を交わすのは。色々な感情が現れては姿を変える。なんとも複雑な気持ちだった。最後に感じたのは温かさだった。

気のせいかな、父の背が若干低くなっているように思う。先程の謁見の時には微塵にも感じられなかったのに。父にはまだ老いの影は見られない。まだまだ男盛りだろう。

……自分でも気付かない内に背が伸びていたのだろうか？

「御心配をおかけして申し訳ございません、父上」

「いや、お前が無事であったのなら何よりだ」

「はい。父上も御健在で何よりです。あの時はいち早く我が守護者の砦に救援を頂き、本当にありがとうございました。おかげで砦の機能もすでに回復しております」

「そうか、お前達の助けになれたのなら良かった」

「父上……」

感謝の念が湧きあがった。私にとって、父は今も昔も大きな存在だった。

そこへ美しい女性が入ってきた。現王妃リリネだ。

彼女は円熟した女の美しさを備えた熟年の女性で絹糸のようなプラチナブロンドに紫の瞳をしている。

私は誰にも悟られないよう密かに心を引き締めた。王城に戻れば彼女と会う事になると覚悟はしていた。

彼女を見た自分はどうか感じるだろう？ 王城を出てから何年も前に彼女への想いをとっくに乗り越えたと思っていたが、実際に会って

みたらどうなるか自分が分からなかった。

リリネは第二王妃だ。第一王妃エリンはヴァルサスの産みの母であり、リリネの姉でもある。エリンはヴァルサスが物心も付かない幼い時に魔物に襲われその命を散らしていた。

以来、リリネはヴァルサスを我が子のように愛情を持って育ててくれた。ヴァルサスにとってリリネは育ての母親だ。

しかし、私はリリネを母親として思っただけでなかった。

年上の、一人の女性として捉えていたのだ。それどころか私の初恋の相手はリリネだ。

私は随分早熟な子供だった。早くに母親を無くし、母に良く似たリリネに母の面影を求めたのだと思う。しかし、いつの間だったのだろうか？リリネへの気持ちが違う想いへと変わっていた。

オルバルトは王として立派な存在だ。今も昔も。だが、父親としては国王としての執務に追われて殆ど会うことが出来ず、私は甘える事など到底できなかった。父が私の事を十分気にかけてくれるのは分かっていたが。

代わりにリリネを一層求めたのかもしれない。

父との間に弟のアルフリードと妹のソレイユが生まれていたが気持ちは強くなっていくばかりだった。許されない想いが。

だが、リリネは自分の義母で、父と愛し合っている。そして自分は第一王子で。何もかもがこの気持ちを許さない。その想いを出す事さえ出来ない。

二人を見ているのが辛く、時に微笑ましくもあり引き裂かれるような気持ちになった。

——強引に自分の物にすることができたなら手に入れたかもしれない。

だが、それを表に出す事もなかった。ぐっと心の奥に秘め、リリネの姿を見ないよう距離を取った。女も抱いた。しかし、気持ちは収まるどころか強くなっていく。

私は王位継承権を放棄して、ついに王城から出る事を希望した。別にどこでも良い。できるだけ遠く離れていれば。

いつかこの気持ちが落ち着いて薄らいでいくのを期待した。

久しぶりに会うリリネは相変わらず美しかったが、私の気持ちは穏やかで落ち着いていた。

「ヴァルサス、貴方大丈夫だったの？ 恐ろしい魔物に襲われたとか！ よく顔を見せて」

「はい、義母上」

「……元氣そうで良かった。本当に久しぶりだわ、こうやって顔を見るのも。貴方の事が心配で一日も早く貴方に会いたかった！」

リリネは私よりもずっと小さな体で抱擁した。伸びあがって私の頬に軽くキスをする。

彼女は私のかつての想いを知らない。そして知らせない。

私はそっと抱擁を返した。

「義母上。御心配をおかけしました。義母上は以前とお変わりなく美しくいらっしゃる」

「ふふふ、ありがとうヴァルサス。貴方は少し変わったわね。なんだか大きくなったみたい。今の貴方の姿を見てほっとしたわ、本当に。全く心配ばかりさせるんですから、この子は」

「……本当にすみません、義母上」

「いいわ。それより近々、守護者の砦の任務を離れてこちらに戻っ

て来れるとか？」

「はい、先程決定しました」

「貴方が帰ってきてくれて王も私も本当に嬉しいわ。アルフリードとソレイユも大層喜ぶでしょうね。あの子達の様子が目に浮かぶようよ」

「ええ。私もまた兄弟共に過ごせると思うと嬉しいです」

「――ヴァルサス」

父が私を静かに呼んだ。その表情は苦渋に満ちている。

「お前には大変危険な役割を背負わせるな。父として本当に申し訳なく思う」

「……いえ、王家に生まれた者として当然のことです。国民のためより凶暴となる魔物から少しでも被害を減らし安全に生活できるよう努める事が、王族である我が責務だと思ってます」

「ヴァルサス……。私はお前を誇りに思うぞ」

「私も父上と義母上を誇りに思ってます」

私の両肩に父が手を置いた。父の両手は力強く温かい。

リリネは美しい顔に穏やかな笑顔を浮かべると父に寄り添った。それに気付いた父はリリネの腰を引き寄せその瞳を覗き込む。

二人はじっとお互いを見つめ合った。

二人が深く愛し合い、信頼し合っている姿が目の前にあった。

かつてはこの姿を見るのが苦しかった。だが、今は穏やかな気持ちがあるだけだ。

「……リリネ」

「……オルト」

お互い指をからませ身を寄せる。

そろそろ他でやってくれないかと思っていると、セーゲルの咳払いの音がした。多分セーゲルも同じ気分のようにだ。彼は毎度毎度これを見せつけられているんだろう、顔をしかめている。

「ゴッホン！」

かなりわざとらしい咳払いだがその効果は抜群だった

「！」

「！！」

二人は我に返った。

咳払いは年季が入っている。咳払い一つで二人を我に返させるなど、職人技だろう。セーゲルは相変わらずいい仕事をするな。

「陛下、そろそろ次のご予定の時間が差し迫っておりますぞ」

「むむむ、もうそんな時間なのか。ヴァルサス、名残惜しいが私達はこれにて失礼する」

「またゆっくり話をしましょうね、ヴァルサス」

「はい」

これからは顔を合わせる機会も増える事だろう。

私は三人を見送った後、自分の部屋へと戻った。

部屋に戻るとそこにはユウとレオンの姿は無く、まだ外出から帰っていないようだった。

久しぶりに一人で過ごすこの部屋は閑散としていてどこか寂しい。

私は意識を澄まして魔力を広げるとユウの探索を行った。すると、ユウの首飾りを通して気配が伝わってくる。ユウはまだこの城へは戻っていないようだ。城下辺りに気配を感じる。この様子だところまで帰って来るには少し時間がかかるだろう。

深く息を吐くと、私はこの鬱陶しく感じるずるずるとした衣装を着替えることにした。

気楽な服装になるとソファにどざりと身を沈める。体がやけに重たく感じていた。

———これからの事に対して準備をせねばなるまい。

喉を潤そうと侍女が用意してくれたお茶を飲む。一口飲むと溜息が唇から洩れた。

リリネは変わっていないなかった。だが、私の気持ちは変わったのだろう。リリネと会っても私の気持ちは静かで落ち着いていた。以前のように心が乱されるようなことは無く、ただ穏やかだ。

あれほど激しかった気持が今は全く湧いてこない。それが自分で望んだ事だったが、実際に変わるとただ不思議だった。

不意にユウの姿が脳裏に浮かんた。気付くといつもユウのことを考えている。

ユウはこの一カ月で驚くほど成長した。彼の目の前で蛹から蝶に羽化するように、子供から一気に少女へと変貌した。

そのさまは、瑞々しい草木が芽吹いて美しい蕾を付けたかのようだ。まさか、それが大輪の花を咲かせようとしていることを今となって気付くとは。

ユウが一気に成長したことに対しクリスの意見を聞いた。その意見では、ユウは他種族との混血児でないかとの見解だった。

その意見には同感だ。しかし、個人差があるのかもしれないがそれでも成長スピードが速い。ユウ自身の身体や他人の眼が心配だがこのまま見守るしか方法は無い。

ユウの前ではこのように心配していることを態度に出さなかった。余計に不安を煽ってしまうだろう。周りの者達にも協力させ、ユウにはそれと悟られないよう殆ど執務室と治療所のみ行動をさせた。本人は多分気が付いてないだろう。落ちつけば少しずつ行動範囲を広げていけば良い。

今回は彼女がストレスを溜め込んでしまわないよう連れだした。こちらは彼女を知っている人間などいない。

ヴァルサス自身の気持ちといえば、ユウに対し何ら違和感を感じなかった。むしろ、自分の中に再び湧きあがってくる強い感情に戸惑う。

ユウが抱きついたあの時。服越しに伝わってきた身体の軟らかさと弾力。子供とは違う少女らしい身体つき。微かな香り。

どきりとした。訳もなく動揺する。

ハクオウに乗っている間どうしていいか分からなくなった。レオンとユウを離したくて攫うように強引にハクオウに乗せた。まるで子供のようだ。なのに……。自分の前にいるユウを支えてやりたかったが触れるのを躊躇った。あの、軟らかな体を再びこの腕に感じたら自分は どうしてしまうだろう。

眩しいユウの笑顔が脳裏に浮かんた。

違う、この感情は違う！

ヴァルサスの中でのユウは子供だった。そこに少女となったユウが現れる。

再び心の中で閉じ込めた感情が蠢いている。とぐろを巻くように渦巻いた。

私はその感情から眼を逸らした。

彼女はまだ子供だ。

その後、ヴァルサスと合流したユウとレオン達三人は直ぐに城を出立した。砦でやり残した仕事を片付けて、次の任務につかなければならない。

ヴァルサス達三人は、その日の内に再び砦へと戻ったのだった。

第23話 不穏な報告（後書き）

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第24話 黒の騎士団（前書き）

h
2
2.
1
1
／
1
3
改稿しました。

第24話 黒の騎士団

「ユウ、おはようございます」

「おはようございます、フラン」

フランといつもの挨拶をする。けれど、私達がいるこの場所はいつもの砦の部屋ではない。

今、私は王城にあるヴァルサスの持つ部屋の中の一室にいる。

この部屋は砦の飾り気のない部屋とは違って華美で上品だった。

「ユウ、朝食の準備が出来てますよ。着替えを済ませてお食事に来て下さいな。」

「はい、少し待ってて。直ぐに行きます」

守護者の砦とは違う慣れない環境に私は最初戸惑いを感じていたが、数日経った今では少しずつこの環境にも慣れてきた。

ここに住むようになった経緯はヴァルサスとレオンと共に王都へ出かけた後、王城に転居することを帰ったその日に突然ヴァルサスから告げられて始まった。

突然の事に驚き戸惑う私を置いて、周囲の準備は瞬く間に整っていった。

私はいえ、自分の荷物などほとんど無いのでまとめ始めると直ぐに準備が済んだ。

その後急きょ慌ただしくこちらに引っ越してきたが、転居の理由はヴァルサスの仕事の変更と就任によるためだとヴァルサス本人から聞いた。

あれよあれよという間に王都への転居が済んだ。

守護者の砦には新たな騎士や騎士団長、召喚士が入れ替わりに就き王都にはヴァルサス、レオン、カイル以外に砦で私を可愛がってくれた召喚士やクリス先生も一緒に移動していた。彼らは今回の人事異動でヴァルサスと共に移動となったみたい。

それにフランも一緒に王都へと変わってきてくれた。おかげで私は新しい環境に不安と緊張を感じながらも心強い思いがしている。私の事を知っている人が傍にいてくれると思うとこの環境にも順応できそうだった。

それに、アルフリード殿下とも知り合いになれた。

彼は私達が王城に来て以来、ちょこちょこ部屋を訪ねてくれる。

王子様は忙しいんじゃないかな？

疑問に思い本人に直接尋ねると、

「私は仕事をこなすのが早いからな。早めに仕事を片付けて、お前が慣れない環境で戸惑っていないか様子を見に来てやってるんだ。そんな風に疑問に思うよりむしろ感謝してほしくらいだ」

などと言うので私は取りあえずお礼を言った。

すると、何故か顔を赤くして何かもごもご言っていたが何を言っているのかは分からなかった。

とはいえ、転居先がたとえどんな場所であろうともこの世界で今の私が存在できる場所はただ一つ。ヴァルサスが許してくれる限り、彼の元であることに変わらない。

いや、私を温かく受け入れてくれた彼の元以外には考えられなかった。

けれど……。

ヴァルサスは今の姿となった私を一体どう思ってるのだろうか？
子供のときと違い、今は彼との距離が少し遠くなったように思う。
それはごく当然の事かもしれない。

子供のときと同じ態度を取られる訳が無い。それほどまでに私は
変化してしまった。

こんな私を受け入れてくれるだろうか？こんなに成長してしまった
私を。

ましてや実の子供でも何でもない娘など、たった少しの期間で本
当の親や兄弟のように信頼や愛情を育てることなど出来ないだろう。
ゆっくりと、少しずつ関係を造り上げていくしかない。

私の方も外見の成長によって子供の姿のときと全く同じようには
関われなくなった。体が触れることや、体の距離の近さに羞恥心を
前より感じるようになった。

やっぱり、子供の体でいたときには自分の性という意識が多少薄
らいでいたのかもしれない。

まっ平らで女性としての象徴が何も無い体だったから？
そのため急な成長により私自身気付かないうちに、私の態度も変
化してるのかもしれない。

このままヴァルサスは私という存在が彼の傍にあることをいつま
で許してくれるだろう？

いずれは彼に特別な女性が現れるだろう。いつまでもこのまま
いられなのは確かだ。

住居が変わるその間にも私の成長は止まること無く進んで行き、
私の体は王都を以前訪れたときよりもさらに成長していた。

着替える途中で手を止めて姿見で自分自身を観察した。そこには

見慣れない少女が立っている。

私の身長は160センチ程度まで成長し、髪は背中まで伸びている。身体つきは瑞々しさを湛えながらも凹凸がよりはっきりとして、女性らしくなった。

クリス先生程までとはいかないけれど胸は育ち腰はくびれ、手足は雌鹿のようにすらりと伸びて引き締まっている。

高校生くらいかな？16歳から18歳程度に見える。

私の外見は元の世界での姿よりも均整がとれていて、肌はより白くなってるように見えた。今の私は元の世界での面影を残しながらも全く別人だった。

この姿になってから何日か経ったけれど、これ以上変化しなくなった。

急な成長が止まったのか、それとも穏やかなスピードへと変化したのか。今はまだ解らないけど、取りあえず落ち着いてくれたみたい。成長が止まってくれて、本当に良かった。あのままお婆ちゃんになっってしまうんじゃないかと本気で怯えていたのだ。今後はまだどうなるのかなんて分からないけど、取りあえずはほっとした。

安堵のため鏡に映る私の顔は、心なしか明るい気がする。

私は身支度を整えると食事のために部屋を出た。

「お待たせ、フラン」

「ユウ、お食事が冷めてしまいますよ。さあ、温かいうちに召しあがって下さいね」

「ありがとうございます。うーん、今日の朝食も美味しそう。それじゃあ早速いただきます」

私は朝食に取りかかった。

この場にヴァルサスはいない。彼は仕事に忙殺されていて朝早く

から執務室へと出勤していた。
私の方ものんびりしている暇は無い。これから仕事があるのだから。

私が成長したことにより、周囲の態度も変化した。

私を小さな子供扱いする人がいなくなった。以前よりも私の意見に耳を傾けてくれるようになり、自分の言動に対する責任も付いてくるようになった。

それは外見だけでなく内面の部分や実際の能力も考慮しての対応や反応だと私は思っている。

嬉しい変化だと思う。子供の姿では認めてもらえないように思えたけれど、ようやく一人の人間として、認めてもらえるようになった気がした。

それに、こちらの世界での自分のお金も手にすることが出来た。それは決してお子遣いでなく、自分の労働に対する賃金として得た物だ。これが何も無い私にとって、とっても嬉しいものだった。相変わらず衣食住をヴァルサスに甘えて依存しているけれど、これを期にいずれは自立したい。いつまでもヴァルサスに甘えてる訳にはいかない。

仕事というのは相変わらずヴァルサスの仕事を手伝うものだ。けれど、内容はより責任のある事務処理などを手伝うことになった。書類の整理や分別、ときに簡単な事務手続きなども私が行い、ヴァルサスのお茶を淹れるのも続けてやっている。

私の働きぶりがその仕事を任せられる程度に認められたのかな。それと、ヴァルサスは新体制設立のため忙しく、正直なところ猫の手も借りたいくらいなのだろう。

ヴァルサスは朝早くから夜遅くまで休み無く働いてて、いつかは

体調を崩すのではないかと心配になる。

取りあえず、私は仕事に出勤するため執務室へと向かった。

ヴァルサスは新たに騎士団を設立していた。その名は黒の騎士団といい、赤・青・黄・緑の四騎士団に新たに追加された。

この黒の騎士団は他と異なりより戦闘に特化した特殊な騎士団として誕生した。

主に、他の騎士団では手に負えない凶悪な魔物に対抗するための騎士団で必然的に実力のある者が集められた、100人にも満たない少人数で構成された国内最精鋭部隊だ。

ヴァルサスは黒の騎士団団長であると共に軍事最高責任者として全ての騎士団を纏めることとなった。しかし、主には今まで通り各々の騎士団団長に采配を任せている。

青の騎士団団長は新しく擁立する事になっているが、今の所はヴァルサスが引き続き兼任している。

お陰でヴァルサスは殆ど自分の時間が無くなった。数少ない空いた時間には自分や騎士団への鍛錬と指導に当てていた。それ以外ではレオンが黒の騎士団副団長として団員の指導や育成に当たっている。

今の体制が落ち着けば少しは時間も取れる事だろう。

ユウの方も治癒の技を学ぶために今ある時間をさらに調整してほとんど毎日クリス先生に師事し、仕事の一部を手伝っていた。

クリス先生も忙しい時間の合間を縫ってユウに付き合ってくれていた。

ここは城内にある治療院の一室だ。私は仕事が終わった後この部屋に来ていた。

「先生、今日もよろしくお願いします」

「ああ、もうそんな時間か、早いね。―――それじゃあ早速始めようか。今日は実践の方をやってみるからね」

「はい」

今、私の目の前には萎れて枯れかけた花が何本も生けてある。これを再び癒しの力で蘇らすのだ。

クリス先生は枯れかけた花を一本手に取った。息を整え深く呼吸をすると花にその掌を向ける。

すると、掌から淡いオレンジがかった黄色の光が生まれ、枯れかけた花を包んだ。

花は映像を巻き戻して見るように、しなびた葉や茎、花びらが瑞々しく張りがでて甦った。枯れかけて変色し茶色じみていた葉や茎は緑色へと変化し花びらは美しい白へと変わった。

心の底から驚愕した。

「先生、凄い！枯れかけていた花が切りたてみたいになった！こんなに瑞々しく甦ってる」

「次はユウ、あんたの番だ。やってみな」

「ええっ？ 私ですか」

「そうだよ、あんたなら出来る」

本当にこんな奇跡のようなことが出来るのかな？ 目の前で見ていなければ信じられなかったかもしれない。本当に、この世界は不思議なことばかり。一体どんな原理であのように甦ったのだろうか？

言われた通りやってみるがそうそう期待どうりにはいかない。全くもって変化は現れなかった。

これも予想どうり。やっぱりね。

「まずは己の意識を集中し、気を静めて。心の中に静かな水面をイメージしてみな」

「はい」

ゆっくり息を吐いて呼吸を落ちつける。頭の中に水面のイメージを浮かべた。しばらくすると湖面が静かに澄んできた。

「波紋を想い浮かべて」

湖面に波紋が生まれた。やがて波紋は広がっていく。次々と波紋は浮かんで大きくなりついには虹色に光輝いて私の体の隅々まで満ちた。光が全身に満ちると私の掌から体の外へ光が溢れ出た。

掌に虹色の輝きが生まれ花を包み込む。目の前で花はみるみる甦っていく。

驚いた事に私にも本当に力があつた。嘘みたい。

けれど、実際に目の前で花は変化していく。しかも、なかなかいい調子で。変化はさらに進んでいった。

あれ？どこまで進むんだろう。

花は満開になった後、するすると萎んで蕾になりやがては蕾もつかないくらい小さな芽と葉に戻ってしまった。

「うん？ ユウ、もう一回やってみな」

「はい」

再度同じようにやってみた。けれど、次は甦るところか枯れてしまつて、さらには種が付いていた。

……何故？

「……失敗してしまいました。けど、何だかやり過ぎてしまったような変化です」

「種が付いてる。……力の微妙な調整が出来てないんだね。けど、こんな風に種を付けたりするの初めて見るケースだ」

「そうですか。もう少し細かく調整することが必要なんですね。私にできるかどうか解りませんが今度は意識してやってみます」

「うん、そうだね。何度でもいいから頑張ってみな」

「はい」

私は何度も失敗を繰り返しながら、ようやくまともに花を蘇らせることが出来るようになった。

「どうでしょうか、先生。ようやく蘇らせることが出来たみたいですよ！」

「うん、そうだね。いい調子になってきたんじゃないかい？」

最初は力なんて全く発動せず、私には癒しの力など無いと思つていたけれど、どうも本当に力があつたみたい。

コントロールが出来ないまま力が使えていたとしたら、大変なこ

とになっていたかもしれない。正しく使えるよう指導を受けることが出来たのは、私にとって本当に有り難いことだった。それに、この力で人の役に立つことも出来る。

改めてクリス先生や先生を紹介してくれたヴァルサスに感謝の気持ちを覚えた。

さらに、他にも私は治療に使用する薬草の知識や薬の生成方法も本格的に学ぶこととなった。

そんな中、ヴァルサス率いる黒の騎士団に不穏な任務の知らせが届いた。

知らせを持ち帰った騎士の姿は見るに堪えない程ぼろぼろで、土と血にまみれ体中いたるところに傷があった。騎士は息も絶え絶えに魔物の出現を報告した。

被害状況は甚大で討伐に向かった緑の騎士団の部隊は壊滅状態だ。この騎士は、命からがら魔物から逃げおおせるとすぐさま王都まで飛んできたのだ。

報告が終わると共に、騎士はその場で意識を失った。

騎士はすぐさま駆けつけた治療士に運ばれていく。

知らせを告げた騎士が倒れたそのとき、体に感じるくらいの地震が起きた。ガタガタと地面が、柵や置物が音をたてて揺れる。

不気味な気配が辺りを包み込んだ。

第24話 黒の騎士団（後書き）

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第25話 悪夢（前書き）

h22. 11／19 改稿しました。

第25話 悪夢

魔物の襲撃により緑の騎士部隊は壊滅状態に陥った。衝撃的な報告内容は王城に動揺をもたらし、すぐさまこのような被害をもたらした魔物の情報収集がなされると黒の騎士団へと討伐命令が下った。緑の騎士部隊を壊滅させた魔物を討伐せよ！

ヴァルサスとレオンは個々の戦闘能力や連携を考慮し黒の騎士団の中から数人を選抜すると、夜明けと共に討伐へと向かった。

報告によると出現したのはキマイラとサイクロプスであったという。

その数はキマイラが十体未満と少数程度でサイクロプスが3体だった。ただ、キマイラとサイクロプスとなると個体そのものの強さがグールやワイバーンと比べて圧倒的に違いがある。襲われた緑の騎士部隊ではひとたまりも無かったのだろう。

騎獣に乗った黒騎士達は目的地に向かって空を駆けた。

胸の内がざわめくような、ざらりとした感覚が離れない。ユウは落ちつかない気持ちでそわそわしながら一人部屋で過ごしていた。とても嫌な予感がする。この感覚がずっと離れない。

私は朝方悪夢を見ていた。よりによって、ヴァルサス達が魔物の討伐に向かったこの日に。

目の前の空間は暗く霧がかっているかのよう。先が全く見えなく

て、歩いても歩いてもどこまでも続いているかのように延々とその空間は続いた。一体どこまで続くのだろうか？

私の内に心細さや不安が湧きあがって来た頃、突然ヴァルサスとレオンが私の前に現れた。二人は私に背中を向けた形で立っている。私はこの不気味な空間で見知った姿を見てほっとすると、駆け寄って二人に声をかけた。

「ヴァル、レオン！　ヴァル達もここにいたんだ！　良かった、貴方達二人がいてくれて。私、気が付いたらこの場所にいたんだけど、一体ここはどこなんだろう？　二人はいつからこの不気味な場所にいるの？」

けれど、二人にはまるで私の声が聞こえていないみたい。声をかけても身動きや反応が全く無い。

訝しく思っただけは二人に近づくと、もう一度声をかけてヴァルサスの背中に触れた。その背中は何故だろう？　硬くひやりとして冷たい。

「ヴァル、レオン。返事をして。ねえ、聞こえて無いの？」

すると、ヴァルサスがピクリと頭を動かした。彼は首から上だけを不自然にゆっくりと動かして振り返り、横顔を私に向けた。その動きは人間とは思えないようなぎこちなさで異様な動作だった。まるで機械の擦れる音が聞こえてくるような……。

「ユウ……」

ヴァルサスはスローモーションみたい ゆっくりと口を動かした。そして、口を開けたまま苦悶の表情を浮かべて動きを止める。まるで彫像みたいに。

ヴァルサスの横顔を占める余裕の無い苦痛を耐える表情に、私は驚愕し動揺した。

「ヴァル？ ど、どうしたの一体？ 大丈夫？」

そう声をかけた途端だった。突如ヴァルサスの首や顔の皮膚が変化し始めた。

コンクリートのような灰色に。

「！！ な、何これ！ ヴァ、ヴァル！ レオン、ヴァルが石に変わって行く！」

私は驚きと恐怖と混乱で訳が解らなかった。どうしていいのか何が起こっているのか理解できず、ただ為す術も無くレオンに助けを求めた。しかし、レオンは振り返る事すらせずにピクリとも動かない。

その間にもヴァルサスは首元からどんどん石化が進み、顎が変色して口は動かなくなった。さらに瞬く間に美しい眼が、額が石へと変化して最後に髪の毛の先まで灰色に変わり石化してしまった。

「あああ！！ ヴァル！ どうしよう、どうしたらいいの？！ 石になっちゃったよ！ ねえレオンってば！ お願い、返事をして！ ねえ！……………ま、まさか、レオンまで？」

私は二人の正面にまわった。するとレオンは髪の毛以外がすでに石と化していた。残っていた燃えるような赤い髪もあつという間に灰色へと変わる。

二つの石像から鈍く甲高い音がした。石像に次々とひび割れが走っていく。私はそれを何とか止めようと手を伸ばした、その時。二つの石像に大きく亀裂が入ると裂けるような恐ろしい音を立ててば

ろぼろと崩れ去った。

「いやあああああ!!」

「ユウ！ 起きて、ユウ！」

私ははっと眼を開いた。フランが心配そうに私を見ている。

夢……？ 私は全身にぐっしりと汗をかいていて、寝巻は私の汗を吸って濡れていた。

その、汗でべたつく不快な感触は私の気持ちを表しているようだった。

「ゆ、夢だったの……？ ああ、良かった夢で。本当に怖かった……」

「随分うなされていましたよ、ユウ。貴方の声が聞こえたので様子を窺いに来たのですが、余りの様子に思わず起こしてしまいました。何か怖い夢でも見ましたか？」

「ええ。起こしてくれてありがとう、フラン。本当に怖い夢だった。……余りに怖くて口に出せないくらい」

「そう、それは余程恐ろしい夢だったのね。でも、もう大丈夫ですよ、ユウ。だって、ただの夢なんですから。夢は所詮夢です。……そうですね、何か体が温まる飲み物を用意しましょうか？ 少し気持ち落ち着きますよ」

「……ありがとう、フラン」

少しして、フランはほんのり湯気の立つミルクティーを用意して

くれた。私はフランからティーカップを受け取ったが、気が付くと手がカタカタと震えていて中身が零れそうになった。

そんな様子にフランは眉根を寄せると心配そうに私を見た。

フランは私の隣に座るとティーカップを持ったまま震える私の両手をフランの両手で優しく包み込んでくれた。

「……フラン」

「大丈夫ですよ、ユウ。怖い夢はもう終わりです。……貴方が落ちつくまでもう少しこうしていきましょうね」

暫らくそうしていると、ようやく手の震えが収まった。

私はぬるくなったミルクティーを一口含んで飲み込んだ。フランの優しい気持が沁み込んだミルクティーの味わいがじんわりと心と体に沁み込んでいく。

私は体の力を抜くとようやくホッと一息つけた。

「ねえ、フラン。ヴァルは今どこにいるか知っている？ 私、夢のせいで彼の顔を見ないと不安で」

「ヴァルサス殿下ですか？ 殿下はレオン副団長と共に黒騎士達を率いて魔物の討伐に出かけられましたよ。今朝方日の出と共に出立されました」

「ええっ、そ、そんな」

「ユウ、大丈夫ですよ。どんな夢を見たのか知らないけれど、ヴァルサス殿下に変わった様子はありませんでしたよ。今まで殿下と離れて過ごす事が少なかったから不安になりましたか？ それとも魔物の討伐が不安ですか？ 大丈夫、殿下はお強い方です」

「……」

そうじゃない。でも、どうやって言っているのか分からない。

魔物の討伐があることなど私は全く知らなかった。事前に分かっ

ていれば何か教えてくれそうなのに。もしかして、ヴァルサスは私に心配をかけまいとしてわざと教えてくれなかったの？ ……そうかもしれない。ヴァルサスは心遣いを忘れない優しい人だから。それともこの討伐は急遽決まった事だったのかもしれない。

——ただの夢。それにしては不吉で生々しいリアルな夢だった。私は夢の内容を何度も否定したけれど、何かを予感させるような夢の内容が頭にこびりついて離れなかった。

繰り返し何度も恐ろしい場面が甦る。不安が私を包み込んだ。悪夢とともに続く魔物の討伐。私は不安が自分の胸の中で育ち、膨れていくのを感じていた。

「ヴァルサス殿下、もう少しで目的地に到着します」

「うむ。皆の者、これより警戒空域に突入する。気を引き締めよ！」

彼らは今、騎獣に乗って上空を高速移動している。黒騎士達はヴァルサスを先頭に隊列を組み、一糸乱れぬ様相で速度を保ちつつ移動していた。

この空域は魔物の被害が出た地域にほど近く、一行は警戒を強めて進んでいく。

ヴァルサスが命令を下すとそれをハクオウの能力で空間を超え各騎士へと伝えられた。

その命令にヴァルサスの元へと全ての騎士達から空間を超えて応答が返る。

ハクオウに騎乗したヴァルサスの傍らにはヒエンに騎乗したレオ

ンとグリフィンに騎乗したカイルの姿が左右にあった。後ろに並ぶ黒騎士達の中にはエディルの姿もある。

「殿下、北北東方向に魔物の存在を確認しました！ キマイラです。その数10体！」

探索を行っていたエディルから報告が届く。

「この速度で進めば数瞬で対峙します！」

左隣に控えたレオンがヴァルサスの代わりに言葉を発する。レオンは言葉と共に抜刀し剣を頭上高く掲げた。

「皆の者！ 戦闘態勢を取れ！ これよりキマイラの討伐にかかる。その数10！」

「おう！」

遙か北北東方向に黒い点のような影が現れた。この距離では姿はつきりと判別できないが、徐々に姿が見えてくる。その姿は上半身はライオンで下半身はヤギ、蝙蝠のような羽根に毒蛇の尻尾を持つキマイラだ。

このままのスピードで進めば直ぐに正面に現れ対峙するだろう。

ヴァルサスは戦闘に備えて騎士達に指示を出した。

「皆の者、聞け。ハクオウの攻撃を合図に対キマイラ戦を開始する！ 皆、衝撃波に備えよ」

「はっ！」

「行くぞ、ハクオウ！」

ハクオウは了解したとヴァルサスの頭の中に直接語りかけてくる。

カイルとレオンを含めた黒騎士達はハクオウから距離を開け、戦闘配置についた。

「薙ぎ払え！」

ヴァルサスの声と共にハクオウは自身の力強い翼を一度大きく羽ばたかせると首を大きくぐりと円を描くように振った。その口の中から渦を巻く青白い光が覗いている。光はハクオウの口の中だけでなく体内でも荒々しくうねりを上げる。うねった光は密度を増し渦を巻くと口の中に凝縮した。それは周囲の空気さえも巻き込みながら青白い光を轟々と発して純粋な力を形成する。

ハクオウは地響きのような咆哮を放ちつつ、轟々と力が燃える巨大な顎を大きく開いた。

強力なドラゴンブレスが恐ろしい勢いでキマイラ達に襲いかかった。放たれた力はプラズマを発しながら大気を捻じ曲げ一直線にキマイラ達に向かう。その一撃は神の鉄槌のようだ。戦慄するほどの強烈な攻撃を放つ。

目の前の視界が青白く染まった。その刹那、鼓膜に痛みを感じるほどの爆音が轟き空気がビリビリと震撼する。ハクオウの放ったドラゴンブレスの余波は黒騎士達にも衝撃波をもたらし、轟音がシールドをも超えて波及する。黒騎士達と騎獣は強風にあおられたかのように一瞬体制を崩した。

光が収まると前方にはその数のほとんどを減らしたキマイラ数体がこちら目がけて飛んで来る。ハクオウの攻撃の後に残ったわずかな数体だ。

一瞬の内にキマイラ一群の中央にいた物とその周辺にいた数体は跡形もなく消滅していた。攻撃をなんとか免れたキマイラも大きくダメージを負っている。

そこへ、畳みかけるように攻撃を開始する。

「黒騎士達よ、今こそその実力を発揮するのだ！ 行くぞォ！」
「オオウ！」

衝撃波にひるまずレオンは声を発した。レオンを先頭に黒騎士達を率いてキマイラへと次々に攻撃を開始する。キマイラに反撃の暇を与えない。

「シルフィード！ 我が召喚に応えたまえ！ 我らが眼前の敵を切り刻め！」

カイルはシルフィードを召喚する。空中に魔法陣が現れると繊細な羽根を持った風の精霊シルフィードが出現した。シルフィードは空を切り裂きながら己自身を巨大な風の刃と化してキマイラへと襲いかかった。その攻撃は死神の鎌のようだった。鋭く冷たく、そして無慈悲に。攻撃を受けたキマイラは両翼をもがれて地上に叩きつけられた。

傷つきながらもなおキマイラは襲いかかって来る。炎のブレスを吐き毒を持つ蛇が騎士達に襲いかかる。その炎にひるまずレオンはキマイラに向けて突っ込むと、勢いを殺さず大剣をキマイラの顔面に突き立てた。肉を貫く手ごたえが両腕に重く伝わって来る。

「グギャアアア！！」
「ぬうあああ！」

顔面から尻まで一気に真っ二へと一刀両断した。
遅れて血飛沫が噴き出す。真っ二つに分かれた胴体は力を失い地

上へと落ちていく。

残っていた最後の一体も黒騎士達によって討伐された。

「皆の者、気を緩めるな！ このままサイクロプスへの討伐へと移行するぞ！」

レオンは声を張り上げた。指示は空間を超えて各騎士へと伝わる。力強い返答がそれぞれの騎士達から返ってきた。

そこへ、探索の手を広げていたエディルよりヴァルサスへと報告が入る。

「森の中よりサイクロプスの気配を感知しました！ その数3体。報告どうりです！」

「よし、地上に降りて森に入る！」

ヴァルサスの命に騎士たちは力強く返事をかえすと一糸乱れぬ動きで一行は地上に降り立った。そのまま鬱蒼と高い木々が茂る深い森の中へと入って行った。

第25話 悪夢（後書き）

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第26話 石化（前書き）

今回も戦闘シーンです。

h22. 11／19 改稿しました。

第26話 石化

鬱蒼と木々が茂る森は深い闇を思わせる。黒騎士達は騎獣を降りて森の中へと入って行った。これ以上は騎乗しての移動が困難であるためだ。騎獣達には森の外で警戒しつつ待機を命じ、黒騎士達一行は徒歩で森の中へと進んで行った。

この森は奥深く広がっていてどこまでも続いているかのようなだ。背の高い木々に遮られた陽光は差しこむ隙間がないほどに葉が茂っている。頭上を見上げるが木の隙間からさえ空を覗く事が出来ない。一行は薄暗い森の中を奥へと入って行く。しばらく進むと引き続き探索を行っているエディルから報告が入った。

「ここよりさらに北東方向へと進んだ場所でサイクロプスの気配を感じます」

「そうか。皆の者、このまま警戒しつつ進行するぞ」
「はっ」

魔物に向かってさらに森の奥深くへと進んだ。緊張を孕んだ空気が黒騎士達を包む。彼らは気を引き締めながらサイクロプスの気配を追った。

「サイクロプスの気配がこちらに向かって移動して来ます。近い！正面から出現します！」

「皆の者、戦闘態勢をとれ！ 戦闘開始と共に召喚に備えよ！」

騎士たちは鞘走りの音を立てながら抜刀した。鋭い緊張が走る。魔物への攻撃に備えて身構えた。

「来ます！」

突如、粉碎音と共に辺りの木々をなぎ倒しながら巨木が襲いかかってきた。人の背丈ほども横幅のある巨木が唸りをあげ、他の木々を巻き込みながら黒騎士達の眼前に迫る。

「回避！」

黒騎士達は素早く回避行動を取る。意表を突く攻撃を皆かわしたが、息つく間もなく続けざまに第二、第三と攻撃が襲いかかった。速い。

「ハアッ！」

レオンは裂帛の気合と共に大剣を下から上に向けて一閃させると、真っ二つに巨木を切断した。

さらにヴァルサスが周囲の木々に剣を一閃させる。視界の開けたその先には三階建の建築物程度の大きさはありそうな巨大な魔物、サイクロプスが三体出現していた。

サイクロプスのその顔には両目が無く中央に大きな一つ目があり、顔には髭が醜く生えている。濃い体毛に覆われた体には、獣の毛皮で造った粗末な衣を身に纏っている程度で殆ど裸に近い。その力は怪力で人を襲っては人肉を好んで食べる。その巨体からは想像できないが、繰り出される攻撃は素早く息つく間もなかった。

召喚を行う隙が全く無い。しかも、サイクロプスの攻撃力は凄まじく繰り出される拳に当たった木々は木端微塵となっていた。

ヴァルサス達はサイクロプスの攻撃にじりじりと押されていく。

ついに回避出来なかった騎士が数人ともに攻撃を食らった。咄嗟に防御していたがその体は木の葉のように吹き飛ばされ木々と地面に激しく叩きつけられる。その後はピクリとも動かない。微かに胸が弱々しく上下に動いているのでどうやら生きてはいるようだが重体だった。すぐにも怪我人を助けに行ってやりたいが、サイクロプスの攻撃はそんな隙さえ窺えない。

「くっ、攻撃する隙が無いな」

このままではサイクロプス三体に包囲されてしまう。そうなれば、こちらが圧倒的に不利だ。黒騎士達は壊滅的な状況に陥るだろう。ヴァルサスはなんとかこの状況を打破するべく指示を飛ばした。

「このまま私とレオン副団長、そしてエディルをリーダーとして三手に分かれるぞ！ それぞれ三人がサイクロプスを引き付けておく間に奴らの動きを封じるのだ！」

「はっ！」

黒騎士達はヴァルサス、レオン、エディルをリーダーに三つのチームに瞬時に分かれた。黒騎士達の動きは無駄がなく統制がとれている。彼らは突然の指示に戸惑う事無く行動に移った。

ヴァルサスは己のチームにさらに指示を出す。

「私が奴を引き付けておく！ お前達はカイルを中心に足止めを行うよう召喚を始めよ！」

「オウ！」

ヴァルサスは素早く動きながら、召喚を開始する。無詠唱で行わ

れる召喚は右腕に血のように赤い文様を描きながら一瞬で魔法陣を構築させる。

「我が刃となれ！ 出でよ、魔槍ゲイボルグ！」

赤い魔法陣が光を放った次の瞬間、ヴァルサスの右手には巨大な槍が握られていた。槍は軽く彼の身長を超えていて、倍以上はあるだろう。

「ハアアッ！」

向かってくるサイクロプスの拳めがけてヴァルサスは渾身の力を込めて槍を投擲した。

槍は唸りを上げて空気を切り裂きサイクロプスの拳に吸い込まれる。槍はサイクロプスの右腕を貫通すると同時に、ゲイボルグから無数の棘が生え次の瞬間にはサイクロプスの右腕は内側から弾けるように破裂した。血液と骨と肉片が辺りに飛び散り、赤黒い大小の塊が周りの木々へと勢い良く付着した。

「グオオオオオ！」

右腕を失ったサイクロプスは怒りと苦悶の叫びを上げる。ぎよろりと血走った一つ眼をヴァルサスに向けた。

その瞬間カイル達の召喚が完成した。風の精霊シルフィードを召喚する。

「風よ、戒めの鎖となりて我らが敵を捕縛せよ！」

意志を持った強風が前後左右から吹き荒れ、風はサイクロプスの身動きを禁ずる。

ヴァルサスはゲイボルグをその手に呼び寄せると、動きを拘束されたサイプロクスをゲイボルグで一突きの元に退治した。

一方、レオンの方はサイクロプスの攻撃を大剣で受け流していた。何とか受け流しているがビリビリと両腕が痺れ左腕は骨折している。これ以上は受け止められない。

レオンは攻撃の隙をついてその懷に飛び込むと、痛みを堪えて大剣を横薙ぎに力強く振り払った。

「うおおお！」

刃が胴体に深く埋まり、ぱっくりと胴が開いた。

サイクロプスの胴から血が噴き出す。サイクロプスは苦悶の声を上げ血が噴き出す傷口を抑えて後退した。そこに一瞬の隙が出来た。その一瞬を逃さず黒騎士達は水の精霊を召喚する。

「水よ、刃となって攻撃せよ！」

水は変形し円形の刃となってサイクロプスに襲いかかった。圧縮され超高压の水の刃が幾つも回転しながら空間を分断する。

水の刃がサイクロプスの手足を切り飛ばし、毛むくじらの手足が宙を飛んだ。手足を失い動きを封じられたサイクロプスがバランスを崩して倒れるその前に、レオンは渾身の力を込めてその胴を一刀のもとに両断した。肉塊と化したサイクロプスであったモノは重い音を立てながら6つに別れて散らばった。

残るはあと一体。エディルのチームだけだ。

ヴァルサス達はレオン達と合流し、エディル達の元へと急いだ。召喚獣が現れた気配がする。エディル達が召喚したのだろう。

「レオンの方も片付いたか。後はエディル達が戦っている一体だけだが、どうやらあちらも片が付きそうだ」

「はい、殿下。もはや時間の問題でしょう」

「ああ。負傷した者達の具合が心配だ。カイル、負傷者の手当てを頼む」

「はっ、了解しました」

その時、突然地震が起き地面が大きく揺れた。体が宙に突き上げられ思わず片方の膝を付く。

「くっ、地震か？　大きいな。エディル達や負傷者はどうなっている？　無事か？」

よりにもよって、このタイミングでこれ程の地震とは。直ぐさま駆けつけるがエディル達は無事サイクロプスを退治していた。カイルの方からも皆無事であるとヴァルサスに返答が届く。どうやら大事無かったようだ。

「エディル、無事か？　他の者達もどうだ？」

「は、皆生存しています。自分のチームから重傷者が一人出ております。出来るだけ早く治療を――」

その時、突然地面から滲む様に黒い霧が噴き出した。

霧の中には黒い影が幾つも潜んでいる。影はぞわぞわと蠢いた。その気配は明らかに人間ではなく魔物だ。

「不味い！　皆の者、私の後ろへ！」

ヴァルサスは叫ぶと召喚を一瞬で行い結界を出来る限り広げるが、

間に合わない。

突如無数の力が黒騎士達に襲いかかった。不意を突かれ、結界が間に合わなかった者達は一瞬で石化した。怪我を負った騎士達やカイルは結界の範囲外にいたため石化していた。ヴァルサス達の視線の先に現れたのは無数の蛇がうねうねと蠢く頭部を持った上位の魔物だった。

黒い霧が薄くなり数体のゴルゴンが現れる。

ゴルゴンには石化能力がある。ヴァルサスは石化を結界で防いだ
が、結界に無数の圧力がかかり徐々に両腕から石化を始める。

「ううう！」

ヴァルサスの喉から苦悶のうめき声が漏れた。

このままでは石化してしまう。まだ、ここでは死ねない。まだ！
脳裏にユウの顔が浮かんた。他には何も考えられない。

ユウ！

城で自分の部屋にいたユウの頭に、突然何の前触れもなくヴァルサスとレオン、エディルやカイル、黒騎士達の様子が映像となって飛び込んできた。ヴァルサスの両腕が石化している。苦悶の表情を浮かべるヴァルサスの様子はさらにじわじわと腕から肩にかけて石化が進んでいく。片腕で大剣を振るうレオンの姿が見えた。左腕は石化している。

全身が石化してピクリとも動かないのはカイルだ。

その光景は朝の悪夢が現実になったみたいだ。あれは予知夢だったの？ このまま夢どおりには決してさせない！

ユウに恐怖を凌駕するほどの強い感情が湧きあがった。私はそのまま強い感情に突き動かされる。

このままではいけない。ヴァルサスを、レオンと皆を助けに行かなければ！

突如、私の体は虹色の光を放つと黒い魔法陣に覆われた。体が熱くなり視界がぼやけていく。

私はそのまま意識が遠くなるのを感じていた。

第26話 石化（後書き）

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第27話 想い（前書き）

時間が少し遡ります。

h22. 11／23 改稿しました。

第27話 想い

両肘から肩にかけてジワジワと石化が進んでいく。

無数に襲いかかって来るゴルゴン達の石化の力が自分の結界をも浸食し、ヴァルサスを圧迫する。

灰色に変色した己の両手が視界に入った。肘から先はぴくりとも動かす事が出来なくなっている。上腕から肩にかけて激痛が絶え間なく走る。それは細胞や神経が石化によって障害されるために引き起こされる痛みだ。

無数の針で串刺しにされているような感覚に、堪えていたうめき声が私の唇から洩れた。脂汗が額ににじむ。

「殿下！ 加勢します！」

「私が結界を維持している間に反撃を開始せよ！ 石化してしまつた者達の守護も頼むぞ！」

展開する結界によって石化から免れた黒騎士達は、急襲された衝撃からすでに態勢を立て直している。黒騎士達の詠唱が幾つも私の背後から耳に届く。騎士達はそれぞれ役割を分担し、結界を張って私と共に石化に対抗する者、反撃をする者と石化した者達を守護する者に分かれていた。しかし、今の状況は余りにも我々の方が圧倒的に不利だ。

ゴルゴン達は石化能力を撒き散らしながら空中から自在に攻撃をしてくる。猫が獲物を撈るように。ゴルゴン達の嘲るような甲高い笑い声が神経を逆撫でした。

この状況を覆す事が出来るだろうか。不安とあせりが騎士達の心

に浮かぶ。

銀鋼の闘神と呼ばれ、黒騎士達の要であるヴァルサスと副団長のレオンが石化を受け、背後には完全に石化してしまった仲間達がいる。ゴルゴンは騎士達と同数程度存在し、なおかつその能力は強力だ。騎士達は浮足立ちそうになる自分の心を必死で抑え込んだ。

石化はそれを成した魔物を退治すれば解ける。しかし、石化の間に受けた傷は解除された後も存在する。もし、石化した身体をゴルゴンに碎かれてしまえば、その体はそのまま肉片となり甦る事無く即死してしまう。

それだけは決してさせてはならない。

黒騎士達は自らの持つ能力の全てを使ってこの状況を乗り切ろうとした。それが出来なければ、待っているのは死あるのみだ。

石化能力を有し、身体能力も高いゴルゴンは上位の魔物に属する。美しい女の姿に剥き出しの殺意を纏って襲いかかってくるゴルゴンの体は下半身が蛇だ。猛毒を持つ猪の牙ががっと開いた口から飛び出している。鋭い威嚇音をたてて頭に生えた蛇がぞろぞろと蠢いた。私の視界に襲いかかる蛇を切り飛ばしているレオンの姿が入る。続けざまに繰り出されたレオンの攻撃をゴルゴンは黄金の羽根をばたつかせてひらりとかわし、青銅の腕で反撃する。レオンは大剣で攻撃を受け止めた。

痛みが増して範囲が広がる。私は全身を針で刺され、灼熱の炎に身を焼かれている様だった。集中力が途切れそうになる。私は何とか結界の維持が続けているが、すでに痛みは胸にまで達し、石化の範囲が確実に広がっているのを嫌でも感じた。

自分がいずれ呼吸運動が出来なくなり、このまま心臓が石化して止まるのも時間の問題だろう。

「ぐううっ！」

息苦しい。さらなる激痛が私を襲う。今度のはより強烈で、胸が引き裂かれそうだ！

意識が朦朧とする。

不意に、私の脳裏にユウの姿が浮かんだ。

それは走馬灯のようにどっと一気に押し寄せる。

目の前に初めて出会った頃のユウが現れた。それは愛らしい子供の姿だった。

大きな琥珀の瞳は濡れたように潤んでいて私の視線を奪う。私と視線が重なり合ったユウは驚いたように大きな瞳を見開いて、寂しげな影を落とす瞳が瞬いた。

ユウの白くぷっくりとした手は愛らしく、私の掌の半分も無い。私はその小さな手を包み込み、子供の身体を引き寄せ抱き締める。ユウを私の腕の中に包み込むと、小さな手は私の身体にしがみ付いた。子供は私の胸に顔を埋めると年齢に似合わない泣き方で全身を震わせた。途端、ユウの姿はかすれていき私の腕から子供の重みが消えた。

私のすぐ傍に再びユウが現れる。その姿は蕾を思わせる可愛らしい少女へと変わっていた。

はにかむように笑顔を浮かべ私を見上げたユウは陽光を浴びた花のようで、私も思わず口元が上がる。その軟らかな頬に触れるとうるたえたように耳まで真っ赤になって下を向く。両手で顔を上向かせると目尻に涙をためて見上げる琥珀の瞳。

再びかすれて消える少女。

そして現れたのは、大輪の花を美しく咲かそうとする現在のユウ。甘やかな香りが私の鼻孔をくすぐった。優しい声で私の名前を紡ぐ花びらのような紅い唇。再びその軟らかく弾力のある身体を引

き寄せると少し戸惑ったような表情をした。

些細な事を素直に喜び瞳を輝かせるユウ。うつすらと上気した頬と楽しげな声。私の身を案ずる瞳。

日々の記憶が現れては消えて行く。身体の温もりを感じる程鮮やかに。

それは、瞬きする程のほんの一瞬だが、わずかな時が私にはとても長く感じられた。

甦った記憶は私の氣力を湧き立たせ、力と変える。

まだだ、まだ。今はまだ、ここでは死ねない！

強い想いは力となり腹の底から湧きあがる。

ユウへの思いだけが今の私を支えていた。この場の命懸けで戦う部下に対する責任や王族としての責務よりも。何よりもユウの存在そのものが私に力をもたらしした。

身勝手だと言われて構わない。今の私は自分自身とたった一人の為だけに命懸けで戦っている。他の者全てを差し置いて。

全身に重くかかる石化の圧力を何とか押し返し、現状を打破しようとして私は魔力を振り絞った。

眼を背け、封じ込めていた自分の中に存在する感情を見つめる。

私は恐れていたのだ。自分の気持ちに。常識が私を戸惑わせ、再び人を愛するという事が私を臆病にした。だが、ここまで追い詰められて漸く向きあう決意ができた。

己の中に存在する想いと、ついに真正面から対峙する。心の奥底に硬く封じ込めていた感情は真っ赤に燃える溶岩のごとく滾り渦巻いている。

ユウ、私は今この瞬間はつきりと思い知った。

好きだ。

お前を狂おしいほどに愛している。

ユウ！

己の身を焦がすほどの熱く激しい想いが全身から迸った。

突如、周囲の光を奪い取るようにして空間が裂ける。

私達とゴルゴン達の頭上に黒々と燃える魔法陣が現れた。

その魔法陣には見覚えがある。いや、忘れようにも忘れる事が出来ないほどに圧倒的な存在感を見せつけた、あの漆黒の魔法陣だった。突然の事態に私は驚愕し眼をみはった。

今の私は結界を維持する事に全力を尽くしていて、新たな召喚を行える余裕など何処にも無い。

ちらりと周りを窺うが、誰も新たに召喚を行える状態では無かった。しかも、このタイミングだと？　こうも都合良く再びイレギュラーが起こるなど考えられない。では、あれは一体何だ？

私達は緊張を漲らせながら固唾を飲んで見守った。

魔法陣は回転速度を上げ勢いを増して展開していく。中心に虹色の輝きが生まれ、瞬く間に人の形へと変化した。虹色の輝きを覆い隠すかのように魔法陣は音を立てて幾重にも重なり合いながら姿を変える。

ほんの一瞬。

わずか心臓が二拍打つ間に魔法陣の隙間から見た、その姿は――。

ユウ！

まさか！ 本当にユウなのか？
ほんのわずかな間に見えたその姿は見間違える筈が無い愛しい者の姿だった。

巨大な球体となった漆黒の魔法陣が完成すると中から闇を退けるように虹色に輝く女が出現した。

第27話 想い（後書き）

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第28話 正体（前書き）

h22. 11/28 改稿しました。

第28話 正体

女はさやさやと揺らめく髪をたなびかせ、輝く衣をその身に纏いて漆黒の魔法陣より現れた。

眩しいほどの虹色の輝きを纏うその姿は光に遮られ良く見えない。しかし、圧倒的なまでの存在感で、女は瞬時にその場を支配した。

周りで聞こえている雑音が遠くなり、私は暗闇に包まれた。

ユウの意識が深く沈むと共に、漆黒の魔法陣が現れる。魔法陣は虹色の光を放ち、ユウをその場から連れ去った。後に残されたのは、人の気配がかき消えて静寂に包まれた部屋だけだった。

真っ暗で何も見えない。何かの音だけが、一定のリズムで聞こえてくる。トクリトクリと確かな音が心地よく、闇が温かく私を包む。ぼつりと虹色の光が私の奥底に灯った。小さな光は徐々に強く大きく光を放ち、煌々と暗闇を虹色に染める。私を飲み込むほどに膨れ上がった輝きは、今まで存在している事すら知らなかった私の一部。

やがて空間をも埋め尽くした虹色の輝きに私は染まった。けれど、光はその大きさに反して私を飲み込むような事は無く、私にしつくり馴染んでぴたりと重なった。まるで、今までずっと一緒だったかのように。

温かい。頭のとっぺんから足の爪先まで身体の隅々に優しさと強さが満ちる。

ぐっと思考が深まって、理解力が増す。今までに知り得るはずのない知識が泉のように湧いてくる。

半月が移ろい満月に変わるように、どこか欠けている私の一部が重なり合って全身に私という存在が満ちる。生命力が私の奥から星の輝きのように爆発した。

私は芳しい花の香りに包まれて、頭上に見える景色に向かって彗星の如く一気に浮上した。

私は、今、覚醒した。閉ざしていた瞳を静かに開く。

そこは、深い闇を思わせる森の中だった。むっとする緑の香りと鉄錆のような生臭い血臭。そうか、私はこの場に転移したんだ。

視界に入るヴァルサスの姿。その姿は半ば石化し上半身はほとんど灰色になっている。

ヴァルサスの表情は今までに見た事が無いほど陰しく、顔が歪んでいた。その顔色は血の気が無く、紙のように青白い。呼吸のたび、ひゅうひゅうと喉が鳴る。全身には油汗をかいていて、髪は水を浴びたように濡れていた。そんな中で異様に光る瞳だけが鬼火のように爛々と燃えている。そこには執念ともいえる強い意志が宿っていた。

その姿に私の心臓は驚掴みにされた。重い圧力が心臓を握り潰そうとする。胸がぎゅっと引き絞られた。

ヴァルサスは死の淵に立っている。生前に見たつらい病氣と闘う患者の姿と重なり合う。

ヴァルサスは今、気力だけだ。それだけで立っている。

死の影が彼にねっとり纏わりついている。彼の喉元には死神の

鎌がひたりと当てられているよう。

ヴァルサスが死んでしまう！怖い、ヴァルサスがなくなってしまう！

恐怖が私を付き落とす。彼が存在しないこの世界に、私の居場所など何処にも無い。全身の毛がぞわりと逆立った。

周りを見ると、レオンの姿が目に入った。レオンは左腕が石化している。身体のバランスが取れないのか、剣を支えにしようやく立っている。レオンが呼吸をするとゼイゼイと音を立てた。その土気色の顔を覆う表情は怖いほどの殺意と苦痛に満ちている。

カイルの石になっている姿が見えた。他の石化した騎士達と一緒に身じろぎひとつしない。石像達の表情は苦痛と恐怖に歪んでいた。満身創痍のエディルがいる。騎士達は皆余裕の無い表情をして、私の視界に映った。

油汗をかき、余裕の無い鬼気迫る形相。それは、私にとって馴染みのあるものだった。

かつて病床にあった私自身の顔がそうだったから。私は癌のもたらす全身を蝕む強烈な痛みにも何度か悲鳴を上げた。麻薬の力を借りなければ耐える事が出来なくて、正気を無くして獣のように叫び声を上げた。

皆の姿と過去の記憶が重なった。その、かつての私の表情が目の前にある。

癒したい。

苦痛を取り去って、皆に笑顔を与えたい。

心の底から想いが迸った。

ヴァルサスやレオン達を追い詰め、苦境に立たせている石化の呪い。

私は確かに感じる見えない力を右手に掴み、勢い良く力任せに振

り千切った。今の私にとって、ゴルゴンの力は手応えも無いほどにもろく、児戯に等しかった。千切った力は砂場の城のように崩れて消えた。

続けざまに、癒しの力をヴァルサス達に一気に放つ。体の奥から癒しの力を引きずり出すと、私の願いは力となって虹色の光へと変わる。輝きが一段と増すと、光が弾けて騎士達に降り注いだ。

ヴァルサス達は虹色の女がゴルゴンの石化能力を退けた瞬間、石化が解けた。息苦しかった呼吸が楽になり、青白かった顔色には血色が戻る。どっと血流が増し、くらりとめまいがした。身体を焼かれる様な激痛が消失し、全く動かすことの出来なかった身体が動くようになった。

騎士達の険しかった表情は、驚愕に取って代わった。

次いで虹色の輝きに全身が包まれる。温かく強さと優しさに満ちた力に包まれると、傷ついた身体がたちどころに癒されていく。つい先程まで己の死を覚悟したはずの騎士達は、奇跡を体験した。

死の淵から救い出され、恐怖から解放された騎士達は安らぎに満ちた力に包まれた。まるで、母の子宮に居るかのように。騎士達は緊迫した状況であるにも拘らず、その心地よさに恍惚の表情を浮かべた。

ユウはヴァルサス達を背中に応うように騎士達とゴルゴン達の間立ち、ゴルゴン達と対峙した。

ゴルゴンに向けて、身体の奥底から怒りの感情がふつふつと湧いてくる。騎士達全員の無事を確認した今、ユウは目の前の魔物に対して意識を集中した。

低い唸り声を上げて威嚇をするゴルゴン達とにらみ合う。視線が激しくぶつかり合って空間に火花を散らす。私の体には変化が現れ

ない。ゴルゴン達の石化能力などなんの影響もない。

私にそれは効かない。ゴルゴン達は動揺したように瞠目した。こちらに跳びかかってこようとするが、体が竦んだように動いていない。威圧されたように、じりじりと後退した。ゴルゴン達は、先程とは打って変わって必死の形相に取って変わった。

私の体は闘志に反映するように一段と輝きを増した。

「お前達がこの地にいでる事はゆるされぬ」

目の前にいる魔物は、シリウスとは違う。この存在は大地に封印された破壊と虚無、混沌の渦から生まれたものだ。この地上に存在する事は許されない。

この思考は私であって、私では無い。まるで別の存在になったように、口から紡ぐ言葉が変わる。私は己の内側から湧きあがって来る思考に身をゆだね、行動を起こす。

私は右手をすっと挙げ、円を描くようにぐりりと大きく回す。掌が熱を帯びた。私の掌の動きを追うように、虹色の魔法陣が数珠を連ねたように現れる。

魔法陣は輝きを放ち、次々と展開していく。それは、幾重もの花びらを持つ大輪の薔薇か、曼荼羅のようだった。

全ての魔法陣が眩く燃えると、大きな水晶玉ほどの光球が幾つも私の背後に出現した。

私は掲げていた右腕を、胸の高さで真一文字に振りきった。

「滅せよ」

私の言葉に光球は不思議な音を発しながら、一斉に空中を滑るように移動する。ぱっと蜘蛛の巣を張るように広がると、ゴルゴン達を瞬く間に包囲する。

それらは全て一瞬の出来事だった。ゴルゴン達はその場から動く事が出来ない。回避行動はおろか防御態勢をとる事さえ。

高出力レーザーのような光の柱がゴルゴンを襲う。光球から放たれたそれは狙い変わらずゴルゴンの体を貫いた。光に貫かれた身体には円形の穴がぽっかりと開き、向こう側の景色が覗く。肉の焦げる嫌な匂いが遅れて広がると、自分の体に風穴が開いた事を理解したゴルゴンの喉から悲鳴が上がる、その時。

次々と光が雨のように襲いかかる。光によって貫かれ、身体が消滅していく。悲鳴を上げる事さえ許されず顔は蒸発した。上半身、両腕、そして最後に両下肢。光に食い殺されたかのように、一欠片の肉片すら残さず消滅する。

目の前の光景に、他のゴルゴン達は文字どおり戦慄した。恐怖という感情に支配される。もはや、なりふり構わず背中を見せる。しかし、逃げ場などどこにも無い。無慈悲な光球に四方を包囲されている。全ての光球が冷たい光を放つと、視界に光が浸食し意識がそこで途切れた。

次々と光に喰われていく。ゴルゴン達は悲鳴を上げる間もなく消滅していった。

虹色の女は我々を瞬時に癒し、ゴルゴン達をも圧倒的な力で殲滅した。

辺りは静寂に包まれ平穏に戻る。その場が安全であることを確認すると、女はゆっくりと我々の目の前に降り立った。

ヴァルサスは警戒を解いた。しかし、ユウと思われる女が次にど

のような行動を取るのか緊張と共に見守る。自ら光を発して輝く姿からは、確認したくとも顔が伺えない。

「……」

女は何か呟いた。微かに耳に届いたその声は、小さすぎて聞き取れない。一体何と言ったのか？ その声を、その言葉を聞き取りなかった。

突如、ぐらりと女の身体が揺れた。

倒れる。そう思った時にはすでに身体が飛び出していた。力を失った体を己の腕に受け止める。受け止めた時の微かな衝撃と、確かに感じる身体の重さが女が幻では無いと伝えてきた。圧倒的なまでの存在感を放っていた女の身体は意外なほど小さく、己の腕にすっぽりと収まった。

腕の中で女の輝が薄れていき、素顔が明らかになる。

腕の中には意識を失い無防備な顔を晒している、大人びたユウの姿があった。

ユウの体は骨がないように軟らかく、身体は弾力をもっていた。ユウから薫る、花の香りに包まれる。

私は頭を殴られような気がした。衝撃に何も考えられない。今まで子供や未成熟な少女だと心のどこかで思っていたユウが、成熟した美しい女の姿をしていたからだ。まるで、ユウと似た別人であるようにすら思えた。

自分の中から乾いた音が何度も響く。何だ？ これは……。

鍵だ。心の奥底の封が上げる音だ。

心の鍵に幾つもの亀裂が入る。止まらない、収まらない。

甲高い金属の響きで碎け散る音が響いた。心を封じ込めた鍵が粉微塵になる。

奥から封じ込めていた獣が顔をちらりと覗かせる。それは、狂気を孕んだ咆哮を上げたような気がした。

もはや私の理性を押し止める物は無い。長い間閉じ込めていた感情はドロドロと濁音を響かせ渦を巻いている。

私は自分が他人よりも明らかに執着心が強い事を知っている。それは異常なほどに。

過去の自分が甦った。もう二度と、繰り返すまいと戒めた自分を。しかし、それも無意味だ。もはや、この感情は止まらない。

黒い程に濃い色の感情が胸の内にじわじわと広がっていく。

気が付くと、隣にレオンが立っていた。一体いつからそこに居たのか？ ユウにばかりに気を取られていて、まるで気付かなかった。レオンは聴力が優れている。それは、レオンが獣族の血を半分受け継いでいるからだ。

先程のユウの呟きは、レオンには聞こえたのだろうか？ 一体何と言ったのか聞き出したくなる。しかし、私はその感情を抑えつけた。レオンも、ユウの無防備なこの姿をしっかりとその眼に捉えている。

レオンの表情は驚愕と共に、別の深い感情が覗いていた。

———見せては不味い、嫌な予感がした。

同じだ。レオンは私と同じ感情をユウに抱いている。そんな、確信めいた考えが浮かんだ。

この、ユウの姿を誰にも見せたくない。自分の物だけにして……。そんな考えが浮かぶ。私は羽織っていたマントを片腕で外すと、ユウの体をすっぽりと覆った。覗き込まなければユウの顔は見えないようにする。身体の方は完全に覆った。

これで、ユウがああ召喚獣である事を知る者は、私とレオンを置いて他には存在しないで済むだろう。正体が周囲に知れる事で、ユ

ウに新たな危険が及ぶのを避けておきたい。いや、ただ単に独占欲に突き動かされただけなのかもしれない。レオンにすら見せたくないという、私の欲に。

私はレオンに目配せをした。レオンは先程までの感情を全て消し去った顔で頷いた。私の意図に気付いている。彼女の正体は周囲に明かさないう事を、その場で意志を統一する。

腕の中のユウが発する光は完全に消え失せた。そっとユウを窺うと、成熟した女性の姿から元の少女の姿へと戻っている。

しかし、もう遅い。

私は心の中で呟いた。もはや、未成熟の少女として見る事など無いだろう。

ヴァルサスはユウを掌中の珠のように胸に抱き、騎士達と共に森を出ると騎獣に乗って王都へと帰還した。

第28話 正体（後書き）

今回も読んで下さいまして、ありがとうございました。

第29話 胸中（前書き）

今回はレオン視点です。

第29話 胸中

レオンは今、王城内の長い廊下を脇目も振らず歩いていた。美しい庭園の傍を通り過ぎるが、その鮮やかな色彩もレオンの視界には入らない。ひたすらヴァルサス殿下の居住する一角に向けて早足で進む。目指す先はユウの部屋だ。

途中、何人か見知った顔とすれ違ったが、挨拶もそこそこに先を急いだ。

日差しが眩しく眼を刺した。少し眼をすがめながら、レオンはユウの部屋へと向かう。

部屋の前で立ち止まり深呼吸をする。大きく息を吐き出して、揺れる気持ちを静めてから目の前の扉をノックした。扉が硬質な音をたてると中から侍女のフランが現れた。フランはレオンを認めると、丁寧な態度で挨拶を述べた。

「これはレオン様。今日はどのような御用件で、こちらにお越しいただいたのでしょうか？ 申し訳ないのですが、ユウでしたら昨日から寝込んでおりまして。今、クリス先生に診ていただいている所なのです」

「知っている。だから見舞いに来た。悪いが少しの間、都合が良くなるまでここで待たせてほしいのだが。ユウの具合が心配ではないか？」

「レオン様、けれど……」

奥から微かな声が耳に届く。それはヴァルサス殿下のものだった。ユウの傍には殿下もいらしてたのか。

フランはその声を聞いて、少しお待ち下さいとレオンに言葉を残して部屋へと消えた。

再び扉が開く。先程より、わずかな時間でレオンは部屋の中へと招かれた。

ヴァルサス殿下から入室の許可が出たようだ。

「失礼します」

部屋の中に入るとベットに埋もれるように横たわるユウの姿が目に入った。白いシートに黒髪が鮮やかに映えている。血色の良い頬と花びらのような唇が、ユウを穏やかに眠っているかに見せた。ベットの傍にはヴァルサス殿下とクリスの姿がある。二人はユウの状態について会話中だった。レオンはその場の邪魔にならないよう脇で様子を窺っていると、ヴァルサス殿下がちらりとこちらを見た。レオンはヴァルサス殿下に向けて頭を下げ、静かに礼をした。

クリスの診察はこれで終わったのか、ごそごと大きなカバンに荷物をしまいつつ、ヴァルサス殿下と話をしている。いかにもクリスらしい行動だった。

クリスか。確かに彼女なら今までユウの事を見てくれていたし、信頼もおける人間だ。逆に言えば、彼女以外の医者など思い浮かばなかった。

昨日の事がレオンの脳裏に甦った。

ユウを抱きかかえたヴァルサス殿下はハクオウに騎乗して、我々より一足早く王城へと帰還していた。

ユウは無事なのだろうか？ 様子が知りたい。

レオンはもう一度、マントに包まれているユウの姿を見たかった。しかし、黒騎士達を放っておく訳もいかず、全員を無事王城に帰還させ報告を済ませて事後処理を終えた頃には夜半を過ぎていた。レオンはすぐにでもユウに会いたかったが、さすがに非常識な時間だ。レオンは疲れているはずの身体を休めるために、その時は自分の

部屋へと戻った。騒ぎ立てる自分の心を持て余しながら。

……半信半疑な思いと現実を受け止めようとする気持ちがない交ぜになる。

あの、死にかけていた自分の命を救ってくれた召喚獣がユウだったとは。しかも、一度ならず、二度までも。

召喚獣。ユウは人間では無いのだろうか？　しかし、ユウは自分達と変わらないように思えた。唯一、混血児としても成長速度が若干速いくらいだ。

では、召喚獣とは一体何だ？

調べたところで詳しい事は何も分からない。召喚獣自体が不明瞭で、分かっている事が多すぎる。

召喚とは、自分の魔力と引き換えに別次元の存在を呼び出す事だ。召喚士の魔力をもって、この世で存在できるようその姿をひととき形成する。その代わりに召喚獣の力の一部を借りるものだ。存在自体が強い召喚獣ほど呼び出しと形成に魔力を必要とする。そして、召喚獣は長時間この世には存在できない。それはこの世の存在では無い為らしい。

しかし、ユウは違う。ユウはここで、レオン達と共に食べて笑って泣き、生活している。

あれは、ユウ自身の能力なのだろうか？

あの、とてつもない力が。ユウは混血児でなく純粋な魔族なのか？　しかし、魔族でさえあれ程の癒しの力を持ち得るのだろうか？

そんな話は聞いた事もない。

思考がぷつりと途切れた。クリスが診察の結果を言い始めたからだ。診察の結果はどうだったのだ。ユウの具合は？　結果が気になりクリスの言葉を一言も聞き洩らさまいとする。

「ユウは大丈夫です。どこにも異常は見られないし、状態も安定し

ている。ただの疲労でしような。少し休めばすぐ元気になりますよ」
「そうか、良かった」

ヴァルサス殿下が心からほっとしたような声を零した。
レオンも気付かない内に入っていた体の力が抜けていく。安堵の息が漏れた。

「ああ、眼が覚めたら体力の付く物でも食べさせてやってください。それでは私はこの辺で失礼しますよ。他にも患者を待たせているもんでね」

「クリス、感謝するぞ」

ヴァルサス殿下とレオンはクリスがその場を立ち去るのを見守った。腕に持った、大きなカバンをガチャガチャいわせながらクリスは姿を消す。

「ヴァルサス殿下、見舞いをお許しいただきありがとうございます」
「レオン、こちらこそユウに代わって礼を言うぞ。それと、昨日は後の事をお前に全て任せてしまったな」

そう言った後、ヴァルサス殿下はフランに席を外すよう言葉をかけた。レオンはフランが姿を消すのを確認してから返事を返す。

「いえ、かまいません。それに、礼などむしろ俺の方がユウに言わねばなりません。何と礼を言っているのやら分からないくらいです」
「そうだな、私もだ。一体何人の人間がユウによって救われたのか。感謝してもしきれない。しかし、ユウは不思議な存在だな。彼女について、私は何も分かっていない」

「ええ。一体何者なのでしょう？」

「ああ、何も分からない。本人に聞くしかないな。ただ、最終的に

は彼女は彼女だ。それ以外の何者でもない」

「もちろんです」

「……クリスにはいずれ、ユウの事を話そうと思っている。やはり、いざという時に協力してもらえる信頼のおける人間が必要だ。たとえば、ユウがどんなに凄い力を使えようとも人は完璧じゃない。今のようにな」

「はい、殿下のおっしゃるとおりです」

レオンはユウの様子を窺った。ユウは傍目には穏やかに眠っているように見える。少しだけ開いた花びらのような唇は少女と娘の狭間で揺れる特有の色気を醸し出し、官能的にすら思えた。

閉じられた睫毛の落とす影。微かに上下する胸。眠っているユウはとても小さく繊細だった。

それは、確かにレオンの知っているユウだった。召喚獣ではなく。

「殿下、ユウの状態が落ちついているのが分かったので、今日はこの辺にしておきます。これ以上邪魔してもいけないでしょうし、ユウの無事な姿も見れましたので、また明日伺うことにします」

「ああ。ユウが目覚めたらすぐにでも連絡しよう」

「ありがとうございます、殿下。では、失礼します」

部屋を出るときにちらりと見えた、ヴァルサス殿下のユウを見つめる表情は穏やかさの中にどこか熱に浮かされたような複雑なものだった。

レオンは自分の部屋にいつの間にか戻っていた。

ユウの部屋を出た後、どうやって戻ったのか覚えていない。

気が付くと、机の上に置いてある女神像を手を取っていた。この、掌くらいの女神像は木彫りの簡素なものだった。レオンが幼い子供の時より幾度となくこの手で触ってきたので、つるりと光沢を帯び

ている。

その穏やかな女神の表情とユウの顔が重なった。

どくりと心臓が大きな音を立て、きゅっと甘い響きをもたらす。思わず、胸の上に右手の拳を押し当てた。

レオンの伏せられた瞼の奥に虹色の輝きが広がった。

レオンの命を救ってくれた虹色の女。皆で魔物に襲われ死にかけていた、レオンを癒した女。

見えなくなったはずの眼力がぼんやりと回復していく時に見えた、あの時。

女神か天の身使いかと思った。

巨大な魔物が岩を襲撃したあの日。

かつてこれ程までに強い魔物など、存在しただろうか？ 自分も

部下の騎士達も、あのヴァルサス殿下でさえ歯が立たない。

突如、牙を？く風圧にレオンの体は吹き飛ばされる。無残にも自分の両足が千切れる音が聴こえた。衝撃は後から体を電撃のように襲い、一瞬で意識が遠のいた。大量の血液が命と共に体から流れ出ていく。

自分は終焉を迎えている。

このまま死ぬのか？

嫌だ、まだ死にたくない。誰か助けてくれ！

ここへ来て救いを！ 空虚で満たされることのないまま死にたくない！

薄れゆく意識の中でレオンは声の限りに叫んだ。

レオンは必死に手を伸ばした。掴まる物さえあれば、何でもいい。実際のところ、レオンはピクリとも身体を動かす事など出来はしなかったのだが。

かすれていく景色が闇へと変わる。暗闇の中、不意に温かい光が

ぽつと灯った。その光が何なのか、考える事さえ出来ず咄嗟にしみ付く。レオンは必死だった。この光ならば、自分を救ってくれるような気がした。

しがみ付いた光はレオンを拒絶する事無く受け入れてくれた。優しく、温かくレオンを包み込む。

穏やかな温かさに満たされる。

初めてだ。生まれて初めて、体だけでなく心が満たされた。この光は空虚な自分を受け入れてくれる。レオンは居場所ができたような気がした。

……この輝きに包まれているのなら、このまま死んでもかまわない。そうだ、ずっとこのままで。

全身を貫く痛みがじわじわと引いていく。感覚が麻痺しはじめていた。

突如、沈んで行く体を引き上げられたかのように急激に力が漲って、重く鉛のような身体が軽くなった。一体何が起きているのだろうか？ レオンは眼を開けた。動かす事ができなかった身体は実にあつけなく動く。

目の前に虹色の女がいた。女は光り輝いていたが、レオンにはうつすらと顔が見えた気がした。

その顔は、慈愛に満ちた女神像に似ていた。

レオンは女に向けて咄嗟に手を伸ばし、この腕に捉えようとした。今度はレオンの思うように動く。しかし、レオンを包んだ虹色の光は女と共にかき消えた。

会いたい、もう一度。心の底から切望した。

だが、どうすれば逢える？

ユウを初めて見た時、何故か女神像が重なった。それから、ユウがいる時は不思議と気持ちりが穏やかになっていた。気が付くと、ユウの姿を探している自分がある。

こじつけのように手土産なんか用意して、ただ会って喜ぶ顔が見たかった。ユウという存在に引き寄せられる自分がいる。ユウはまるで闇の中に灯る光のようだ。レオンはその灯にふらふらと惹かれる虫のようだった。

あの虹色の女はユウだった。手の届かぬ存在しない幻では無く。

……あの輝きを今度こそ、この腕の中に。
必ず。

第29話 胸中 (後書き)

今回も読んでくださいまして、ありがとうございます。

第30話 信頼

薄ぼんやりと青白い光に部屋が染まっていく。光は徐々に明るくなり、静寂に包まれていた部屋は、暗闇から日が昇る前の白々とした青さを秘めた光へと染まっていく。

眼が覚めた時見えたのは、自分の部屋の見慣れた天井だった。

ぼんやりとした思考の中、違和感を感じてごろりと寝がえりを打った途端、視界に入ったのは鋼色の髪だった。

椅子に座って長い脚を緩く組み、腕組みしたまま俯いているヴァルサスの姿があった。

私は驚いて身体を起こした。ベットが軟らかく揺れて、私の身体を受け止める。私はきよろきよろと落ちつきなく部屋の中を見渡した。

一体何がどうなっているんだろう？

いつの間に自分の部屋に戻ったの？ 確か、あの薄暗い森の中でヴァルサス達と共にいたはずなのに……。

一瞬の内に、まどろんでいた私の頭は眠気が吹き飛んでいた。

椅子に座ったまま、器用に眠っているヴァルサスの姿をじっと見つめる。

記憶がぶつとりと途切れていて、状況が分からない。初めてヴァルサスの部屋で目覚めた時のようだった。

椅子に座っているヴァルサスは、肌寒い中何も掛けずに眠っている。昼と夜では気温差のあるこの地では、日が沈むとぐっと冷え込んでしまう。

このままではヴァルサスが風邪をひいてしまうかも。そっと近寄って、シーツを掛けよう。

そう思った私はベットから音をたてないよう抜け出した。シートから抜け出した素足をひんやりとした空気が撫でる。

「眼が覚めたか？ ユウ。具合はどうだ？」

突如、静寂を破るように声が聴こえた。驚いて声のした方を振り向くと、青白い部屋よりもお深い、夜空の青が私を見つめていた。暗闇の中、二つの青い瞳が浮かんでいるかのようだった。

「ひゃあ！」

私の心臓は驚きのあまり飛び上がった。ヴァルサスは一体いつから起きていたんだろう？ さっきまで眠っていると思ったのに。

「ヴァル、起きてたの？ 寝ていると思ったよ」

「ああ、ユウが起きたくらいから眼が覚めた。それよりどうだ？」

調子は

「えっ、調子？ ……特に変な所は無いよ。私、一体どうなったんだろう？」

「ユウ、君がゴルゴン達から我々を救ってくれた後、その場で気を失ったんだ。あの森での事は覚えているか？」

「……うん」

強張ってしわがれた声が私の唇から漏れた。とても自分の声とは思えない。

確かにヴァルサスは言った。

はつきりと、私が彼らを救ったと。決して聞き違いではない。

前の時は分かっているようだったのに。

あの、私であって、私では無い状態を、ヴァルサスは分かっていた。ということは、あの場にいた全員が分かったのかな？ 私であ

るという事を。

前回は子供へと変わっていたから気付かれなかったのかもしれない。でも、今回は違う。

私はヴァルサス達皆の前で堂々と姿を晒して、力を使った。あの時は必死で、自分の事など考えてもいなかった。

私は、人間としてはどう思われただろう。あんな風に力を使っている人などこの世界に来て以来見た事などない。

普通の人間とは違うんじゃないの？ 成長にしても、力にしても。とても異常な状態なのでは？ 異端、その言葉が脳裏に浮かんだ。

ヴァルサスは私の事をどう思ったのだろうか？

ひやりと冷たい空気が身体を包んだ。ぶるりと身体の芯から震えがきて、止まらなくなった。

どうしよう。

とてつもなく怖くなった。ヴァルサスから否定や拒絶をされたら？

私は自分の頼りない身体をかき抱いた。

私の冷たくなった手を、温かい大きな手がぎゅっと包んだ。その途端、ぐいと強い力で引かれていた。何が起こったのか、突然の事態に私の思考と身体は追いつかない。

衝撃は襲って来なかった。私の身体は広い胸に優しく受け止められ、気が付くと私は強引にヴァルサスに抱きしめられていた。

「震えているな、ユウ。どうした？ 何を考えている？」

頭のとっぺんからヴァルサスの声が降ってきた。優しい、労わりに満ちた少し低めの声。

思わず、顔を上げると青い瞳と視線がぶつかった。真摯に私を案じる光が灯っているその瞳は、再び家族の眼差しと重なった。

気が付くと、私は自分の思いを素直に口に出していた。

「私みたいに成長したり、ゴルゴンを退治した時のように力を使ったりする事ってあるのかな？」

これ以上は聞けなかった。

けれど、ヴァルサスには私の思いが伝わったようだった。

ヴァルサスは私の俯きそうになる顔を捕らえると、顎をくいを持ち上げた。青い瞳が私を覗き込んでいる。大きな手は私の頬をゆるゆると撫で、私の強張った気持ちをゆっくりと解していく。

「ユウ、君にどんな事があるうとも、これだけは確かだ。ユウはユウだ。それ以外の何者でもなく、根本的に私の知っているユウである事に変わりはない」

「……………」

私は口が効けなくなった。言葉が出てこない。

視界が歪んでヴァルサスの顔がぼやけた。いつの間にか、涙が頬を濡らしていた。

ヴァルサスは私の事をそのまま受け入れてくれる。

私が再び俯こうとした時、ヴァルサスの手がそれを阻んだ。私の目尻に微かに吐息がかかる。温かくて弾力のある唇が、そっと目尻に触れた。反対側にも。

ヴァルサスは唇で私の涙をそっと吸った。

「甘いな」

吃驚して私の涙は止まってしまった。次に羞恥で何も考えられなくなった。身体が熱くなる。

「確かに、普通の人間にはあれ程の力はない。けれど、それが何だ

というのだ。少し違うくらいで私が動揺するとも思ったのか？

ユウへの気持ちが変わるとでも？　ユウ、私を信賴してほしい。私が君を信じているように」

「うん。ヴァル、ごめんなさい。……それに、ありがとう」

「……ん。それは、私の言葉だ。ユウに命を救ってもらったのだから。ユウには感謝しても足りないくらいだ」

ヴァルサスはほんのり目尻が赤くなった。突然、ぎゅっと抱きしめられヴァルサスの胸に顔が押し付けられる。私からは彼の顔が見えなくなった。ヴァルサスの、少し速めの鼓動が耳に心地よく伝わってくる。

「あの時、ユウだと解ったのは、私とレオンだけだ。他の者には見えていない」

「見えていない？」

「そうだ。あの時ユウは、光り輝いて姿がぼんやりとしか解らなかったからだ。ユウが気を失った後光は消えたが、他の者には見えないうようにしてここまで運んできた」

そうだったんだ。私の気持ちは少し落ち着いてきた。ヴァルサスの心遣いに感謝する。けれど、レオンはどう思っただろう？　私の心は絡まってしまった糸のように乱れた。けれど、ヴァルサスが私を受け入れてくれた事が、私に勇気をくれた。

ヴァルサスに全てを話そう。彼が私を信じてくれているように、私も今まで以上に信賴しよう。

ヴァルサスの身体を少し押して、隙間を作ると私は大きく息を吸った。冷たい空気が肺に入り込んで、身体を冷やす。

私が再び顔を上げると、ヴァルサスの瞳をじっと見つめた。心臓の音が煩く響く。私は腹に力を込めると口を開いた。

「ヴァル、私ね、この世界の人間じゃなかったの」

ぽつりと、漏れた言葉は青白い光から黄みを帯びた白い光で明るくなって行く部屋へと落ちた。

第30話 信頼（後書き）

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第31話 打ち明けた過去

「ヴァル、私ね、この世界の人間じゃなかったの」

私の言葉は夜明けの光が差し込む部屋の中に、重い石ころのように鈍く落ちた。

静寂に包まれていた部屋の空気は私の言葉で破れてしまったように思える。じっと立ったまま話をしている私とヴァルサスの間には、手を伸ばせば触れるくらいのほんの少しの距離があった。

手を伸ばせば届く距離、けれどもそれは私にとって、とても遠くに感じられた。

「ユウ？」

ヴァルサスが微かに眉をひそめて私を窺った。

その長身を少し屈め、私の言葉を聞き洩らさまいとするように、身を乗り出して私を見つめた。

ヴァルサスの深い青の瞳が私を鋭く捉え、私の心は怖じ気づきそうになる。

私は再び大きく息を吸い込むと、からからに乾いてしまった唇から言葉を紡いだ。

「ヴァル、信じられないような話だけど、疑わないで聞いてくれる？」

「……ああ」

白い朝の光は私とヴァルサスをも飲み込んで、寒々とした空気が私達を包んだ。

ヴァルサスは温かい。まるで、私をすっぽりと包んでくれる毛布のように。

彼の温もりが、私に自分を語る勇気をくれた。

けれども、その温かさを感じる事ができるのもこれで最後かもしれない。

私はヴァルサスに拒絶されるかもしれないという事を、しっかりと心の中で覚悟した。

「私、この世界とは違う別の似たような世界の人間だった。私は元の世界では成人していて、仕事にも就いていた。けれど、ある日突然病気に襲われたの。もう、治療を施す事もできない状態で、見つけた時には手遅れだった。病気は確実に私を蝕んで、元の世界で私は死んだの」

私は言葉を切って一呼吸おくと、ヴァルサスを窺った。

ヴァルサスは息さえ止まっているかのように、ピクリとも動かない。

「私はあの苦しい生が終わって安堵した。漸く苦痛から解放されて、私という鎖から家族を解放できたから。死んだ私の意識はどこともつかない白い空間で漂って、流されるままに身を任せていたの。その時、突然誰かの声が聴こえた。“助けてくれ、我らに救いを”って。その直後、私の意識は物凄い力に引っ張られて、気が付いたらあの砦にいたの。砦が破壊されて、瀕死の皆がいる場所に」

沈黙が部屋に重く漂って、何の音も生じない。風の音も、鳥の囀りでさえ聞こえてこなかった。

ヴァルサスは瞬きもせず、身じろぎ一つしなかった。

私達はその場に立ちつくしたまま、二人の影だけが床の上に浮かび上がって行く。

ごくりと唾を飲み込んで喘ぐように息を吸うと、冷えた空気が肺に入り込んで体温を奪った。

「私は気が付くと、自分でも使った事の無い力を使っていた。どうしてそんな力が使えたのかは今も良く分からないけれど、ただ、その時は皆の苦しみを取り除いてあげたい、その一心だけだった。私も苦しんだから皆の辛さが余計に分かったの」

ただ、沈黙のみが私の話を促した。

「皆を癒した後、私は何かに引き寄せられるように移動したの。すると、目の前にヴァルが倒れていた。私はヴァルの輝く瞳をもう一度見たくて、治れば良いと力を注いだ。それから次に眼が覚めた時には、子供の姿になっていた」

私は話を終えると口をつぐんだ。

今の話を聞いてヴァルサスはどう思っただろう？

でも、どう思われても良いと、頭の片隅では思っていた。だって、ヴァルサスの今までの気持ちだけでも十分だと思えたし、いざとなれば、ここからそっと立ち去れば良い。

その時も、多分何とかなるよ。

私はあえて楽天的に考えた。

「……そうか、驚いたな」

私はヴァルサスの表情を窺った。彼の気持ちのほんの一欠片でも知りたくて、そして知りたくなかった。

私は近付きたいようで、これ以上近付くのが怖くて、息を殺してヴァルサスの次の言葉を待った。

「私と初めて会った時、ユウは子供の姿だったな。とても小さくて、琥珀の瞳と闇を切り取ったような黒髪が印象的な可愛い子供だった」

「えっ？」

突然の言葉に私の思考は追いつかない。彼は一体何を伝えようとしているのだろうか？

「ユウは子供の姿で私の前に現れた。私は自分の命が救われた時、命を救ってくれたのが小さな子供であった事が信じられなかった。だが、自分の命を救ってくれた目の前の小さな子供に感謝した。それは今も変わらない」

「……」

「ユウを異世界から呼び出したのは私だったのか？ 私の声に応えてくれたのか……」

ヴァルサスの瞳が深く輝いたように見えた。

いつもより低めの声でぽつりとヴァルサスが言葉を漏らすと、ぞくりとさせる何かを秘めた青の視線が、ちっほけな私を捉えたかのような気がした。

「ヴァル？」

「ユウには悪いが……この世界に来てくれた事、存在してくれた事に感謝する。私の元に現れてくれて、これ以上の喜びはない」

「……ヴァル。私の事、気持ち悪くないの？ 異世界人だし、死んでるんだよ？」

「目の前の君は生きてここにいる。温かくて、軟らかな心と身体を持って。それが私にとっての全てだ」

「でも！」

「ユウ、ここに居てくれ。頼む」

「……うん、ありがとう。私、ここに居てもいいんだ……」

止まっただけの涙が再び流れ出た。涙は熱く、間欠泉のように私の中から溢れて止まらない。私の顔は見る影もない位ぐしゃぐしゃになっていと思う。私はみっともない事になっているであろう自分の顔を両手で覆って俯いた。

しゃくり上げて泣く私の両腕を大きな手が掴んだ。ヴァルサスが私の両手をそっと外そうとしている。

私はイヤイヤと子供のように首を振って、両手を外すことを拒否した。だって、みっともない顔なんて見られたくない。

けれど、大きな手は優しい仕草で力強く、私の両手を顔から外してしまった。

駄目だ、涙が溢れて止まらない。私は眼を硬くぎゅっと閉じた。大きな、少し骨ばった両手に顔と頭を優しく撫でられ、意思に反して上向かされる。私はこれ以上顔を見られたく無くて、口を弱々しく開いた。

ヴァル、見ないで。

けれど、伝えようとした言葉は最後まで言えなかった。

私の唇を、温かい唇が塞いで言葉を奪い取ってしまったから。

第31話 打ち明けた過去（後書き）

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第32話 帰る場所

明るい日差しが部屋を包み込み、開け放たれた窓からは、微かに鳥の囀りが聞こえてくる。部屋の前には美しく整えられた庭園が広がっていて、そこで鳥達が楽しくおしゃべりをしているのだろう。

いつもと変わらない景色、空気と音。

部屋はいつもと同じ容相で私を優しく受け入れてくれる。けれども、私はそわそわとして落ちつけない。日ごろは座り心地好いソファも居心地悪く感じてしまい、何度も身じろぎをしては座り直す。窓から入ってくる風は、ざわついた人の気配を乗せて運んでくるような気がした。

私は立ち上がると、まるで何かが入ってくるのを恐れるかのように、開け放たれている窓をばたんと閉めた。

一体ヴァルサスは何を考えているの？ 私の事をどう思っているの？

ヴァルサスは私に掠めるようにキスをして、はっとした時には既に離れていた。

微かに温もりと軟らかな感触だけを残して。

キスされたと解ったのは、少し経った後だった。

キ・キス！

つまり、あれだよ。私の唇とヴァルサスの唇がこう、隙間なくぴたりと重なっちゃったんだよ。

かっと身体が熱を持つ。脳みそが沸騰しそう！ ぶくぶくと思考が泡立つ音が聞こえてきた。

けれども、ヴァルサスはある後何事も無かったような態度で私に接した。

動揺しているのは私だけなの？

ヴァルサスは話を再開し、私は半ば止まりかける思考のまま、流されるようにただ頷いていた。

もちろん、ショックで涙なんかはとっくの昔に止まっている。

ヴァルサスは頭が真っ白けな私に約束させた。

いわく、ヴァルサスを頼ること。隠し事をしない事。今まで通りヴァルサスの元で過ごす事。召喚状態での強大な力はできるだけ使わない事。ヴァルサスとレオン以外には正体を明かさないように気を付ける事。

ただし、通常の状態での癒しの力を使う程度ならクリス先生の指導もあるし、良しとされた。

でもね、そう言われても、自分で意識して変身する訳でも力が使える訳でもないんだけど。

私が意識して出来る事があるとすれば、たどたどしい癒しの力だけ。

けれどもその時の私は真っ白な頭で何も考えられないまま、ただひたすら頷いていた。疑問なんて、浮かぶ事すら無かった。

最後に、ヴァルサスの一言。

「ユウが成人していると知ったからには、今までとは違って子供であるとは思わないが、それでもいいな？」

「……うん、分かった。私もこれからは大人として行動するように自覚します」

「ん、そんなに硬くならなくてもいいが、成人女性として見るというだけだ」

「はい」

それにしても、この世界でのキスって挨拶程度なのかしら？

出逢った頃に、父親か兄のように思っていて欲しいと言われているし、

実際兄のように思っている。

だってさ、お父さんというにはちょっと若いよね？

先程のは軽い口づけ程度だったし、あまりにもヴァルサスの態度が変わらないから、親しい間での挨拶とか親愛の表現なのかもしれない。

日本での常識とは違うけど、この世界でのキスシーンなんて見た事も聞いた事もないし、分からないよ。

私一人だけがこんなに意識してしまうなんて、恥ずかしい限りだ。なんだか私の気持ちは、ヴァルサスに振り回されているような気がする。

私も気にしないでおくとしよう。

あの後、私はレオンにも同じように話をする事に決めた。レオンも私の姿を見ているのだし、疑問に思っている事だろう。

それに、私は彼にも随分良くしてもらっているし、お世話にもなっている。

レオンにだって知る権利がある。

私は食事を済ませ、身じたくを整えると気持ちを落ちつけた。

ヴァルサスと話をして少し時間が経っているから、冷静に話が出ると思う。多分。

部屋にノックの音が響いて返事をする、ヴァルサスとレオンが入ってきた。事前にヴァルサスからレオンがお見舞いに来てくれる事を聞いていたので動揺はしない。

今日、レオンと話をする事に決めていた。もちろんヴァルサスも一緒だ。

入ってきたレオンの表情には、私を気遣って心配してくれているのがありありと浮かんでいる。ヴァルサスの方は穏やかないつもの顔。

私はソファから立ち上がって二人を部屋に招き入れた。
レオンが優しい声で、問い掛けてくる。

「ユウ、調子はもう大丈夫なのか？ 起きていて、しんどくはないのか？」

「ありがとう、レオン。もう何ともないから」
「ユウ、しんどくなったらいつでも言うんだぞ」

これはヴァルサス。私の体調だけでなく、気持ちまでも配慮してくれている。

「ありがとう、ヴァル。でも、心配いらないよ。さあ、どうぞ二人とも座って。今、お茶を淹れてもらおうから」

私は先程まで自分が座っていた、テーブルを挟んで設置してあるソファに座るよう二人に勧めた。

すると、レオンは私の目の前に、ヴァルサスは私の隣に座る事となった。

ヴァルサスが隣にいてくれる、私にとってそれがとても心強かった。

私はフランにお茶を頼んだ。

今からレオンに話をする間、フランには席を外して貰う事にしたのだ。

私はヴァルサスに説明したように、レオンにも自分の事を話した。私が異世界人で、元の世界で病死した事。こちらの世界に召喚された事。不思議と大きな力が使えた事。

レオンは私が話を終えるまで、じつと静かに聞いてくれた。

ヴァルサスも、口を挟む事もなく静かに佇んでいる。

話が終わった後もレオンは少しの間黙っていたけれど、やがてぽつりと言った。

「ユウ、俺に話してくれてありがとう。俺の事を信頼してくれて嬉しいよ。けれど、勇気がいっただろう？ 一体どれだけの勇気がこの小さな身体に詰まっているんだ？」

レオンは立ち上がると、テーブルを挟んで座る私の傍に来て、その場にそっと跪づいた。

私は驚きながら、急いでレオンの方に身体を向き直した。

一体何をするつもりなのだろう？

レオンは貴婦人にするように優雅に私の右手を取ると、その手に微かに力を籠めて、そっと唇を寄せた。

レオンの吐息と唇が、わたしの手の甲を熱く撫でる。

唇が当たったのは一瞬だったけれども、私の手は燃えるようになって、息をするのを一瞬忘れた。

レオンはまるで私以外眼に入らないとでもいうように、じっと熱の籠った眼差しで私を見た。

「君が俺を救ってくれた。一度ならず、二度までも。ありがとう、俺達の前に現れてくれて」

「レオン……」

「悪いが、元の世界に戻りたいと思ったとしても、もう遅いからな。放さないぞ、ユウ。この世界で、俺の元にいてもらうからな」

レオンは冗談めかしてそう言うと、そっと私の手を放した。

私は拒絶されなかった。それどころか、受け入れてくれたんだ。

じんと胸が熱くなった。視界が少しぼやけて眼が潤んでいるのが自分でも分かった。

良かった。

……怖かった、本当に。私は、親しい人に拒絶されるのが怖かった。

ヴァルサスが私に向けて優しく微笑んだ。その笑顔を見た途端、私の身体から緊張が取れて力が抜けた。

フランが淹れてくれたお茶を飲みながら、いつの間にかカラカラに乾いていた喉を潤した。

お茶の甘い香りが漂って、私の気持ちを解してくれる。

ヴァルサスとレオンは何やら会話をしながらお茶を楽しんでいるけれど、私はその内容が頭に入ってこなかった。

私は二人の様子を見ながら、胸の内でそっと自分に問い掛けた。

元の世界に戻りたいだろうか？

死んでしまった私にとって、元の世界には居場所は無いと思う。

もしも、あるとするならば、そこにはお墓と思い出がある位だろう。

もちろん、私の身体はとっくの昔に焼けて灰になり、小さな壺に骨だけとなって入っている事だろう。

帰る場所なんて、どこにもない。

ここ以外には。

私はレオンとヴァルサスに感謝して、今まで通り過ごす事となった。

ついでに、レオンともヴァルサスと同じように約束させられた。

「ユウ、しかしこれだけは約束するんだ。俺たちを信頼して、隠し事はなし。勝手に出て行こうなんて、思うなよ？」

それにしても二人共、私の事を良く分かっていらっしやる。

第32話 帰る場所（後書き）

今回も読んで下さいまして、ありがとうございました。

第33話 前触れ 1

どうしてこんな事になっちゃったんだろう？

私は今、城下にいる。

王城の治療院で治療に使う薬草や薬のストックが少なくなってきたので、不足する前に買い出しに来たのだ。

そのため今日の私は動きやすい上着にズボンという、男の子みたいな格好をしている。

当初の予定はクリス先生と一緒に出かける筈だったんだけど、先生の体調が今日はなんだかすぐれないからと、私のみで出かける事になった。

クリス先生大丈夫かな？

あの人が休むだなんて、めずらしい。早く良くなってくれば良いけれど。

クリス先生の昨日の様子はいつもと変わりなく働いていたし、私の面倒も見ってくれていた。

一体どうしたのだろう？

まあ、私もそろそろ王都にも慣れてきた頃だし、独りで出かけてみても何とかなるだろうと思い、一人で城下買い出しへ行こうとしたんだけど……。

城下は活気に溢れていて、大通りには沢山の人で賑わっている。

両脇にずらりと並んだ店からは客引きの威勢のいい声が飛んで来て、客の商品を値切る声がそれに続く。

私は両手をそれぞれ力強い手に引かれながら、並ぶ店や商品を眺めた。

どこからか、風に乗って香辛料の効いた甘い肉の焼ける匂いが漂ってきた。

美味しそう。

ふらりとその匂いに惹かれて歩きそうになったけど、両手を引かれているのでそのまま真っ直ぐ進んだ。

ちよっとくらい一人で気ままに楽しみたいなあ。

私は胸の内で、ぽつりと呟いた。

ふと空を見上げると、私の気分を裏切るように空はとても澄んでいて、青空に白い雲が綿飴みたいに浮かんでいた。

そんな中、私の周りだけ人がいない。否、私達だ。

皆、私達を避けるように通り過ぎて行く。

見てはならない者を見たかのように眼をそらす人、逆に興味深くじろじろと眺めて行く人など周囲の反応は様々だけど、見世物になった気分がするのは確かだった。

私の右隣には背の高い赤毛の帯剣した騎士がいる。こちらはレオンだ。

レオンは背が高い上、騎士の服装のまま出てきているので、目立つ事この上ない。

私の左隣には全身をダークグレーのフード付きマントで覆っている、いかにも怪しげな男性がいる。

フード付きのマントは完全に男性の姿を覆い隠していて、全く姿が伺えない。

この、明らかに不審者っぽい感じの方は、ヴァルサスだった。この姿も悪い意味で良く目立つ。

こういう所にアルフリード殿下と兄弟なんだな、などと感じてしまふ。

だって、変装した時のセンスがあんまり良く無いよね。というか、悪い。

そんな二人に挟まれて私は両手を二人に引かれながら、まるで囚人のように連行されているかのように歩いている。

二人とも背が高く2メートルくらい身長があった。いや、レオンなんかはヴァルサスより背が高いので、もう少しあると思う。

このウィルベリングという国の人達は皆身長が高く、男性は平均身長185センチ程度で、女性は170センチくらいある。

そんな中でも両脇の二人は周りの人達よりも頭一つ分背が高かった。

それに比べて私は160センチ程度なので平均より背が低く、二人に挟まれると子供のようだった。

脳裏に宇宙人がNASAの研究員に連行されている写真が浮かんだ。

もちろん、宇宙人とは私の事。

今の光景は異様な凸凹三人組が手を繋いで歩いているといったところだ。

もし、レオンがヴァルサスと同じような怪しい格好をしていたら、間違いなく通報されているに違いない。

かろうじて通報されていないのは、レオンが騎士の格好をしているからかも。

「ねえ、二人ともそろそろ手を放してほしいんだけど」

私は恥ずかしさと、いたたまれなさでもう何度目になる希望を口にした。

「駄目だな」

即答。一呼吸分も無かったよ、今。

レオンったら、もう少し考えてくれてもいいんじゃない？

こうなったら相手を変えて、懇願してみる事にした。

「ヴァルう〜」

「……」

無反応。こちらは軽く流された。何故だろう、心なしか逆に握っている手に力が籠ったような気がする。

「ユウ、いいか？ お嬢ちゃんなんか一人でこんな所を歩いていたら、一瞬でかどわかされるぞ。ここは治安は良いが、それでも危険な事には変わりないんだからな」

大袈裟な。

一人でいる訳じゃないし、別に手を繋がなくてもいいじゃない。

「でも、両手を繋がなくても」

ぼそぼそと、二人には聞こえない程度の小声で愚痴をこぼした。けれど、私の小声はしっかりとレオンの耳には届いたみたいだった。じろりとこちらを見たレオンの表情はちよっと笑っていたけれど、眼は真剣だった。

ダメ、絶対って感じ。

なんて地獄耳。

こんな事なら、二人とも絶対に一緒に出かけるなんて言わなかったのに。

あの時、一人で出かける事になった私が治療院でスタッフの一人と話していると、タイミング良くレオンが治療院に現れた。どうやらレオンは 크리스 先生に用事があったみたいだった。

そこで、たまたま私の買い出しを聞いたレオンは、何故か血相を

変えて付いてくると言い出したのだ。

レオンの方こそ仕事はどうなっているのだろうか？

疑問に思っただけ聞いてみると、丁度早めに切り上げた所なのだろう。なので、私に付き添ってくれる事となった。

その後ヴァルサスに一言言っただけで出かける事にした私はこれにも後悔した。

この、不審者のような格好で付き添ってくれる事になったから。ヴァルサスには、レオンと一緒に付き添ってくれるからいいと断ったんだけど、心配だとか丁度手が空いているとか、気分転換しようと思っただけ等と言うので、こちらも断り切れなかった。あの時、ヴァルサスには黙って出てきた方が良かったかも。でも、後で注意されるのも嫌だし、怒られたくないし。そういう訳で二人が付いてきたのだ。

私達は中央広場にある噴水の前まで来ると、立ち止まった。広場の周囲には背の高い建物が取り囲むように並んでいて、その中にはひと際目立つ時計台もあった。

広場には沢山の露店が並んでいて美味しそうな匂いがする。

噴水の傍には文鳥に似た小鳥達が水を飲んでいて。

白い小さな身体と可愛い口をちょこちょこ動かして水を飲んでいてのが見えたけれど、私達が噴水に近づいて行くとまるで逃げないように一斉に飛び立っていく。

噴水近くのベンチには親子連れが座っていたけれど、私達を見るとぎょっとしたように固まって、その場からそそくさと離れて行った。

私達の周りにだけ人のいない空間ができた。

気のせいかな、親子連れが遠巻きに私達を見ている気がする。

私が一体何をしていたというんだ。

失礼過ぎる。

私は不機嫌そうにじっと黙っていると、レオンが突然ヴァルサス

に話しかけた。

「殿下、お疲れになったでしょう。ユウの手は私が握っていますよ」
多分、私の様子を見てそう言ってくれたんだと思う。
でも、レオンだって放してほしい。

「レオン、その名で呼ぶな。初めに言っているだろう」

軽く違う方へ話題は流れた。

これは絶対わざと話をすり替えたのだと思う。

「ああ、失礼。ルース」

ヴァルサスは今回お忍びで出てきているので偽名を使っていた。
ヴァルサスの上と中の文字を取ってルースという理由だ。とって
も単純だけど、良くある名前なのだそう。

「ルウ？」

何だか疲れてきた私は、更に短縮して偽名を呼んだ。

もう一回、手を解放してもらえよう懇願してみようと思って呼
んだのだけれど、こちらを見たヴァルサスは無反応にじっと私を見
た。

も、もう言いたい事がばれちゃったのかな？

「あ、あのー」

「……もう一回だ、ユウ。確認したい事があるから先程のようにも
う一度呼んでくれ」

見上げたフードの中から、やけに真剣な光を灯す青い瞳が見えた。
な、何かまずかった？

「ルウ」

私をじっと見ていたヴァルサスだったけれど、少ししてふらりとよろめいた。

ヴァルサスは空いている左手で自分の顔を覆った。

フードの隙間から見えた頬は微かに赤かったように見えた。

「な、何?! 大丈夫? 気分悪くなったの? ヴァル、ごめんね、変な風に呼んじゃって。もう言わないから!」

「……大丈夫だ。ユウ、そのままでもいい。いや、むしろその呼び方のほうが良い」

そ、そうなの? 大丈夫かな? ?

じっと黙って見ていたレオンが低い声で、急にぼつりと言った。

「ユウ、ルースの心臓に悪いからそうやって呼ぶのは止めた方がいい。むしろ、きちんと呼んだ方が健全だ」

レオンの表情は普段と変わらないのだけれど、声はちょっと不機嫌そうに聞こえた。

健全って。そんなにあの呼び方に問題が?

「いや、問題無い。レオンは大袈裟だな」

「そうですか? ルースこそよろめいたりして、体力が落ちたんじやないですか?」

私の頭上は何となくぴりぴりしている気がする。

何だか変な雰囲気になってきたみたい。

私は二人に挟まれながら二人の様子を窺った。

どうしたんだろう、二人とも。

私が口を挟もうか迷った丁度その時、昼を告げる時計塔からの鐘の音が響き渡った。

高く低く、幾重にも重なって響く鐘の音色は、気まずいその場の空気を破った。

私を見下ろしたレオンははっとしたような表情をした。

「ユウ、済まなかったな。そんな顔をさせて」

私はどんな顔をしてたのだろうか？ 多分、困っているようで驚いたような、そんな変な表情だったのだろう。

「丁度昼時だ。先に食事を軽く済ませてから店まで行こう。目的の店までもう少し掛かるからな」

ヴァルサスの提案によって、近くの飲食店に入る事になった。

その時、小さな揺れを体を感じた。

思わず体の動きが止まる。

見るとヴァルサスとレオンも立ち止まっていた。

周りの人達は何事も無かったように寛いでいるように見えただけで、ヴァルサスとレオンは少し緊張しているように感じた。

この地震は、本日二度目のものだった。

第33話 前触れ 1 (後書き)

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第33話 前触れ 2

漸く私の両手は解放された。

子供の様に手を繋いで歩くのはどうしても勘弁してほしかったので、食事を済ませた後に何とか二人を説得したのだ。

二人にはどう説得したかというと、子供扱いをされるのは正直辛しいし、二人が付き添ってくれているのだから手を繋がなくても安全だとか、心から信頼しているなどと言ったのだ。

レオンもヴァルスも持ち上げられているのは分かっているとは思うけれど、実際に私がそう思っているのも事実なので、私の気持ちも伝わったのだと思う。

私達は今、目当ての薬屋に来ている。

薬草とか薬を扱うお店について、私はこじんまりとして薄暗い場所かと想像していたけれど、予想していたよりもずっと広くて奥行きのある明るい建物だった。

天井まである棚には沢山の種類の薬草や奇妙な薬が山のようにずらりと並べてあって、小さな文字で大小のさまざまな瓶にラベルが貼ってある。

さらに、遮光のいる品物や冷所保存する物は奥にある薄暗い部屋に並べてあった。

他にも様々なサイズの包帯やガーゼ、色んな種類の消毒液と消毒用の綿球や持ち運びできる程度の医療器具のような物まであって、意外と元の世界とこちらの世界の医療状態が似ていると思えた。

そう、この世界と元の世界は共通点や類似点が多いのだ。

人間や動植物、その他の生物の身体つきや形だって、元の世界の物と類似している。

もちろん、ドラゴンや魔物、魔力とか他にも違う物も多々あるの

だけれど。

私がこの世界の食事を普通に食べれて栄養摂取ができるのも、呼吸が普通にできるのも類似した世界だからだと思っている。

つまり、元の世界と同じか、又は似たような栄養成分が体を構成・維持することで今の私の体は健全な状態を保ち、私の呼吸が平常でいられるのも大気中に含まれる気体とその割合が同じであるという事なのだろう。

もしくは私の体がこの世界に合わせて変化をしていたのか、順応しているのかもしれない。なにしろ、自分の体なのに自分の事は全く分らないのだから。

私は自分の事から再び店の中へと意識を戻した。

この店内には様々な薬草から発せられている独特な匂いが漂っている。

品の中には王宮の治療院で見かけない様な物もあり、私は珍しさのあまり店の中をじろじろと見渡した。

そんな、考え事をしながら店内を眺めている私を見ていたレオンは、面白そうに笑いながら言った。

「ユウ、そんなに珍しいものばかりだったか？ 王宮の治療院にもこのこと同じものは置いてあるだろ？ ユウ、さっきからぽかんと口が空いてるぞ」

「えっ！」

思わず両手で口を覆ったけれど、その時口はちゃんと閉じていた事に気が付いた。

「もうっ！ レオン、初めから開けてなんか無いじゃない」

「ははは！ 初めから気が付けよ」

ヴァルサスまでもがクスリと小さな音をたてて笑ったのが聞こえたので、私は余計に恥ずかしくて顔が熱くなった。

この二人に私はいつも、赤くなったり青くなったりさせられる。もう、そんな風にかかわらないでほしい。

このままぼんやりしていてはまたレオンにからかわれそうなので、これ以上面白がられないよう私はさっさと注文を済ませる事にした。薬屋のカウンターに立った店員は中年の穏やかな雰囲気をした女性だった。

私の想像では童話に出てくる魔法使いのような怪しい人物か、腰の曲がった老婆をイメージしていたのだけれど、出てきた店員は意外にも優しい女性だった。

店員は注文した希望の薬草と薬、素材を手早く揃えてくれた。

それにしても、ヴァルサスもレオンもこの店を知っているとは意外だった。

もしかするとこの店が有名なのか、又は以前に二人とも利用した事があるのだろうか？

それとも両方なのかもしれない。

私は店員が揃えてくれた商品に間違いがない事をそれぞれ確認し、大小の手提げ袋に入れてもらうと、クリス先生から預かったお金を懐から出して支払いを済ませた。

「ありがとうございます」

店員の声を聞きながら私達は店を出た。

予想外に愛想の良い店員の目に、私達ちぐはぐトリオはかなり奇妙に映った事だろう。

もちろん、そんな態度は全く表に出さなかったけれども。

大量に買い込んだ荷物は大きな袋二つとA4サイズの書類が入る

くらいの袋一つになったので、男性二人が大きな袋をそれぞれ持ってくれた。

こういう時は、男性が付き添ってくれると本当に有り難い。

一人で運ぼうと思ったら重くて大変だっただろう。

私は二人にお礼を言おうと、申し訳ないのでせめて小さい袋は自分で持つと伝えた。

「ユウ、荷物はそんなに重く無いからそれも持つぞ？」

「ううん、これくらいは自分で持つよ」

男性二人はそれぞれ片手に荷物を持って、相変わらず私を真ん中に三人並んで歩く。

この並びは先程と同じではないか。

両手を繋がれないよう対策として、私は袋を両手に抱えて歩く事にした。

これならば、もしも二人の気が変わって手を再び繋ごうと思って、私の両手は無事だろう。

しばらく歩くと再び時計塔が見えてきた。

辿りついた中央広場は相変わらずの人の多さだった。

後は真っ直ぐ帰るだけ、その時。

噴水の小鳥達が一斉に羽音をたてて飛び立ったと思った瞬間、再び地震が私達を襲った。

今回は先程よりずっと大きくて、足元がぐらぐらと揺れる。

激しい揺れで体が突き上げられ、思わず手に持った荷物が落ちそうになった。

視界が激しく上下に揺れる。

混乱した人々の悲鳴が広場のあちこちで上がり、露店の商品が地面に落ちて次々に派手な音をたて、立っていられなくなった人達の転倒する音がそれに続いた。

足元の石畳が液状になってぐにやりと曲がり、鋭い音を発しながら石畳に亀裂が走る。

私は体のバランスを崩して、前のめりに転げそうになった。両手が荷物で塞がっているので思わず手が出ない。

「ああっ！」

「ユウっ！」

思いつきり転倒して自分の体に痛みが来る事を覚悟したけれど、時間が経っても地面は迫ってこず衝撃も襲ってこなかった。

揺れが収まって気が付くと、いつの間にか力強い腕にすっぽりと抱きとめられていた。

ダークグレーのマントに包まれた広い胸と規則正しい心臓の音が私を包む。

ヴァルサスが片膝を地面に付いた状態で私を抱きかかえてくれていた。

「大丈夫か？ ユウ」

「あ、ありがとう、ヴァル」

地震に動転し、いつの間にか素早く助けてもらっていた事に驚愕した私は、思わず偽名を使う事を忘れてヴァルサスの名を呼んだ。

私を覗きこむようにヴァルサスが身を屈めていた為、フードに隠されていたヴァルサスの表情が見えた。

フードから見えたヴァルサスの顔はいつもと違って無表情で、どこことなく緊張を纏っている。

私を抱きかかえたまま、ヴァルサスは素早く立ち上がると周りを鋭く窺った。

レオンもこちらをちらりと見た後、辺りを窺っているのだけれど、その表情はいつもの楽しい余裕のある表情では無くいつになく真

剣なものだった。

「ルース」

「ああ、あの気配だ。気を抜くな、レオン」

その時、ゾクリと背筋が寒くなるような悪寒が体を這い上がった。
何？　これは。

突如、水が勢い良く噴射するが如く空気を引き裂く音と共に、中央広場のあちこちから石畳に走った亀裂を縫うように地面から黒い霧が次々と噴き出した。

視界の至る所に、私の身長を上回る程の黒い霧が噴き出ている。

「！！」

「来る！」

「ユウ、私にしっかり掴るんだ。レオン、すぐに戻る」

「はっ！　ルース、ユウを頼みました」

レオンは返事を返しつつ、背中の大剣を抜刀した。
抜刀により金属音が冷たくその場に響き渡るのを、私は息を飲んで見ていた。

突如、体が重力に反してグイッと引かれたように感じたかと思うと、ヴァルサスの右腕に抱かれたまま、私の体は宙を舞っていた。

眼下に人の頭や露店の屋根、噴水が見える。

人の身長より遙か上の空中に私達はいるのだ。

ぎゃああ！　ちよっと待って、どうなってんの？！　ちゅ、宙を舞ってない？

頬に、びゅうびゅうと空気が切れては風となって強く当たるのを感じる。

私は驚愕と恐怖でヴァルサスにぎゅっとしがみ付いた。

ヴァルサスは私を抱きかかえたまま走り出し、力強く跳躍していたのだ。

気が付くと、ヴァルサスは私の他に荷物も一緒に持って宙を跳んでいた。

驚愕の跳躍力を見せたヴァルサスは素早く着地した後も、人と黒い霧を避けながら、あつという間に建物の傍まで移動する。

移動中、ちらりと見えた黒い霧の中には、かつて砦で見たグールの姿に似ている魔物が潜んでいた。

「魔物?!」

何でこんな所に突然魔物が?

ウィルベリングは国の四方に魔物の侵入を防ぐ砦があり、有色の騎士達がこの国を守っている。王都やその周辺地域となると魔物の入り込む隙は無く、今までは存在していなかった。

また、王都は巨大な外壁で囲まれていて、今まで魔物が入ってきた事も出現した事も無かった筈だった。

ヴァルサスは私を建物の中に入れ、素早く建物の中を確認した後私をそっと降ろし、荷物を置いた。

「いいか、ユウ。ここで身を潜めているんだ。私達が迎えに来るまで、決して動くんじゃないぞ」

「ヴァル! 待って! ヴァルやレオンは?!」

私に背中を向けて扉の外に出て行こうとしていたヴァルサスに慌てて声を掛けた。

ヴァルサスに置いて行かれないように、私はヴァルサスの元に駆け寄ろうとして両足に力を込めたけれど、膝に力が入らずその場へたり込んでしまった。

訝しく思っ て見てみると、自分の手足が細かく震えている。

「どうやら私は、いきなり宙を跳んでいた事で驚愕の余り腰が抜けたみたいだった。」

「ユウ、魔物を退治したら迎えにくる。それまで待っていてくれ」

ヴァルサスは私の言葉に一瞬振り返ってそう言う と、優しく微笑みを浮かべた表情をフードの隙間から覗かせて建物の外へと出て行く。

重たい音をたてて開いた扉の外からは日の光が差し込んだ。

ヴァルサスが扉を閉めていくにつれて、光も筋のように細くなっていく。

扉が完全に閉じると光も途切れ、薄暗い空間に私はひとり残された。

「ヴァル！」

私の声が虚ろに建物の中に反響した。

ヴァルサスの後を追おうと、私は大きな扉まで何とか床を這いつて扉まで辿りついた。

とたん、扉の向こうから微かに人々の悲鳴が聞こえてくる。

私は耳を澄ませて外の様子を窺うと、鼓膜に絹を裂くような悲鳴や怒号、数々の物が倒れて壊れるような物音が届いてきた。

ぞぞりと自分から血の気が引いて行く。

数々の物音を飲み込むように魔物達の咆哮が重なって響き渡ると、私の不安は膨れて弾けた。

第33話 前触れ 2 (後書き)

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第33話 前触れ 3

私は辿りついた扉の前で凍りついた。

扉の向こうから微かに聞こえる混乱した物音と魔物達の咆哮に私の体からは血の気が引き、冷たい汗がじわりと掌に滲むと気持ち悪く纏わりついた。

私はいまだ力の入らない、微かに震える己の足に酷く腹立たしさを感じると同時に、この物音を窺う事しか出来ていない状況に焦燥感が募った。

必死で私が扉の外の様子を窺っていると、背後で人の気配がした。石の床を打つ靴音が、私の耳をも硬い音が打つ。

「気分でも悪いのかい？」

はっとして振り返ると、そこには茶色の制服を着て親切そうな笑顔を浮かべた白髪の中年男性がいた。左胸には警備員と書いてある名札がぶら下がっている。

後退している前髪のない広い額は天井からの照明を反射して、ぴかりと一瞬眩しく光った。

警備員のおじさんは白い口髭を動かしながら、少し身を屈めて優しく私に尋ねてきた。

「君、大丈夫かい？ 立てるかな？」

「えっ？ あの、ちょっと一人では立てそうになくて」

そう答えると、私の両腕を掴んで腰が抜けている私を立たせてく

れた。

ぐらりと体が頼りなく揺れる。

私の足は小鹿のようにプルプル震えて一人では自分の体重を支えられず、しばらく警備員の両腕にしがみ付いて支えてもらっていたのだけれど、ほんの少し時間が経つと足の震えが止まってしつかりした。

よし、もう大丈夫。

両手で掴っていた警備員の腕を放すと自分の足がしつかりしている事を確認した。

「あの、もう大丈夫みたいです。ありがとうございました」

「おお、そうかい、それは良かった。さっきは凄い地震だったから、どこか打ったのか怪我でもしたのかと思ったよ。君と一緒にいた連れの人はどこへ行ったのかい？」

「どこにも怪我はしていません。連れは私をここに避難させてこの建物から外へ出て行っただけです。……あの、ここは？」

「避難？ さっきの地震で何かあったのかい？ ああ、ここは時計台の一階、受付カウンター前だよ」

私は改めてこの建物の中を見渡した。天井は高く、照明がゆらゆらと揺れている。銅の大きな輪っかにまあるい照明が幾つもシャンデリアのように付いていて、白い壁には飴色に光る木を使った柱が並んでいた。さらに、奥には同じ材質でできた重厚な階段があり、その手前に受付カウンターがあった。

奥の階段からは見学中だったのだろうお客が数人、ここの受付らしき女性と一緒にのんびり話しながら降りてくる。

「今、ここはさっきの地震で安全確認中なんだよ。しばらくの間、中の見学は出来ないんだ。悪いね」

警備員はのんびりと悠長に言い、まるで外の騒ぎとは無縁のように見えた。

もしかして、外で起こってる事や魔物が出た事を知らないのかもしれない。

「いいえ、私は見学ではなく、魔物が広場に出たのでここに連れが避難させてくれたんです」

警備員は面白くも無い冗談を聞いたかのように眉をひそめて笑った。

白い口髭が微かに歪む。

「魔物だって？　おいおい、何の冗談だい？　魔物なんて、この王都にいる訳がない」

「本当なんです。さっきの地震と共に突然現れたんです！」

私の言葉を全く信じてくれない様子の警備員は、やれやれとか言っ
て外人のように両手を上に向けて首を振った。

このまま説明を続けても、この様子だと魔物が出現した事を信じてもらえそうにない。

王都は今まで魔物が出現した事など無かったので、警備員は私の話を質の悪いつまらない冗談とでも思っているのだろう。

けれど、建物の外は危険である事を伝えておくべきだ。この建物の中にいる人達が魔物の危険にさらされ無いように、不用意に建物の外に出ないよう伝える必要がある。

この時計台の中には、ここにいる人以外の職員や他の見学客等もいるかもしれない。

私の言葉をまともに信じてくれない警備員に、それでも魔物が現れて建物の外は危険である事を伝え、建物の外には出ないよう他の人にも伝えるよう声を掛けた。

次に私はヴァルサスとレオンの様子を窺う為に扉の外へ出ようとした。

中央広場は、彼ら二人はどうなっているのだろう。少しでも、何かの力になれば。

先程から不安と心配で気持ちばかりが焦ってしまふ。

扉の取っ手に手を掛けようとしたその時、扉が勢い良く開くと外から人が数人転がり込むように入ってきた。

皆、必死な形相をして息を切らし、服は所々汚れている。

「た、助けて！ ま、魔物が出たのよ！」

「あれはグールだった！ 以前俺はグールを見た事があるんだ、間違いない！」

「ここに避難させてくれ！ おい、早く扉を閉めろ！ 外から開かないように鍵を掛けるんだ」

突然なだれ込んで来た人達に警備員も、受付の女性と見学客も驚いた様に茫然としている。

「今、外では魔物と騎士とマントの剣士が戦っているが、魔物の数が多いんだ！」

ヴァルサスとレオンの事だ！ グールの数が多いとは、二人とも大丈夫なの？！

「そ、それで二人は？ 騎士と剣士は無事なの？！」

「そんなの知らねえよ！ 俺達はあるところから避難してくるだけで精一杯だ。駐在の騎士達がじきに応援に来るのを待つだけだ」

私は二人が心配で外に出ようと扉に手をかけた。けれど、その手

は避難してきた人達に素早く払われる。

「何するのよ！ 開けるつもりなの？」

「私の連れがまだ外にいるの。お願い！」

「よせ、開けるんじゃない！ おい、警備員、早く鍵を閉めろ！」

私は扉の近くから奥へ追いやられてしまった。

茫然としていた警備員のおじさんは叫んだ人の剣幕に押されるように、じゃらじゃら音を立てる鍵束を持って扉に近寄ると素早く鍵を閉めた。

がしゃんと重い音を立ててあつという間に閉まった鍵は、私と建物の外にいるヴァルサスとレオンとの繋がりを断ち切るように重い音をたてた。

駄目だ、このままでは外に出れない。

私は他に入出口が無いかときよろきよろ見回すと二階に上がる階段が視界に入った。

二階に窓があるかもしれない。

私は二階目指して階段を一気に駆け上った。

一階とは異なって二階は休憩室程度のスペースしか無かった。床には赤い絨毯が敷かれていて、目指した窓の傍には椅子とテーブルが数個置いてあった。窓は割と大きく観音開きのものだった。

私は窓際に駆け寄って、窓を大きく開くと身を乗り出して外の様子を見た。

時計台は中央広場に隣接しているため、中央広場は良く見渡せる。

中央広場には、さっきまであれほど溢れていた人影が、跡形も無くなっていった。

残っているのは散乱している商品や、壊れた屋台と襲ってくる魔物と、そして中央広場の中心で戦う二人の人間の姿だけだった。

二人の周りには、うじゃうじゃとグールが群がってくる。まるで二人に吸い寄せられるように。

周囲をグールに囲まれたヴァルサスとレオンは、お互いを庇うように背中を向けあって戦っていた。

次の瞬間グール数体が固まって一斉にレオンに襲い掛かった。

レオンは自分の背丈と同じ位の大剣を猛々しく振るうと、襲い掛かったグールの上半身が吹き飛び、あるいは体が二つに折れたようになっではじけ飛んだ。

斜め下から横薙ぎに払った大剣を、勢い殺さず上段よりグールの脳天に大剣を切り降ろす。グールの体はぐしゃりと潰れ、首が胴体にめり込んだ。そのまま返す手で続けざまに閃いた大剣は獐猛な勢いで新たな獲物に襲い掛かり、腰から肩にかけて一気に両断する。

ヴァルサスは両手に日本刀のように反りのある剣を持っていて、左右から襲ってきたグールの攻撃をひらりとかわすと同時に左手の剣でグールの腕を切り飛ばし、次いで右手の剣で反対側にいたグールの首を切断した。

腕を切り飛ばされたグールは体ごとヴァルサスに突進してくる。

このまま引きずり倒される！私の脳裏に恐怖の映像がちらついた。しかし、ヴァルサスは素早く右足を踏み込み上体を沈めると両刀を交差させ、一気に左右に振り抜いた。

グールの上半身と下半身が真っ二つに分断され、遅れて血飛沫が噴水状に飛び散った。

そのまま、肉食獣の様に新たな敵の喉笛に両刀で喰らい付くと切り飛ばし、死骸を増やして行く。その動きは恐ろしい物なのに、まるで舞いを踊っているかのようで美しく見えた。無駄な動きが見当たらない。

不意に風に乗って、鉄錆のようなむせ返る血の匂いが私の元まで

届くと共に、グールの放つ咆哮が轟いた。

ヴァルサスとレオンがグールを倒しても、次々と絶え間なくグールが二人に襲いかかって行く。

襲ってくるグールの数は、数体どころでは無く二十……ううん、三十体以上いるように見えた。

私は頭を強く殴られたような衝撃を感じた。

あれでは幾ら二人が強くて、いずれは数に押されて圧倒されるかもしれない。

現に絶え間なくグールに襲われて、召喚を行う隙もないみたいだ。最悪な場面がちらりと脳裏をかすめた。

二人を助けなければ！ 早く、はやく！

私は自分の奥底から力を引き出そうとした。

お願い、もう一度あの大きな力を。

今まで意識して変身していた訳ではないけれど、二度も変身して大きな力を使う事が出来たのだ。二度出来た事なら今回だって出来る筈だ。

脳裏に、二人に約束させられた事がちらりと浮かぶ。

——出来るだけ召喚状態での強大な力は使わないように。

——ヴァルサスとレオン以外には正体を明かさないように。

丁度、ここにいるのは私一人で他に見ている人は誰もいない

私は己の力を引ずりだそうと、更に自分の体の奥底に意識の手を伸ばした。

無い。

意識の手は空を切る。

力が湧いてこない！

更に探ると微かに指先に力が触れた。

視ると、意識の手の中に在るのはほんの微かな、細い糸のような力だけ。

あの、私を飲み込むほどに力強く圧倒的な力はどこにも感じられなかった。

出てきた力は私の掌がほんの少しぼんやりと光る程度の物だけだった。

どうして？

今まではヴァルス達を助けたいと強く願った時に、力が湧いて出てきたのに。

今回だって、願いの強さは変わらない。

なのに、何故！

このままの私では、力も武器も持たない逆に襲われるだけの、自分の身すら守れない無力な人間でしかない。

どうしたらいいの？

私は愕然として、ただ窓越しに二人の様子を見ているだけだった。

番外編1 甘い香り

執務室の重厚な机の上には、今日も多くの事案や意見・要望書、報告書が厚く重ねてある。

更に朝から報告を携えては、部下の出入りが途絶えない。

ヴァルサスにとって、それはいつもの朝の風景だった。そして、相変わらずの仕事量だ。

カイルがヴァルサスへの報告と判断が必要な物だけ仕事を回してくれるのでそれでも仕事量を減らす事ができるのだが、最近ではユウが雑務から書類の整理とユウが出来る範囲で資料を用意してくれるので、仕事が今まで以上にはかどるようになっていた。

ある程度仕事に目処が付いて落ちつく、ヴァルサスの目の前にお茶がそつと置かれた。

「喉が渴いていませんか？」

にっこりと笑顔を浮かべたユウがどうぞと言いながら熱いお茶を勧めてくれた。

「ありがとう」

ヴァルサスはそう返すと、湯気を立てるお茶に口を付ける。

……うん、ユウの淹れてくれるお茶はいつも美味しいな。

発酵させた茶葉の優しい甘さと少し苦めの後味が、気付かない内に疲れていた心を解してくれる。

見ると、カイルも表情を和ませてお茶を飲んでいる。

ヴァルサスは一息ついて窓の外にちらりと眼をやると、黄色みを帯びた明るい日差しが降り注いでいるのがその瞳に映った。

時計を見れば、いつの間にか昼近くになっていた。時間が経つのは早いものだ。

「あの、ヴァル」

ユウが遠慮がちにおずおずと話しかけてくる。

すっきりと一つに結んだ黒髪が、身体の動きに合わせて背中から胸元へ零れ落ちた。

微かに覗く白い首筋と繊細な鎖骨に黒髪が掛かる。その様に、思わず眼が吸い寄せられてしまう。

ユウの今日の服装は、リボンで結ぶタイの付いたシフォン生地の上着に紺のスカートだ。動くたびに微かに裾が揺れ、膝と白い腿がちらちらと覗いた。

両手で握りしめた銀のトレイを胸に少し前屈みになってこちらを見るユウは、眉を寄せて頬をほんのり赤らめると次の言葉を言い難そうに口を閉じた。

……そんな表情をされるとつい、手が出てしまいそうだ。

どきりと心臓が音を立てて跳ねたが平静を装ってユウに声を掛ける。

「どうした？ 何か分からない所でもあったか？」

今日のユウはいつもと比べて朝から落ち着きなくそわそわしている。

ヴァルサスは目の前にある書類に目を通しながら、ユウをさり気なく観察していた。

ここ最近、ユウは何か考え事をしているかと思えば、楽しそうに浮かれている時もある。

こそこそと一人隠れて何かをしているようなのだが、何をしているのやら分からない。

しかし、いずれ分かるだろうとそれとなく様子を見ていたのだが、今日のユウはいつもと様子が違って手元のメモを見たかと思えば何かを思案しているようであった。

もちろん、ユウに任せている仕事はきちんとこなしているようだった。

「ううん、そうじゃなくて、お願いがあるのだけれど……」

「うん？ 何のお願いだ？」

「あの、この書類を頼まれた所まで済ませたし、他に何か残っている仕事があるかなって。無ければ今日は少し早めに仕事を上がらせてほしいんだけど……」

ヴァルサスはユウから処理の済んだ書類を預かると、眼を通した。受け取った書類は指示通りきちんと整理されており、更に後の処理まで済んでいる。

相変わらず、指示以上の所までやってくれているな。

カイルに眼をやると、カイルの方も残っている仕事は無いと言う。

「ふむ、取りあえず今日はもう良い。ユウに頼めるのはここまでだ。後はカイルが処理する内容だしな」

そう答えるとユウは嬉しそうに眼を輝かせた。

「ありがとう、ヴァル！ カイル！」

「ん、そろそろ昼だし、今日はこれで上がっていいぞ」

「ええ、お疲れ様でしたね、ユウ」

ユウはぺこぺこと見慣れない仕草で頭を下げて、感謝の言葉を述べながら執務室から姿を消した。

余程嬉しかったようで、元の世界でのものだろう挨拶をして出て

行った。

それにしても、どうにもユウの妙な態度が引っ掛かる。

一体何をしようとしているのだろうか？

ユウのいない執務室は何となく、先程よりも薄暗く静かな気がした。

次の日、早めに執務室に来て仕事を始めていたヴァルサスは、いつもの出勤時刻よりも早く出てきたユウに少し驚いた。

「おはよう、ユウ。今日はいつもより早いな」

「おはようございます、ヴァル。今日は何となく早く来てしまつて。昨日早めに上がらせてもらったから、代わりに今日はしっかり働くな」

「そうか、頼もしいな。それじゃあ今日もよろしく頼むぞ」

ユウの今日の服装はさらりとした黄色の生地にふんわりと襷のあるシャツとクリーム色のスカートだ。その手には小さめの手提げ袋を持っていた。

ユウが身動きすると、微かに甘い香りが漂ってくる。

少し癖のある、その甘い香りは何となくヴァルサスの心をくすぐった。

一体何の香りだろうか？ どこかで嗅いだ事のあるその甘い香りを、ヴァルサスは思わずもっと近くで嗅ぎたくなった。

ユウの束ねた黒髪の後ろに覗く、白いうなじに眼が吸い寄せられる。

そこに顔を埋めたら、あの香りが包んでくれるだろうか？ その時ユウは一体どんな反応を見せてくれるだろうか？

思わずそんな事を考えたが、カイルが出勤して仕事に加わったの

で、意識を目の前の書類に集中させた。

時間はあっという間に過ぎて行く。

手元の仕事がひと段落付いた頃には昼になっていた。そろそろユウが仕事から上がる時間だ。

先にカイルがユウに労いの言葉を掛けて、書類の束を持って執務室の外へと姿を消す。様々な書類を持って各部署へと回る為だ。

「ユウ、今日のご苦労様。お陰で仕事が一段とはかどった。もう時間だから、上がっていいぞ」

ヴァルサスはユウに言葉を掛けた。

すると、ユウはあっという何かに気付いたような表情を浮かべ、落ち着かない様子で立ち上がった。

ユウは手提げ袋の中から何かを取り出すと、ヴァルサスの机の前に来る。

「ヴァル、受け取って下さい！」

「？」

頬を赤らめながら白い手から差し出された物は、赤いリボンの付いた小さな包みだった。

「ありがとうございます。……これは？」

「開けてみてください。それ、私のいた世界でチョコレートって言うお菓子なんです。ヴァルの口に合えばいいのだけれど」

「今、食べてみても良いか？」

「どうぞ！」

指でつまめる程度の小さな四角い茶色のそれを、口に含む。

微かにほろ苦い味わいがした後、甘くコクのある味わいが後から

口の中を覆う。少しすると、淡く溶けて無くなってしまった。

どこかで嗅いだ事のある香りは、だが、初めて食べた味で美味しかった。

「美味しい。これは初めて食べたな」

「良かった。あの、元の世界では今の時期位にバレンタインデーというのがあるって、元々は女性から男性に対して愛の告白をする日なんだけど、他にも日頃の感謝の気持ちを込めてチョココレートを贈ったりもするの」

その言葉を聞いた途端、思考と共に息が一瞬止まった。

かっと頭に血が昇ると、遅れて心臓が躍るように早鐘を打つ。上手く言葉が出てこない。

口を開こうとした途端、ユウが焦ったように声を出した。その顔は、包みを飾っていたリボンのように赤くなっている。

「あつ、もうこんな時間。クリス先生との時間に遅れちゃう。ヴァル、それじゃあ私は失礼するね！」

そう言い残して、ユウは素早く執務室の扉の向こうへと姿を消した。

執務室に一人残ったヴァルサスは赤くなった顔を片手で覆った。

今日のユウの甘い香りと同じチョココレートの香り。

そうか、ユウの様子が変だったのは、このチョココレートを準備する為だったのか。

……それで、どっちなんだ。感謝の気持ちかそれとも愛の告白か？ヴァルサスは当分仕事には手をつけられそうに無かった。

番外編1 甘い香り（後書き）

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第33話 前触れ 4

考えろ、考えるんだ、私。

こんなちっぽけで無力な私にだって出来る事が何かある筈だ。

思考が泡立ち混乱しそうになる。

そんな自分を叱りつけ、冷静になろうと努める。

今の私に出来る事があるとすれば怪我人を治療する事。

グールの爪と牙は鋭利でその力も強い。もし、殴られてもすれば骨折だけでは済まない。出来るだけ手早い対処が必要だ。

幸いな事に今日買った薬がある。私の僅かな癒しの力と薬で傷や多少の打撲ならば、何とか対応できるだろう。

私は急いで一階に戻ってみると扉はきっちり閉まっていて、相変わらずの混乱状態だった。

女性がヒステリーを起したように泣いていて、他の人も皆取り乱している。

けれど、ざっと見た限りでは治療が必要な程の怪我人はいないようだった。

ただ、この状況では扉の鍵は開ける事など出来そうに無かった。

開けようとしても余計に混乱を増長させるだけだろう。更に周りを見渡すが、出入り口は目の前の扉しか無さそうだった。

せめて荷物だけでも回収したい。

私の荷物は邪魔だったのか隅の方に避けてあった。私はこれ以上皆を刺激しないように素早く大小の荷物を手に取ると、急いで二階へと戻った。

中央広場の様子を見ると、戦い続ける二人は驚異的な身体能力を発揮し、その戦いぶりはまるで鬼神だった。

ヴァルサスの剣が躍るごとにグールの四肢や首が宙を舞う。

上から横から襲い掛かる凶悪な爪を回転しつつ駒のように宙を舞って避けると同時にグールを切り飛ばし、回し蹴りをたたき込む。その動きは止まる事を知らない。

体をひねりながら右腕が閃くとグールの顔が西瓜のように二つに飛び、左腕が振り下ろされるとグールの両足は胴体から別れを告げる。遅れて血飛沫が勢い良く飛び散った。

一方、レオンが大剣を一振りすると、一瞬にして上半身を失ったグールの血が雨のように噴き出した。

グールが爪を突き出し鋭く攻撃を放ってくる。レオンは大剣の平で勢い付けて受け止めそのまま振り抜く。衝撃に吹き飛ばされたグールは歪な角度に折れ曲がる。息をつく間もなく四方から襲う攻撃を転がりつつ回避し、起き上がり動作と共に切り上げ横薙ぎから背後まで一閃する。レオンの周囲には紅い花火のようにグールの血が噴き出した。

中央広場にはグールの死体が至る所に転がっていた。

二人はまるで死神か剣を持つ竜巻だ。

気が付くと中央広場は血みどろになって汚れ、グールの死体が広場を覆った。

そこに、遅れて王都の警備を務める騎士達が到着し、次々と交戦していく。

一糸乱れぬその動きは次々とグールを退治していく。

あっという間に生きて動いているグールの数はわずかに残っているだけとなった。

しかし二人は無事なのだろうか？

二人の様子は所々服に赤黒い血がべつとりと付着していて、怪我をしている事を予想させられた。

さらに、後から駆けつけた警備の騎士達の様相も瞬く間に赤黒く汚れて行く。

私の体から音を立てて血の気が引いて行く。

無意識の内に握りしめていた掌に、冷たい汗がじつとりと浮かんで指先を痺れさせる。

建物の外へ出られそうな場所は今の所、二階の窓だけだ。

窓の下を覗いて見てみると石畳が見えた。二階だけど結構高さがあるので、このまま飛び降りる事は私には出来そうにない。

窓のすぐ下の壁を見てみると足を付けそうな幅の梁があり、建物の右橋には非常用のはしごが見えた。

時計台の最上階から避難する時に使う緊急用の物だろうか、あれならば掴って降りれそうだ。

ただ、荷物を持って伝って下りる事は出来そうには無かったので、私は先に荷物を窓の下へ落とすことにした。

数個ある割れやすい瓶を小さい袋に入れ換え、腰のベルトに袋の持ち手の部分を通して頑丈に括りつける。

少し重たいけれど、両手は開いている。体の横に来るように括りつけると取りあえず何とかなりそうだった。

今回瓶の中身に水薬は無かったので瓶は重すぎず、幸いだった。

私は大きな、薬草や割れる物の入っていない袋二つを下に落とした。

予想外に大きなどさりという音が続けざまに聞こえると、窓の下に二つの袋が石畳の上に無事落ちてるのが見えた。

次は自分の体の方だと気を引き締めると、私は窓を乗り越えた。足がしっかりと建物の梁についた感触があった。

よし、このままいける。

私は壁に向かいあう形で体をひっ付けるようにしながら、不用意に地面を見ないようにじりじりと移動する。

地面を見たら、怖くて足がすくんでしまうだろう。

そのまま壁を伝って右端まで何とか移動すると、非常用のはしごを掴んだ。

はしごを左手で掴み片足を掛けて降りようとしたその時、足を踏み外してしまった。

「!！」

体がずるりと滑った。咄嗟にはしごに掴るが、片手では自分の体重を支えきれない。

左手は私の意思に反して外れ体が嫌な浮遊感を感じたかと思うと、そこから落ちた。

一気にはしごが遠ざかり、びゅうびゅうと自分の体が空を裂いて落ちて行く。

体が石畳で打ち付けられ衝撃と強烈な痛みが襲う、思考が頭によぎったと同時にぎゅっと硬く眼を閉じた。

衝撃を背中と足に感じた。けれど強い痛みは襲って来ない。

そろりと、硬くつむっていた眼を開いた私の視界にはレオンの固く強張った表情が飛び込んできた。

私の体は力強いレオンの腕にがちりと抱かれていたのだ。

「おい！ 大丈夫か？ ユウ」

レオンは怖いくらい鋭い表情で私に言った。

私を抱いているその腕も上半身も血で汚れている。

「レオン！ あ、ありがとう。……助かった」

止まっていた息がどつと一気に出た。

「怪我はないのか?!」

「私なんかより、レオンこそ無事なの？ こんなに血が付いて、どれだけ怪我をしたの？ ちょっと見せて！」

「……無事だったか」

安堵したように息を吐いてレオンは言うど、私を抱え直してぎゅっと抱きしめた。

私はレオンの傷を確認しようとしたけれど、強く抱きしめられて身動きできない。

「レオン！」

レオンの右腕は私の上半身から後頭部をしっかりと支え、下半身は左腕でを抱き抱えられていた。私の頭を支えている右手に力が籠ると私の顔はレオンの首筋に押し当てられた。

レオンの肩の上に私の顔が乗る形となった。

どくどくと、早めなテンポでレオンの頸動脈が拍動しているのが感じられる。

レオンは私の首すじに顔を埋めてじっと動かない。少し苦しく感じる腕の力も緩まなかった。

「……これは全部返り血だ、怪我はしていない」

「本当？ ああ、良かった」

いつの間にか、騎士達とヴァルサスの手によってグールは全て退

治されていた。

激しい戦闘の音とグールの鳴き声は聞こえなくなっていた。

「それよりユウこそ、あんな所から降りようとするとはどうしたんだ？ 感心しないな」

レオンは私の首筋に顔を埋めたまま、少し低い声で聞いた。

一体いつからなのか、どうやら私がごそごそと壁を伝っている所を見られていたのだろう。

レオンが唇を動かすと、少しかさついた軟らかい唇が羽毛のように私の首筋をなぞった。微かに吐き出された息が温かく首筋にかかって、私の背筋を震わせる。

レオンの表情は私には見えなくて、僅かに視界に入るのはレオンの後頭部の燃えるような赤毛だけ。熱い体温が私を包み、血の匂いに混じって微かにレオンの汗と男らしい匂いがした。

「ごめんなさい。でも、二人の事が心配でたまらなくて。けれど建物は閉鎖されてとても出られないし、窓以外に出れそうな場所が無かったから」

「その場で大人しく待っておく事もできただろう？ ユウが落ちかけた時には肝が冷えたぞ。俺の心臓を止めるつもりか？ たまたま物音に気付いたから間に合ったが、いつもこうとはいかないぞ。ユウは運動神経が無いに等しいからな」

そりゃあレオンから見たら、ヴァルサス以外の誰だって運動神経なんて皆無だろう。

「……それはそうだけど、でも自分が少々怪我しても構わないくらい二人が心配だったの」

「ユウ……。くそっ！」

そう言った途端、首筋に吐息より熱い少し湿った何かが触れた。

「あっ」

不意に私の首筋を襲った感触に背筋がゾクリとして思わず声が漏れる。びくりと体が強張った。

な、何？ 今のは。思わず変な声が出てしまった。

「……とにかくもう止めてくれ」

そう言って私を抱えたままレオンは落とした袋の前まで移動すると、漸く私を解放してくれた。

レオンは私を降ろすと、その時初めて自分の服の汚れのひどさに気が付いたようだった。

「結構返り血を浴びていたな。済まない、ユウの服も血で汚れてしまったかもしれないな」

「ううん、大丈夫」

やっとそれだけ言葉が漏れた。

レオンは私が落とした荷物を拾うとヴァルサスと合流する為に歩きます。

私は少しの間、何も言えなくなって大人しくレオンの後を付いて歩いた。

先程の感触に心臓が動悸を打つ。

さっきのはレオンの唇？

偶然？ それとも故意に？

レオンはそれ以上何も言わない。その表情はとても優しいとはいえない、怖いものだった。

だから私は何も言えず、偶然としか思えなかった。

合流したヴァルサスにも至る所に血が付いていた。

「ヴァ……、ルウ。怪我は？ 体は無事なの？」

「ユウは無事だったようだな」

ヴァルサスは私をざっと見た後、返事をくれた。

「私の方は大丈夫だ。グールから受けた傷など無い。ただ、グールの数が多くて少し血を浴びてしまったただけだ」

本当に？

私はこの手でしっかりヴァルサスの無事を確認したくて、ヴァルサスのマントの前を肌蹴ると、両腕を掴んで他に血が付いて無いか確認した。

そこにはしっかりと筋肉の付いた力強い腕に、どこにも怪我をした様子の無い体があった。

マントの下の服には血の汚れは見当たらない。

不自然な身体の動きも見られなかった。

「……ああ、本当に無事で良かった」

二人の無事を確認して安堵した途端、急に脱力感が私の体を襲った。

足から力が抜けて立っていられない。思わずそのままヴァルサスの体にしがみ付いた。

視界が滲んで眼頭が熱くなる。望んでもいないのに涙が出そうに

なった。

ヴァルサスが私を静かにぎゅっと抱きよせた。

「心配させたな」

「……うん、本当に。物凄く心配したし、何かあったらと思うと怖かった。二人共怪我が無く無事で本当に良かった。……あんな所に私一人、置いて行って」

「ああ」

ヴァルサスは私を上から覗き込むと、私の顔を両手でなぞって微かに溜まった涙を吸った。その後、私の顔を覗き込むようにして顔をほころばせた。

綺麗な笑顔を浮かべたヴァルサスの表情は、私の視線を釘付けにする。

私は自分の顔が異常に赤くなっていくのを感じながら、ヴァルサスから身を離れた。

私は二人の無事が分かれると漸く気持ちが落ち着いた。

騎士達が中央平場の後処理を始め出していた。見ると、レオンが騎士隊長に何らかの指示を出している。

私は他の騎士達にも怪我が無いか確認して回り、何人かの負傷している騎士達の傷に対して傷や打撲の治療を施した。

負傷した騎士達への手当てがあらかた済むと、ヴァルサスが切り出した。

「レオン、ここその他にも魔物が出現しているかも知れない。他の騎士達と共に見回りを頼む。あと、一般市民への怪我人への対応も任せるぞ。私は王城が気になるので一足先に戻らせて貰う」

「分かりました。ここはお任せください、ルース」

視界に映るレオンは何を考えているのか分からない、硬い表情をしていた。ちらりと、レオンは私の方を見たけれども、直ぐに眼を逸らした。

「ユウ、ルースと共に先に城へ戻ってくれ」

「はい、レオン。……気を付けてね」

「ああ、ユウもな」

私はレオンの態度が僅かに気になりながら、ヴァルサスと一緒に急ぎ城へと向かった。

第33話 前触れ 4 (後書き)

今回も読んで下さいまして、ありがとうございました。

第34話 奇病 1

ヴァルサスと共に急いで戻ってみると王城は混乱のなかにあった。騎士達が巡回し、物々しい雰囲気が漂っている。

所々に割れた花瓶や踏みつけられた花、台が床に転がり、飾られていた像などが壊れて無残に散らばっていた。床に散乱した物や騎士達のも々しい雰囲気、地震の後の混乱具合を表していた。

ヴァルサスは近くにいた騎士の一人に声を掛けると現状を報告させた。

もちろんこの時既に、血で汚れていたあの怪しいフード付きマントは脱いでいる。

あんなのを着ていたら、今頃大騒ぎだろうと思う。

報告の内容によると、王城でも地震の後にグールが出現していた。出現したグール達は王城の騎士達によって速やかに退治されていたけれど、突然の事態に被害者も出ていた。

地震とグールによる被害者は、騎士、文官、女官の他、下働きの者達と様々で、不幸にも死者が数人、負傷者も幾らか出ていた。

中にはグールに襲われたのでは無く、地震によって倒れてきた家具や物によって怪我を負った者もいたようだ。

ヴァルサスは買い出しの荷物が入った大小の袋を騎士に渡し、治療院に運ぶように事づけると、私を自室まで送ってくれた。ヴァルサスは送ってくれる間も警戒を解かなかった。私の自室に危険が無い事を確かめてから、ようやく警戒を解いて私を部屋に入るように促した。

「どうやらここは安全なようだな。ユウ、入っていいぞ」

恐る恐る入った部屋の容相は、出かける前とあまり変わり無く所々に小物が少し落ちていた程度だった。

「ここはあまり被害が無かったようだな。だが、他はどうか分からないから、安全が確認されるまで大人しくしておいてくれ。このまま傍に居てやりたいが、私は急用が出来たのでここで失礼するぞ」
「うん。ここまで本当にありがとう、ヴァル。気を付けてね」

「ああ」

ヴァルサスは私の頬を一撫ですると、部屋を出て行った。ヴァルサスの急用とは今回の被害状況の確認と現状への対策等を指示する事だろうと思う。

私は先程から気になっていた、フランやいつも面倒をみてくれる侍女達の安否を確認するため彼女達を探した。

すると、奥から出てきたフランは一見変わりないように見えた。

「フラン！ 無事だったのね。良かった、大丈夫？ 怪我は無いの？」

「ええ、ユウも元気そうでなによりですわ。私達は皆無事ですよ。幸いこちらの方にはグールが出現しなかったのです」

「ああ、そうだったの。皆怪我がなくて良かった」

私はほっと胸を撫で下ろした。

「フラン、治療院の方はどうなっているか知っている？」

「いえ、生憎とそちらの方は分かりません。ここの事で精一杯で」

「……そう。私、クリス先生や治療院の人達の事も気になるから様子を見てくるね！ 何か手伝える事もあるかもしれないし」

私はフランに一言断ると、止めるフランを置いて治療院へと向か

った。

クリス先生や他のスタッフ達はもうなっているのだろうか？ 無事であつたらいいのだけれど。それに、今回の騒ぎで今頃治療院は大忙しだろう。少しでも何か力になれば。

治療院への道のりは特に危険無く無事に移動できた。

治療院のスタッフ達は、地震とグールによって怪我を負った人達への対応で皆忙しそうにしていた。

ただでさえ元々忙しい所なのに今は混乱状態となっている。

その中を、私はクリス先生の姿を探して回った。程なくしてその姿を見つけた時、クリス先生は病室で新たに負傷した人への処置をしていた。

広い病室で処置をするクリス先生はとても酷い顔色で、自分の方が病人であるかのようにふらついていた。

今朝会った時よりも、随分と具合が悪いように見える。

「クリス先生、遅くなりました。大丈夫ですか？ 顔色がとても悪いですよ」

「ユウかい。無事だったようだね」

クリス先生はいつもとはかけ離れた弱々しい表情で顔を上げた。その声は、酷く細い。

「はい。先生は体調が悪い様ですから少し休んでください。出来る事は私が代わりますので」

「ああ。それなら済まないが、こちらを手伝って――」

クリス先生は最後まで言葉を口にする事が出来なかった。立ち上がろうとした途中で、ぐるりと白眼をむいたのだ。

「先生！」

吃驚して咄嗟に手を伸ばしたけれど、間に合わない。

クリス先生は派手な音を立てて医療器具と一緒に床へと倒れた。傍にあった消毒薬やガーゼ、包帯などが床に散らばる。

「先生、しっかりして！ 誰か手を貸して下さい！」

クリス先生は意識を失っていた。

先生の呼吸は浅く、じつとりと冷たい汗をかいていた。指先は青白く、顔色は紙のように蒼白だった。

触れた手首から伝わってくる脈はとても頼りなく、微かに触れるという程度の弱々しいものだった。

「先生！」

突如、クリス先生の姿が揺らぎ始める。クリスの体からは陽炎のようにオレンジがかった魔力がうつすらと立ち昇っていた。

「何があった？！」

「どうしたの！」

他のスタッフや医師達がバタバタと足音を立てて次々と集まってきた。クリス先生の状態を診たスタッフ達はすぐさま担架にクリスを乗ると重傷者用のベットへと運んで行く。

「ユウ、あなたは此処をお願いします」

私は共に手伝おうとしたのだけれど、途中になっている処置の続きを任せられ、そのままクリス先生が運ばれて行くのを見送るしか

なかった。

負傷者の傷の当てがひとしきり終わり、治療院にようやく落ち着きが出てきた頃、クリス先生の病名が判明した。

クリス先生は奇病を発症させていた。

治療法も分からない未知の病を。

しかも、奇病に侵されたのはクリス先生だけでは無かった。一般市民や騎士達にも今回新たに発症していた。

そしてこの国の第二王子、アルフリードも奇病という名の死神に取りつかれていた。

第34話 奇病 1 (後書き)

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第34話 奇病 2

案内された治療室には、医師と治療士やスタッフが入れ替わり立ち替わり、せわしく動いていた。

ベットを見ると、蠟人形のようなクリス先生が横たわっていた。

ベットに横たわるクリス先生の体には様々な治療用の器具が取り付けられていた。

沢山の医療器具に繋がれているその姿。体に繋がっているチューブ。投与される薬。

青白い顔。意思の力では動く事のない体。

その様は、まるで元の世界での自分を見ているようだった。

「……先生」

それ以上の言葉が出てこない。事態は私の予想以上に悪いようだった。

クリス先生の元へ行く事を許された私は様子を見に治療室に入っただけけれど、奇病への知識がなく治療士としても不十分な実力でしかない自分には、何もできない事を悟った。

とはいえ、奇病事態が未知の病気であるため、治療は症状に合わせて対処する事しか出来ず、根本的な治療法が無い状態だった。

クリス先生の呼吸は弱々しく、本当に息をしているかどうかさえ分かり難い程微か。力無く閉じられた瞳はピクリとも動かない。

そして弱りきった体を包む、オレンジの陽炎。クリス先生の魔力はより一層強く燃え上がっていた。魔力が自分の意思とは関係なく消費され続けているのだ。魔力が無くなれば己の生命力を削り、燃

やし尽くしてしまおう。

その輝きは、まるで蠟燭の最後の明かりのようだった。その炎は、燃え尽きれば命と共に消え失せる。

クリス先生の傍らには治療士の姿があった。

治療士は意識の無いクリス先生の状態を観察し、留まる事無く流出し続ける魔力を押し止めるように、手を心臓の上に当てている。必死に魔力を注いでいるのだが、一向に改善する兆しが現れなかった。

私は傍らの治療士に許可を得て、クリス先生の青白く血の氣の無い手をそっと握った。その手は氷のように冷たく、じっとりと汗で濡れている。

今の私にある、僅かな魔力だけでもいい。少しでもクリス先生に注げればと思ったのだ。

ひやりとした手を握った途端、クリス先生の手から黒い何かが這い上った。ぞわりと私の掌を撫でる。

黒い物はねっとりとして氷のように冷たく、なのにゾワゾワと熱くおぞましい。

私の体はビクリと震えてこわばり、反射的に握っていた手を放してしまった。

治療士が一瞬怪訝そうに私を見たが、すぐにクリス先生に集中する。

一瞬だったけれども、真っ黒いモノがうねうねとクリス先生の内側に蠢いているのを感じた。

今のは一体何なの？ 他の人は、何も感じないの？

ふと、クリスの体が二重写しのように重なってぼやけた。ぶれて

見えるその姿は。

クリスの内側から陽炎のようにめくれ上がって見えるのは？

内側から広がるように黒い影がじわじわと広がっていく。

一体何が起きているの？

私はじっと眼を凝らして視ようとしたその時、治療士から声がかかる。

「これ以上の面会は治療の妨げになり、クリス先生本人への負担もかかる。悪いが今日はここまでにして下さい」

はっとして集中が解けた途端、クリス先生の影も視えなくなった。まるで、クリス先生の体の中に黒い何かが潜り込んだようだった。私はもう少し、先程の何かの正体を見極めたくて傍にいたかった。

「あの、クリス先生に黒い何かが……」

「黒い何か？」

治療士は怪訝そうに私を見たけれど、それ以上の会話は受け付けなかった。治療士は私の両肩に手を置くと、そのままそっと体をベットの傍から押し出した。

「ユウさん、気持ちちは分かりますが今日はここまでにして下さい。

今から他の処置に入りますので」

「……そうですか。分かりました。また明日来ます」

私の存在は、次の処置を行うのに邪魔になるだけのようだった。これ以上傍にいる事は出来なくて、私はその部屋を後にした。私の言いたい事は、治療士には全く伝わって無いようだった。私だけが、クリス先生の中の黒い物を感じたようだった。

今日はこれ以上治療院での仕事は無く、もう良いと言われたので部屋へと戻る。

私は一人、じっと先程視えたクリス先生の状態を考え込んだ。

私は今の様な状態をかつて一度見た事がある。

……似ている。

今の状況はこの世界に召喚された時に見たシリウスと、とても良く似ている。ただし、シリウスの方は姿形が大きく変わってしまい、なお且つ過激な変化だったけれども。

全てが一緒では無いけれども、ある程度の共通点があった。

私の唇は自分では気付かないうちに、勝手にその名を零していた。

「……シリウス」

その瞬間、周りの空気が一瞬震えた。その名は鐘のように幾重にも重なって鳴り響き、私を取り巻く空間さえも打ち鳴らす様に震撼させる。

窓を開けていないのに、何も無い空間から強い風が吹きつけて私の髪と服を攫う。

「あっ！」

思わず髪と服を手で押さえると、私のすぐ後ろから唐突に声が聞こえた。

囁くような声で、私の耳をくすぐるように温かい吐息がかかる。

「漸く呼んでくれたね、僕の女神」

「ひゃあっ！」

微かに擦れて聞こえた懐かしいその声。はっとして振り返ると、そこには懐かしいクリムゾンの瞳があった。

「待ち遠しかった」

私の眼の前には、いつの間にかシリウスが立っていた。

第34話 奇病 2 (後書き)

今回も読んでいただきまして、ありがとうございます。

第34話 奇病 3

私の眼の前には、いつの間にかシリウスが立っていた。

誰もいなかった筈の私の部屋に突然現れたのだ。以前突然現れて消えた時のように。

「シリウス?! どうやって此処へ」

「どうやってって、君が呼んだから転移したんだよ」

私の驚き慌てた様子が面白いのか、シリウスはニヤリと笑って答えた。

「どうして私の居場所が分かったの? 昔から居場所が変わったのに」

私はシリウスの名を小さく呟いただけなのに、どうやってシリウスは聞きつけたのだろう? それに、最後に会ったのは守護者の昔だったのに、どうして今の居場所が分かったのだろう?

「言っただろう? 君が僕の名を呼べば、どこへなりとも飛んで行くってね。僕には君の居場所が分かるんだ。でも、あんまりにも長い事呼んでくれないから、実は忘れているんじゃないかと思っていたところだよ」

「え、いえ、忘れた訳では……」

吃驚だ。シリウスの事を忘れていた訳では無いけれど、呼ぶ事は思いつく事も無く、全く思い付かなかった。そして、ここで再会す

るとも思っていなかった。

言い返した言葉は何となく、しどろもどろになってしまった。これでは全く信憑性が無い事だろう。それを裏付けるように、私の返事を聞いたシリウスは、すうっと眼を細め口元をゆがめた。

「へえ、そう。まあいいよ。それにしても、ユウは随分変わったね。女らしく成長して、綺麗になった」

シリウスは今までの表情をがらりと変えて、真剣な表情を浮かべると言った。

「えっ？ あっ。背、伸びたでしょっ」

突然放たれた言葉は、私を動揺させるに十分だった。あまりにも恥ずかしい。

ああ、そう言えば、この人はこういう恥ずかしいセリフを堂々と口にする人だった。そんな事を思い出す。

顔が赤らむのを感じながら、その恥ずかしい部分をさり気なく無視して返事をする。

「シリウスがいなくなった後、急に体が成長し始めて。短い間でここまでになったの」

すると、シリウスは眼を細めて猫の様な笑顔を浮かべた。まるでお気に入りのミルクを舐める猫のよう。

もしかして、シリウスは何か知っているの？ あの時、私の体に負担が掛かるって言っていたよね。

シリウスは異常な成長に関して、特に気にする様子も見せなかった。なぜだろう？ 彼は疑問を抱くどころか、何となく満足そうにすら見えた。

「そう、それは良かったよ。僕にとっては今の姿の方が好きだ。それどころかもうちよつと成長してくれても良い位だよ」

また、あのからかうような、猫のような表情で言う。その視線は明らかに私の胸を見ている。それに、上から下まで私の体に視線を這わせた。

「や、やだっ！ やめてよ、どうせ胸は大きく無いし！ まだ、これからなんですからね！」

「はははっ！」

シリウスは楽しそうに笑い声を上げた。どうやら思いっきりからかわれたみたいだった。そう、シリウスは元々いじめっこだった。

「ところでユウ、何か困った事になっているんじゃないの？」

そうだった。今はそれどころじゃ無かった。

「ああっ、そうなの。実は私の先生が奇病に罹ってしまって。でも、治療法が全く見つからなくて。私、今回初めて奇病に罹っている患者を見たの。奇病に罹った先生の様子を見た時、似ていると思った。初めて会った時のシリウスと」

「初めて会った時か。成程、確かに君は、僕のあの姿を真に視た人だ。僕はあの時重度の奇病に侵された状態だった」

シリウスの瞳はきらりと輝きを放ち、何かの確信に満ちた表情を浮かべた。

その表情はまるで、シリウスは私が奇病について相談するのを、見透かしていたかのようなようだった。

「ユウが僕を癒してくれた後、僕は奇病についての経験を情報として国に持ち帰ったんだよ。僕の国でも奇病は蔓延していたからね。そして、僕の経験を元に研究がすすめられた。国を上げての急ピッチで進められた研究の結果、対処法が見つかったんだよ。今、僕の国では急速に、奇病が沈静化しつつある」

「す、凄い！ それじゃあ」

「但し、その方法が人間にも同じように効果があるかは分からないよ。ただ、ためしてみる価値は十分ある」

今までに全く対処法が分からなかった奇病に対し、種族が違うとはいえ、効果は十分に期待できた。何故なら、魔族と人間とで子供が成せる程に両種族は構造が非常に似通っている。

「シリウスお願い、早速その方法を教えて！」

「良いよ。君は僕の恩人だからね。ただし、その方法を試してみるにはリスクがある。だが、ここでそれを教える事が出来るのも、今の所知っている僕だけだ。だから、何か褒美が欲しい」

「褒美？ 一体どんな事？ 私にできる範囲の事であれば良いけれど、それ以外では無理だよ」

「ああ、君にしか出来ない事さ」

「私にしか？」

「ああ、そうだ。……僕の女神の唇を味わいたい」

「ええっ？ ななな、何それ！ 変な冗談やめてよ」

「冗談なものか、本気だよ。いいかい、掛かっているのは人の命だよ？」

シリウスはいつものように、私をからかって面白がっているんだろうか？ シリウスは掴み所の無い表情を浮かべている。

「また、私をからかっているの？」

途端、シリウスは私の腕を取って引き寄せた。以外にも強い力で引かれた私の体は、シリウスの腕の中にあっけなく囚われてしまう。

「本当にそう思っているのかい？」

私の心臓は小鳥のように震えた。喉がカラカラに乾いて心臓が口から飛び出しそうになる。言葉が何も出てこない。私は呼吸の仕方さえ忘れてしまった。

シリウスは私の反応を見て、承諾したと思ったのだろうか？

あっという間に私の後頭部に手が掛かり、顔をくいと仰向かされる。私の顔に影が落ちて視界にシリウスの整った顔が映った。赤い瞳が誘う様に私を捉えて離さない。

「あっ……」

唇に軽く吐息が掛かり、シリウスの体温を感じた様な気がした。

「そこまでだ」

突如、冷やかな声が部屋の怪しい空気を切り裂いた。

私は、はっと呪縛から冷めたようにシリウスにのまれていた意識を取り戻し、シリウスの体を跳ねのけると両腕から抜け出した。

シリウスから距離をとって離れた途端、私の腕は力強く掴まれて引き寄せられた。

それは、あっという間の出来事で、気付いたら覚えのある温かい体温を背中に感じていた。

馴染みのある逞しい体の傍に引き寄せられていたのだ。

「ユウ、大丈夫か？」
「ヴァル」

反射的に見上げた視界には、今までに見た事の無い程冷たい雰囲気
を纏ったヴァルサスが、無表情に立っていた。

第34話 奇病 3（後書き）

今回も読んで下さいまして、ありがとうございました。

第34話 奇病 4

「そこまでだ。ユウ、大丈夫か？」

反射的に見上げた視界には、今までに見た事の無い程冷たい雰囲気
気を纏ったヴァルサスが、無表情に立っていた。

「お前は何者だ。どうやって此処へ侵入した？」

その声は凍てつく氷のようだった。私は背中に冷やりとした気配
を感じ、嫌な汗が流れていく。初めて耳にするヴァルサスの声音に、
私は震え上がった。

ヴァルサスのこんな声を、私は今までに聞いた事が無かったのだ。

「ふ、怖いな。あと少しの所だったのに残念だよ」

ニヤリと笑いながらシリウスは返答した。その発言に、ヴァルサ
スはより一層冷たい刃物のような気配を漂わせる。

「……質問に答えてもらおう」

その声と背中の気配に私の冷えた背骨は凍りついた。これにはさ
すがのシリウスも、浮かべていた笑みをかき消していた。

「侵入したのでは無いよ。喚び声に応えたんだ」

この返答では、余計にヴァルサスの怒りを煽るようなものだ。私

はこの場を何とかしようと口を開いた。

「待って、ヴァル！ この人は私が喚んだみたいなの。名はシリウス。シリウス、こちらはヴァルサス殿下よ。シリウスは私の命の恩人であり、友人でもあるの」

「どういことだ？」

「まだ砦にいた頃に、砦の外壁から落ちた私をシリウスが助けてくれたの。彼が助けてくれなかったら、今の私は居ないと思う。……決して怪しい人では無いから」

「……」

私の説明を聞いている間も、ヴァルサスはシリウスから眼を放さない。厳しく冷たい眼差しをシリウスに向けたまま、さり気なく私の前に立ち、その背に私を庇う。

「そう言う事だから、そのおっかない気配を納めてくれない？ 僕とユウは友人なんだ。それに、今回はユウの力になりたくて、ここに来たんだから」

「そ、そうなの。実は、奇病の治療法を知っているかもしれないの」「ほう、魔族がか。その方法とは我々人間にも有効なのだろうな？」

この短いやり取りの間に、ヴァルサスはシリウスが魔族である事を見抜いたようだった。私には、外見上では全く分からないというのに。

「ヴァル、お願い。シリウスの話を聞いてみて。シリウスも、ヴァルにも奇病についての説明をお願いするわ」

「良いよ。ユウの望みならば僕は何だって聞くよ」

シリウスは素直に私のお願いを聞いてくれた。この雰囲気では流

石に、真面目に答えてくれたのだと思う。

もちろん見返りなんて、今回は要求しなかった。最初から、その態度を取ってくれればいいのに。私はブツブツと心の中でぼやいた。

「奇病の治療法があるのなら聞こう」

ヴァルサスは、ようやく背筋の冷えるような気配を納めてくれた。ああ、寿命が一年くらい縮まったかも。この時私が安堵のため大きく息を吐いてしまったのは、仕方の無い事だと思う。

一通りの説明を終えたシリウスは、少し準備があると言ってこの場から姿を消した。現れた時と同様に、またもや唐突に姿を消した。今、私の部屋にいるのはヴァルサスと私だけとなっている。

魔族式の治療は早速明日にも行う予定となった。出来るだけ急がなければならぬけれど、治療を行う為の準備が整っていなかったからだ。

時間と患者の体力は、刻一刻と削られていく。クリス先生やアルフリード殿下、その他の新たに発症した人達に出来るだけ早めに対応しなければならない。

シリウスの説明というのは、あの怪獣クンの姿だった時の事は省いた内容で、それ以外での魔族での奇病の蔓延と、治療による反応と改善についての物だった。また、具体的な治療方法についても説明してくれた。

「ユウ」

奇病と治療で占められていた私の思考は、ヴァルサスの声によって引き戻された。その声はいつもより低めで冷たく、何かを抑えている様に私には聞こえた。

「は、はいっ」

先程の冷気を思い出し、思わず声が裏返ってしまった。無意識の内に、一瞬で背中に鉄の棒が入ったかの如く背筋が伸びる。

見ると、ヴァルサスが再び無表情に私を見ていた。

いつもは穏やかな光を湛えている夜空の瞳は、凍える真冬の夜空となっていた。眼は鋭い光を放ち、獲物を狙う肉食獣の様に爛々としている。それは、砦で一度経験して以来、久しぶりに眼にした瞳だった。ヴァルサスの様子に私は息を飲むと、思わず体が縮こまった。

そう言えば、以前もシリウスが絡んでいたような気がする。そんな考えがちらりと脳裏をかすめた。

「あの魔族の気配を以前にも感じた事があったな。あれは砦での事だったか。あの時、命の危険にあったとは初耳だな」

「……」

しまった。

そう思っても後の祭り。私は砦の外壁から落ちた事は、一切口にしていなかったのだ。

シリウスに助けてもらった後の事が、鮮やかに頭の中で浮かび上がった。あの、恐怖の後に羞恥をもたらしたヴァルサスを。今、私の顔は間違い無く青くなっていると思う。

「どこまでされた？」

「……えっ？」

突然の問いに思考が一瞬止まる。

理解するのに数秒かかってしまった。その後、先程のシリウスとの事を思い出して顔が赤くなっていく。

一体いつからヴァルサスに見られていたの？

そう思うほどに、羞恥で顔が熱くなっていった。自分では赤くなるのを止められない。私は視線を落ち着きなくうろろと彷徨わせてしまった。

気持ちを何とか落ちつけて、私は再びヴァルサスへと視線を戻した。けれど、私はヴァルサスに視線を戻した事を一瞬で後悔した。ヴァルサスの眼は恐怖を誘う程に底光りをして、私を見ていたからだ。

ひいいっ、怖っ！

私は生唾を飲み込もうとして、それすら出来なかった。

ヴァルサスがゆっくりとこちらに歩いてくる。それは、肉食獣のように音も無くしなやかに。私は猛獣と一緒にの檻の中に、閉じ込められてしまったような錯覚に陥った。

私はあっという間に壁際まで追い詰められていた。しかし、そんな事にも気付く余裕なんて無い。かろうじて呼吸をするのがやっと。覆い被さってくるように、私の頭上からヴァルサスが身を屈める。いつの間に、こんなに近づいたのか。

ヴァルサスの体温と吐息が迫ってくる。私はこのまま、牙を立てられ喉笛を喰い千切られると思った。

「悪い事は何もされてないし、していないからっ」

意味不明な事を必死で口走っている。

私は眼を硬く瞑り、亀のように首を縮こめて必死で弁解しようと言を聞いた。

途端、ヴァルサスの手が私に触れた。顎に手が掛かった瞬間、上向かされていた。

意識する間もなく、唇を熱い何かで覆われる。それは、火傷する程に熱く私の息を何度も奪う。

息苦しくなって、私は口を開いて逃れようともがいた。けれども私の自由になる物など何も無い。

激しく、湿った何かが溶岩のように入り込むと、私の口腔内を荒々しく何度も犯した。

第34話 奇病 4 (後書き)

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第34話 奇病 5

私はヴァルサスに口づけられていた。

呼吸さえも奪い取るその激しさに、眼の前が霞んで頭の中が白く染まっていく。

私の唇からは、あえぎ声とも唸り声とも取れる音だけが、微かに、かすれては途切れながら漏れて行く。

口の中はとても熱く苦しく、けれど脳天を痺れさせるような感覚が絶え間なく私を襲ってくる。

何とか鼻で呼吸をしているけれど、全てを奪う様な口づけに酸素を求めて体が喘ぐ。いつの間にかぎゅっと掴んでいたヴァルサスの服を握る手の力が弱くなり、指先が痺れて力無く震えてくる。

もう、膝に力が入らず立ってなどいられない。

ヴァルサスにいつの間にか縋りついていて私の体は、人形のように全身の力が抜けると、その場に崩れ落ちそうになった。

それは、酸欠のためなのか、それとも背筋を這いまわる様に駆け抜ける感覚によるものか、どちらかはもう分からない。

けれども、そのまま崩れ落ちる事は許されなかった。

私の体を包む、檻のように回されたヴァルサスの腕と体が、私を自由にする事を拒む。その檻は、私を小鳥のように囚えて離さない。ヴァルサスの舌は私の中を幾度も思うさま蹂躪し続けた。

熱い。

もう、口の中の唾液はどちらのものなのか、唇が誰の物なのかも分からない。

全ての音が聞こえなくなっって、気が遠くなりそうになった時、ようやく私の呼吸は解放された。

床から離れていたつま先がそっと降ろされると、そのまま私の体はへたり込むように力なく床へと崩れた。

荒い呼吸が自分の口から何度も漏れる。喘ぐように、必死で酸素を取り込んでいる唇は、腫れぼったくてひりついている。

ヴァルサスが私の顔を覗き込んでいる。私は魅入られたようにヴァルサスの瞳から眼を逸らす事ができなかった。

私の唇に、硬い感触のある指先がそっと触れて、ゆっくりとなぞる。

「愛している、ユウ」

私は上手く働かない、止まった思考のままヴァルサスを見上げていた。ただ、その言葉が脳に届いた時、身体のどこかにある芯が発火し熱を孕んだような気がした。

言葉が何も出てこない。

ヴァルサスにとっての私とは、娘か妹くらいの保護対象として、考えていてくれているのだろうと今まで思っていた。だから、尚更今の状況に衝撃を受けていた。

先程の、激しいキスも、告白も。

私にとって、ヴァルサスは兄のような存在となっていた。私は生前三十路であったというのに、この世界ではいつの間にかヴァルサスに頼りきっていたのだ。それ程までにヴァルサスの存在は頼もしく、かけがえなく、私にとって、とても大きなものだった。

「驚かせてすまない。だが、この思いを抑えきれなかった」

一体いつから？　なぜ？

それ以上は思い付かない。何故か、私の体は力が入らなかった。ただ、拒絶する事も、嫌悪感を感じる事も無かった。私の中からは、拒否や否定の言葉すら出てこなかった。本当に家族のように思っているのならば、そう感じても可笑しくは無い筈なのに。

鈍くなっている思考は、私をより一層無防備にさせていた。

私の両脇をヴァルサスの引き締まった腕が囲った。私はいつの間にか、床に体を預けるような姿勢になっていて、ヴァルサスは床に両腕を付いて私の上に覆いかぶさっていた。

どこまでも深い、夜空の瞳が迫ってくる。

重力に従って垂れてきたヴァルサスの銀髪が、私の頬に、次いで首筋に触れては羽毛のように愛撫する。私の皮膚は鳥肌が立ち、身体が微かに震えた。首筋に軟らかな感触と温もりが触れて、視界は銀糸に埋め尽くされた。

首に、鎖骨にヴァルサスの唇と頬の感触が何度も落ちる。ぞくりと、再び背中を走り抜ける感覚が襲う。

「あつ、ああ……………」

かすれた声が、私の唇から艶を含んで漏れていた。

その声を聞いたヴァルサスはびくりと体を大きく震わせると、動きを止めた。体中に緊張を漲らせ、私の首筋に埋めていた顔を上げた。私の潤んだ視界にヴァルサスの瞳が映る。

ヴァルサスと眼が合っている少しの間が、とても長く感じられた。すると、ヴァルサスはぎゅっと眉根を寄せて、硬く瞳を閉じると大きく溜息を零す。それは、何かを吐きだす様な苦痛を含んだ物だった。

そして、ヴァルサスは身体をゆっくりと離すと、私を床から起こして座らせてくれた。

ヴァルサスの艶を含んだ瞳は強い光を灯していたけれど、いつもの穏やかな表情へと戻っていた。

「これ以上ここには居られないな。ユウ、大丈夫か？」

私はただ、頷いた。言葉を出すのが怖かったからかもしれない。私の様子を見たヴァルサスは、微かに口元に笑みを浮かべると、まだ行うべき事があると言ってこの部屋から姿を消した。

私はフランが部屋に現れるまで茫然と、その場に座り込んだまま、ヴァルサスが姿を消した扉をぼんやり見ていた。

思考は絵の具を撒き散らしたかのように、ぐちゃぐちゃだった。

私はヴァルサスの見せた感情の激しさに、初めて私の知らない彼の一面を知った。それは驚きと少しの恐怖心と、そして今までとは違う感情を私にもたらした。

私にとって先程の激しい口づけは、不快では無くむしろ、鼓動を熱く走らせる程の快感を感じさせた事を自覚していた。

第34話 奇病 5 (後書き)

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第34話 奇病 6

私にとって眠れなかった一夜が明けた。

今、私の周囲では奇病治療への準備が着々と進んでいく。眼の前では治療スタッフ達がずらりと揃い、治療に対する説明を受けていた。

けれども、私の思考はともすれば、ヴァルサスの事ばかりに逸れてしまっていた。眼の前の事へと集中できず、つい意識が散漫になってしまふ。そんな自分を叱りつけつつ、眼の前の資料に集中しようと思いを引き締めた。

私は今、治療院の一室に居る。ここは、緊急の会議を行う際に使用する、広い空間が確保してある場所だった。いつもはがらんとして寂しい筈のこの部屋は、異様な緊張感と熱気が籠っている。誰ひとり無駄口を叩く者は無く、しわぶき一つ立たなかった。しんと静まり返っている異様な空気の中、説明をする声のみが淡々と響く。

私は部屋前方で説明をしている魔族を見ようと顔を上げた。すると、その傍近くに座って資料に眼を通して、ヴァルサスの姿が視界に入ってしまった。ヴァルサスは、この広い空間の上座に当たる場所に居て、私の席とは随分離れた場所にいる。

もう、何度目だろう。こうやってその姿や表情を見てしまうのは。私は何度も繰り返して自分が嫌になってしまふくらい、気が付くと彼を見てしまふのだった。いけないと、何度も直ぐに視線を引き剥がしているのに。

ヴァルサスの傍には、カイルが控えていた。さらに、その他部屋には役人達と治療士やスタッフ、関係者と思われる人達と共に、シリウス含む魔族数人がずらりと揃っていた。

奇病治療に対しては、今この説明を行われている間にも、並行し

て行われていた。部屋の外からは、人と物が慌ただしく何度も出入りする気配が微かに伝わってきて、皆初めての事に戸惑っているのが良く判る。

それは、今の現状が少しの時間も無駄にできない事実も、如実に表していた。今行われている説明も、僅かな時間しか無い中行われているため、簡潔明瞭かつ淡々と進んでいき質問は許されていない。そして、終わればすぐに私達も実施に参加するのだ。共に治療に参加し、経験する事で知識の共有を図ると共に、不測の事態に備えて少しでも人手があった方が良かったからだ。

奇病が発症している人にとっては、残された時間は僅かしかなかった。

今ここで説明を行い、治療に対して主導権を握っているのは魔族の治療士達だった。配布された手元の資料には、魔族での現状と治療、症例などが詳細に書かれている。シリウスは昨日消えた後、魔族のスタッフと共にこれを全て準備したのだろうか？ よくもこれだけの物を、と感心してしまう。揃えるには一体どのくらいの人と物、手間がいったのだろうか？ 感謝の念が湧きあがったが、それと同時に疑問も浮かび上がってくるのだった。

シリウスは一体何者なのだろう？ 一般の者ではこんな事は不可能だろうに。感謝しつつも疑問が頭から離れていかない。

また、資料の内容にも驚愕させられていた。ただし、この突然の事態や治療内容に驚愕しているのは、私だけでは無い事は確かだろう。多分、ここに居る全ての人間が当て嵌まっている筈だ。それは、実際この部屋の雰囲気が良い物語っていると思う。

しかし、この魔族側から提供される奇病治療を実施する事に、皆驚きや困惑を隠しきれない。中には拒絶や嫌悪感を覚えた者もいる。それはそうだろう、突然治療に横槍が入ったのだから。見ず知らずの第三者、しかも他種族が割って入ってきては、良い思いはしない

に違いない。皆、それぞれ自分の仕事に責任や誇りを持って、患者に全力で当たっているのだ。

しかし、それでもこのように魔族の介入をスムーズに実現できているのには、理由がある。それは、奇病自体が未知の病で、治療法が分からず打開策が無い事。さらに被害は拡大の一途を辿っており、王族が奇病に掛かったにも拘らず、手をこまねいているしかない状況にあった。そのため、今回の突拍子の無い事態に一切の物を捨てて、飛び付いたのだった。さらに、背中を押す様に王家からの命令が下った。これには誰も反対出来なかった。間違い無くヴァルサスが手を尽くしてくれたに違いない。私は同じ治療室で、資料に眼を通してながら説明を聞いているヴァルサスをそっと見た。

私はヴァルサスに感謝して、までも思考がぶれてしまった。あの、激しい口づけによって、私の唇はまだ少し腫れている。唇をそっと舌で舐めると、微かにヴァルサスの味がしたような気がして、思わずどきりと心臓が跳ねた。昨日の行為は熱い焼き鰻の如く、私の唇にヴァルサスの感触を刻みつけられてしまったかのよう。

私はキスが初めてという訳ではない。もちろん初心な反応をする程経験が無い訳でも無かった。ただ、それは生前の事であって、こちらでは少し違うけれど。

この世界での初めての軽いキスと、二度目の深い口づけは共にヴァルサス一人だった。

ただ、あんなに激しく身を焼かれる様な口づけは初めてだった。私の体と心に深く刻みつけられるような物は。

あの時、明らかにヴァルサスの欲望を感じた。それは、私を子供などでは無く、一人の女として見ている事をはっきりと私に知らしめたのだ。

ヴァルサスが少し前に、私に言った事が甦る。

子供であるとは思わない。成人女性として見る。

そう言ったのだ。

ヴァルサスは親兄弟ではない。私にとって、一人の男であるとはつきりと自覚してしまった。昨日改めて感じた筋張った大きな手も、しっかりと美しい筋肉が付いた逞しい身体もヴァルサスが男性である事を主張していた。

今後どうヴァルサスと接すれば良いのだろう。私は分からなくなってしまった。

いけない。今は、そんな事を考えている場合じゃない。

私は意識をなんとか切り替えた。

私達が治療室に入ると、部屋には大きな魔法陣が描かれていた。

その上には数人の患者がベットと共に運びこまれている。焚かれている香がうつすらと紫煙で部屋を覆い、四方から治療士達の呪文が這う様に部屋を満たしていた。

それは、何とも怪しく奇妙な光景だった。このような呪いか祈祷を思わせる行いは、奇病の原因が意外にも精神領域にあったからだ。そのことが、奇病の原因を今まで誰にも分からせず、対応させないでいた。

数人の患者達の中にはクリス先生もいた。先生の容体は昨日よりもさらに悪化しているのが、傍目にも簡単に見てとれる。ここに集められているのは一刻の猶予も許され無い者達ばかりで、皆同様に立ち昇る魔力が弱々しく消えそうになっていた。その代わりに、毒々しい程に黒く淀んだ靄のような物が、身体という器から溢れるように滲み出している。なんという禍々しさだろう。まるで、視覚か

ら侵されたかの様に、私の身体にぞわりと怖気が走った。

やがて、唱えられる呪文がうねるように大きく激しくなった。部屋には緊張が走る。何かを払うかのように呪文を唱えていた魔族達から発せられる。

途端、私には黒い靄が碎け散るように消え去った。床に描かれている魔法陣が淡い光を帯びて、美しく浮かび上がる。

すると、今まで虫の息だった患者達の呼吸が安定した。心なしか、放出される魔力の輝きに力が籠ったように見えたけれど、やがてそれも収まった。どうやっても止める事のできなかった魔力の一方的な放出が、ぴたりと止まったのだ。

周囲からわっと声が上がった。初めて、奇病という避けられない死から助け出す光が見えたからだ。周囲の興奮している声が溢れんばかりに部屋を満たした。

しかし、一人だけ状態の変わらない患者が居た。クリス先生だ。

黒い霧はその存在を主張するように濃さを増して、纏わりついているように見える。

呪文は途切れず詠唱され続けていたけれども、魔族の術者は額に汗を浮かべて、髪を張り付かせていた。その様子から、再び部屋には息詰まるような沈黙が覆った。

「誰か、彼女の家族や親しい友人はいないか？ 彼女の精神を救うにはその人の協力が必要だ！」

状況を察したシリウスが緊張した声を放った。こんな声音、私は初めて聞いたかもしれない。

けれども、クリス先生の事を詳しく知る人物は誰もいなかった。私は今まで知らなかったけれど、先生は家族と呼べる人が居ないのだそうだ。この国の治療院で働く以前には子供が居たそうなのだけ

れども、その子供も病で亡くなっていた。そんな事、私はちっとも知らなかった。普段の表情からは決して伺わせず、事情を知ることには無かったのだ。

「私が手伝いましょう！ 何をしたらいいでしょうか？」

その声を発したのは、意外な事にカイルだった。カイルはシリウスに指示されるまま、用意された椅子に腰かけクリス先生の手を握ると、意識を先生に合わせる。シリウスが何か唱えると、途端にカイルは意識を失った。それを見て、周囲に動揺が走る。

「彼は今、精神のみで患者の精神領域に入り込みました。成功すれば、侵されている患者の意識をこちらに導く事が出来る筈です。我々は彼と患者の絆を信じましょう」

私は思わず息を飲んだ。資料の一部にこのような内容が記載されていたけれども、それはかなりの重症例で、心の闇が深い者ほど精神が蝕まれ改善し難いと。それに、協力者も一緒に引き摺られ、精神が闇から戻れなくなってしまう危険性が十分にあった。

私達はひたすら眼の前の事態を見守った。クリス先生の呼吸が細く、何度も止まりそうになった。纏う魔力が弱々しく掠れて殆ど眼には見えなくなる。

時間がとても長く感じられ苦しくなった頃、魔法陣が淡い光を放った。

ピクリとカイルの体が動いたかと思うと、意識を取り戻した。カイルがクリス先生の手をぎゅっと両手で握りしめると、皆の見守る中、クリス先生の呼吸が安定し魔力の放出が収まったのだった。

第34話 奇病 6 (後書き)

今回も読んで下さいまして、ありがとうございました。

第34話 奇病 7 (前書き)

今回はヴァルサス視点です。

第34話 奇病 7

クリスほか、危篤状態にあった重傷者の治療が済み治療内容が明らかになった今、次はアルフリードの治療を行う番だった。

ただし、クリス達は全快した訳では無いので、途中経過を今後も用心して見て行かなければならないが、魔族の治療は人間にも十分通用する事が証明された。

治療の際、同室内に居たユウの姿が脳裏に浮かんだ。ともすれば、ユウにばかり意識が向かってしまいそうだ。今は視線と意識を向ける事を自分に禁じた。そうしなければ、この重要な場面で、昨日感じた軟らかく果実のように甘い唇や、その体と香りを再び堪能してしまう、そんな自製の効かない自分を自覚していたからだ。

私は護衛と共に王宮奥の王族専用治療施設へと向かった。常ならば私の傍にはカイルが控えている筈だが、今は病床のクリスの傍に付き添っていた。

それにしても、いつの間にクリスとあの様な間柄になっていたのだろうか。私は表情には出さないまま、内心頭を捻っていた。あの場でカイルが名乗りを上げるとは、予想だにもなかった。二人が深い心の交流を持つ程の仲であるなど、私はそれまで全く気付かなかったからだ。

まあ、落ち着いた頃にでも、尋ねてみるとしようか。

アルフリードの治療はクリス達の治療が異常なく済んだ後、反応を見て行われる事があらかじめ決まっていた。

それは、アルフリードには今だ余力があり、少しの猶予があった事。王位第一継承者という身分である事。魔族から提供される前例

の無い治療である事。それが主な理由であった。全てが手探りで行われる治療では、このような対応も仕方のないものだろう。

しかし、頭では理解しているつもりだが、クリス達を犠牲にした治療実験であるというのも一つの事実だった。ざらりとした物が私の心を撫でる。私はそのどうしようもない思考を頭の隅へと追いやると、アルフリードの治療が行われる部屋へと向かった。

「これは、ヴァルサス殿下。お入りください」

部屋の前に立っている両脇の騎士達が、さっと扉を開いた。

この部屋には限られた人物しか入れない。ここにいるのは、王族と王家専属の治療士達、危険が無い事を確認された、シリウス含む数名の魔族がいるのみだ。あとは、王族専門の護衛が物々しく脇に控えている。

部屋にはクリスの時と同じように、魔法陣の中のベットにアルフリードが横たわっていた。

アルフリードは血色の無い顔色で、力なく横たわっている。その意識の無い身体は、常ならば考えられない程に脆く、弱々しく見えた。

その場には王と王妃がいた。今の二人の顔は、王族としての威厳ある姿は欠片も無く、親としての顔をした、唯の人だった。王妃はアルフリードと同じ位、血色の無い顔を晒している。立っているのもやっとという風情で、実際には王の支えでようやく姿勢を保っているといった具合だ。

その二人で支え合う姿は、二人がいかに深くお互いを愛し、必要としているかが如実に現れている姿でもあった。

「父上、義母上、お待たせしました。アルフリードの容体について

はどうですか？」

「ヴァルサスか。やはり、良くなる兆しは見当たらん。本人の持つ魔力が元々強いので何とか保ってはいるが、それも時間の問題であろう。やはり、魔族から提供された治療を行うほかないな」

「やはり、そうですか。最初の症例は成功しています。今回も無事に済むよう我々も全力を尽くしましょう」

「ああ、そうするしか道はないであろうな」

「ヴァルサス、ありがとう。私達、貴方がいてくれて本当に心強いわ」

父に縋ってようやく立っている義母の様子は痛々しい物だった。顔色が悪く今にも倒れそうで、ヴァルサスは義母の息子を思う心情を思いやらずにはいられなかった。

「義母上、大丈夫ですか？ 少し休まれた方がよろしいかと」

「いいえ、大丈夫です。このままここで、アルフリードの傍に付いていたい。私だけ休んでいる訳にはいかないわ」

「分かりました。では、我々はここで見守りましょう」

ヴァルサスは椅子を準備させ、何とかリリネを座らせると、治療を見守る事とした。

部屋中に香と紫煙が立ち込め、呪文の詠唱が満ちる。低く、地を這う様な声が続き魔力が満ちる。そのままの状態でも呪文は繰り返されたが、アルフリードの容体には変化が全く見られなかった。徐々に魔族や治療士達の様子が変わり、焦りの色を漂わせる。

魔法陣は反応を見せず、アルフリードは依然魔力を燃やし続けている。

これは、先程のクリスと同じ状態だ。アルフリードは心に深く闇

を抱え、それを誰も気付かなかったのだ。アルフリードは表へと出さず、一人抱え込み育てていたのだろう。人に打ち明けられる程度ならば、其処まで闇は育たない。溜め込まなければならぬ状態だからこそ、このようになったのだろう。

「私が彼の精神に入り込もう」

ヴァルサスは状況を判断し、魔族に声を掛けた。これ以上、同じ事を続けようとも効果が無く、限界であると察した。

「彼の状態では今のままでは救えない。是非、参加をお願いします。だが、先程も申しましたように危険はありますが」

ヴァルサスの言葉を聞いて、シリウスが反応する。しかし、それを聞いたリリネは止めようとした。

「ヴァルっ。なりません、私が行います」

「いえ、母上はこの国にとって無くてはならない人です。私が適任で」

言葉を言い終わらない内に、勢い良く部屋の扉が開いた。不意に襲ってきた開放音が耳に痛い。

「ヴァルお兄様、ここはわたくしが行いますわっ！」

「ソレイユ」

ドアを開けて入ってきたのは、妹の王女ソレイユだった。走ってきたのか、白い肌が上気している。美しいウェーブを描く淡い色の金髪がゆらゆらと揺れ、強い意志を宿した紫の瞳がこちらを見ていた。

「お兄様ばかり、いつもこのような事をさせてしまって。わたくしだって、少しでも力になりたいのです」

ソレイユは一度こうと決めたら最後まで意思を貫くという、意思が強いというか、頑固な所があった。この様子では、一歩たりとも引く気が無い事は明白だ。

「しかし……」

「よからう。ヴァルサス、ソレイユ。一人より二人の方がより力となるだろう。どうか、私達の代わりにアルフリードを救ってやってくれ」

視界の片隅で、シリウスが頷くのが見えた。仕方が無い。二人である方が良いのであれば、ソレイユの力を借りよう。いざとなれば、自分が守りきってみせる。

ヴァルサスとソレイユは、今だ魔力の放出を続けるアルフリードの傍に位置すると、その冷たい手をお互い握った。シリウスが二人の意識をアルフリードへとつなぐ。

「いいですか、今からあなた方は患者の意識が存在する心理層へと下っていきます。貴方がいる所はそのまま相手を蝕んでいる原因のある場所と考えて下さい」

どこか遠くでシリウスの声が聞こえるように感じた。急激に眼の前が暗くなり、意識が落下するように強い力で引かれるのを感じた。

第34話 奇病 7 (後書き)

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第34話 奇病 8

ここは、どこだ。

ヴァルサスの目の前は、黒で埋め尽くされた空間が広がっていた。景色は黒い闇に支配されるのみで、上下左右の感覚すら覚束ない。一瞬ヴァルサスは眼が見えなくなったのかと思った。しかし、黒の濃淡や僅かな明るさが、失明した訳ではないと気付かせる。足元の闇が蠢いている。見ると、ゆっくりと泥が飲み込もうとするように、足元が黒い空間に沈んでいく。何とも言いようのない、絡みつくおぞましさを感じる黒い泥だった。

このまま足元が埋まってしまわないよう、ヴァルサスは足を踏み出し歩を進めた。足元が埋まるスピードはゆっくりであるが、足が取られて歩き難い。黒以外何もない世界で、ヴァルサスは声を張り上げた。

「アルフリード！ ソレイユ！ どこにいるんだ！」

自分の声が空間に吸い込まれていった。この空間は思ったより広いのか、声が反響しない。自分以外に音を出す物の無い空間の中で、ヴァルサスは何度も声を張り上げた。

「兄さまっ！」

確かにソレイユの声が耳に届いた。振り向くと、ソレイユが喜色を浮かべてこちらに向かってるのが見える。私は彼女の元に急いだ。

「ヴァル兄さまっ！ 良かった、わたくし一人で彷徨っているのかと思いましたわ」

「ソレイユっ。無事だったか、良かった」

ヴァルサスは自分の胸に飛び込んできた妹を抱きしめた。腕の中の体は意識だけの存在であるというのに、ソレイユは温かかった。実際に存在しているという、心強い存在感がある。どうやらどこにも異常は無さそうだ。思わず安堵の息がついて出る。

「しかし、何と暗い所でしょう。それに、この黒い泥のようなおぞましい物は一体……」

「ああ。こんな物がアルフリードの中に存在しているとは」

ソレイユが身震いしたのが分かった。ヴァルサスは、次に出かかった言葉を口にできなかった。ソレイユをいたずらに不安がらせたくは無い。まるで、魔物の放つ闇の様であるなどと。

二人はアルフリードを求めて彷徨った。一体どれほどの時間が経ったのだろう。時間の経過が曖昧で、長いのか短いのかすら分からなかったが、疲労感だけは徐々に溜まっていくのを感じた。纏わりつく黒い泥は、まるで意志を持つかのように絡み付いてくる。

微かに、視界に金色の何かが目に入った。この空間で初めて見る、黒以外の物だった。

近付くと、アルフリードが膝を抱えて胎児のようにうずくまっていた。その姿は闇に浸るかのように、腰まで闇に飲まれている。

「アル兄様っ！ 大丈夫ですよ、しっかりして下さいまし。迎えに来たんです。眼を開けて下さいなっ」

「これは……」

アルフリードに呼びかけても返事はない。抜け殻のようなアルフリードの肩を、ソレイユが思わず掴んで揺さぶるとぼんやりと目を

開いたが、その眼は焦点が全く合っておらず、ガラス玉のようだった。

「ああっ！？ 何なの、これっ」

「どうした？ ソレイユ」

「あ、頭の中につ。入り込んでくるっ」

「ソレイユっ」

ヴァルサスは肩を掴んでいるソレイユの手を引き剥がそうと、ソレイユの腕に触れたその時。

ヴァルサスの体は石にでもなったかのように動かせなくなり、頭の中に何かが侵入してくるのを感じた。眼前の景色とは違う景色が浮かび上がり、ころころと画面が変わる。

様々な声が周囲から聞こえ、それは笑嘲となり、重なっては消えていく。

「こ、これは……」

アルフリードの記憶だ。唐突に理解した。眼の前には少し若い頃の自分を含めた家族が立っている。しかし、その中にアルフリードのみ含まれていない。家族達は穏やかに談笑し合っている。声だけが、アルフリードもその場に居る事を証明していた。その中で、胸を塞がれるような感情が流れる。

苛立ち、劣等感、卑小な自己への怒り。

手の届かない、偉大な父と立派な兄。尊敬と同時に湧き上がる嫉妬。自己への未熟さに対し、くすぶる嫌悪感。

それらの強い感情に、ヴァルサスは自分が流されそうになったが、そこで抵抗する。

臣下達のひそひそと、囁く様な声が聞こえてくる。

アルフリード様ではなんと頼りない事か。現王と兄であるヴァルサス殿下はあんなにも立派であらせられるのに、それと比べてアルフリード様は。ああ、ヴァルサス殿下が王位を継いでくれれば良かったものを。

やめろ！ 煩い！ 自分だって努力しているんだ。これは自分の実力なんかじゃない。違うんだ！

兄上と僕とでは違いすぎる。なぜ、僕は兄上のようにできないんだろう。

ひととき強い思念がヴァルサスの頭を打った。嵐のようなそれを、ヴァルサスは何とか受け止め、流して行く。ヴァルサスと同じく影響を受けているであろうソレイユは無事だろうか。果たして己を保っているだろうか。これに流され、飲み込まれてはいないか？

ヴァルサスはソレイユの気配を必死で探った。途端、アルフリードの中から自分が弾き飛ばされたかと思うと、記憶の景色の中に佇んでいた。眼の前には今よりも幼いアルフリードがいる。アルフリードは驚いたような表情でヴァルサスを見ている。こちらのアルフリードは反応があるようだったが、この表情からみるとヴァルサスの突然の出現に、驚いたのだろうか？

アルフリードに重なるように、ソレイユの気配を感じた。ソレイユはアルフリードの中に引き込まれたままの様だ。

「アルフリード、お前の意識はこんな所に居たのか。探したぞ」

「……兄上？」

「ソレイユもお前の傍にいる。さあ、私達と共に帰ろう」

幼いアルフリードは顔を伏せ、視線を合わせようとはしなかった。

「嫌です。私は帰りません」

「アルフリード。私達にはお前が必要なんだ。たとえば、誰が何と言おうと」

先程のアルフリードの中で見た、記憶と感情。それらが今の事態を招き、アルフリードを苦しめる原因だろう。

「私、……いや、僕は帰らない。ここで、じっとしていたいんだ。兄上、どうして王位継承権を放棄してしまったんだ。どうして僕なんかに譲ったの？ 兄上の方がずっと優れているのは誰だって、僕にだって解っているんだ」

「アル……」

「ここは気持ちが良いんだよ。誰も何も言わないし、僕を批判しない。心地好いぬるま湯に浸かっているみたいだ。何も考えなくても良いここは、とても楽なんだよ」

「そうやって閉じこもっているつもりか？ 皆、お前を心配して目覚める事を待っているんだぞ。ソレイユだって、お前の為に命懸けでここまで来たんだ」

「……ソレイユ。兄上、二人共僕を放って帰ってくれ！ 嫌だ、このままにしてくれ！」

アルフリードの言葉に呼応するように、周囲に黒い霧が立ち込めた。そのままアルフリードを包み込もうとする。眼の前でアルフリードの瞳は徐々に生氣を失い、死んだ魚のような光の無い眼へと変わっていく。

いけない。このままではアルフリードは黒い霧に取り込まれてしまう。確信めいた考えが浮かぶ。

思わず腕を伸ばしたその時、意外な人物の声が割って入った。

「甘えないでよっ！ わたくしの自慢のアルフリード兄様は、こんな不拔けた人じゃなくてよっ！」

ソレイユの一喝で霧が四散した。アルフリードの瞳に活気が戻る。眼の前には、ソレイユが仁王立ちで立っていた。握りしめた両の拳が、ぶるぶると震えている。

「アルフリード兄様は、表には見せないけれど意外と努力家で、不器用だけど意思の強い自慢の兄ですわっ！ 周囲が何だっていうの。そんなの、勝手に言わせておけばいい。きちんとした評価は後から付いてくるもの。わたくしには分かっています。じきに、そんな言葉は出なくなるという事を」

「ソレイユ」

「私だってそうだぞ。お前の代わりは誰も出来ないし、私にだってお前のようにはなれない。お前は、私にとってかけがえのない、自慢の弟だよ」

そう言って、手を差し伸べた。幼いアルフリードはおずおずと手を伸ばしたが、力強く私の手を握った。

「兄上っ」

私はアルフリードを引き寄せると、抱きよせた。すると、ソレイユまでもが横から抱きついてくる。二人分の重みが私の体に掛かってくる。アルフリードの肩が震えているのが分かった。

「一緒に戻ろう」

「はいっ」

途端、身体が淡い光を放ち、そのまま急速に意識が引き上げられるのを感じたまま、目の前が白く染まって行った。

アルフリードの容体は落ち着いた。私とソレイユは無事意識を取り戻し、アルフリードの魔力の放出は止まっていた。

容体は日を追う毎に改善し、やがて、アルフリードはベットから起き上がれるようにまでの回復ぶりを見せている。

王都に広がる奇病の蔓延も治療法が見つかった今、次々とその数を減らして行き、徐々に落ち着きを取り戻していった。

この国は、魔族に随分と大きな借りを作ってしまったな。

私は窓の向こうに広がる、抜けるように青い空を見上げた。

第34話 奇病 8 (後書き)

今回も読んで下さいまして、ありがとうございました。

第35話 推測 1 (前書き)

今回はヴァルサス視点です。

第35話 推測 1

奇病騒ぎは収拾の兆しを見せ始めた。アルフリードやクリス、その他城内の奇病患者達の容体は安定・軽快をみせ、現在ではベットから離れて徐々に元の生活へと戻りつつある。また、国内の治療施設にもすぐさま治療方法が伝達され、直ちに対応がなされた。

また、ウィルベリングより各国へ治療方法が提供された。今まで世界各国が奇病に対しての実害と脅威に怯え、何の対処も出来なかったが、治療法が分かった事で急速に落ち着きを見せ始めていた。魔族とウィルベリングの今回の活躍は、各国へ大きな影響力を与えた事となる。今後この国の発言力が増すと共に、医術に関する技術力を買われる事は間違いないだろう。

ヴァルサスは執務室にて資料に目を通し、各部署より報告を受けていた。ひとまず、ひと段落ついたので手にしていたペンを置く。

アルフリードといえば、心に巣くっていた暗い感情や悩みは、奇病が落ち着いたと同時に随分と安定した。

まるで負の感情を黒い闇に増幅されていたかのようだ。しかし、アルフリードの奥深くにあった感情であるのは間違いない。それを見過ごす事の無いようにしなければ。いつでも手を差し伸べてやる姿勢が必要だろう。ヴァルサスは己に言い聞かせた。あとで、アルフリードの顔を見に行こうか。

現状のアルフリードは随分と回復を見せている。今では軽い執務までこなす程だが無理はさせない方がいいだろう。

また、クリスの方は仕事復帰はまだだが、自宅療養出来るまでに

回復している。

最近では、クリスの自宅でカイルの姿がちよくちよく見られるそうだ。

あの、真面目なカイルが一体どんな顔でクリスに会っているのやら。

多数の目撃証言によれば、随分と間の抜けた顔をしているらしい。そういうヴァルサスも締まりの無いカイルの顔を何度か見ているので、クリスと上手くいっているだろう事は間違いないだろう。

ともかく、ひとまずそちらについては安心できる。

しかし、現状はこのままでは済まされない。

ヴァルサスは正直頭が痛かった。

奇病と地震の奇妙な関連性や地震と共に出現した魔物達について、今後の対応を考えて行かなければならないのだが、解決策が分からない。今の所、各部署からの報告に決定的な解決策はなく、魔物に対する結界の強化を行うのみだ。

今の現状では魔物に対し、常に後手後手の対応となっている。しかし、このまま指を咥えてみている訳にはいかない。早急に何らかの対応をする必要性があった。

だが、どのように対応すれば良いというのだろうか。そもそも、一体何が起きているのだ？

急遽他種族をも加えた各国の魔物対策専門家や学者をウィルベリングに集結させ会議を開いた。しかし、各国代表の学者達がそれぞれの意見を述べたが、これといったものが無く不明点ばかりが目立った。また、地震を伴った魔物による被害は甚大で、今までに前例の無いものでもあった。

今確かに言えるのは、この奇病が魔物と何らかの関わりがあり、

おそらく魔物による精神面への攻撃であるという事だけだった。

ヴァルサスは鈍く重い頭をはっきりさせようと、書類から眼を離し大きく息を吐いた。気付かない内に随分と首筋が硬く凝っていて、重く疲労を感じる。

すると、微かに花の香りが鼻孔をくすぐった。疲れてしまった今の自分には、何とも心地好い香りだ。

小さな物音がする方を見れば、ユウがお茶の準備を整えワゴンを持って来たところだった。

「ヴァル、少し休憩したらどうかと思うの。今、お茶を淹れるからどうぞ。甘味も疲れに効くから食べてね」

心地好い香りと共にユウが現れる。今日も、彼女は変わらず日々の仕事を手伝ってくれていた。今、カイルはこの場におらず、ユウと私の二人きりだ。少しぎこちない笑顔を浮かべたユウは、慣れた手つきでお茶を淹れてくれた。

「ん、ありがとう」

ユウの気遣いに疲れた気持ちさがほころぶようだった。自然と口元に笑みが浮かんでくる。

途端、ユウは目を伏し目がちにして、お茶の入ったカップを卓上に置いた。今迄であればこちらの眼を見て話してくれるのだが、今は眼が合っても直ぐにその黒い瞳を逸らしてしまう。逸らされたユウの瞳が落ち着きなく揺れ動くのを、じっと見つめた。

それは、強引に自分の気持ちさをユウに押し付けてからの反応だった。

今までとは違う心境の変化から来るものだろう。自分を一人の男としてユウに対して意識づけた結果だが、少し寂しく感じると同時

に心をくすぐられもする。

相反するこの感情は、いつまでも保護者でいるつもりなどさらさら無いからだ。

このようにユウの態度に変化が現れはしたが、今迄通り接してくれる所を見ると拒絶されてはいないようだ。この反応だと悪感情を抱いては無いと思いたい。

「……うん、良い香りだ。これは北の産地の発酵茶か」

「そう、新しいのが手に入ったから。今年の新摘みだって」

ふくよかな香りに重くなった頭がゆっくりとほぐれていく。あっさりとした味わいが心地好く喉を潤してくれる。

ユウの視線をこちらに向かせたい。

そう頭では考えながらも気持ちとは違う言葉をかけた。自分の言葉に反応してユウの眼元がほんのり染まるのを見れば、奇妙な満足感を感じてそれで良しとする。

告げた想いに対し、ユウからの返事はまだ無い。

しかし、今はそれで良いと考えている。

ここで焦ってはいけない。決して彼女の気持ちを手放す気が無いからだ。じっくりと時間を掛けてでも手に入れる。そこに焦りは禁物であった。

ヴァルサスは首筋の凝りを解すように軽く首を揉んだ。ともすれば、急きそうになる気持ちを抑えるように。

そこへ、再び仕事の話が入ってきた。急いてしまいそうな自分の心を抑えてくれるのに丁度良いタイミングだ。しかし、ユウとの時間を邪魔されるのは、何とももどかしい気もしてしまう。

思わず皮肉に歪んだ笑みが口元に浮かんでいた。

入室の許可をすれば、ユウはその場から奥へと姿を消してしまう。代わりに現れたのは、興奮した様子を隠しきれない、野暮ったい眼鏡をかけた年老いた学者だった。普段ならばヴァルサスとは接する事の無い相手だが、依頼していた調査についてだろうか。老学者は随分緊張しているようにも見える。

その学者が持参した報告書は、以前ヴァルサスが召喚獣について調査するよう依頼した内容だった。そう、知らなかったとはいえユウについてだ。彼女の正体が周囲に漏れる危険もあるが、何も分からないままにいる方が結果的には最悪な事態を生み出しかねない。ユウについては分からない点が多すぎるのだ。ヴァルサスは調査を引き続き、密に行わせていた。

しかし、その報告内容は意外なものだった。驚いた事に古の神話に関連する内容で、今回の地震や奇病と同じような現象を彷彿とさせたのだ。

これは、一体……。

第35話 推測 1 (後書き)

今回も読んで下さいまして、ありがとうございました。

第35話 推測 2

これは一体……。

ヴァルサスの眼は、学者が提出した報告書に釘付けとなっていた。それは、召喚獣として現れたユウの姿と古代神の姿が類似していると共に、この古代神話は現状と極めて酷似していたからだ。

今、この世界で信仰されている神は、光の神を頂点とした数柱の神々で成り立っている。

しかし、この手元の報告書にある古代神話は現在の世界が創造された現代のものでは無く、滅びを迎えたとされる旧世界でのものだった。

旧世界での神は二柱しか存在しておらず、無の空間に突如誕生した神と言われている。また、現存する神の祖であるとも語られている。

この二柱の古代神は世界を創生した強大な存在であったのだが、今では忘れ去られてしまったお伽噺のような存在だ。

実際ヴァルサスはその程度位しか、古代神については知識が無い。そもそも、光の神を生み出したという遙か昔に滅びた存在など、知っている者すら少ないだろう。

この二柱の古代神は、それぞれ太陽神と月神の名で呼ばれていたようだ。

太陽神は光と英知と希望を、月神は生と死と安らぎを司る神であったという。

太陽神と月神は共に力を併せて旧世界を天地創造する。しかし、その時同時に混沌という全てを原始に還すものも誕生してしまった。

二柱の神は大地を生み緑を茂らせ、海と山に獣の生命を誕生させた。そして、様々な生命を次々と生み出したのだが、最後に旧人類を誕生させたという。大地は豊かな自然が覆い、獣は繁殖し、旧人類の文明は栄えた。

しかし、旧人類が栄える程に混沌も同じく成長を見せた。やがて混沌は大地を飲み込む程に大きく成長してしまい、旧世界へと襲い掛かった。混沌という無秩序の中で、再び世界を無に帰そうと。

地上には混沌から生まれ出た魔物が溢れた。地上の緑は失われ、獣は死に絶え大地は裂けた。

旧人類は次々と病に侵され死を迎えた。抗うすべもなく、絶滅への道を坂を転げ落ちるように急速に辿って行く。そして、全てを凌駕する程強大に成長した混沌によって、旧世界は飲み込まれ無へ帰そうとした。

これに対し、二柱の神は絶滅に瀕する世界を救うべく、混沌を滅ぼそうとする。しかし、混沌はこの時既に二柱の神と拮抗するほどの力を得ており、力及ばず失敗してしまう。

よって、月神は己自身の命と引き換えに混沌を地中深くに封じ込め、再び混沌が地上に現れないよう己の身体で裂けた大地を覆った。これにより月神の体は砕け散り、大地へと降り注いだ。すると死に瀕した大地は修復し、再び甦ったとされている。

残された太陽神は新たな神々を生み出し、再び地上に生命を誕生させた。

新たに生み出された人類、それが今の人間である。

しかし、ここで太陽神は力尽き、残された世界を新たな神々へ託すと深い眠りについたという。

ここまでが旧世界と旧人類、古代神の神話だった。

「これは、魔族に残されていた旧世界の神話です。随分と古い物で、ほとんど残存する資料のない忘れられた神話です。実際魔族ですらない者が大多数でしょうな」

報告に来た学者が貴重な資料の発見に興奮をにじませて話す。これは、今までは余り交流の無かった魔族と奇病対策を通じて接触する中で、偶然見つかった記録だった。

その記録が現状をなぞるかの様な内容であったため、急遽魔族に協力を要請し調査研究の対象となった。

「こちらがこの資料の元となった原書です」

老学者が差し出したそれは、随分と古い本だった。脆くなった紙のページをそつとめくると、乾いた音を小さく立てる。その本に記載されていた文字は古代語で、ヴァルサスには全く読むことのできない忘れ去られた文字だった。

「一部の魔族は先祖の記憶を血の中に受け継ぐそうでした。たまたま、古い血統を受け継ぐ方が記憶の断片を甦らせたため、調査の糸口になったのです」

「ふむ。しかし、この内容が現状を辿っているのならば、恐ろしい事が今後待ち受けている事となる」

「はい。ですが確証は致しかねますがな。神話とは何とも曖昧な物。その内容については一部のみの解析しかできておりませんで、現在も詳しく調査中です」

「だが、このまま見過ごす事もできないな。妙に気に掛かる内容だ。続けて出来るだけ急いでくれ」

「はい、全力で挑みます」

さらに、この月神の姿についての資料がある。

「こちらは依頼された召喚獣についての資料です。殿下の召喚獣と同一であるという確証は無いのですが、共通点が見られましてな」

月神は虹色に輝く光を纏った女神であったという。生と死を司るというように、二面性のある女神であった。命を司り癒しを施す半面、命を刈り取り容赦なく死を与える女神でもある。また、安らぎという闇を司どっていてもいた。

「ヴァルサス様。これを見れば、虹色の召喚獣は古代の月の女神である可能性があると思われます。どうも、外見他その能力に共通点が多数見られておりますしな」

「……そうか。確かに共通点が幾つかはあるようだが。今の所、これは参考までと受け止めさせてもらおう。それにしても、この古代神話はまるで、我々の現状を書き写したかのようだな。もし、これが本当に旧世界で起きた事ならば、我々に今後考えられる事は……」
「滅亡への道ですか？」

老学者は面白くもなさそうな顔で言葉を放った。

「確かに、その召喚獣が現れたこと自体、何かを予兆しているようだがとは思えませんな」

そう言い放った老学者の表情は、古代神話を否定しているようにも、恐れているようにも見えた。

報告を終えた老学者が執務室から退室すると、あとに一人残されたヴァルサスは、重い空気の中再度資料に目をやった。

ユウが用意してくれたお茶は、机の片隅ですでに冷めきってしまっている。それは、今の自分の気持ちを代弁しているかのようだ。

「ユウ、お前は一体何者だ？」

小さく漏れた言葉に返事はない。発した言葉は部屋の中を重く漂うと、虚ろに滞った。

ヴァルサスは自分の掌を何となく見つめた。その掌で、ユウを何度も抱きしめ温もりを感じたというのに、何かが指の隙間から零れ落ちて行くような気がする。

思わずぎゅっと拳を握り締める。けれど、その感覚は収まるどころか強くなるばかりだった。

それは、突如ユウが手の届かない、遠い存在であることを自覚してしまったからなのか。

この時ヴァルサスは、握りしめた拳を開く事ができなかった。

第35話 推測 2 (後書き)

今回も読んで下さいまして、ありがとうございました。

第36話 出現 1

王都は落ち着きを取り戻した。再び城下には活気が溢れ、人々の表情には笑顔が戻りつつある。奇病に罹患した人々は治療を施されて日常へと戻っていき、蔓延した奇病は、もはや手の付けようの無い病ではなくなったために、人々にとって今までのような脅威ではなくなっていた。

しかし、落ち着いているように見えているのは表面上だけの事であり、今だ人々の間では拭えない不安や恐怖が心の中に潜んでいた。それは、絶えることなく続く地震が人々の心に暗い影を落としているからだ。地震と共に、再び魔物が出現する事を恐れているのだ。

その状況は人々の不安をより強く煽りたて、様々な憶測や流言などが口々に飛び交った。その内容といえば、世界はこのまま魔物によって滅亡を迎えるのではないか。新たな魔物が出現し、奇病を越える疫病を撒き散らすだろう。地震は今以上に強くなり被害は拡大の一途をたどる。やがては魔物によって人類の住まう所は皆無となる。滅亡を迎えた国がある等と実に様々ではあったが、どれも暗く不安を掻き立てる内容ばかりであった。

不安や恐怖によってもたらされた影響は眼に見える形となって現れている。ウィルベリング国内の治安は以前より悪化し犯罪が多くなった。今では、夜だけでなく昼間でも女子供の一人歩きは危険となった。また、物価は徐々に高騰し、物資は品薄状態の兆しをみせている。

今の所、騎士達によって何とか治安は守られているが、犯罪率は日を追うごとに上昇して行く。それは、人々の不安が徐々に強くな

っている証でもあるようだった。

また、国内四方では有色の騎士団によって魔物への抵抗力と結界を強化したのだが、地震と共に魔物が出現するようになってから確実に魔物は強くなり、数は多くなっている。

この状況に有色の騎士達は、度々魔物の討伐に飛びまわる事となっていた。

ここ数日間ユウは出来るだけ治療院にいる時間を増やしていた。

ユウに出来る事といえば、治療の手伝いや傷の手当てくらいだったが、人手不足の今はそんなユウでも随分と重宝されている。今日も負傷した騎士達が何人も運び込まれて来ていた。

ユウは処置室にて、自分が責任を持って行える範囲の負傷者の手当てに当たっていた。

ここ数日間で、今までより怪我人が多く出るようになったと思う。しかも、その怪我人の何割かは魔物によって負傷した傷では無くて、明らかに人によって傷付けられたと思われる刃物や打撲によるものだった。

最近では王都や、それ以外の地域でも治安が悪くなっているようで、治安が悪化している事を何度も耳にした。ここ王城でも、どことなくピリピリとした空気が流れている。

私にとってもこの数日間はどうとなく落ち着かない多忙な日々が続いている。それは自分にとっては有り難い事だとも言えた。何故かという、忙しくしていれば色々な事を考えなくて済むからだ。ヴァルとの事と自分の気持ち、この世界での自分の居場所。そして自分自身の力や存在そのもの。

一体、私は何なのだろう。

今後ヴァルサスと、どう付き合って行けばいいのだろう。いや、ヴァルサスだけでなく異質な自分は周囲の人とどう接していいのだろう。

考え出せばきりが無い。

だから今は、考える余裕の無い状況の方がありがたかった。

処置室の外へと声を掛けると、新たな負傷者が処置室の中に入ってきた。見ると相手はまだ随分と年若い騎士で、今の自分とあまり変わらない外見をしていた。何となく騎士になりたてかと思う様な雰囲気がある。

具合を尋ねると、年若い騎士は自分の怪我をしている腕を差し出した。見れば、腕に明らかに刃物で出来たのであるう傷があった。騎士の腕に当てられた布は血で濡れそぼる程傷が深く、じわじわと滲むように血が出ている。血管が損傷しているのだろうか。

私は傷口を消毒し感染の無い事を確認すると、傷口を圧迫して止血した。

軽く精神を集中すると、体の奥から癒しの力がするりと出てきて組織を修復し、傷口を塞いでいく。後に残されたのは、赤みを帯びて少し盛り上がった皮膚だけだった。

「腕を動かしてみてください」

「あっ、はい。……痛く無い」

指示どおりに騎士は腕をゆっくりと動かした。恐る恐るだけれども腕はスムーズに動き、異常無さそうだった。

私のたどたどしい癒しの力はどういう訳か、力のコントロールがしやすいようになった。また、その力も増したように思える。今迄は力が及ばなかった傷や組織の修復が、あっさりと出来るようになっていた。その理由やきっかけは分からないのだけれど、力が使え

なかった事と何か関係あるのだろうか？ 周囲は日頃の努力の賜物だと思ってくれているので、私はそのまま否定せずにいた。

「よし、傷の当てはここまでですよ。お疲れ様でした。傷は化膿していませんが、割と深く出血もありましたから、明日も体調をみせに来て下さいね。今日はしっかり栄養を取って、休んで下さいね」

「はい。あ、ありがとうございます」

手当てを済ませて労いの言葉を掛けると、相手の騎士はうめく様にして礼を言った。その表情を見れば、何かを訴えたい様な顔をしている。痛みが強いのか、随分と疲労がたまっていたのだろうか？ 結構出血していたし、しんどいかもしれない。治療は上手く行えたと思うのだけれど。

「あの、どうされましたか？ 傷がまだ痛みますか？」

「い、いえ。その……」

次の言葉を待ってみたが、もごもごとはっきりしない。何だろうか？

すると、返事を待っている間に横からさつと声が掛かった。

「では、お疲れ様でした。出口はこちらですよ。はい、次の方どうぞ」

シリウスが処置室のしきりとなっているカーテンをさっと開いて促すように身体を開くと、騎士は結局何も言わずに退室していった。何だったのだろうか？ まあ、いいか。

私は次の負傷者を処置室へ招き入れた。

それにしても、何故かシリウスと一緒に処置をしている。彼に処置などは出来ないで雑用をもらっているのだけれど、気が付くといつの間にやらシリウスが雑用係となって傍についてくれるようになっていた。決してこちらから頼んだ訳ではないのだけれど。いいのかな？　こんな事してもらって。

どうやらシリウスはある程度の身分のある人みたいなのだ。彼には部下のような人達がいるし、周囲の魔族がそういった態度なのだ。そこは疑問が浮かぶのだけれども、自分から手伝ってくれる本人が良いというので、何となく流されるように受け入れていた。

「ユウ、これがいるんだろ？　こっちに準備してあるから」
「えっ？　う、うん。ありがとう」

何とも要領が良く無駄が無い。シリウスが手伝ってくれるのは有り難い限りなのだけれども、ときどき押されてしまう。

「何考えてんの？　僕と一緒にだと気が散る？　僕はユウの傍に居る事だけで幸せだけど、ユウが辛いのなら……」

シリウスは悲しそうに歪んだ表情を見せると俯いた。

「いえいえっ。つ、次の方どうぞ」

私はあたふたとしながら、処置にとりかかった。処置室にはとてもではないが似合わない、シリウスのニヤニヤとした笑い顔が視界に入った。またもやからかわれたのだろうか。絶対に面白がっているに違いない。私は表面上精一杯真面目な顔を作って、負傷者の治療に当たったのだった。

「よう。ユウ、今日も頑張っているな。元気にしてたか？」
「レオン！」

しばらくして落ちついた頃、処置室奥の裏手からひよいと顔を覗かせたのは、久しぶりに合うレオンだった。あの、城下での地震後に一度、ほんの僅かな時間だけ会ったけれども、後は顔を見る事が無かった。レオンは黒の騎士団副団長という立場にあるので、忙しくしていたのだろう。

「お久しぶりです。何だか、レオンと随分会っていない様な気がする」

「おう、最近は忙しくてな。王都に戻ってこれたのも昨日の夜中だったんだ」

「そうだったの。それは大変だね。レオンの方こそ、体調は大丈夫なの？」

どうやらレオンは殆ど王城にはいなかったみたい。最近では魔物が多く出現するようになってるので、当然ながらレオンも対処に追われていたのだろう。

久しぶりに会うレオンは特に、いつもと変わった様子はないように見える。少し疲れているような印象を受けるけれども、表情は穏やかだった。

「ああ。ところでユウ、こちらは？」

「あ、彼はシリウス。魔族なの。それと、彼が今回の奇病に対して治療法を提供してくれたのよ」

「へえ、君がそうなのか。俺は……」

レオンが言い終わらない内に、シリウスが遮った。

「レオンさんでしょ。存じていますよ、貴方の事は」

「へえ、そうか。俺も有名になったもんだな。よろしく、シリウス」
「こちらこそ、よろしく願いますよ」

やけに爽やかに、お互い挨拶を交わし合っている。シリウスなんて、いつもの様子はなりを潜めて、礼儀正しく挨拶なんてしちゃってるし。せめて、十分の一でいい、私にもその態度で接してほしい。

「ところで、ユウ。たまには息抜きに出かけてみないか？ 実は、ヒエンがユウに会いたがっていてな。あいつもストレスが溜まっているようで、久しぶりに会ってやってくれないか？」

「ヒエンが私に？ そういえば、ヒエンとも随分と会ってなかったかも。……そうね、都合が空けば会いに行ってみようかな」

「よし。なら、都合の良い日を教えてくれるか？ ヒエンと一緒に出掛けよう」

「うん。ありがとう、レオン」

「ふーん、楽しそうだね、ユウ」

シリウスが興味深そうに言っている。

気分転換が出来るかもしれない。そう思った私は有り難くその誘いに乗る事にした。

ヒエンと久しぶりに会える事を考えると、私は今の内から気分が軽くなるようだった。

何も考えずに楽しみたい。今の私はただ、それだけだった。

第36話 出現 1 (後書き)

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます

第36話 出現 2

「ユウ、何かあったら必ず僕の名前を呼ぶんだ」

シリウスがやけに真剣な表情を浮かべて言う。

私は迎えに来てくれたレオンと共に、ヒエンのいる厩舎に出かけようとしているところだった。自分の部屋から出て、少し歩いた所でシリウスに呼び止められたのだ。

私はシリウスの言葉に頭では随分と大げさだと思いつつも、素直に返事をした。まあ、確かに今は治安も悪くなってきたし、魔物も出現している。…けれどね。

「何かあったらって、大丈夫よ。レオンとヒエンが居てくれるから」

「そんな調子だから心配なんじゃないか。くそう、用事さえなければ付いて行ったんだけど、どうしても外せないんだ」

「そうなの？ 私のことは気にせず頑張ってね」

いや、別に付き添いなんていらなくていいでしょ。なんなの、その子供扱いは。

そこへ、一緒にいたレオンが愛想の良い表情で会話を割って入ってきた。

「ご心配無く。彼女のことは無事に部屋まで送り届けるよ。君は、心置きなく会議に出てくれたらいい」

レオンに対してシリウスは妙に爽やかな笑顔に白い歯を見せた。日頃の経験から何となく胡散臭いと思ってしまうのは、仕方のない

事だと思う。私の穿ち過ぎだろうか？

「そうですか？　くれぐれもよろしくお願いしますよ」

「それよりシリウス様、時間が押してます。お急ぎください」

シリウスの後ろに控えていた魔族がしびれを切らしたように割って入った。彼の活躍がなかったら、この会話はもっと時間を食っているに違いない。

「分っている。少し待て」

シリウスが複雑な顔をして、部下の魔族に言い放った。そのシリウスを、部下が苛ついた表情で後ろから見ているので、私の方が気にしてしまう。鋭い視線がちょっぴり怖い。

ついにシリウスの部下は実力行使に出ることにしたらしい。シリウスの両肩をがちり掴むと、そのまま引きずって行った。

掴まれたシリウスは不承不承連れられて、そのまま去って行った。なんだったんだか、今のは。

それにしても、意外とシリウスは過保護なのか、いまだに私を子供扱いしているのか。どちらにしろ、あまり良い気はしない。全く、ヴァルサスといいレオンといい、こちらの世界の男性はこのように女性を過保護にするのだろうか。

レオンに連れられて、ヒエンのいる厩舎へと向かった。ヒエンのいる厩舎はとても広く、見たこともないような騎獣の姿もあった。珍しさのあまり、ついきよろきよると落ち着きなく見ながら歩いている間に、ヒエンのいる場所までたどり着いていた。

久しぶりに会ったヒエンは変わらず大きい。けれど、前の時のように私をぶら下げられる程ではない。成長した私には、もはやその

手は効かないのだ。小さな勝利を確信した私の口元は、思わずにやりと歪んでしまった。

久しぶりに会ったヒエンは私たちの目の前で全身を使って体をくねらせたり、飛び跳ねたりしていた。それに時々短く鳴き声なんかも上げている。その姿は何となく踊っているように見えなくもない。鋭い棘のある尻尾が勢いよく上下に揺れて地面に打ち付けられている。ヒエンの足元にはいくつも穴が開いていた。

「おいおいヒエン、なんだよそりゃ。久しぶりに会えたからといって、浮かれすぎだろうが。あ？　何？　そうか。……ユウ、これは歓迎の表現なんだそうだ」

レオンが呆れたように声を掛けたけれど、ヒエンは全く気にしていないようで暫くその奇妙な舞踏は続いた。

「久しぶり、ヒエン。また会えて嬉しいよ。元気にしてた？　今日はよろしくね」

「こちらこそ、会いたかったっさ」

頭を下げて耳をぴくぴく動かしている様子は、その巨体に似合わない何とも可愛らしい。ヒエンは厩舎から出ると、胸を得意げに反らして見事な驚の翼をいっぱいに広げた。その様子はどこことなくボデイルダーがポーズをとっているように見える。ちよっぴり可笑しくて、私は思わず笑ってしまった。レオンといえば、呆れたように溜息をついている。

「お前なあ。まあいい。おい、鞍を着けるからな」

レオンの声にヒエンはつんとした表情で返した。耳をぴよこんと伏せたので、了承したのだろうか。

鞍をつけ終わると、ヒエンは背中に乗り易いようにその場で姿勢を低くして、私を見た。どうやら背中に乗れって言うてくれたみたい。

「ユウ、ヒエンの背中に。さ、手をかしてみろ」
「よいしょっ。うわっ！　ありがとう、レオン」

ヒエンの背中に乗ろうと私は鞍に手を掛けた。ぎこちない私の動きを見たレオンが手を貸してくれ、ようやく私はヒエンの背中に乗れた。

ヒエンの鮮やかな黄色と赤橙色の毛皮は、さらさらとしていて指通りよく心地良い。微かに獣ならではの匂いがして、ヒエンの体温と共に肋骨と背中が呼吸の度に動いているのが伝わってくる。

続いてレオンが私の後ろに身軽な動きで飛び乗った。私の体はレオンの体に背中を預ける形で、しっかりと支えられている。

「よし、ユウいいか？」
「大丈夫」

その言葉を合図にヒエンは一度、尻尾で地面を打つと立ち上がった。予想していた以上にヒエンは結構背が高い。

私が思わず小さく声を漏らすと、レオンが逞しい両腕を私の体に廻してしっかりと支えてくれた。ヒエンの温もりとは違うレオンの体温を背中に感じながら、ヒエンに乗せられた私は空へと舞い上がった。

第36話 出現 2（後書き）

今回も読んで下さいまして、ありがとうございました。

第36話 出現 3

私達を乗せたヒエンは王城の召喚獣専用門から飛び出すと、空中を駆け上がるように四肢と翼を動かしながら一気にぐんと高度を上げた。あっという間に視界は空の青で埋め尽くされ、見下ろせば王城が湖の中にたたずんでいる。その高さに、私は思わずヒエンのたてがみにしがみついた。

王城はみるみる遠ざかり、代わりに貴族たちの居住区が見えてくる。初めてヒエンに騎乗した私は緊張と恐怖で固くなってしまったけれど、その間にヒエンは悠々と貴族の居住区を通り越していた。私の背中側からは、安定して騎乗できるようにレオンが体をぐっと深く支えてくれている。時々声を掛けてくれるので、強い安心感があった。

青く晴れ渡った空に魚のような形をした白い雲がゆっくりと流れていく。青空に白い雲が悠々と流れ、かすかに風を感じる。気温は心地よく秋くらいの気候だろうか。

ああいうの、鰯雲っていうんだっけ？ 元の世界で見えるような雲が広がっている。元の世界でならば、明日の天気は崩れているだろう。

私はようやく気持ちに余裕が出てきたので、周りの景色を恐る恐るだけれど眺める事が出来始めた。

見上げると、まぶしい太陽の光が目にし込んできて、私は両目をすがめて伏せた。足元を見るのはまだ少し怖いんだけど、後ろからレオンがしっかりと支えてくれているので不安はない。また、ヒエンも気を使って飛行してくれているようなので、揺れはほとんどなく穏やかな飛行だった。

視線を下ろすとおもちゃのように小さくなった街並みに、人形の

ように可愛らしい人々がちよこちよこ動いている。城下の街並みは整然と建築されたように並んで見え、白い土壁はまるで街全体を白く化粧したかのように見せていた。

ヒエンが背中の大きな翼を悠々と羽ばたいた。左右の翼が力強く上下すると、ヒエンの背中の筋肉がしなやかに波打つ。孕んだ風が翼を抜けて私の頬を強く撫で、風を切る音と共に私の髪の毛を攫っていく。風は心地よく吹き抜けて、目の前に見えるヒエンのたてがみをいたずらに弄った勢いで、私の少し高くなった体温を程良く攫っていった。

城下の時計塔が眼下に見えてきた。吊るされた鐘が陽光を浴びて、金属の輝きを放っている。距離が近付いてくると、ヒエンの気配を感じ取った鳥達が一斉に羽ばたいて逃げていく。

こうやって城下を見下ろすのは、この王都に來た時と併せて二度目だった。城下は前回と変わらず、賑やかな活気に溢れていた。

「どうだ、ユウ。寒くはないか？」

その問いで、私は心地好い熱を発散するレオンの体温に気が付いた。私の体はレオンの温もりで程よく温められている。その、逞しくて少し固く感じる筋肉質な体や腕で。

いつの間にかこんな事になっていたなんて。突如暑くなって動機がした。視界が急激に狭まって感覚が鋭くなった気がする。こんなに体を密着させていたとは。伝わってくる微かな息使いや僅かな体の動きまで、はつきりと感じてしまう。駄目だ、恥ずかしくて居心地悪い。

「いいえ。むしろちょっと暑いくらいかも」

「そうか。今日は天候が良いし、日差しが強いかもしれないな」

私がレオンの腕の中で少し身じろぎすると、レオンは廻した腕を僅かに緩めてくれた。それでも、私の体は熱を持ったままだったけれど。

やけに心臓の音が大きくなっている私だったけれど、レオンには胸中が表に出ないように意識しながら何気なさを装って話かけた。

「空からこうやって城下を見る事が出来たのはこれで二度目だけだ、本当に綺麗な街並みね」

地震と魔物の襲撃によって被害を被った場所はどうなったんだろう？　ここからでは確認できそうもなかった。

「ああ、ここの景観は観光としても有名なんだ。そうか、共に王城に越してきた時以来だよな。あれから随分経ったような気がするが、実際はまだそんなに無いよな」

「こっちの世界に来てから色々とありすぎて、あつという間に時間が経ったようにも、まだ日にちがあまり経ってないようにも思えて実際混乱してる」

「そうだよな。ユウにとっては初めての慣れない場所で、あり得ない経験をしているんだよな」

「ねえ、レオン。この間の地震と魔物の騒ぎの後、この城下は大丈夫だったのかしら？」

「それについてはだな、ほら、見えるか？　この間の騒ぎで出来た跡がまだあちらこちらに残っている。怪我人についてはユウの方が詳しいかもしれないが、混乱していた治療所も今は落ち着きを見せているようだ。とりあえず、再び魔物が出てこないよう処置を施してはあるのだがな」

そう言われて良く目を凝らしてみると、確かに地震や魔物によってできた地面の亀裂や建築物の破損が分った。修復が済んでいる所もあるようだが、現在修復作業をしている場所もまだあった。

「なあ、ユウ。魔物の動きが活発で無く安全な状況だったら町の外へ遠出するところだが、今は危険だからな。外壁の中で過ごそう」

レオンの声が私の頭の上から聞こえた。頭頂部にレオンの顎だろうと思われる固いものが話す度に触れている。私がレオンに言われるまま頷くと、レオンはヒエンにどこかの場所を指示した。

ヒエンが降り立ったのは、町の少し外れにある庭園だった。少し開けたその場所は騎獣も入る事が許可されている場所らしく、主人に連れられた騎獣らしい生き物がちらほら見える。街中では、場所によっては騎獣の立ち入り禁止区域もあるそうだ。私はこの庭園に来たのは初めてで、そもそも、このような場所があることすら知らなかった。外壁に囲まれた地域であるにも関わらず、なんと広い事だろうか。

ヒエンに礼を言うと、得意げに胸を逸らして再びあのポーズをした。見た目とは裏腹に、なんとも可愛らしい。思わず体を撫でると気持ちが良いのか、目を閉じてしっぽをゆらゆらと揺らしている。

「ユウ、そのくらいにしといた方がいいぞ」

その声で、目の前に大きな舌が迫っているのに気が付いた。さつと後ろに身を引いてかわす。

間一髪、危なかった。レオンが声をかけてくれなかったら、今頃は涎まみれになっていたかも。ヒエンが舌を出しっぱなしにしたまま、しっぱをぴんと立てた。

「なあ、奇病騒ぎでは大変だったな。あのクリスがまさか罹患するなんて、思いもしなかったよな。まったく、治療者側の立場だからこそ自分の体にも気を使わないとな。ユウは大丈夫だったのか？ 忙しくて会う暇がなかなか無いが、無理してないといいんだが」

「ううん、私は大丈夫だよ。ありがとう、レオン」
「本当か？」

唐突にレオンが穏やかな口調で言った。その言葉に、私は思わずどきりと身を竦めそうになった。

「いつもと少し様子が違うが、何か変わった事でもあったか？」
「えっ。……どうして？」

口調は穏やかだけれども、針の先端のように鋭く感じた。私に向けられたレオンの緑の瞳はどこまでも真っ直ぐで、内心を見透かされているかのよう。

一瞬のぴんと張ったような空気と沈黙が辺りを包んで、緑の視線が心の中まで入り込んでくるような気がした。

第36話 出現 3（後書き）

今回も読んで下さいまして、ありがとうございました。

第36話 出現 4

「いつもと少し様子が違うが、何か変わった事でもあったか？」
「えっ。……どうして？」

その問いは、今の私にとって針の先端のように鋭かった。核心を突いた問いに、自分の口がただ固まったままでとっさに言葉が出てこない。

何と答えようか。焦っている間に、レオンの方から視線を逸らした。

口からほっと溜息が出ていた。私は知らず小さく息を吐いていて、気付けば空気は緩くなっていた。

「いや、ユウは考えている事が表に出やすいからな。なんとなく、難しい顔をしているように思っただけなんだが」

「そんな表情をしたの？ やだ！ 心配させるような事は、何にも無いのに。ただ、今までに色々あったから疲れてただけ」
「そうか？」

ちらりと向けられた視線は疑わしそうだっただけで、レオンはそれ以上何も言わなかった。

納得してくれたのかな？ 確かにそれは嘘ではなかったので、信憑性があったのだろう。

「レオン、ありがとう。心配してくれたんだ」

「ん？ ああ。俺はいつだってユウの力になる。だから小さい事でもいい、遠慮なんかしないで何でも相談してくれ」

「うん」

それにしても、こんな風に何かと私の事を気遣ってくれるレオンの存在が有り難い。その心遣いが伝わってきて、胸がほんわりと温かくなる。

自然と顔が綻んでいた。ただ、嬉しかったから。そんな私の指先を、しっとりとした何かが触れた。慌てて見ると、ヒエンの舌がちょんとちょんと窺うように触れていた。

「もしかして、ヒエンもなの？ フフ、ありがとう」

今度ばかりは涎も気にならない。私はお返しに、ヒエンの顔をゆっくり撫でた。

「お前、結局目標を達成したかったんだろ。どうしても舐めたかったんだな」

ぼそりと漏れたレオンの声に、ヒエンは反応しなかった。……絶対聞こえてると思うけどね。

ヴァルサスの事は、今考えてみても何も分らない。だったら今は、もう少し待ってくれないだろうか？ 簡単に返事をする事はできる。でも、今の私は現実を受け入れる心の準備が出来ていないのだ。いっぱいいっぱいで、溺れてしまいそう。私が何とか現状を受け入れているのは、ヴァルサスやレオン、それに周りの人たちが温かく受け入れてくれたから。けれど、その状況が変化してしまったら、今までのように出来る自信など全く無かった。

私はこれ以上考える事をやめた。今は、レオンとヒエンと一緒に過ごす時間を楽しもう。

「それにしても私って、そんなにしやすいかな」

そんなに分り易く態度に出ていたのだろうか。だとすれば、なんともお恥ずかしいったら。レオン以外の他の人にも伝わってないといいけれど。

そうか、今回レオンは私を心配して誘ってくれたのかな？ でも、先日久しぶりに会ったばかりだったのに、その少しの間で気付くレオンの観察眼は凄いよね。

それから、今までに見た事もない花や植物が咲き誇っているこの庭園を散策した。異世界ならではの文化と不思議な美しさを楽しんで、二人と一匹でいる時間を満喫した。その間、私達とすれ違う人の大抵が、ヒエンを見ては驚いていた。ヒエンのような騎獣は珍しいようで、その反応を見るだけでも面白かった。

ほんの束の間だけでも、今はヴァルサスとの悩みを忘れる事ができた。たとえそれが、逃避だとしても。

「お、この匂いは。懐かしい、久しぶりに食ってみるか。ユウもどうだ？」

「匂い？」

そう言うと、ずんずん先に歩いて行く。レオンの後について庭園から出ると、街道沿いに露店が並んでいた。お客で賑わっている露店からは香ばしい匂いが漂ってくる。レオンお目当ての店の前には、何人かの客が並んでいる。

「ヒエンと一緒に少し待ってろよ」

程なくして差し出されたのは、片手で気軽に食べられるスナックのようなものだった。食べてみると、フライドポテトのような味と食感がする。上からかけてある甘辛いピリッとしたソースがアクセ

ントになっていた。

「あ、美味しい！」

「だろ？ ほらヒエンにもあるぞ」

そう言って差し出されたのは何かの肉の串焼きだった。ヒエンは木製の串を気にせず、串ごとバリバリ食べてしまった。うん、なかなか迫力ある食べ方だった。

満喫した私達は、王城へ戻ることにした。

レオンがおいでと言うと、私をヒエンの鞍に乘せてくれる。私は少し恥ずかしく思いながらも、自然と身体を預けていた。背中にレオンの温もりが伝わってくる。私は今までより、ずっとレオンとの距離が近くなったように感じていた。レオンの腕が私をやさしく包み込んでくれると、若干の恥ずかしさと同時に安心感が心に広がった。

ヒエンの背に乗って王城を目指す。太陽は沈みかけ、夕日が空を紅い血のように染めていた。何だか不気味な色。体に感じる風はじつとりとして、湿気が纏わりつくよう。

「何だ？ この音は」

「音？」

耳を澄ますと微かに聞こえる何かの音。
何だろう。地鳴りのような。

「まさかっ。これは！」

突如それは爆発したかのように大音響をたてた。爆音は衝撃となつて私の身体をずしんと襲い、地響きが轟く。

ヒエンの体が上下に揺さぶられ、身体が不安定に浮きそうになる。ヒエンが咆哮した。

「きゃあああ！」

「ユウ、しっかり掴まってる！」

会話すらまともにできない。地上はもうもうと土煙が上がり、体を突き上げるような重低音と共に大地が二つに裂けた。

建物は倒壊し、深い地割れに建物もろとも人々は飲み込まれていく。大地と人々の悲鳴が空間を満たし、上空まで届く。

そして、裂けた地面の中からは黒い霧がもうもうと噴き出し、地上は真っ黒に覆われていった。

第36話 出現 4 (後書き)

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第36話 出現 5

大地が悲鳴を上げながら真つ二つに裂けて行く。裂けた大地には瞬く間もなく人も建物も全てが飲み込まれて消えてゆく。時計塔は崩れ落ち、今まで居た庭園は跡形もない。傍にあった露店が次々と亀裂へと消えて行くのをただ何も出来ないまま、私達は上空から見つめていた。

「そ、そんな。嘘でしょう？」

さっきまで私達が過ごしていた場所は跡形もなく、町の一部は一瞬で飲み込まれてしまった。あるのは底の見えないほど深い大地の亀裂だけ。ぽっかりと空いた深い亀裂の底からは、気味の悪い唸り声のような音が響いてくる。窺ってみても延々と続く裂け目は底が見えない。不気味なまでに、深く闇が凝っているかのよう。これだけ深ければ、飲み込まれてしまった人々は助からないだろう。

ぞくりと、冷たく怖気のある気配が全身を覆った。まるで、前回の地震のときのように気持ちの悪い何かが。

「いかんっ。これは前回と同じ気配だ。ヒエン、全力で城まで飛べ！」

レオンもこの気配を感じたのか、鋭い声で指示を出した。

ヒエンは一気に加速した。弾丸のような速さで急発進し、私の身体は後ろのレオンに強く押し付けられる。素早くレオンの片腕が私の腰に廻されると、しっかりと包み込まれた。

王城にいる皆は大丈夫だろうか。ヴァルサスは？　お願い、どう

か無事でいて。

私はひたすら祈るばかりだった。

風を切る音が悲鳴のように聞こえてくる。空気が痛いくらいに震え、耳鳴りがしてくる。全身の皮膚が焼けるように痛い。視界がぐるぐると回ってめまいが起き、頭の中で激しく警鐘が鳴っていた。頭の奥で何かの記憶の断片がちりちりと掠めるけれど、それに手を伸ばそうとすると、するりと霧散してしまう。

大地を分断するほどに巨大な亀裂から黒い霧が噴き出した。その量は前回の比では無く、あっという間に広がると視界は黒で覆われてしまった。先ほどから感じる嫌な気配も比例してどんどん膨らんでいき、このまま私達を飲み込んでしまいそうだった。

私達は急ぎ王城へと戻った。王城は地震の被害からは免れていて、心配をよそに無事存在していた。

「城の結界は持ちこたえたか」

レオンがほっとした声を出した。前回の騒ぎを受けて、結界を強化していたらしい。

騎獣専用門からヒエンが滑るように入っていくと、入れ替わりに騎獣に乗った騎士達が隊列を組んで慌ただしく出発していく。

次々と騎士達が飛翔して行くなかには、グリフィンの他、ペガサスやユニコーン、バイコーンもいた。

アーチ状になった回廊を抜け、召喚獣専用の発着場にヒエンは降り立った。その場には武器と鎧を着け武装した騎士や救急用の荷物を持った治療士が、次々と集まっては騎獣に乗って発着場を出ていく。その様子はまるで戦場にいるかのような、緊迫したものものしい雰囲気だった。

その中ですれ違った一人をレオンが呼び止める。

「おい、殿下はどちらにおられる？」

呼び止められた騎士は一瞬驚いた表情をしたけれど、すぐに敬礼して答えた。

「これは、レオン副団長。殿下は正門にて指揮を執っておられます」

「そうか、呼び止めてすまなかったな」

「はっ、失礼します」

騎士は騎獣に飛び乗ると、隊の後を追ってすぐに飛び立った。

この時の私には、ヴァルサスの事しか頭になかった。ヴァルサスが指揮を執っているという事は無事でいるのだろうけど、この目で姿を見るまでは不安でならなかった。

広い城内を正門目指して急いだ。色鮮やかなタイルで装飾された長い回廊はいつもは静まり返っているけれど、今は人が慌ただしく行き交っていて進み難い。私達は人をかき分けるように進み、天井が巨大なアーチ状になっている大広間を幾つも抜けて、正門前に漸く辿り着く。

鎧姿に帯剣をしたヴァルサスが正門前の大広場にいた。傍にはカインもいる。ヴァルサスは私達が大広間に入った時点で、まるで背中に目が付いているかのようにこちらを振り返った。けれども、私はそんな事に疑問を感じる余裕など全くなくて、気付けば必死でヴ

アルサスの元まで走りだしていた。

ヴァルサスはカイル他、周りにいる人達へ何か告げると、こちらへ向かってきた。その表情は鋭く引き締まっていて、握りしめた拳が一瞬白くなった。

「ユウ、無事だったか！ 怪我はないか？」

「ヴァル！ 良かった、王城は無事で」

「レオンも共に無事だな」

私はヴァルサスの声を聞いた途端、膝から崩れ落ちそうになった。視界がぼやけて歪んでいく。一瞬ヴァルサスの腕に手を伸ばして縋りつきそうになったけれど、自分の体を叱りつけ何とか立つ。

今はヴァルサスの事で悩んでいたなど、頭から吹き飛んでいた。とにかく無事でヴァルサスが居る。それだけが全てだった。

レオンもヴァルサスの傍に寄り、言葉を交わすと状況報告を始めた。私達の周りでは、慌ただしく人が立ちまわっている。傍にいる司令官から続々と指示がなされ、新たな状況報告を携えた騎士が次々と集まってくる。

「こちらは無事なようです。城下は市民区域が地割れに襲われ、貴族区域も地震による建物の倒壊が起こっています」

「ああ、結界を強化していたからな。王城内の者は全員無事だ。しかし、外は耐えきれなかったか」

「予想をはるかに上回る状況です。広範囲に及んで出現した黒い霧も、この目で確認しました。このままでは、被害は恐ろしい事になります。王都は魔物に蹂躪されてしまうでしょう」

「まさに未曾有の危機か」

「ええ。これを超えなければ、明日は無いでしょう」

次々と報告を受けたヴァルサスは、周囲に命令を発した。

「状況報告を怠るな。騎士達は民間人を直ちに城内へ避難させろ！これは、自然発生した単なる地震では無い。必ず魔物が出現する。よいか、決して油断してはならん」

「ユウはレオンと共に避難してくれ。頼んだぞ、レオン」

「はっ、お任せ下さい」

「ヴァルも、気をつけてね」

「ああ。また後で会おう、ユウ。待っていてくれ」

ヴァルサスは己の責任を果たすべく、再び指揮へと戻った。

「決して王城内に魔物の進入を許してはならない。一人でも多くの人命を救助するのだ！」

背中ではヴァルサスの言葉を聞きながら、私達は避難場所へと向かった。

胃がきゅっと縮こまって、重たくなるのを感じながら。

第36話 出現 5（後書き）

今回も読んで下さいまして、ありがとうございました。

第36話 出現 6

深い谷間から噴き出した大量の黒い霧からは、次々と魔物が出現した。広範囲に及ぶ霧はおびただしい数の魔物を出現させ、城下は瞬く間に魔物で溢れかえった。

住民は何の心構えも無く突然の事態に、為す術もなく魔物に襲われ命を落としていく。また、地震によってできた亀裂や建物の倒壊に阻まれてしまい、人々の避難はより困難を極めた。何とか一命を取り留めた者も、突然現れた魔物によって次々と命を散らしていく。今や城下は地獄と化していた。

「ユウ、急ぐぞ」

「はい」

私はレオンに連れられて、王宮の中央部分より奥にあたる場所へと移動していた。この場所には、私達以外にも女子供老人などの非力な者達や戦えない者、一般市民なども誘導されていて、隣の大広間では、怪我人に対処できるよう治療の準備が整えられていた。

皆、動揺と恐怖を隠しきれない。まだ状況を把握できない者もあり、この場所は不穏な雰囲気包まれている。ざわめく人々の中には、城下に家族や友人、恋人が居る者も数多くいて、動揺を怒りに変えて周りに当たる者さえいた。

この中にフランはいるのだろうか？

私はざっと見渡してみたけれども、フランの栗色の頭に侍女服姿の女性は見当たらない。人でごった返すこの場所では、フランの姿

を確認する事はできなかった。

私達もこの中で過ごすのだろうか。そう思っていたのだけれど、レオンはさっさとこの場を通り過ぎていく。

「ユウ、我々はこっちだ」

私はレオンの背中を慌てて追いかけた。

広間の脇を怪我人が何度も運ばれていく。避難場所である大広間の、さらに奥へと入って行った。

治療スタッフが働いているのに、私だけこんな風に避難してもいいのだろうか？

そんな思いを抱えながらも、私は言われるがままレオンに付いて歩く。

「レオン、私も怪我人の手当に……」

「あっちは任せておくんだ。ユウはこちらへ来てくれ」

優しい口調だったけれど、有無を言わさぬ雰囲気があった。レオンは私の腕を軽く掴むと、そのまま先へと急いでいく。

避難場所である広間を通り越して奥へと向かうと、少し急な階段を昇る。石でできた階段は足音が響いて気持ちが悪く落ち着かない。追いついてられるように階段を通り過ぎると、重厚な木製の扉が現れた。レオンは躊躇わず両手を取っ手に掛けると、扉は重々しい音を立てて内側へと開く。

まず、赤い色彩が目飛び込んできた。それは足元に広がる鮮やかな絨毯で、毛足の長い絨毯の上にはゆったりとした椅子やテーブルなどの上品な家具が配置してあった。ここは、一般人以外の高貴な人物が過ごす部屋なのだろう。

私達が部屋に入ると、奥の方から言い争う声が聞こえてきた。

「よせ、止めるな。放せ」

「なりませんぞアルフリード殿下！ お待ちくだされっ」

「僕も城下へと向かう。もう体調は戻っているんだ。このまま、魔物に襲われているのを指をくわえて黙って見ている訳にはいかない」

「何をおっしゃいますか。まだ体調が万全ではない貴方が出ていて、どうなるというのですか。それこそ、もし殿下に何かあれば……」

中ではアルフリードが臣下の老人と揉めていた。興奮した様子のアルフリードは、老人に行く手を阻まれている。

「これは、アルフリード殿下。一体どうなされたのですか？」

「レオンか！ 丁度いい所に来てくれたな。お前からも、じいに何とか言ってくれっ」

「いいえ、殿下こそいい加減諦めて、大人しくして下され」

「何が諦めろだ！」

「お兄様。そのくらいになさったらいかがですか？ ホルストのような老人を困らせるものではありませんわ」

そこには絹糸のような髪を結い上げた少女が立っていた。背筋をぴんとのばした後ろ姿は凛々しく、その外見から判断する年には似合わないくらい、妙に威厳があった。

「今出て行くよりも、私達にはここを守るという重要な役割があるではありませんか。いざとなれば、我々がここに居る人々を守る盾とならねばなりません」

少女の言葉にはっとした表情を浮かべたアルフリードは、そのまま大人しくなった。

どうやら少女の言葉が堪えたようだった。

「ソレイユの言うとおりだな。済まない、ホルスト。無理を言ったな」

「……殿下。お分かりいただけましたか。しかし、なんと勿体ないお言葉」

ホルストと呼ばれた老人は眼を潤ませて、全身を震わせている。アルフリードとホルストはがっちり手を握り合っていた。

私達がぼんやり眺めていると、少女の淡い金髪の頭がこちらを振り向いて、紫色の大きな瞳が私達を捉えた。

「レオン、貴方は無事だったようで何よりですわ。後ろにいらっしやる、そちらの方は？」

「ソレイユ王女、お変わりない様子で何よりです。彼女はユウと申します」

「初めまして、王女様」

「あら、貴方がユウでしたの？ わたくしはソレイユ。兄のヴァルスが傍に置いている女性と伺っていたものですから、一体どんな方かと想像していたのですわ」

「そ、そうですか」

「レオンに任せるなんて、兄は随分と貴方を大事にしているのね」

ソレイユは一体どんな風に聞いていたのだろう。ちょっと気になっってしまった。

この部屋には城内の様子が上から見えるように、小さなバルコニ

ーが付いている。ソレイユとアルフリードがバルコニーへと出ると、外の様子を窺っている。

私は二人の後ろから周りを見渡した。すると、この城全体が結界で覆われているのが分かる。その結界の向こうからは、怒声や大きな爆音が響いてきて、魔物がそこかしこに存在していた。

「何と。……これ程の数の魔物が出てきたとは」

「ええ、今までにない凄い数ですわ。ここが魔物に襲われる様な事態にならなければ良いのですが」

ここに魔物が侵入するという事は、最悪の事態を迎えたという事だろう。今は、至る所に魔物がいて、この城以外に逃げ場は何処にも無い。もしも、結界が破られたのなら、外を守る騎士団達は壊滅し、この城の人々が危機的状况に追い詰められた場合だろう。

上空に黒い影が幾つも飛んでいる。あれは、ワイバーンだ。他にも見た事の無い魔物がうようよしている。

これ程の魔物の数があるなど、大丈夫なのだろうか。ヴァルサス達は無事だろうか？ 不安で胸が締めつけられる。

突如、鋭い金属的な音が空気を震わせた。上空に大きな紋章が浮かび上がり、そこから白いドラゴンが突き出てくる。

視界が光で一瞬埋め尽くされ、轟音が響き渡った。白い光に埋め尽くされ視界を奪われる。耳に痛みを感じた時、空気の振動で体がビリビリと震えた。

視力が戻った時には、うようよと上空を飛んでいた魔物達は一掃されていた。

「凄いな。あれはハクオウか。ヴァルサス殿下だな」

「兄上のハクオウにかなうものなど存在しない。ハクオウならば…」

∴
」

けれど、それも一時の事だった。黒い霧が一層その密度を増すと、再び上空には魔物の影で黒く覆い尽くされていった。

第36話 出現 6 (後書き)

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第36話 出現 7

魔物達の鳴き声だけで、他の物音はかき消されてしまったかのよう。

魔物はハクオウから攻撃を受ける以前よりも、圧倒的にその数を増やしてしまった。群れて蠢く魔物の羽ばたきや鳴き声は、耳に煩い程で不快感が募っていく。

黒い霧と多数の魔物により日差しは遮られて陰ってしまい、夜の闇の中にいる様な暗さが辺りを包んでいる。気味の悪い鳴き声に夜のような暗い景色は、まるで王都が魔界にでもなってしまったかのような気持ちにさせられた。

「嘘……」

「ありえない。なんて事だ」

驚愕の声をアルフリードとソレイユが漏らした。

ソレイユのバルコニーに置かれた細い手が小刻みに震えている。

表情には先程までのゆとりは微塵も無くなっていた。

アルフリードの方はその眼を一杯に見開いて、顔色を失っている。二人共、今までには無かった動揺と、恐怖のない交ぜになった表情を晒している。

「これは、一体何がどうなっているんですか？　このような事態なぞ、今までに見た事がありませぬ」

ホルストが震えながら漏らした言葉は、この場にいる全員が抱いているものだろう。

「この数はあまりにも異常だぞ。あの亀裂から湧いて出た、黒い霧

から出てくるようだが」

「倒しても倒しても、次々と湧いてくる。このままでは、我々人間は圧倒的に不利じゃないか」

この部屋のバルコニーからは、城内だけでなく城下の街並みも眺望できる。いつもなら、その眺めは城の周囲を満たす美しい湖が見え、その向こうには城下が広がっている筈だった。けれど、今私達の眼に映っているのは、黒煙を至る所から上げる倒壊した街並み。裂けた大地の周りや壊れた街中を魔物達が蟻のように這いまわっていて、上空にも魔物が飛んでいる。騎士達の儲けた防御線の内側には、列をなして避難をして来た市民が次々と王城へ逃げ込んで行くのが見えた。

城下では、防御線を守る騎士達が絶えること無く果敢に召喚を続け、連携を組んで攻撃をしている。

シルフやサラマンダーや見た事も無い召喚獣が、次々と姿を現しては一斉に魔物達へと攻撃を放つ。

放たれた力は、周囲の石畳や建物を巻き込み瓦礫へと変え、魔物達を蹴散らして行く。

爆発音と共に赤々と燃える大きな火柱が何本も上がった。炎の竜巻が地上を舐めるように這い、魔物を一瞬で炭化させる。それは、見ているこちらまで熱が伝わってきそうな威力だった。

また、上空ではかまいたちが飛行する魔物を鋭く切断し、血の雨を降らせている。血生臭い匂いが風に乗って漂ってきそうな程だ。美しかった街並みは、いまや見る影も無くなってしまった。

騎士達の容赦無い攻撃により魔物は次々と退治されていく。けれども、魔物はその数を一向に減らしていく気配がない。それどころか次々と現れる魔物の数に押されて、騎士達は防戦一方となっているように見える。

「この勢いでは、防御線を突破されるのも時間の問題だな」

「レオン！ そんなのって」

レオンの言葉が示す通り、圧倒的な魔物の数によって遂に接近戦となってしまう。戦場は混戦して行き、こうなれば魔物の持つ特殊能力や破壊力は圧倒的で、騎士達は太刀打ちできない。血反吐を撒き散らしながら、倒されて行く騎士達は戦闘不能へ次々と陥り、死者を累々と積み重ねていく。

レーザーのように光線が上空から地上へと縦に走った。魔物達を瞬時に蒸発させ、黒い空が裂ける。爆発が線状に起こると、ぐらぐらと私達の足元まで揺れた。上空からのハクオウの攻撃だ。その上空でも激しい攻防が繰り広げられている。カイルのグリフィンや、ヒエン以外のマンティコアの姿も見える。騎乗したカイルや騎士達が剣を振るい、召喚をしている。騎獣達は炎を吐き、切り裂き、噛みついていた。

「ハクオウがもう一度、あの攻撃をすれば。何とかならないの？」

「いや、ハクオウのドラゴンブレスは連射が出来ないんだ。一度使うと次のブレスまで、溜めの時間を取る」

「……もう、ここに魔物が押し寄せてくるのも時間の問題ですわね」

ぽつりと、ソレイユが呟いた。その声は小さなものだったけれど、はつきりと私の耳には届いていた。

「わたくし、下で魔物を迎え撃ちます。たとえ結界が破壊されたとしても、父上が率いる部隊がいますわ。大丈夫、父上はお強いです。すぐにここまで魔物が押し寄せて来ることはありませんわ」

「よせ、ソレイユ。お前はここに居るんだ。僕が出る」

「いけません、アルお兄様。大丈夫、わたくしだって王家の血を引

く者。こう見えて、わりと召喚は得意ですの。ですから少しは戦えるのですよ。それに、腕の立つ部下を連れて行きますわ」

そう言うと、ソレイユは一度も振り返らずにこの部屋から姿を消した。

部屋から出て行く時、ソレイユの堅く握りしめられた拳が震えているのが分かった。けれど、その後ろ姿は毅然として、とても美しかった。

突然、何かが衝突した様な大きな重低音と共に、私達のいる建物が揺れた。いや、王城自体が揺れていたのだ。慌てて外を見ると、ゆらゆらと結界が揺らいでいる。またも続けて、先程よりも大きく揺れた。

「きゃああっ」

「うわっ」

激しい揺れに、その場に居た全員の体が床へと投げ出された。私の体は、素早くレオンが受け止めてくれていた。

アルフリードとホルストが床から体を起こしている。二人共怪我は無さそうだった。

「結界がつ。このままでは破壊される！」

「くうっ。この様な時が来る事態なぞ」

「ここまでか」

レオンが私を抱えながら言った。新緑の瞳が私を真っ直ぐ見つめている。

「いいか、ユウ。何があってもお前は俺が絶対に守ってやる」

「レオン」

私は頷いた。気付かない内にレオンの服を握りしめていた。まるで、子供のように。私は今の現状に強い不安を感じていたのだ。何も出来ない無力感と、再び経験する事になるだろう、死への恐怖を。ヴァルサスはどうなったのだろう。ハクオウが飛翔しているのが見えるから、生きているだろうとは思う。でも、どんな状態かは分からない。それに、他の皆や騎士達は？

怖い。お願い、どうか無事でいて。

私はどうしたらいいの？ 今の状況で、こんな私に何が出来るというのだろうか。私の癒しの力など、たかが知れている。それに、あの大きな力だって、まるで最初から存在しなかったみたいに使えないのに。

ガラスが破裂したような大音声が響き渡った。大きく王城全体が揺れ、城を覆っていた結界は遂に跡形もなく消滅してしまった。

慌てて外を見れば、魔物が城内へと一気に押し寄せようとしているのが見えた。

第36話 出現 7（後書き）

今回も読んで下さいまして、ありがとうございました。

第36話 出現 8

結界は魔物の攻撃に耐えきれなくなり、私達の目の前から消滅した。

甲高い、ガラスが砕けた様な音が響く。

無防備になった王城には、魔物達が一気に攻め込んできた。

「魔物が侵入してきたっ!」

「王の部隊と戦闘が始まったようだ」

爆発音が合図となったように、雄叫びと剣戟の音が聞こえ、魔物の咆哮が響く。地響きのような重低音が何度も響き、城の一角が吹き飛んだ。

戦闘を回避した魔物が、城中を我が物顔で這いまわっているのが見える。いたる所で悲鳴が上がり、人々が逃げ惑っている。

あちこちで、火の手が上がった。

魔物の群れがここまで来るのも時間の問題だろう。いくら、王の部隊がいるとしても。

急激に喉の渇きを感じて唾を飲み込むと、その音が嫌に大きく感じてどきりとする。口の中はからからに乾燥していて、寒くも無いのに体の震えが止まらない。

ずきりと頭の奥が痛んで、私は額に手を当てた。

何かが浮かびあがろうとしている。けれど、それははっきりしないまま、霞みがかって消えてしまった。

「う、うう」

「ユウ、大丈夫か? 心配するな。俺が居る」

「う、うん。大丈夫。少し気分が悪くなったただけだから。ありがとう、レオン」

レオンがそっと、その逞しい腕で引き寄せ軽く抱いてくれた。震えが止まらない私を安心させるように、背中をゆつくりとさすってくれる。

レオンの優しい指使いと規則正しい心臓の音を聞いていると、じわりと頭痛が軽くなり、落ち着いてきた。

再び激しい揺れが起こった。体に響く程の重い音と共に、天井から壁の一部が剥がれて落ちてくる。ここがこんな風になっているという事は、他はどうなのだろう。

城外で戦闘していたヴァルサス達はどうなったの？ それに、ソレイユやクリス先生にフランは？

ソレイユの決意に満ちた、青ざめた顔が脳裏に浮かんた。

もう戦闘は、始まっているのだろうか。

彼女は無事なのだろうか。

ソレイユだって恐怖を感じていた筈だ。拳を握りしめてぐっとこらえていたけれど、震えは隠しきれていなかった。ソレイユは私よりも年下のように見えた。十代前半ではないだろうか。それなのに、なんて勇気があるんだろう。

ヴァルサスや私を守ってくれているレオンや戦っている騎士達。それに、下で怪我人の対応をしているだろう人だって。

なのに、私は自分が無力であると怯えてばかりで、唯守られているだけ。

いけない。

行かなければならない。ここで唯、守られるだけではならない。不思議な程強く感じた。頭痛がぶり返す。

何故だか理由は分からない。

けれど、それが自分の役割のような気がする。

「レオン、お願い。私もここから出て皆が避難している場所へ行かせて」

「どうしたんだ、ユウ？」

「私だけ、ここで守られているなんて。私にだって癒しの力があるのに。少しでも、私にできる事をしたいの」

レオンは表情の無い顔で私を見ている。緑の瞳は何も伺う事が出来ず、初めてその眼を怖いと感じた。

「駄目だ」

「お願い」

「……」

「私、このままでは自分が許せないと思うの。今、この瞬間にも倒れて行く人が出て、治療を必要としている状況がある筈なのに」

私の懇願は受け入れられなかった。レオンの意思は固く、この場から出してもらえそうに無かった。

どうしよう。再び頭痛が強くなり、頭の中がざわつき始める。

まるで私を急かすように、頭の中で音がする。

急げと。

疾く走れと。

鼓動が激しく音を立て、血流が熱を持って全身を駆け巡る。

行くんだ。

いつの間にか、私は走り出していた。

行く手を阻む、レオンの腕をすり抜ける。

不思議だ。私の運動神経では、決してレオンの制止をすり抜けるなど出来ないだろうに。

体が軽い。体重が無くなって、宙を走っているような浮遊感がある。

「ユウっ。待つんだ！」

後ろから、レオンの声が聞こえた。焦りを含んだ鋭い声に、私は止まることなく先へと進んだ。

私は避難場所となっている広間へと向かった。避難している一般市民は一か所に集まっていて、異様な程の静けさを保っている。恐怖に怯えているのだ。聞こえるのは魔物達と戦闘する激しい音だけ。大広間の扉は固く閉じられ、バリケードが作られていた。何処からか集めてきた椅子やテーブルなどの家具で、うず高く築き上げられている。

これではここから先の状況は伺えそうに無かった。けれども、その行動すら不必要となった。

見える。

扉と広間の壁の向こうが透けて見えるのだ。

ソレイユ達女性騎士が、結界を展開しながら戦闘している姿が。

巨大なサイクロプスが腕を振り回すと柱が吹き飛び、壁に大穴が空く。石像になってしまった人々の向こうにはラミアの一群がいて、ケタケタと笑い声を上げながら騎士達を襲っている。床や天井にはムカデのような魔物が這いまわり、宙には蜘蛛と蜂が合わさった様な魔物が飛びまわっている。ムカデの体長は成人よりも遙かに大きく怖気がはしる。蜘蛛の様な蜂は大型犬ぐらいの大きさで、気味が悪い。

対するソレイユ達は、明らかに苦戦している。呼吸は荒く、皆、

満身創痍だ。

再び建物が激しく揺れると、壁や天井の一部が剥がれ落ちてきた。避難している人々から悲鳴が上がった。

「ここに居たのかっ。ユウ。探したよっ」

背中側から声が聞こえた。振り返ると、広間の奥から走ってくるシリウスの姿があった。

素早く私の傍に駆け寄って来る。

「ユウ、僕と一緒に来て。魔族の住む、僕の国へ逃げよう。ここはもう持たない。いいかい、僕以外の魔族は既に自国へと転移させている。この城はもう危険だ」

私はその言葉を受け入れる事は無かった。

駄目。ヴァルサスやレオンや、他の皆が戦っているのに。

否、私には為さねばならない役目がある。

視界はさらに広がって、ビデオを見ているように次々と映像が切り替わる。

外では魔物達から逃げ惑う人々の悲鳴と剣戟の音が響き、戦闘によつて美しかった王宮は次々と炎に包まれた。

周りの景色が二重になったようにぼやける。

ざわり。ざわり。

頭の奥から音がする。

私は、この光景を知っている。

そう思った突如、暗闇が押し寄せてきて私の意識は一瞬で飲み込まれた。

第36話 出現 8 (後書き)

今回も読んで下さいまして、ありがとうございます。

第36話 出現 9 (前書き)

今回はヴァルサス視点です。

第36話 出現 9

視界を埋め尽くす程の魔物に囲まれている。ヴァルサスの部隊を遙かに凌駕するその数に、騎士達は圧倒された。この状況では、結界に守られていなければ、いくら数を揃えていようと簡単に捻り潰されてしまうだろう。

先程から召喚獣によって攻撃を仕掛けているが、魔物によってできた壁は分厚く一向に状況は変わらない。

いや、むしろ確実に悪化していた。

左隣にはペガサスに騎乗したエディルが戦闘している。いつものならば、その位置にいるのはレオンだったが、今はユウの護衛に付いている。右隣にいるのはグリフィンに騎乗したカイルだった。

二人の呼吸は乱れ、汗まみれとなっている。他の黒騎士達も似たような状況で、顔色は悪く魔力が底をつき始めていた。消耗が激しくいつまで召喚が行えるか分からない。

ヴァルサスはハクオウに騎乗しながら召喚した雷獣を放った。雷獣が攻撃をしている間に、ハクオウが二度目のブレスを放つ準備に入る。また、黒騎士達もカイルを中心として、大掛かりな召喚を開始する。一斉に魔力を練り上げ寄り合わせていく。その攻撃陣の後方では、防御を担当する騎士達が結界を維持していた。

魔法陣が二つ同時に描かれると、ジンとサラマンダーが出現する。ジンとサラマンダーが力を振るうと、突風が押し寄せ火柱が立つ。空間を焦がすほどの高熱が発生し炎の竜巻へと変貌すると、唸りを上げて荒れ狂った。炎が貪欲に魔物達を飲み込むと、肉を焦がす嫌

な匂いが辺りに立ち込めた。

しかし、次々と押し寄せてくる魔物の数は尋常では無く、一向に減る気配が無かった。

「キリが無い。一体どうなっているんだっ」

「このままでは我々の方が持たないぞ」

黒騎士達に動揺が広がっていく。その声色には明らかな恐怖が滲んでいた。

「皆、落ち付け。不安や恐怖は余計に消耗させる。冷静さを保て」

「しかし、ヴァルサス殿下。現状は明らかに悪化しています。何か、この状況を打開する手立てが必要です」

カイルが声を上げる。

いつもは冷静なカイルだが、今は焦燥した表情をありありと浮かべていた。

ハクオウがブレスを発射する。地上に向けて空間を分断するかのように放たれた光は、線上にいる魔物を尽く貫き蒸発させ、周りの建物さえも粉塵へと変えていく。遅れて、耳をつんざくような爆発音が轟いた。

束の間、青空が覗いた。

ヴァルサスは青空など随分と見ていない様な、余裕の無い焦燥感にも似た思いに駆られたが、その光景もほんの僅かな時間でしかなかった。

「殿下！ そろそろ皆、限界です」

「いや、まだ手はある筈だ。諦めるのは、まだ早い」

ハクオウでさえも力及ばない、非常にまずい状況だった。ハクオウのブレスは破壊力に優れているが、一回の攻撃毎に時間が掛かってしまうのが難点だった。

今の戦力ではこの状況を打破出来ない。こちらの部隊が消耗しきってしまうのも時間の問題だ。

「今一度、皆で召喚を開始する。いいか、再び魔力を集結させろ」

背中に黒騎士達の返事が届く。しかし、逆らうようにエディルが声を張り上げた。

「ヴァルサス殿下、どうか、我々の危機を二度にわたって救った虹色の召喚獣をっ」

「私にも、他に手立てはあるようには思えません」

カイルやエディルや何も言わない黒騎士達の、切羽詰まった思いがひしひしと伝わってくる。

「……あれは、召喚出来ない」

絞り出すような声が出た。

召喚出来ないどころか、むしろこの場にユウが召喚獣として現れる事だけは避けたかった。

ユウは確かに、召喚獣として強力な戦力を持っている。だが、同時に傷つきやすい只の女でもある。

そんな彼女をこの場で戦わせたくなど無い。しかも、人としてではなく召喚獣としてである。

また、その細い肩にこれ程の魔物を退治するべく荷を負わせるのである。彼女の意志とは関わりなく、命懸けの多くの責任と負担を

掛けるのだ。

ユウが長い時間ベツトに横たわっていた姿が脳裏に浮かぶ。あの時ユウは、死んだようにピクリとも動かなかった。

出来る限り、自分達で対処したかった。例え、どれほど被害が出ようとも、身勝手な考えだとしても。

眼の前で、まざまざと召喚獣としてのユウを見たく無かった。ユウが自分とは違う、より一層遠い存在だと気付いてしまうのが怖かった。

「何故なのですか?！」

「私の意思で、コントロール出来るようなものでは無いからだ」

「しかし、二度も召喚されたではないですか」

結界が激しく攻撃を受け、先程から何度も揺らぎを見せている。

結界への負荷が大きいのだ。

ワイバーンの毒ブレスを苛烈に浴び、尻尾が無い体に両頭の翼を持つ蛇龍、アンフェスバエナの物理攻撃を受け止める。眼玉だけの肉塊に翼を持つ姿の魔物が放った衝撃波を防ぐ。これは初めて見る魔物だ。

結界は攻撃を良く受け止めていると言っているだろう。普段ならば、耐久限界を超えている。黒騎士達の召喚獣が魔物を退けてはいるが、後ろから新たな敵が顔を出すだけだった。

「結界の維持が出来ません!」

「このままでは、突破されてしまいます」

火花を散らしながら、衝撃が激しく結界を襲う。四方からの攻撃に結界から鋭い音がすると、結界を維持していた召喚獣達が悲鳴と共に消え去った。同時に召喚していた騎士達から呻き声上がる。

結界は消失し、魔物が一気に押し寄せてきた。

騎士達は押し寄せた魔物達に接近戦を余儀なくされた。

毒ブレスや衝撃波を受け激しく攻防を繰り返すが、確実に追い詰められている。衝撃波を避けきれなかった黒騎士は、騎乗しているペガサスの頭部もろとも上半身が吹き飛んだ。全身に毒ブレスを浴びた黒騎士は、地上へと墜落していく。

現状では召喚どころか、魔力を練り上げる事さえ困難となった。召喚が出来なければ、雑魚ならまだしもこの数の他に、上位の魔物相手では圧倒的に不利だった。

負傷者が次々と出ては戦闘不能に陥った。最早、生死の判別さえ困難だ。瞬く間に隊列を維持できない程追い詰められてしまう。

魔物の圧倒的な数に押されて、遂に防御線を突破されてしまった。後には、守るべき大事な人々が居る城だというのに。

「このままでは、部隊は壊滅してしまいますっ」

魔物による四方からの攻撃に悲鳴が上がる。

「皆、隊列を保て！ このままでは分断され孤立してしまうぞっ！」

「ヴァルサス殿下、あの召喚獣を！」

「殿下っ」

カイルやエディル達から悲鳴が上がった。

「城が攻撃されています。あそこだけは死守しなければっ！ 我ら

の家族や恋人がいるのですっ」

「くっ！」

突如、爆風が吹き荒れた。

魔物達は巨大な手に打ち付けられたように、瞬時に弾き飛ばされ消滅した。

今まで魔物に埋め尽くされていた筈の空間が、ぽっかりと空いていた。

「なっ。何が起こっている?!」

この時、誰も召喚を行う余裕など無かった筈だ。どこにも召喚獣の姿など見当たらない。

では、この現象は一体どういう事だ。

正面から吹きつけていた風が逆流を始める。轟々と吹き抜け渦となり、眼の前の空間に吸い込まれていく。

何か、耳障りな音が聞こえる。

音は何かが近付いて来るかのように、徐々に大きくなる。

「何の音でしようかっ」

「新たな魔物か?!」

遂に激しい摩擦音となった。その音に、思わず耳を塞いでしまう者さえいる。

次の瞬間、落雷のような音を立て、空間が一気に裂けた。

そこからは、漆黒の魔法陣が出現する。

ヴァルサス達の眼の前で魔法陣は密度を増し続け、その姿を高速で次々と変えていく。

「あれは、まさか」

立体魔法陣へと変貌した。

「これは、あの召喚獣か？」

「一体何が起こっている？ まさか、殿下が召喚されたのか？」

「そんな行動は……」

ヴァルサスの思考は白く染まった。凍りついた様に、身動きする事ができない。

ただ、その場で傍観するのみだった。

第36話 出現 9（後書き）

今回も読んで下さいまして、ありがとうございました。

第37話 震撼

先程まで魔物で埋め尽くされていた空は、一部分のみ切り取ったように青空が広がっていた。ぽっかりと開いた空間の中心には、黒い魔法陣が異様な様相で展開している。

「これは、一体どうなっている？」

「あの魔法陣が出現すると同時に、周囲の魔物は弾き飛ばされ消滅しました。お陰で、我々も助かったのですが」

カイルとエディルも、茫然と見入っている。いや、その場にいる全ての人間が固唾を呑んで見守った。

先程まで魔物と接近戦を繰り広げ、圧倒的に不利な状況まで追い詰められていた。それが、突如現れた魔法陣により状況が劇的に変化したのだ。一瞬で周囲にいた魔物は死滅し、部隊は壊滅を免れた。

「ゴルゴンに襲われた時と一緒だ」

「我々を二度にわたって救った虹色の召喚獣でしょうか」

現れた魔法陣はその姿を変え続け、瞬く間に球体となる。

魔法陣の中からは、虹色に輝く召喚獣が現れた。それは女の姿をしている。

皆の眼には女性型の召喚獣として映るだろう。

ヴァルサスは召喚獣を見つめながら、胸の内を呟いた。

だが、ヴァルサスにとっては、ユウの姿そのものにしか見えない。たとえば、光を纏った召喚獣の姿であろうと、他人の眼にどう映ろう

と。

何故現れた。

今この場所に、よりにもよって召喚獣の姿で。

胸が引き絞られるような気がした。

ユウが例えどんな姿をしていようと、自分にとっては身体の小さな守るべき女性なのだ。決して争いや暴力に向いていない。どれだけ召喚獣として力があるとしてもだ。

自分は無力だ。

どう感じようと、現実では自分の能力を超えたどうしようもない事態に、ただ手をこまねいている事しか出来ない。

魔方阵から現れたユウを見て、ヴァルサスは違和感を覚えた。

以前のユウとはどこか違う。

何と表現すれば良いだろうか。

ユウが召喚獣の姿である時は、その存在感はどこか現実的で無く幻の様であった。しかし、眼前のユウは血肉を持つ者として、確かな存在感を放っている。

ユウは自ら虹色の光を放ちながら、不動のまま空中に立っている。髪と衣はそのものが意志を持つかの如く優雅に揺れ、周囲の風による影響を受けていない。

その姿は、正に女神であった。

だが、放つ空気は全く異なっている。

以前はどこか慈愛を秘めた、心癒される神々しさを放っていたが、今回は女神というよりは断罪の神だ。

纏う空気は刃のように鋭く、畏怖さえ覚える。
まるで周囲の空間さえも、怒りを抱いているかのようなのだ。

「混沌よ。よくもここまで我が物顔に振舞い、我が大地と愛し子を痛めつけてくれたな。しかし、それも此処まで。これ以上お前の思いどおりにはさせぬ」

大気が震撼する。ユウが放つ気配に、その場にいる全ての人間が竦み上がった。

亀裂から湧きだした黒い霧が密度を増した。

まるで、意志を持って密集し歪んだようだった。僅かに、霧の中に隙間ができる。

——顔だ。

醜い笑い顔だ。

ヴァルサスには黒い霧が意思を持って、感情を表に出したように見えた。

空中のユウは氷よりも尚冷たい声を放つ。

「今再び、大地の底へと沈むが良い」

強い光に突如視界が奪われる。

上空より眼が眩む程の光が降り注ぎ、太陽が間近に現れたかのようだった。思わず手を翳して光を遮る。知らず、呻き声が漏れていた。

目が眩むほどの輝きは一瞬で、頭上を仰ぎ見れば光の帯が空一面に広がっている。

複雑に入り組んで虹色に輝く光の帯は、空を覆い尽くすほどに続いている。

「何でしょう？ あれは」

「虹？ しかし、このような虹など今迄に見た事がありません」

「……いや、違う。あれは魔法陣だ！」

ユウの頭上を中心として、虹色に輝く超巨大な魔法陣が展開されていたのだ。

虹色の輝きを凝視すれば、見た事も無い古代文字がびっしりと描かれている。それが、密度を持って帯状となっているのだ。文様は次から次へと変わっていく。

「馬鹿な……」

「こんな巨大な魔法陣などありえない！ 一体どれだけの魔力を消費しているのだ」

「ヴァルサス殿下、貴方はあの召喚獣をコントロールしておられるのか？ 失礼ですが、自分にはそのようには見えません。貴方は今、魔力を消費しておられない」

「召喚獣が自らの魔力を使用して召喚するなど考えられない」

ヴァルサスは、沈黙で返答するのみだ。

眼の前では、迷うことなく行動を続けるユウが居る。一体何を召喚するつもりなのだろうか。これ程の魔法陣など、何を起こそうとしているのか見当もつかない。

「冥府の獣を戒める四門よ、此処へ来たれ」

ユウが言葉に、上空の魔法陣の一部が暗い光を纏う。そこから重低音を響かせて、巨大な漆黒の門が四つ出現した。

陣の一部に、更に魔法陣が組み込まれていたのだ。この魔法陣は

多重構造となっていた。このような事を成すには、超高度な技と莫大な魔力を必要とするだろう。

出現した門には幾重にも、がんじがらめに鎖が巻き付いており、不気味で不吉な印象だった。門は上空から地上までの空間を占拠する程で、その大きさはハクオウが小さな鳥に思える程だ。視界をめぐらせば、東西南北に位置して巨大な門が出現している。

「一の門、開門せよ」

ユウが鋭く命じる。すると、西側の門が内側から弾けるように開き、黒い鱗に覆われた巨大な大蛇が中から現れた。

大蛇の胴体は門一杯の太さを持ち、頭部が五つに分かれて一つの胴体となっている。その姿は長くうねる黒い腕とも見えた。

その五頭の大蛇には黒光りする太い鎖が幾重にも巻き付いている。それは、門に巻き付いている鎖が大蛇まで及んでいるのだ。

蛇は巨大な胴体と五つの頭を持ち上げ耳障りな威嚇音を放った。

砂が擦れ合う音にも似ている。直ぐに人の耳では捉えられない音域まで上がっていく。五つの音波は共鳴し、大量殺戮波と化した。

一瞬だった。瞬きするほどの間に、魔物の群れは木端微塵に吹き飛んだ。空中には、魔物の死骸が粉塵のように飛び散っていく。

「す、凄い」

怯える騎獣を宥めながら、エディルが言った。しかし、怯えているのは騎獣だけだろうか？ その表情が物語っている。

魔物達は一体となって、大蛇に反撃をする。しかし、門の大蛇に近寄る事さえ出来ない。

「二の門、開門せよ」

冷たい声ユウのが響く。

東側の門が開き、闇色の巨大な猛禽類が現れた。一つの胴体に五つの頭を持っている。これも、鉤爪持つ腕に見える。五つの頭は同時に嘴を開くと、何かを大量に噴射した。それは羽根だった。槍のように鋭く重量を持ち羽根が、雨あられと降り注ぐ。

魔物を貫き、穿ち、大地に縫い留め、串刺しにする。

その攻撃に、今まであれ程我々を苦しめていた魔物は、鳴き声を恐怖と懇願へ変化させていた。

魔物は攻撃対象をユウへと切り替えた。大群となって一気に押し寄せるが、何かに弾かれた様に吹き飛ばされる。

「三の門、四の門、開門せよ」

ユウは動揺する事も無く続ける。

南北に位置する扉が開き、北からは五頭の黒ドラゴン、南からは五頭の黒獣が姿を現した。いずれも太い鎖が巻き付いており、戒めを受けている。

ドラゴンは五頭の頭を持ち上げた。光が急速に集約すると、一気に爆発する。五本のドラゴンブレスはプラズマを発しながら、白く焼き尽くし魔物を蒸発させる。

黒獣は五つの口から咆哮を放った。頭蓋が震えるような耳鳴りが起きる。魔物達が不自然に歪んだかと思うと、収縮し潰れていく。まるで、巨大な手にでも潰され、圧迫死したみたいだった。

巨大な召喚獣に対して魔物達も反撃をしているが、まるで、葉虫のように全く相手にならない。魔物が持つ特殊攻撃も、効果が無いようだった。

「何という光景だ」

誰か呟いた。

そうだ。これは、まるで地上の世界では無い。

「だが、幾ら魔物を倒しても、根源をどうにかしない事には、状況は改善されない」

「あの、大地の割れ目ですね。あそこから、今も魔物達は湧き出てくる」

カイルも同じ思いを抱いていたようだ。

大地の亀裂からは黒々とした霧と共に、次々と魔物が湧き出て来る。

どうやって、あれを対処するのか。

「戒めの獣よ。今、その鎖より解放する」

召喚はまだ終わりでは無かった。

四体の巨大な獣は、甲高い音をたてて戒めから解き放たれた。途端、門は獣諸共掻き消すように姿が見えなくなった。

上空の魔法陣だけが、暗く不気味に点滅している。

魔方阵から巨大な口が生えた。

それは、正に口としか言いようが無い。ドラゴンとも獣とも見えない頭部が、口を一杯に開いて頭上から襲い掛かってきた。あまりの巨大さに、口しか見えない。

ヴァルサスは総毛立った。自分達も巻き込まれてしまいそうだ。皆、息を殺して見守る外ない。まともに騎獣を飛翔させる事が出来ない者さえ出た。

恐怖とも畏怖とも言える感情が、その場を支配する。

巨大な口は、一直線に大地の亀裂へと食らいつく。衝撃に大地が震撼した。ガラスが擦れるような音が一帯に響き、鼓膜が痛いほど揺さぶられる。

召喚獣は魔物達を大地の亀裂ごと一気に飲み込み、深く沈んで行く。やがて、その姿は大地と同化し、消えた後にはおぞましい大地の割れ目は無くなっていった。

第37話 震撼（後書き）

読んで下さいまして、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9877m/>

喚び寄せる声

2012年1月10日10時12分発行